

暗闇のスキャナー  
A Scanner Darkly

フィリップ・K・ディック<sup>\*1</sup>著      翻訳: 山形浩生<sup>\*2</sup>

2014年4月2日

<sup>\*1</sup> ©Philip K. Dick

<sup>\*2</sup> ©山形浩生



---

本書の登場人物は架空のものであり、生死を問わず、実在の人物とのいかなる類似もまったくの偶然である。

「脳の反対側：並列する意識」ジョセフ・E・ボーゲン医学博士、「ロサンゼルス神経学会誌」第三十四巻第三号、一九六九年七月

「人間の脳梁切断」マイケル・ガザニガ、「サイエンティフィック・アメリカン」一九六七年八月号、通巻二一七号

無題の詩は「ハインリヒ・ハイネ、歌詞とバラッド」エルンスト・フェイス訳より引用。  
著作権 一九六一年ピッツバーグ大学出版会。

その他ドイツ語の引用はゲーテ「ファウスト」第一部とベートーヴェンのオペラ「フィデリオ」より。



# 目次

第 1 章	1
第 2 章	13
第 3 章	23
第 4 章	35
第 5 章	47
第 6 章	57
第 7 章	69
第 8 章	81
第 9 章	101
第 10 章	107
第 11 章	117
第 12 章	127
第 13 章	139
第 14 章	159
第 15 章	177
第 16 章	179
第 17 章	181
作者付記	185
訳者あとがき	187



## 第1章

むかし、一日中つつ立って髪の毛からムシをふりはらっているやつがいた。医者には、髪にムシなんかいないと言われた。八時間シャワーを浴び続け、ムシの痛みに苦しみがら何時間も熱い湯の下に立ったのに、出てからだをかわかしてみると、髪にはまだムシがいた。それどころか、ムシは全身にたかっていた。一月後には肺のなかにまでムシがいた。

ほかにもすることも考えることもなかったから、まず理論的にムシの一生を解明しようとした。それからブリタニカ百科事典をひもといて、どのムシかを同定しようとした。いまでは家中ムシだらけだった。いろんな種類のムシのことを読んで、とうとうそのムシが屋外にもいるのに気がついたから、こいつはアリマキだ、と結論を下した。こう心に決めると、もう二度と変わらなかった。ほかの連中が何を言おうとも……たとえば、「アリマキは人を咬んだりしないよ」だとか。

こっちが絶え間なくムシに咬まれて苦しんでいるのに、連中はそんなことを言うのだった。カリフォルニアのほぼ全域にひろがるチェーン店のセブン・イレブンで「襲撃」「黒旗」「お庭番」のスプレーカンを買った。まず家にスプレーして、それから自分にもスプレーした。「お庭番」がいちばん効くみたいだった。

一方の理論面では、ムシの一生に三つの時期を発見した。まず、ムシはこっちが保菌者と呼んでいる連中に運ばれて、汚染しにやってくる。保菌者というのは自分がムシをまきちらしているのに気がつかないやつらだ。この時期には、ムシは大アゴも下顎部（このことばは、何週間にもわたる学者然とした研究のなかで覚えたものだ。「ハンディ・ブレーキ&タイヤ」工場で、車のブレーキドラムのライニング交換をなりわいとする男にしては、異常に本漬けの作業だった）もない。したがって、保菌者も何も感じない。居間の奥のすみっこにすわって、いろんな保菌者　ほとんどは面識が多少あるやつらだが、なかには新顔もいる　が、この咬まない時期のアリマキに全身たかられているのをながめたものだ。つい内心ニヤニヤしてしまう。ムシに利用されているのに、当人はてんで気づいてないのがこっちにはわかるからだ。

そいつらが言う。「なにをニタついてるんだよ、ジェリー」

こっちはにっこりするだけ。

次の時期には羽だかなんだかが生えてくるけれど、正確には羽じゃなかった。とにかく、ムシが飛び回れるようにする機能をもった付属器官だ。これで移動して生息範囲を広げる　特にこっちに向かって広げるのだった。こうなると空気はムシだらけになる。おかげで居間からなから家中がかすんだ。この時期にはできるだけムシを吸いこまないようにした。

一番かわいそうなのは犬だった。だってムシが犬に舞い降りては全身にたかるのが見え

たからだ。おそらくは、こっち同様犬の肺にも入りこんでいるんだろう。どうやら 少なくとも共感能力のお告げでは 犬もこっち同様に苦しんでいるらしい。犬自身の幸せを考えて、誰かにあげてしまうべきだろうか。それはだめだ。犬はすでに、好むと好まざるとにかかわらずムシに感染しているから、どこへ行くにもムシをまきちらすことになる。

たまにはシャワーを犬といっしょに浴びて、犬もきれいに洗ってやろうとした。でも、自分自身のときと同じく、うまくいかなかった。犬が苦しんでいると思うとつらい。だから決して助けるのをやめようとはしなかった。文句も言えない動物の苦痛こそが、ある意味ではいちばんつらかった。

「犬コロなんかと一日中シャワー浴びて、なに考えてるんだ」そんな最中にやってきたダチのチャールズ・フレックがきいたことがあった。

ジェリーは答えた。「アリマキを取ってやるんだ」そして犬のマックスをシャワーから出して、乾かしてやりだした。チャールズ・フレックがキツネにつままれたように見つめるなか、ジェリーはベビーオイルとシッカロールを犬の毛皮にすりこんでやった。殺虫剤スプレーや、シッカロールやベビーオイルやスキンローションのびんなどが、家中に積上げられ、投げ散らされていた。ほとんどが空っぽだ。いまでは一日に何缶も使うようになっていたのだ。

「アリマキなんか見当たらないぜ。アリマキってなに？」とチャールズ。

「放っとくといずれ殺されちまう。それがアリマキだよ。オレの髪にも肌にも肺にもいて、痛くってもうどうしようもないんだ 病院にいかないよ」

「どうしてオレには見えないの？」

ジェリーは、タオルにくるんだ犬をおろすと、毛足の長い敷き物にひざをついた。「一匹見せてやる」敷き物はアリマキだらけだった。ほうぼうでぴょんぴょんはねていて、なかにはひときわ威勢のいいヤツもいる。なかでも特に大きなのを探した。そうでもしないと他人にはなかなか見えないのだ。「びんかジャーをとってくれ。流しの下にあるから。ふたをするか栓をして、医者に行くとき持ってって、分析してもらおう」

チャールズ・フレックは空のマヨネーズのびんを持ってきた。ジェリーは探しつづけ、とうとう床面からメートル半もとびあがってるヤツをみつけた。三センチもあるアリマキだ。そいつをつかまえて、びんに運び、そっと中に落としてふたをした。それから得意げにかかげてみせた。「ホレ見ろ」

「なああああるほどおお」とチャールズ・フレック。びんの中身をまのあたりにして、目を丸くしている。「どデカイじゃん。すげえ！」

「医者に見せるんだから、もっと見つけるのを手伝ってくれよ」びんを脇において、ジェリーはまた敷き物にしゃがみこんだ。

「当然」とチャールズ・フレックも後に続いた。

半時間ほどで、ムシは三つのびんにいっぱいになった。チャールズは、はじめてなのに最大級のヤツを数匹みつけた。

これは一九九四年六月の真昼のことだった。カリフォルニアの、安いけど長もちするプラスチック造住宅地域で、カタギはとうに逃げだしたあたりだ。真昼とはいっても、ジェリーはずいぶん前に窓全部に金属塗料をスプレーして、日照をしめだすようにしていた。部屋の照明はポールランプ一本だけで、それもスポット照明しかとりつけないで一日中つけっぱなしにしてあった。自分や仲間の時間の感覚をなくすためだ。そういうのが好き



だった。時間をうちやるのが好きだった。そうすれば、邪魔されないで他のもっと大事なことに集中できる。たとえば、男が二人して毛足の長い敷き物にしゃがんで、次から次へとムシを見つけ、次から次へとびんにつめる、とか。

その日も遅くなって、チャールズ・フレックが言った。「こんなことして、なんかもらえるわけ？ つまり、医者が賞金なんかくれるの？ それとも賞品？ 銭？」

「こうすりゃ治療法の完成に貢献できるだろ」とジェリー。痛みは絶え間なく、ほとんど耐え難くなってきた。これに慣れたことはないし、これからだって慣れないだろう。またシャワーを浴びたいという衝動と欲求がつのってきた。立ち上がって、ジェリーはあえいだ。「なあ、おい、オレちょっとションベンとかしてくっから、びんにどんどんムシを詰めといてくれやな」と洗面所に向かった。

「OK」とチャールズ。両手をくぼませて、びんのほうに向きなおりながら、長い脚をガクガクさせていた。とはいえ、もと軍人なので、まだ結構うまく筋肉を操れた。だからなんとかびんのところまでたどりついた。でも、そこで突然こう言った。「ジェリー、おい

このムシ、なんかおっかないよ。ひとりでいの、やだなあ」そして立ち上がった。

「能なしバカ」とジェリーはちょっと洗面所で立ち止まり、痛みにあえいだ。

「たのむから」

「ションベンだって言ってんだろ！」とドアをたたきつけてシャワーのノブをひねった。水が降ってきた。

「ここじゃこわいんだ」チャールズ・フレックの声はかすかにしか聞こえなかった。大声で怒鳴っているのは間違いなかったけど。

「じゃあ勝手にしやがれ！」ジェリーは怒鳴りかえしてシャワーに踏み込んだ。なにが友だちだ、いまましい。無能、無能め！ クソの役にも立ちやしねえ！

「こいつら刺す？」チャールズ・フレックが、ドアのまん前で怒鳴った。

「うん、刺すぜ」とジェリーは髪にシャンプーをつけた。

「そうだろうと思った」間。「手を洗ってこいつら落として、お前を待ってたいんだけど」能なしめ、とジェリーは苦々しい怒りをおぼえた。何も言ってやらなかった。ひたすら洗い続けただけ。あんなバカに返事してやることはない.....チャールズ・フレックなんか無視だ。自分だけ。自分の切実で火急のせっぱつまった必要だけ考えてりゃいいんだ。ほかは全部あとまわし。なにせ時間がない、時間がないんだ。こっちは先送りにできない。ほかはどうでもいい。ただし犬だけは別。彼は犬のマックスを思った。

チャールズ・フレックは、持ってそうだとあたりをつけたやつに電話した。「デス十ばかり都合できない？」

「ゲエツ、おれも切らしてる こっちもキメようとしてるところさ。あったら教えてくれよ。おれも欲しいから」

「供給がどうかしたの？」

「逮捕かなんかだろうけど」

チャールズ・フレックは受話器をおいて、公衆電話 買いつけに家の電話は絶対に使わない から駐車したシボレーへよたよたと陰鬱に戻りながら、頭のなかで妄想にふけた。この妄想では、スリフティー・ドラッグストアの横を流しているとそこにでっかいショーウィンドウが出ている。びん入りスロー・デス、缶入りスロー・デス、びんだの風呂おけだの鉢だのどんぶりだのに入ったスロー・デス、コカインやヘロインやバルビ

ツールや幻覚剤と混ぜたスロー・デス、もう何から何まで　そしてでっかい看板には「あなたのクレジットカードも有効」、そして当然「超低価格、町で最低の値段です」

でも本当は、スリフティーのウィンドウはろくでもなかった。くしだの肝油のびんだのデオドラントのスプレーだの、いつだってそんなガラクタしかなかった。でも裏の薬剤部には、手つかずの純粋な混じりっけのない未加工のスロー・デスが、カギかけて置いてあるはずだ、と考えながら、駐車場からハーバー大通りの午後の交通のなかに車を出した。それも二十五キロ入りの袋があるにちがいない。

物質D二十五キロ入りの袋は、毎朝、何時にどうやってスリフティー薬剤部に積みおろされるんだろう。どこから来るのか知らないけど　わかるもんか、スイスかな、それとも賢い宇宙人が住む他の惑星から来るのかも。たぶんすぐはよい時間に配達するんだぜ、武装した警備員つきで　あいつがいつもと同じにレーザー・ライフルを持ってこわい顔して立ってるんだ。誰かオレのスロー・デスをガメやがったら、しめ殺してやる。つい警備員の身になって考えてしまった。

たぶん物質Dは、少しでも価値のある合法的な薬物にはすべて含まれているものなんだろう。あちらこちらに一つまみづつ、そいつを発明したドイツだかスイスだかの供給元の、極秘分子式に従ったものがふりまかれるんだ。でも、ホントはそうじゃないことくらい承知している。当局は、Dを売ったり運んだり使ったりしてるやつは誰でも殺るかパクってるから、もしあれを置いてたりしたら、スリフティー・ドラッグストアは　何万ものチェーン店ぜんぶ　撃たれたり爆破されて商売できなくなるか、少なくとも罰金はくろうはず。罰金だけってのが一番ありそうだ。スリフティーはコネもあるし。だいたい、ドラッグストアの大チェーンをどうやって撃つ？　どうやって始末する？

あそこにはフツのものしか置いてないよ、と車を流しながら思った。蓄えのスロー・デスが三百錠しかないので、みじめな気分だった。裏庭のつばきの下に埋めてある。春になっても腐れ落ちないクールなでっかい花をつけた、品種改良版のつばきだ。これだけの蓄えだと一週間しかもたない。それで切れたらどうしよう。クソッ。

全カリフォルニアとオレゴンの一部のみんなが同時に切らしたら？　ウォ。

こいつはフレックがふけるオールタイム・ベストのホラー妄想だった。フレックに限らず、全ヤク漬けの抱く妄想だ。アメリカ合州国西部全域で同時に蓄えが底をつき、みんな同じ日に禁断症状が始まる。それも日曜朝六時、カタギがめかしこんで礼拝なんぞにでかける頃。

場面：パサディナ第一監督派教会、ヤク切れ日曜の朝八時半。

「教区の信者のみなさん、禁断症状のためにベッドの中でのたうちまわっている人々の苦悶に、神が今すぐ介入してくださるよう祈ろうではありませんか」

「そーだ、そーだ」信徒たちは牧師に同意する。

「しかしながら、神が新鮮なDをもって介入なさる前に　」

パトカーが、こちらの運転になにか不審なものを嗅ぎとったらしい。停車していた場所を出て、車の流れのなかでこっちをマークしてつけてくる。今のところはサイレンも赤色灯もつけていないけれど、でも……

蛇行でもしてたのかな。マッポめが、こっちのイカれてるのを見やがったんだ。でも何だろう。

マッポ：「よーし、名前は？」

「名前、ですかあ？」(名前が出てこない)

「おい、自分の名前もわからんのか？」マッポはパトの中の相棒に合図する。「この野郎、本当にラリってやがる」

「ここじゃ撃たないで。せめて署までつれてって、誰も見てないところで撃つてくれ」これは自分をつけてくるパトカーを見て浮かんだ、お決まりのホラー幻覚のなかのチャールズ・フレック。

このファシスト警察国家で生き延びるには、いつも名前がわかってねえとな、特に自分の名前は。いつでも常に。自分が誰だかわかんねえってのは、イカれてるっていう何よりの証拠にされちまう。

こうしよう。駐車スペースが見つかったら、向こうが赤色灯をつけるとかする前に、こっちから停車する。横につけてきたら、タイヤがゆるんだとか、なんかメカメカしいことを言おう。

こっちから降参して、身動きとれなくなるってのが連中のお気に入りだからな。動物が、柔らかい無防備な下腹をさらけだして地面に寝ころがるみたいなもんだ。オレもそうしようっと。

そこでそうした。右にそれて、車の前輪を縁石にぶつける。マッポは横を通り過ぎていった。

何のために停ったんだか。こんなに混んでちゃ道にもどるのも一苦労だ、とエンジンを切る。しばらくここに駐車したまますわってようか。それで 波冥想とか、その他いろんな変化した意識の状態に没入しようか。できれば歩いてる女でも眺めてさ。波用の脳波計じゃなくて、欲情波用の脳波計ってのはないのかな。欲情波が、最初は短く、それからどんどん長く、でかく、でかくなって、ついには振り切れる。

これじゃどうしようもない。出かけて、誰か持ってるやつを見つけないと。仕込まないと、じきにヤク切れで狂乱しちゃって、そうなったらそれこそ何もできなくなる。今みたいに路側にすわってることさえできなくなる。自分が誰だかわかんなくなるのはもてるん、どこにいるのか、何が起こってるのかもわかんなくなっちゃう。

ところで何が起こってる？ 今日は何曜日？ 何曜日かわかれば、その他のこともわかる。徐々に思い出せる。

水曜日だ。LAのダウンタウン、ウェストウッド地区。前方には、人をスーパーボールみたいにはねかえす壁に囲まれた、巨大なショッピング・モールがある。ただし、クレジットカードをちゃんと持っていれば、その電子の壁を通過できる。モール用のクレジットカードは一つも持っていなかったの、中の店がどんな感じかは他人の証言に頼るしかなかった。何から何まであって、カタギの連中、特にカタギの主婦どもにいい品を売っているのは間違いない。モールのゲートの制服警備員たちが、通る人間をいちいち確認しているのが見える。入る男なり女なりが、クレジットカードの持ち主と違ってないか、盗んだカードじゃないか、売るとか買うとか、不正入手されたカードじゃないかどうか見張っている。ゲートから入る人はたくさんいたけれど、ウィンドウショッピングの連中がほとんどだろう。あれだけの人数が、この時間に買物するだけのぜ二も欲望もあるものか。まだ早すぎる、二時過ぎだもん。夜がかき入れ時なんだ。店が一斉に照明をつける。その照明は外からも見えた。まるで閃光のシャワーのようで、成人したガキ向けの遊園地さながら。それは彼に限らず、仲間の誰でも見るのができた。

モールの向い側に並ぶ店は、クレジットカードも要らず、武装警備員もおらず、大したものではなかった。日用品の店ばかり。靴屋、電気屋、パン屋、修繕屋、コインランド

リー。短いビニールジャケットとストレッチ・パンツの女の子が店から店へとぶらぶらしているのを見物。髪はきれいだけど、顔は見えなかったの、美人かどうかはわからなかった。からだは悪くない。その子はレザー製品の並んでいるウィンドウの前でしばらく立ち止まった。ふさのついたバッグに目をつけている。見つめて、迷って、ソロバンをはじいているのが見てとれる。こりゃ店に入って、見せてくれって頼むな。

思った通り、その子は店に飛びこんだ。

別の女の子が、歩道の人混みを分けてやってきた。この子はフリルっぽいブラウスにハイヒール、銀髪でメイクがケバすぎる。歳より大人っぽく見せようとしてるな。ホントは高校も出てないだろう。この子の後は見るべき女が来なかったの、グローブボックスを締めているひもをほどいてタバコを取り出した。火をつけて、カーラジオをロック専門の局に合わせた。前はカーステレオを持っていたのだが、ついにある日、ハイになっていたとき、車をロックする際に持って出るのがサボってしまった。もちろん戻ってみると、カーステレオは丸ごと盗まれていた。不注意だからそういう目に会うんだぜ、と思ったものだが、そんなわけで今ではセコいカーラジオしかなかった。いずれこいつも盗まれちゃうだろうよ。でも、ラジオなら中古のやつをタダ同然で手に入れられるところがある。どのみち、車そのものが廃車寸前だった。オイルリングが吹っ飛んでいて、エンジンの圧縮力はガタ落ちになっている。上等のブーツを山ほど仕込んで高速をとばして帰ってきたときに、シリンダーが焼きついてしまったのだ。たまに大量にキメると、被害妄想にとりつかれる。警察よりも、ほかのヤク中にガメられるんじゃないかと不安になる。どっかのヤク中が、切れかかってヤケになって、クズみたくどうしようもなくなって盗みにくるんじゃないかしら。

そこへ、そそる女が通りがかった。黒髪美人でゆっくり歩いている。ヘソ出しブラウスと洗いざらしの白いデニム・パンツ。おっと、知った顔だ。ありゃボブ・アークターの彼女だ。ドナじゃん。

車のドアをあけて外に出た。相手はこっちを見たが、歩き続けた。追う。

ナンパされるとでも思ってるんだろう、と通行人をぬって歩きながら考えた。女は楽々と速度をあげている。ほとんど見えなくなったところでこっちを振り向いた。しっかりと落ち着いた顔……大きな目がこっちを認めたのがわかる。自分の速度を計算して、追いつけるか考える。このスピードじゃ無理だ。動きのいい子だ。

交差点で、信号待ちの歩行者たちがとまっていた。車が次々と、乱暴に左折している。でも女は、さっさと威嚇をもって歩き続け、気狂いじみた車の間をぬって行く。ドライバーたちは憤慨して女をねめつける。だが女は気にした様子もない。

「ドナ！」信号が青になると、急いで道を渡って追いついた。女は走ろうと身構えたが、結局歩くのを速めただけだった。「きみ、ボブの彼女だろ？」なんとか女の前に出て、顔を見ることができた。

「ノー」と女。「ノー」そしてまっすぐこっちに向かってきた。男は後ずさる。相手はこっちの腹に向けた短いナイフを持っていたからだ。「失せな」と何のためらいも見せず、ずんずんこっちに向かってくる。

「絶対そうだよ。あいつの家で会ったもん」ナイフはほとんど見えなかった。見えるのは刃の金属の部分が少しだけだったが、確かにナイフだ。こっちを刺して、行ってしまうのだ。男は抗議しつつ、後ずさりを続ける。ナイフは実にうまく隠されていて、まわりを歩いている人は誰一人それに気づいていないらしい。でも、男にはわかった。相手はずん

ずん近づいて、まっすぐこっちを狙ってくる。そこで一歩脇によけると、女はまた歩きはじめた。

「とんでもねえな！」とその背中に向かって言った。ドナにまちがいないのに。ただこっちが誰か思い出さないだけだ。知り合いなのを忘れてるんだ。びびってるんだろ。コマされるんじゃないかってびびってるんだ。道で知らない女に声をかけるときは気をつけないと。最近じゃみんな用意万端だもん。いままでひどい目に会いすぎてるからな。

セコいナイフだ。女があんなのを持ち歩くもんじゃない。男なら誰だって、いつでも手首をつかんで刃をつき返せる。このオレだって。本気でヤツちまいたいんなら。腹立たしい思いで男は立ちつくしていた。ドナなのはまちがいないのに。

駐車した車のほうへ戻りかけたとき、さっきの娘が通行人の中でひとり立ち止まり、だまってこっちをじっと見ているのに気づいた。

用心しながら女に近寄った。「いつかの夜さあ、オレとボブと別の女が昔のS & Gのテープを持って、きみもいっしょにすわってただろ」彼女は高純度のデスを、一つずつ苦労しながらカプセルにつめていた。一時間以上も。段トツ。最高。デス。つめ終わると、女はそれぞれにキャップをかぶせ、それをみんなでいっしょに飲った。彼女以外のみんなで。あたしは売るだけ、自分で飲りはじめたら、あがりをもみんな入れあげちゃう、とのことだった。

「あたしを殴り倒してつっこむ気かと思ったのよ」と女。

「ちがうよ。オレはただ……」口ごもる。「乗ってきたいかって思っただけだよ。ここ、歩道じゃん」とあわてる。「しかも真っ昼間で」

「建物の入口でやるとかさ、そうでなきゃ車に引きずりこむとか」

「だって知り合いだろ」と憤慨。「それにそんなマネをしたら、アークターに締め殺されちまう」

「だって誰だかわかんなかったんだもん」女は三步こちらに近づいた。「ちょっと目が近視だから」

「コンタクトでもすれば」きれいで大きい暖かな黒い目だ。ってことはヘロインはやってないな。

「前はしてたんだけど。片っぽがパンチのボウルに落っこっちゃって。LSDパンチだったわ、パーティーで。底まで沈んじゃって、たぶん誰かがすくって飲んじゃったんじゃないかな。おいしいとよかったけどね。だってもとは三十五ドルもしたんだもの」

「どこ行くの、乗ってく？」

「車の中でつっこむ気？」

「冗談。いま、って言うか、ここ何週間か立たないし。いろんなものに混ぜこんである代物のせいだと思うけど。クスリみたいな」

「うまい口実だけど、前にもそう言ったヤツがいたわ。まったくみんなしてあたしを犯すんだから」と言って訂正。「とにかく犯そうとはするわ。女もつらいのよ。今だって男を告訴して慰謝料を請求中なの。性的いやがらせと暴行未遂で。損害賠償として四万ドル請求してるよ」

「そいつ、どこまでいったの？」

「オッパイつかんだわ」

「それで四万も？」

二人はいっしょに車に戻りはじめた。

「品物ない？ オレ、ほんとにつらいとこでさ。ほとんできらしかかっている、というか、考えてみりゃ実は完全にきらしてるんだ。ちょっとでいいからさあ、都合してもらえない？」

「なんとかなるわ」

「錠剤だよ。注射じゃやんないから」

「うん」女は深くうなずいた。「でも、ほら、いまはほんとに品薄でね　なんか供給がちょうどすっからかんの。それはたぶん知ってるでしょ。だからそうたくさんは渡せないけど、でも　」

「いつ？」男は口をはさんだ。車にたどりついた。立ち止まり、ドアをあげ、中に入った。ドナは反対側のドアから乗った。二人は並んですわった。

「あさって。あいつがつかまればだけど。たぶん大丈夫」

チツ、あさってかよ。「もっと早くなんない？　たとえば、今晚とか？」

「早くて明日」

「いくら？」

「百で六十ドル」

「ゲッ、ポってんじゃねえよ」

「だってすごくいいブツなんだもん。前にもあいつから買ったことがあったけど、いつも買わされるようなのは全然ちがうわ。悪いこと言わないから　それだけの値打はあるって。だいたいあたしだって、他の売人から買うよりあいつから買いたいよ　できればだけど。いつも手持ちのあるやつじゃないから。そいつがちょうど南に旅行してきたらしいの。戻ったばっかで。当人が選んだんだから絶対いいブツなのは確かよ。先払いじゃなくていいからさあ。引き換えで、ね？　信用するわ」

「先払いは絶対しねえ主義だもん」

「やむを得ないときだってあるでしょ」

「いいよ。それで最低百はくれるんだろ？」いくつ買おうか、急いで胸算用した。二日でたぶん百二十ドル用意できるから、彼女から二百錠買える。それにその間に、ほかに持ってるやつに会ってもっと安く買えるようなら、こっちの取引は忘れてそっちから買えばいい。絶対に先払いしない利点がこれだ。それと、絶対に持ち逃げされないし。

「あたしに会えたなんてラッキーよ」発車して交通の流れに戻りながらドナが言った。「あと一時間ほどで別のヤツに会うはずでさ、そいつはたぶんあたしの扱える量を全部買うだろうから……その後だったらツイてなかったわよ。今日は運がいいじゃない」と女はにっこりしたので、こっちもそうした。

「もっと早くなんない？」

「できたらね……」バッグをあげ、「スパークス・バッテリーチェーン」とエンボスのあるペンと小さなメモ帳を取り出した。「連絡先は？　それと名前、なんだっけ。忘れちゃった」

「チャールズ・B・フレック」電話番号も教える　実は自分のじゃなかったけど。このテの伝言用に利用するカタギの友だちの電話だ。ドナはそれを苦勞しい書きとめた。書くのにえらく苦勞してんなあ。のぞきこむみたいにして、たどたどしい手つきで……女も最近学校でロクにもものも教わってねえのか。まるっきしの文盲じゃん。でもそそる女だ。読み書きできない、それがどうした？　ナオンはオッパイさえ立派ならいいんだから。

「あなたのこと、思いだしたわ。なんとなくだけど。あの晩のことはみんなぼんやりしてんの。あたしホントにボケてたから。はっきり覚えてんのは、小さいカプセル　リブリウムの入ってたカプセル　に粉をつめてたことだけ。カプセルにもともと入ってた中身は捨てちゃってさ。たぶんブーツも半分以上は無駄にしたと思うな。床にこぼしちゃって」女は値踏みするように、運転するこちらを見つめた。「あなた、結構話せるヒトみたいね。そいでもって、またいずれ買いに来るんでしょ？　しばらくたてばもっと要るでしょ？」

「当然」そう答えながら、次に会うまでもっと安い仕入れ先を都合できるかどうか思索した。たぶん大丈夫。そんな気がすごくする。どのみちオレの勝ちだ。つまり、どのみちブーツはキメられる。

錠剤がある、これぞ幸せ。

車の外の日常、忙しい様子の通行人、陽射しと活気、それらはすべて、こちらの気にもとまらぬままに過ぎて行く。幸せだなあ。

ひょっこりこんなものに出くわすとはね　それもそのきっかけというのが、パトがたまたま追上げてきたこと。降ってわいたような物質Dの供給。人生、これにまさることはない。たぶんこの先二週間、ってことは約半月も、干上がるとか干上がりかけるとかしないですむ。物質Dの禁断症状だと、干上がるのも干上がりかけるのも同じことだった。二週間！　心が踊り、一瞬、開いた車の窓から、春のはかない興奮が流れこんでくるのが香ったほどだ。

「いっしょにジェリー・フェイビンに会いにいかない？」ときいてみた。「連邦第三クリニックにあいつの持ち物を一山持ってくるとこなんだけどさ。昨日の夜に連れてかれたんだ。オレ、一度に全部運ばないで、少しづつ持ってってるんだ。だって退院してくるかもしれないじゃん。そしたら全部また運ばなきゃならないだろ」

「あたし、会わない方がいいと思う」とドナ。

「知ってるの？　ジェリー・フェイビンを？」

「ジェリー・フェイビンは、あたしが最初に伝染したって思ってたのよ、あのムシを」

「アリマキだよ」

「でもその頃はまだ、なんのムシかわかんなかったのよ。とにかくあたしは近づかない方がいいわ。こないだ会ったときも、すごいキツくなっただし。脳のレセプターがどうしたとかでしょ、あのヒト。最近の政府のパンフを見るとそうみたいよ」

「それ、なおんないんだよな？」

「ええ。回復不能だって」

「クリニックの人は会わせてくれるって言ってて、そいでたぶんあいつが何とか、ほら」と身ぶりをする。「完全には」また身ぶりをする。友だちについてここで言うとしているようなことは、どう表現していいのかわからなかった。

それをチラッと見て、ドナは言った。「あなた、言語中枢がイカれてたりしない？　あの　えっと、なんてったっけ　後頭葉にあるやつ」

「しない」彼は猛然と答えた。

「どっかイカれてるとこ、ない？」と女は頭をたたいてみせた。

「ないよ。ただ……だからさあ。ああいう糞クリニックの話をすんのがつらくってさ。ああいう神経性失語症クリニックってのが嫌いなんだよ。前に、入院してるやつに面会にいったんだけど、そいつは床をワックスがけしようとしててね。クリニックのやつらに言

わせると、そいつにワックスがけなんかできない、って言うか、やりかたがわかんないはずだって……でも、それでもそいつはやるうとし続けてさ、それが哀れで。それも一時間やそこらじゃないんだ。一ヶ月たってもう一回行ってみたら、まだやってるんだ。何度も何度も、前に面会に来たときと全然同じで、そのままのところで。自分がなんでワックスがけできないのかもわかんないの。今でもあの表情は忘れらんない。自分のやりかたのどこがおかしいのか思いつこうって頑張れば、いずれ正しいやりかたがわかるはずだって思いこんでてさ。『おれのやりかた、どこがまちがってる?』ってきき続けんの。でも、教えようがないんだ。って言うか、みんな教えたんだぜ　オレだって教えてやったよ　それでもそいつにはわかんないんだ」

「脳のレセプター部は、真っ先にやられるところだって書いてあった」ドナは平然としていた。「誰かの脳で、効きかたが悪かったとかいうふうなとき、キツすぎたとかそんなのときにね」目は前をゆく車を追っていた。「あ、見て、あそこ、二連装エンジンの新型ポルシェ」とはしゃいで指さした。「すごーい」

「ああいう新型ポルシェに乗ってたやつがいたけど。リバーサイド高速にのって、二八〇キロまでフカして　ドッカーン」と身ぶり。「もろトレーラーのカマ掘って。気がつくひまもなかったろうな」頭のなかで妄想にふける。自分がポルシェに乗っていて、しかもトレーラーには気づいている。そのトレーラーだけでなく全部のトレーラーに気づいている。そして高速自動車道上　ラッシュ時のハリウッド高速上　の全員が確実にこっちに気づいている。精悍な、肩幅の広い、見てくれのいい野郎が、まっサラのポルシェを時速三二〇キロでとばし、オマワリどもは手もだせずにあぐり口をあけてるしかないんだ。

「震えてるじゃない」とドナは手をのぼし、こちらの腕に置いた。落ち着いた手で、彼はすぐに正気にかえた。「スピードおとしなさいよ」

「疲れてるから。丸二日、昼も夜もムシを数え続けててさ。数えてはビンにつめるんだ。とうとうぶったおれて、次の朝に目をさまして、車にびんを運ぼう、医者に持ってって見せてやろうとしたら、びんの中に何も無いんだ。空っぽ」いまでは自分でも震えているのが感じられた。ハンドルを握る手が震えているのも見える。時速三〇キロで流している車のハンドルを握る手が震えている。「一つ残らず。空っぽ。ムシなし。それでわかったんだ。心底わかったんだ。悟ったんだよ、あいつの脳のこと。ジェリーの脳のこと」

すでに春の香りは失せ、物質Dを早急に摂らなくては、といきなり思った。思ったより時間がまわっていたか、あるいは最後にのんだ量が思ったより少なかったんだ。ありがたいことに、携帯用の蓄えをグローブボックスのずっと奥に入れてあった。そこで駐車用の空きスペースを探しはじめた。

「心がイタズラするのよね」ドナは上の空で言った。どうやら自分の世界に引きこもってしまって、遠くをさまよっているような感じだった。オレの落ち着かない運転に呆れてるのかな。たぶんそうだ。

べつの妄想フィルムが、頼みもしないのに頭の中で突然はじまった。まず見えたのは、駐車中の大きなポンティアックで、その後輪がジャッキで持ち上げられているのだが、車はずるずるすべりつつあって、年の頃十三ぐらいの長髪坊やがそれを必死で止めようとしていて、同時に助けを求めて叫んでいた。自分自身とジェリー・フェイビンが、いっしょにジェリーの家から飛び出して、ビール缶の散らかった車庫の前の道を駆けていくのが見えた。自分は、車の運転席側のドアをつかんで開け、ブレーキ・ペダルを踏もうとした。



でもジェリー・フェイスは、ズボン一枚で靴もはかず、ボサボサの髪　まだ寝ていたのだ　をなびかせたジェリーは、車の後ろにまわって、太陽にさらしたこともないむきだしの青白い肩で、少年を車からはるか彼方へと突き飛ばした。ジャッキーはまがって倒れ、車の後部はぐしゃっと落ち、タイヤとホイールは転がっていったが、少年は無事だった。

「ブレーキじゃ遅すぎた」ジェリーは息をきらせ、きたないべたつく髪を目の上からかきあげてまばたきした。「間に合わなかった」

「その子、だいじょぶか？」チャールズ・フレックは叫んだ。胸がまだドキドキする。

「ああ」ジェリーは少年の横にたって、ため息をついた。そしてすごい剣幕で少年を怒鳴りつけた。「バカ野郎！　いっしょにやるまで待ってて言っただろ！　それとジャッキーがすべったら　このバカ、一トン半を支えきれぬわけねえだろが！」彼は顔をゆがませた。少年、ラットアスは惨めな様子で後ろめたそうにもじもじした。「何度も何度も言ったはずだぞ！」

「オレ、ブレーキを踏もうとしてて」チャールズ・フレックは、少年に負けず劣らず役たらずで致命的な自分のバカさ加減は分かっていたが、そう言い訳した。立派な大人のクセに正しい行動がとれないなんて。それでも何とか、少年と同じくことばで自分を正当化したかった。「でもいまならわかる　」とまくしたてたところで妄想がとぎれた。実はこれはドキュメンタリーだった。昔、みんながいっしょに住んでいた頃にそういうことがあったのを覚えていた。ジェリーのとっさの判断　それがなければラットアスはポンティアックの後部の下敷になって、背骨をつぶされていただろう。

三人はトボトボと、家のほうに陰気に戻っていった。タイヤとホイールはまだ転がり続けていたけれど、それを追いかけてもしなかった。

「せっかく寝てたのに」暗い家の中に入ってジェリーはつぶやいた。「ここ何週間かで初めてだったんだ。ムシがそこそこに減ったもんでね。もう五日間もぜんぜん寝てなかった

あっちこっち駆けずりまわっててさ。ひょっとして、ムシどもがいなくなったかな、と思ったんだ。しばらくは消えてたんだぜ。だから、やつらもとうとうあきらめて、隣の家とか、どっかよそへ行ってこの家からは完全に退却したのかなって思ったんだが。でも、またやつらがいるのがわかる。あの十番目の坊虫帯、それともあの十一番目のやつだかが、また例によってインチキだったに決まってる」でも今の彼の声は和らいでいて、怒りもなく、当惑して抑えたような声だった。手をラットアスの頭にのせて、きつく小突いた。「このアホガキ　ジャッキーがすべったら、さっさと逃げるんだよ。車なんかどうだっていい。後ろにまわって押し戻そうなんて了見は起こすな。おまえのからだで、あんだけの重量を支えきれぬわけないんだから」

「でも、ジェリー、そしたら車軸がイカれるんじゃないかって　」

「車軸がどうした。車がなんだ。テメーの命だろうに」三人は、いっしょに暗いリビングをぬけて行き、そのとき過ぎ去った時間の回想はプツンと切れ、二度と戻ってはこなかった。



## 第2章

「アナハイム・ライオンズクラブの紳士のみなさま、本日は素晴らしい催しを用意いたしました。と申しますのも、このたびオレンジ郡政府のご好意によりまして、郡保安官局の覆面麻薬捜査官のお話をうかがい、さらには捜査官のお仕事、あるいは捜査官自身についての質疑応答などを行なう機会を得ることになったわけです」マイクを持った男が微笑んだ。身につけているのはピンクの格子縞スーツに幅広の黄色いプラスチック・ネクタイ、青いシャツと合成皮革の靴。太りすぎて、歳もくいすぎ、それにはしゃぎすぎ。はしゃぐようなことがほとんど、あるいは全然ないくせに、はしゃぎすぎている。

そいつを見ていると、覆面麻薬捜査官はへどが出そうだった。

「さて、ご覧になっておわかりかと思いますが」とライオンズクラブの司会者、「わたくしのすぐ右手に座っておいでこの人物は、ほとんど見えません。これはこの方がスクランブル・スーツと呼ばれるものを着ていらっしゃるためです。これはこの方が、法執行におきます日常職務のある部分、と申しますかほとんどの部分で、身につける と申しますか身につけなくてはならないスーツそのものでございます。その理由につきましては、ご本人から後ほど説明がでございます」

聴衆はほとんどあらゆる面で司会者を鏡に写したような連中だったが、そいつらがスクランブル・スーツを着た人物をながめた。

司会者は声高に述べる。「この人物は、集めました情報を報告なさいませときのコードネームに従いまして、フレッドと呼ばせていただきますが、ひとたびスクランブル・スーツを身につけますと、声からでも、あるいは技術的な声紋からでも、外見からでも誰だかはわからなくなります。確かにこうして拝見しますと、ぼやけたもやのようにしか見えませんね。いかがでしょう」司会者は派手にニッコリしてみせた。聴衆も、これは確かに面白いというわけで、それぞれにちょっとニッコリした。

スクランブル・スーツはベル研究所の発明で、S・A・パワーズという研究員の事故から生まれたものだった。この研究員は、数年前に、神経組織に影響のある脱抑制物質の実験を行っていた。ある晩、多少の陶酔性はあるが安全と思われた量を自分に静脈注射した結果、脳内の アミノ酪酸の流量が極度に低下するのを体験した。彼自身の主観から言えば、ベッドルームの向こう側の壁に投影された毒々しい眼内閃光活動が見え、その時は現代抽象絵画と思われた映像が、モニタージュされて、めまぐるしく移り変わった。

六時間ほどの間、トランス状態で、S・A・パワーズは何千ものピカソの絵が閃光のように次々に入れ替わるのをながめ、それからパウル・クレーが一生のうちに描いた絵の数ははるかに上回る数のパウル・クレーを見せられた。続いてモジリアニがおそるべき速度で入れ替わるのをながめながら、S・A・パワーズは、薔薇十字がテレパシーで自分に絵を送信しているのだと推測した（人は何にでも理論を欲しがるといふものだ）。たぶん発達した

マイクロ波中継システムで増幅されているんだろう。しかし、その後カンディンスキーの絵に悩ませられはじめて、レニングラード中央美術館がまさにこのような非具象絵画を専門にしていたのを思い出し、ソ連がテレパシーで自分とコンタクトを試みているのだと結論した。

朝になって、脳の アミノ酪酸の流量の著しい低下がこういう眼内閃光活動をもたらすのを思いだした。マイクロ波増幅があるとかないとか言う以前に、そもそも誰もテレパシーによるコンタクトなど試みてはいなかったのだ。でも、これがスクランブル・スーツというアイデアに結びついた。設計の基本原理は、多面水晶レンズが小型コンピュータにつながれているというものだった。コンピュータのメモリ・バンクには、さまざまな人間の百五十万に及ぶ断片化された人相が蓄えられている。老若男女を問わずあらゆる人間のあらゆる変数がエンコードされ、レンズを通じてあらゆる方向に投影され、一般人がちょうど着られるぐらいの大きさの、経帷子のような超薄膜に映し出される。

コンピュータがメモリをさらうにつれて、ありとあらゆる目の色や髪の色、鼻の形や種類、歯並び、顔の骨のつくりなどが投影される。そして経帷子のような超薄膜全体は、投影された肉体的な特徴を一ナノ秒ごとにそのまま映し出しては次の姿に移る。スクランブル・スーツの効果を高めたい一心で、S・A・パワーズはメモリ一周ごとに投影される特徴の順番を乱数化するようにプログラムを組んだ。そしてコストダウン（連邦政府の役人はこいつが大好きなのだ）のために、皮膜の材料として、すでに政府関係の仕事をしている大企業の工場副産物を使った。

とにかく、スクランブル・スーツを着ている者は万人となり、一時間ごとに（百五十万の部分の）あらゆる組合せとなる。したがって、彼 または彼女 に関するどんな描写も無意味だ。言うまでもなく、S・A・パワーズは自分自身の肉体的な特徴もコンピュータに入力してあったから、めまぐるしく特質が変遷するうちに、彼自身の姿も組み合わさって登場した……平均すると、スーツ一着あたり五十年ごとに、切り刻まれたのがまた組み立てられて現われる計算だ。こうして彼は、不死にめいっばい近づいたのであった。

「では、ぼやけたもやに盛大な拍手をどうぞ！」司会者が大声で言うと、大きな拍手がわき起こった。

スクランブル・スーツを着たフレッド、またの名をロバート・アークターはうめいた。最低だ。

毎月一度、覆面麻薬捜査官が一人でたために選ばれて、この類いの脳無し連中の集会で話をさせられるのだった。今日はフレッドの番だった。聴衆をながめながら、自分がどんなにカタギ連中を嫌っているかを知った。こんなのが大事なことだと思っていやがる。ニコニコしやがって。面白がったりなんかして。

ひょっとするとたった今、スクランブル・スーツの実質的に無限の組合せは、S・A・パワーズを構成していたかもしれないな。

「しかし、笑い事ではありませんが、ここにおいでのこと……」司会者はしゃべるのをやめて、思いだそうとしていた。

「フレッドです」とロバート・アークター。S・A・フレッドだ。

「フレッド、そうでした」司会者は、活気づいて気をとりのおし、聴衆にむけて腕をふった。「お気づきのよう、フレッドの声はサン・ディエゴにあるドライブ・イン式銀行のロボットの、コンピュータの声のようですね。まったく抑揚がなく人工的です。わたくしたち聞く側に何の印象も与えません。これはこの方がオレンジ郡麻薬濫用、えへん、対策

本部の上司に報告なさるときもまったく同じです」と意味深に間。「と申しますのも、こうした警察の捜査官はおそるべき危険にさらされているからでして、ご承知のように、麻薬勢力は驚くほどの狡猾さをもって国中の法執行機関に侵入している、あるいは侵入し兼ねない、というのがその方面に詳しい専門家の考えなのです。したがって、こうした仕事に従事される方々の保護のため、このスクランブル・スーツは不可欠なのであります」

スクランブル・スーツにわずかな拍手。そして膜の中に潜むフレッドに期待をこめた視線。

「しかし現場での職務におきましては、もちろん彼もこんなものを着てはいません。あなたやわたくしと同じような服装をしております、が、もちろん、格好はヒッピーで、様々なサブカルチャー団体に属して精力的に活躍なさるわけです」司会者は最後にこうつけ加えると、マイクの前から離れてフレッドに場所を譲った。

フレッドは、立ち上がってマイクの前に行くように合図された。フレッドことロバート・アークターは、これまでこの手のことを六回やってきて、何を言えばいいのか、何が待っているのかも承知していた。種類や程度の差こそあれ、クソみたいな質問と露骨な愚鈍さの詰め合せだ。こっちの得るものは、時間の無駄に加えて怒り、そして毎度の空虚さ。それが毎回強まる。

拍手が鳴りやんでから彼はマイクに向かった。「もしあなたがわたくしを街で見かけたら、たぶん『気色の悪いイカしたヤク中め』とでも言って、嫌悪を感じて離れようとするはずですよ」

沈黙。

「わたくしはあなたがたのような身なりはしていません。そんな危険は冒せないんです。命がかかっていますから」本当は、こいつらとそれほどちがったなりをしているわけではなかった。それにどのみち、仕事であろうとなかろうと、命がかかっているといまいと、自分の着たいものを着ることにしていた。自分の身なりは気に入っていた。でも、ここでしゃべっている内容は、その大部分が他人の書いたもので、彼はそれを渡されて暗唱しているだけだった。多少は脱線してもよかったが、みんなそれぞれ自分用の標準フォーマットを持っていた。何年前か、ある野心にあふれた署長が導入したもので、それが今では正式文書になっていた。

この考えを押しこむまでしばらく手間取った。

「まず、ここオレンジ郡で、わたくしたちの都市の道ばたや学校の廊下において、違法な麻薬の売人や供給源をつきとめるために、覆面捜査官としてわたしが何をしようとしているのか、そんなことをお話するつもりはありません。お話ししたいのは」と学校のPRの授業での訓練通りに間をおく。「わたくしが何を恐れているか、です」と文を終える。

これは連中の虚をついた。みんな食い入るようにこちらを見つめる。

「昼も夜も、わたくしが何を恐れているかと言えば、わたくしたちの子供、あなたがたの子供、わたくしの子供……」また間。「二人おりますが」そして、特に声を落として「まだ小さい、ごく幼い子供たちです」ここで決然と声を張り上げる。「しかし、どんなに幼くても、この社会を破壊しようとするやつらは平気で中毒にしまえるんです。それも意図的に、儲けのためにです」また間。それから、もっと平静に続けた。「この連中というか獣どもが誰なのか、まだつきとめてはいけません。やつらは、わたくしたちの若い世代を、ここがまるでアメリカではない異国のジャングルでもあるかのように食いつくそうとしています。日々、何百万もの男女　　というか、かつては男女であった者

に注射され、飲まれ、吸われている、脳を破壊する汚らしい代物でできたこの毒を調達してくるやつらの正体は、まだ徐々に解明されている段階です。しかしいずれは、神の前に、すべてが明らかになるでしょう」

聴衆からの声：「やつらをたたきつぶせ！」

同じくらい熱のこもった声がもう一つ：「アカをやっつける！」

拍手、数回繰り返す。

ロバート・アークターはしゃべるのを止めた。こいつらを見てやれ。太ったスーツ、太ったネクタイ、太った靴。物質Dといえどもこいつらの脳は破壊できまい。脳なんかないんだから。

「本当のところをおっしゃってください」さっきほど声高ではない声が上がった。女の声だ。きょろきょろしてアークターは中年女性を見つけた。そんなに太っていない。手を不安そうに握りしめている。

フレッドだかロバート・アークターだか、いずれにしても彼は言った。「毎日、この病はわたくしたちからツケを取り立てます。過ぎ行く毎日の終わりにはその儲けが流れて行き 流れる先は、いずれ 」中断した。文の続きがどうしても思い出せないのだ。授業でも前の講演でも、何万回も繰り返したもののな。

巨大な部屋の全員が黙ってる。

「まあ、どのみち儲けじゃないんです。もっと別のものです。実際に目にする出来事は」連中、ちがいは気がつかなかったみたいだな。お仕着せの演説を離れて、オレンジ郡当局にひかえているPRマンの助けもなしに勝手に脱線したのに。どのみち何のちがいがあある？ ちがったらどうだって言うんだ？ こいつら何も知りゃしない、何も気にしやしない。このカタギどもは、防犯設備つきの複合ビルの巨大なアパートに住んで、警備員に警備してもらって、その警備員たちは、どうせテメーらが金を払ったわけでもないのに、ピアノや電気時計やヒゲ剃りやステレオをかつばらおうと枕カバーを持って壁をよじ登ってくるヤク中には、誰であれ一人残らずぶっばなしてやろうと身構えてる。ヤク中のほうはといえば、一服手に入れたいだけなのに。そのクソが手に入らなけりゃ死にまうかもしれない、文字通り掛け値無しに、禁断症状の苦痛とショックで死にまうんだ。でも、わが身は内側で安全に外を眺めているだけで、壁には電気が通ってて警備員も武装してて、そんな連中が何でそんなことを気にかける？

「あなたが糖尿病で、インシュリン注射の金がなかったら、盗んでも金を手に入れるますか？ それともおとなしく死にますか？」

沈黙。

スクランブル・スーツのヘッドホンでちっちゃな声が聞こえた。「出来合いの台本に戻れ、フレッド。冗談じゃないぞ」

フレッドだかロバート・アークターだか誰だかは、のど当てマイクに向かって「忘れました」と言った。これが聞こえるのはオレンジ郡GHQの上司だけだった。上司と言ってもミスター・Fことハンクではない。これは今回のためだけに彼につけられた、名前も知らない上司だった。

「よーし」公式のちっちゃなプロンプターがイヤホンのなかで言った。「読んでやるから、後について繰り返せ。でも、自然に聞こえるようにしろよ」ちょっと間があって、ページをめくる音。「えーと……『儲けが流れて行き 流れる先は、いずれ 』ここらへんでお前は中断したな」

「こいつにはどうも抵抗があります」とアークター。

「『わたくしたちがつきとめます。そうすれば即座に懲罰が続きます。そしてその時になったら、死んでもやつらの側にはいたくないものです』」公式プロンプターは意に介さず言った。

「なぜ抵抗があるかわかりますか？ こいつこそが人をクスリに走らせるものだからですよ」とアークター。こいつのせいで人は何もかも投げ出してヤク中になるんだ。この手のもののせいで。こいつのせいで、みんなあきらめて逃げ出すんだ。嫌悪のせいで。

だがそこで再度聴衆のほうを見ると、こいつらは一向に嫌悪していないのに気がついた。それどころか、こうじゃなければ連中の耳には届かないのだ。おれが相手にしているのはぬけ作どもなんだ。単細胞ども。小学校一年生に教えるのと同じように仕込んでやらなきゃならない。「リ」はリンゴのりで、リンゴはまあいるですよ。

「Dは、物質DのDです。墮落と脱落と断絶のDでもあります。あなたがたが友人から断絶し、友人がたがあなたから断絶し、誰もがほかのみんなから断絶する。お互いの疎外と孤独と憎しみと不信。Dとは、最終的には死です。わたくしたち　　」彼はためらった。「わたくしたちヤク中に言わせれば、スロー・デス、のろい死です」声はかすれて沈みこんだ。「まあ、御存知とは思いますが。のろい死。頭のとっぺんからじわじわと。えー、これで終わります」椅子のところに戻ってすわった。しーんとしている。

「台無しだ。戻ったらわたしのオフィスに來い。四三〇号室だ」と上司兼プロンプター。

「はい。しくじりました」とアークター。

連中は、こっちが目の前で小便でも漏らしたかのような目で見つめていた。でも、その理由はよくわからなかった。

マイクに歩み寄って、ライオンズ・クラブの司会者が言った。「申し遅れましたが、今回の講演に先立ちましてフレッドは、自分のコメントはごく短いものにして、質疑応答を中心に進めて行きたいとおっしゃっていました。では」と司会者は右手をあげた

「どなたかいらっしゃいますか？」

アークターは突然、ぎくしゃくと立ち上がった。

「おや、フレッドがなにかつけ加えたいことがあるようです」と司会者はこっちに会釈した。

ゆっくりとマイクの前に戻りながら、アークターは顔を伏せて、正確に語った。「ひとつだけ。ヤクをやったからといって彼らを買めないでください。ヤクをやっている連中、中毒の連中をです。彼らの半分は、大部分は、特に女の子は、自分がヤクをやっていると、何かをやっていることさえ知らずに中毒になるんだから。だからとにかく、その人たち、みんな、わたくしたちがヤクをやらないようにして」ここで彼は顔をちょっとあげた。「つまりさ、やつらはワインにシャブを溶かして、その売人たちがだけど、そんで　　そのサケをナオンに飲まして、それもろくに歳のいってねえ娘に、シャブを八錠とか十錠とか飲まして、その娘が気を失うとメックス一発射って、メックスってのはヘロインと物質Dを半々に混ぜたもんで　　」彼は口を閉じた。「どうも」

男が声をあげた。「どうやって止めればいんでしょうか」

「売人たちを殺すんです」とアークターは椅子に戻った。

オレンジ都市庁や四三〇号室にすぐ戻る気がしなかったので、アナハイムの商店街をぶらついて、マクドナルドや洗車場やガソリンスタンドやピザハットやその他の驚異の店を

検分して回った。

ほかの雑多人々とともに、こうしてあてもなく公共の通りをうろついていると、いつも自分は誰なんだろうという奇妙な感覚に襲われた。会場のライオンズ連中に話したように、スクランブル・スーツを脱げば自分はヤク中に見えたと、ヤク中みたいな話し方をした。今だってまわりの連中はまちがいでなくこっちをヤク中と思っているし、そういう態度をとっている。仲間のヤク中　ほれ見ろ、自分でも「仲間の」とか言ってる　は、「よお、兄弟」みたいな目くばせをよこすが、カタギはよこさない。

司教の僧衣と冠をつけてうろつきまわったら、みんなおじぎをしてひざまづいたりなんかして、こっちの指輪はおるかケツにまでキスしようとして、そうこうするうちにホントに司教になっちゃう。たとえばの話だけど、アイデンティティって何？　どこまでが演技？　誰にもわからんよ。

自分が誰なのか、何者なのかという感覚が本気でイカれるのは、マップがちょっかいをかけてくるときだ。制服警官だろうと巡査だろうと、ただのオマワリだろうと、ありとあらゆるマップが、たとえばこっちが歩いてると、脅すみたいに路肩に車をせてきて、間を歩いてジロジロと鋭く金属的に無表情にこっちを検分し、それでどうせただの気まぐれで、二度に一度は車をとめてこっちを呼び止める。

「よおし、身分証明書を見せて」とオマワリは手を差し出す。そして、アークター・フレッド・某・なにがしが札入れをごそごそやっている、こう叫ぶ。「前科は？」または、ちょっと変化をつけてこうつけ加える。「こんどが初めてか？」まるでいますぐブタパコ送りだとも言わんばかりに。

「ネタは何だよ」とやりかえすのが普通だった。やりかえす場合は、であったが。まわりには自然と野次馬がたかる。ほとんどの連中は、こっちが道ばたで商売してんのをとっつかまったんだろうと思ってる。そして不安そうにニヤリとして、次に何が起きるかを見守るのだが、なかには腹立たしそうな表情のやつらもいて、たいていはメキシコ移民か黒人かヤク中丸出しのツラだった。そしてそいつらも、すぐに自分たちが腹立たしそうなのに気がついて、あわてて平然とした顔をしようとする。だって、マップの前で腹立たしそうだったり不安そうだったり　どっちでも関わらない　する連中は、なにか後暗いものがあるというのが常識だったからだ。とくにそれはオマワリたちの常識であり、伝説であり、そういう人間は自動的にちょっかいが加えられる。

でも、今回はだれも寄ってこなかった。それとわかるヤク中はたくさんいた。自分はそのなかの一人にすぎない。

おれは本当は何者なんだ？　一瞬、スクランブル・スーツがあればと願った。そうすれば、ぼやけたもやになり続けられるし、通りすがりの、道行くすべてのやつらが喝采してくれる。ぼやけたもやに盛大な拍手を、と頭のなかでちょっとプレイバック。有名になるには大した方法だよ。たとえば、どうすればこれがお目あてのぼやけたもやであるかどうかわかる？　中に入っているのはフレッド以外の誰かかも知れないし、別のフレッドかも知れないし、連中には絶対わからない。フレッドが口を開いてしゃべったとしても、それでも本当のところはわからない。たとえばフレッドのふりをしているアルかもしれない。中に入ってるのは誰でもいいし、誰もいなくていいんだ。オレンジ郡GHQから声をスクランブル・スーツに送って、保安官のオフィスから操っているかも知れない。その場合、フレッドというのは机にいてたまたま原稿とマイクを手にした誰であってもいい。あるいはそれぞれ自分の机についてる連中全員であっていい。



でも、おれが最後にあんなことを口走ったせいで、そうも言ってもらえないわけだ。オフィスにいたのは誰でもいいって連中じゃない。それどころか、オフィスの連中は、この件についておれに話があるそうだし。

あまり楽しみな話ではなかったのだから、寄り道をして引き延ばしを続け、どこに行くわけでもなく、そこらじゅうをうろついた。南カリフォルニアではどこに行こうとまるでちがいはない。いつもおなじマクドナルドのハンバーガー屋が繰り返し繰り返し出てきて、どこかに行くふりをしている自分が通りすぎたあたりでぐるっと輪になってるエンドレス・フィルムのような感じだ。そしてやがて腹が減ってマクドナルドに行くとマクドナルドのハンバーガーを買おうと、そいつは前回、その前の回、さらにその前の回等々、おそらく自分が生まれる前にさかのぼってみても、以前に売りつけられたやつとまるで同じで、それに悪い連中　うそつきたち　は、どうせ原料は七面鳥の内臓だなんて言ってた。

マクドナルドは、看板によると、同じオリジナル・バーガーをこれまで五百億個も売ったそうだ。買ったやつも同じだったりして。カリフォルニア州アナハイムの人生というのは、それ自体がコマーシャルのようなもので、果てしなくプレイバックされる。何も変わらない。ぼんやりしたネオンサインの形でどんどんどんどんスプロールするだけ。ずいぶん昔から、そこにあったものは数だけが増えて、その場に永久に凍りついてゆく。こういう代物をこしらえる自動工場のスイッチが「入」のままつかえてしまったみたいだ。こうして地面はプラスチックとなりました。「海はどうして塩辛い」というおとぎ話を思い浮かべていたのだ。いつか、おれたちみんな、マクドナルドのハンバーガーを買うだけでなく売のまで義務づけられるぞ。それでお互いにリビングルームで永久に売ったり買ったりする。そうすれば外に行かなくて済む。

時計を見た。二時半。買いの電話をする時間だ。ドナの話だと、メタンフェタミンを混ぜた物質Dを彼女経由で干錠キメられるはず。

むろん、手にいれたブツは、郡麻薬濫用局に渡され、分析の後に破棄される、のかどうかは知らなかったが、自分たちでのんじゃうのかも。そういう噂もあった。あるいは売るとか。でも、ドナから買うのは麻薬売買で逮捕するためではない。これまで何度も買っているが、一度も逮捕したことはない。片手間のちんけな末端売人を逮捕するとか、ヤクの取引をカッコいいとかきまってるとか思ってるような女を逮捕するなんてのが目当てではないのだ。オレンジ郡の麻薬捜査官の半数は、ドナが売人なのを知っていたし、面も通っていた。ドナはセブン・イレブンの駐車場、それも警察が常時動かしている自動ホロ・スキャナーのまん前で取引をして、それでも逮捕されなかった。ドナは、いわば誰の前で何をしようとも逮捕されることはなかったわけだ。

このドナとの取引が何になるかと言えば、これまでの他のヤツと同じくドナを通じて、彼女が買っている供給元へと一歩駒をすすめようという魂胆だった。だからドナから買う量はだんだん増えていった。最初はうまく言いくるめて　と言うべきかどうか　好意で十錠ほどわけてもらった。友だち同士だから、というわけ。それから、あとで恩返しと称して百錠入りの袋をせしめ、つづいて三袋。さて、もし運がよければ千、つまり十袋キメられるはず。いずれドナの経済的な負担力を越える量を買うようになるだろう。すると彼女は、それだけのブツの末端価格を保証できるだけの前金が払えなくなる。すると、ブツが手に入らず、大もうけするかわりに損をしてしまう。相手は言い値をゆずらない。ドナは、一部でいいから前金をよこせと言い出す。こっちは断わる。ドナは自分で供給元に

前金を払うだけの余裕がない。だんだんタイムリミットが近づく　この程度のセコい取引でもピリピリしてくる。みんな苛立つ。誰だか知らないが彼女の仕入れ先は、ブツは押さえてあるのに彼女が姿を見せないのて怒る。だから、うまくいけば、いずれドナはさじを投げ、こっちと仕入れ先とにこう言う。「ねえ、おたがい直で取り引きしてよ。あたし、どっちも知ってるし、どっちも信用できるし。保証するわ。会えるように場所と日時は手配したげる。だからさ、ボブ、あんなにたくさん買うんなら、今度から直で買って」だって、この量を買ってるとなると、彼はどう考えても売人でしかなかった。これはもう売人の扱う量だ。一度に最低千は買っている以上、ドナはたぶん、こっちが百錠ずつさばいて利ざやを稼いでいると思うはずだ。こうして彼ははしごを一段上り、線上の次の人間と接触して、ドナのような売人になり、そしていずれはもう一段、そしてもう一段と、買う量を増やしてゆく。

いずれは　このプロジェクトはこればっかだが　逮捕するに値するだけの人物に会える。つまり、何か知っている人間、つまり製造元とつながりのある人物か、または直接接触はなくても製造元を知っている人物だ。

ほかのドラッグとはちがって、物質Dは　どうやら　供給元が一つしかないようだった。合成されたもので、生物から採れたものではなかった。したがって、どこかの化学工場から来たはずだ。合成可能だから、すでに連邦政府の研究が始まっていた。理論的には、まず化学式を知っていて、次にその工場をつくるだけの技術的能力があれば、誰にでもつくれる物質である。でも、現実問題としては、そのコストは法外だった。それに、物質Dを開発し、製造して流している連中は、まともな市場競争が不可能なほど安く売っていた。それに販売網は実に広くて、供給源は一つでも、分散して立地しているらしかった。おそらくは北米とヨーロッパの主要麻薬消費都市の近くに一つづつあるのだろう。それがどうして一つも発見されていないのかは謎だった。が、一般の見方として、そしてまちがいなく政府もヴェールの下でそう考えているようだが、このSD機関　とその筋はいい加減に呼んでいた　は地方及び国レベルの法執行機関のずっと上層部にまで食いこんでいるので、その実態についていささかでも使える情報を見いだしたものは、じきに買収されるか、あるいは存在しなくなるのだろうと思われていた。

むろんボブは、ドナ以外にも同時に数人、手札を持っていた。しだいに買う量を増やしてゆく売人たちだ。でも、ドナは自分の女だったから　と言うか、こちらはそうなるよう希望していた　彼女がいちばんやりやすかった。訪ねたり、電話でしゃべったり、いっしょに出かけたり家に呼んだり　そういうのは仕事であると同時に自分の楽しみでもあった。どうせ誰かをスパイして報告するんなら、どのみち会わなきゃならない連中のほうがいい。怪しまれにくいし、こっちもうんざりしないで済む。それに、しょっちゅう会っていなかったやつが相手でも、調査をはじめれば結局はしょっちゅう会わざるを得なくなる。最終的には同じことだ。

電話ボックスに入って、電話でござこそ。

じりりりりん。

「もしもし」とドナ。

世界中の公衆電話は盗聴されていた。されていなければ、それはどこぞの担当者がまだやってきていないというだけのこと。盗聴内容は、どこか中央の記録ルールに電子的に入力され、オフィスを出ることなく数多くの電話を聞いている係員によって、二日に一度、プリントアウトが出される。係員はただ記憶ドラムを電話で呼び出して、ある信号を送る

と再生がはじまる。テープの空白部分は自動的に飛ばされた。ほとんどの通話は無害だった。係員は、それほど穏やかでないものを選び出すことができた。それがこの係員の能力だった。このために給料をもらっているのだ。うまい係員もいれば、それほどうまくないのもいる。

そういうわけで、彼とドナが話しているのを聞いている人間は誰もいなかった。これがプレイバックされるのは早くて明日。もしとんでもない非合法的な相談ごとをしていて、盗聴係がそれに気づけば、声紋がとられる。でも、ほどほどにしておけば大丈夫。どのみち話がヤクの取引なのはわかってしまう。でも、ここで政府のいわば経済則が効いてくる

日常茶飯程度の非合法取引なら、声紋をとったり捜査したりする手間に値しないのだ。その手の代物なら、山ほどの電話機で、連日のように山ほど行なわれていた。ドナも彼もそれを承知していた。

「元気？」

「うん」ドナの暖かいハスキーな声がちょっとためらった。

「頭はどう？」

「ちょっとダメ。調子悪い」間。「今日の朝さあ、店のボスに因縁つけられちゃったの」ドナはコスタ・メサのゲートサイド・モールにある小さな香水屋のカウンターで働いていた。毎日MGに乗って通っている。「それが何て言われたと思う？ 客がさあ、おいぼれの灰色頭だったんだけど、そいつが十ドルごまかしてっただけ。そしたら、それがあたしのせいだからあたしに埋め合せしろってのよ。給料からさっ引くって。おかげでクソ悪い

あ、ごめん 悪いことなんもしてないのに十ドル損しちゃった」

アークターが言った。「ねえ、持ってない？」

答える彼女は不機嫌になっていて、まるで売りたいくないみたいだった。やべえ。「どのくらい？ わかんないけど」

「十」二人の取り決めで、一が百だということになっていた。したがって、これは千の買い注文になる。

取引の偽装にもいろいろあったが、公共通信で取り引きせざるを得ない場合、でかい取引の見た目を小さい取引に見せかけるのは、結構いい手口だった。この程度の量なら、いつまで取り引きしていても、官憲の注意をひくことは絶対ない。さもないと、麻薬捜査チームはあらゆる通りのあらゆるアパートや家を朝から晩までひっかきまわして強制捜査をしなければならず、しかも大した成果はあげられないことになる。

「『じゅうう』？」ドナはいまいましそうにつぶやいた。

「ホントきらしててさ」売人と言うよりは、ヤク中の口ぶり。「あとでキメたらその分払うから」

「ううん」ドナはぼんやりと言う。「あなたは無料でいいから。十」いま、こっちがさばいてるのかしらと思案中なのはまちがいない。たぶんさばいてるはずだわ。「十ね。わかった。じゃあ、三日後」

「早くなんない？」

「このブツはすごく」

「OK」

「寄るわ」

「何時？」

ドナはちょっと計算した。「そうだな、夜の八時頃かな。ねえ、見せたい本があるの。

誰かが店に忘れてった本なんだけど、すっごいいいの。オオカミの本。ねえ知ってる？ オスのオオカミってさ、相手をやっつけても殺さないんだって おシッコかけるんだって。ホント。倒した相手の上に立っておシッコかけて、いっちゃうの。それだけ。縄張り争いがほとんどらしいわね。それと交尾の権利とか」

アークターは「おれだってちょっと前に、人にしょんべんかけてやったぜ」と言った。

「ええーっ、ウソ！　なんで？」

「比喻だよ」

「なんだ、ホントにやったんじゃないのか」

「だからさ、そいつらにこう言ってやったワケ　」ここで中断。口がすべった。行き詰まり。まずい。「なんか、野郎どもがいてさ。族みたいな連中、わかる？　フォスター冷凍倉庫のあたりでさ。おれが流してたらアヤつけてきやがったの。だから振り向いてこう言ってやったワケ　」一瞬、せりふが思いつかなかった。

「最低上げつなくても言っていていいよ。族連中とか、上げつなく言っやんないとわかんないもん」

アークターは「いやあ、『そんな馬に乗るよりブタにでも乗れば？』ってさ」と言った。

「イマイチわかんない」

「だからさ、馬はバイクで、ブタってのは女で　」

「あっ、そうか、それでわかった。グローい」

「じゃあ、言ってた通り、おれんとこでまた。じゃあね」と彼は切ろうとした。

「さっきのオオカミの本、持ってっていい？　コンラート・ローレンツが書いたの。この人、オオカミの最高権威なんだって。背表紙に書いてあったわ。ああ、そうだ、それともう一つね、あなたのルームメイトが二人とも店に来たわよ。アーニー・なんとかと、例のバリス。探してたわよ、もう会ったか知らないけど　」

「なんで探してたんだ？」とアークター。

「あなたの脳彩スコープあるでしょ、あの九百ドルしたとかいうヤツ。家に帰ったらいつもつけて遊んでるじゃない　アーニーとバリスがあれがどうしたとか言っって。なんか今日使おうとしたんだけど動かなかったんだって。色もでないし脳波もでないし、どっちもダメだったって。そいでバリスの工具箱もってきて、裏ぶたを開けてみたんだって」

「ええっ、なんだってえ？」彼は激怒した。

「そしたらメチャクチャにされてたって。壊されてて。電線も切られててとか、その手の不気味なコトとか　ホラ、気色悪いみたいな。ショートしてたり部品が壊れてたり。バリスはなおそうとしたって　」

「おれ、すぐ帰る」とアークターは電話を切った。おれの一番大事な持ち物を、と彼は苦々しく思った。それをあのアホのバリスがいじくるとは。でも、いまずぐは帰れないと気がついた。ニュー・パスに行っって、連中がなにをたくらんでるか調べなきゃ。

これは任務だった。職務命令だ。

## 第3章

チャールズ・フレックもまた、ニュー・パスに入ろうかと思っていたところだった。ジェリー・フェイビンがイカれたせいで、彼はそこまで思いつめていたのだ。

サンタ・アナのフィドラーズ・スリー喫茶店にジム・パリスとすわって、彼は砂糖をまぶしたドーナツをむっつりともてあそんでいた。「つらい決断だよな。あそこの治療ってのはぞっとしねえもん。あそこって、自殺するとか腕を喰いちぎるとかしないように見張ってるだけで、何もしてくれないんだもん。医者がバリウムを処方するとか、そんなもんだろ」

笑いながら、パリスは自分のパティ・メルトを検分した。とけたにセチーズと牛ひき肉もどきが、特製有機パンにのっかっている。「これってどういうパン？」とパリスはたずねた。

「メニューを見るよ。書いてあっから」とチャールズ・フレック。

「ニュー・パスに入ったら、肉体、正確には脳の内部に存在する基礎的な物質流から派生する、さまざまな症状を体験することになるよ。物質とはすなわち、ノルアドレナリンとかセラトニンとかのカテコラミン類だ。つまり、こういう仕組みだ。物質D、というか、中毒性のクスリすべてをなんだけど特に物質Dは、カテコラミンと反応して、しかもその反応は細胞レベル以下に限定されてしまう。生物学的な対抗適応が起きて、それが意味で永續する」パリスはパティ・メルトの右半分を大きくかじった。「むかしは、これが起きるのはアルカロイド系の麻薬だけだと思われてたんだけど、ヘロインとか」

「おれ、ヘロインはやったことないぜ。ダウナーだもん」

立派なおっぱいでブロンド、黄色い制服で愛想のいい美人のウェイトレスが、テーブルにやってきた。「ハイ、ほかにオーダーある？」

チャールズ・フレックはおびえて顔をあげた。

「キミの名前、パティ？」パリスはききながら、心配ないよ、とチャールズ・フレックに合図した。

「ううん」と女は右のおっぱいにつけたバッジを指さした。「ベスよ」

左のおっぱいは何て名だろう、とチャールズ・フレックは思った。

「前に来たときのウェイトレスがパティって名前でき」とパリスはいやらしくウェイトレスを見つめた。「サンドイッチとおんなじ」

「サンドイッチのとはちがうパティだったはずよ。サンドイッチのパティは Patty で、あの娘は確か Patti だったもん」

「オーダーはなし。万事絶好調」とパリス。その頭上に吹き出しが出て、ベスが服を脱ぎながら犯してちょうだいと身悶えているのがチャールズ・フレックには見えた。

「おれは全然好調じゃねえよ、他人にはない問題をいろいろ抱えてるし」

陰気な声で、パリス曰く「お前さんに限った話じゃねえよ。そういうやつは数は日増しに増えてる。ここはビョーキの世界だし、ひどくなる一方だかんね」彼の頭上の吹き出しもひどくなる一方だった。

「デザートなんかどお？」とベスがニッコリして見おろした。

「何があんの？」チャールズ・フレックはいぶかしんできいた。

「新鮮なストロベリー・パイと新鮮なピーチ・パイ。どっちもここの自家製の」とベスはニッコリしたまま言った。

「いや、デザートはいらない」とチャールズ・フレック。ウェイトエレスは去った。「あーりゃ婆さん用だよ、あんなフルーツ・パイなんて」とパリスに言った。

「自分自身をリハビリに送りこむなんて、そりゃ考えただけで憂鬱になるわな。これはある目的を持ったマイナス症状、すなわち恐怖が自己主張を行なうことによるものだ。体内のクスリがお前さんに、ニューパスに行くな、クスリをやめるなって語りかけてるんだ。つまりさ、あらゆる症状ってのは、プラス、マイナスに関わらず目的を持ってるんだ」

「そりゃあまた」チャールズ・フレックはつぶやいた。

「マイナスのほうはどういう形であられるかってえと、たとえば泣き言だ。全身が意図的に、その所有者　この場合はお前さんだけ　に狂ったみたいにヤクを続ける口実を　」

「ニュー・パスに入ってまず何をされるかってと、チンポコを切り落とされる。思い知らせるためだけ。そこからはもう向こうのしたい放題」とチャールズ・フレック。

「脾臓が次」とパリス。

「なに、んなもんまでちょん切んのお　それ何するところ、脾臓って」

「食い物の消化を助けてくれんの」

「どーゆーふうに？」

「セルロースを取り除くんよ」

「だったらそれをちょん切られちまったら　」

「食い物はセルロースなしのもんだけ。葉っぱとかアルファルファはダメね」

「そんなんで長く生きられんの？」

「まあ、本人の心構え次第けど」

「フツー、ヒトっていくつ脾臓があんの？」腎臓なら普通は二つあるのは知っていた。

「体重と年齢次第」

「なんで」チャールズ・フレックは非常に怪しいものを感じた。

「人間は歳にしたがってだんだん脾臓が増えてくんだよ。八十になる頃には　」

「フカシてんじゃねえぞ」

パリスは笑った。こいつ、いつだっておかしな笑い方をするやつなんだ、とチャールズ・フレックは思った。ウソくさい笑い方で、何かがかわれるときみたい。「麻薬更正施設なんぞで入院治療を受ける気になんかあった理由は？」パリスは率直にきいてきた。

「ジェリー・フェイス」と答えた。

あっさりと振り捨てるような仕草をしてパリスは言った。「ジェリーは特殊ケース。前にジェリー・フェイスが、よるよるしちゃあブツ倒れて、もう全身クソまみれで自分がどこにいるのかもわかんなくなって、それで自分がこんど手に入れた毒が何だかをオレに見せて調べさせようとしてんの、たぶん硫酸タリウムだろうな……殺虫剤や殺鼠剤に入ってるの。何かの仕返しで誰かにつかまされたんだぜ。オレなら、あいつをおかしくしたか

もしない有害物質や毒を少なくとも十は 」

「理由はまだある。おれ、手持ちがまた切れかけてて、もう耐えられねえんだ、こういつも、手持ちが残り少なくなってきてんのに、次に手に入るかどうかもわからないのが」

「それを言やあ明日の太陽が拝めるかどうかだってわかりゃしないよ」

「でもチクショウ いまなんか、ホント切れそうであと数日ってとこまできてんだぜ。それと.....どうもボられてるみたいなの。だってこんなはやくのんでるはずないもん、だれかがおれの蓄えからくすねてるに決まってる」

「一日どんくらいやんの？」

「そりゃなかなかはっきりわからないけど、そんなに多くはないよ」

「耐性ができて、だんだん量が増えるんだぜ」

「うん、当然、だけどそうじゃない。切れるとかそーゆーのがやなの。でも一方じゃ.....」  
そうだ、思いだした。「新しい仕入れ先ができたみたい。例のドナ、ドナなんとかいう娘」

「ああ、ボブの女ね」

「そ。愛人」チャールズ・フレックはうなずいた。

「いや、あいつは一度もやっちゃいないね。努力はしてるけど」

「あの娘、信用できる？」

「どっち？ 寝る方、それとも 」とパリスは身ぶり：手を口に持って行って何か飲みこむ仕草。

「そんなセックスがあんの？」それからハッと気がついた。「ああ、うん、あとの方」

「そこそこには信用できるよ。落ち着かない娘だけどね、ちょっと。まあ、そこは女だから、特に黒髪だし。ご他聞に漏れず、脳が股の間にあるってヤツ。たぶん蓄えもアソコに隠してんだろ」パリスはくすくす笑った。「売人として扱う分全部をね」

チャールズ・フレックはパリスのほうに身を乗り出した。「アークターが一度もドナとコマンきめてない？ だってあいつはやったみたいない言い方してるぜ」 パリスは言った。「ボブ・アークターってそういうやつだかね。いろんなことをやったような口をきく。でもちがうんだな、これが。もう全然」

「だいたいなんで寝てないの？ あいつ、立たねーの？」

パリスは賢そうに考えこんで見せた。まだパティ・メルトをもてあそんでいる。ちぎってもう小さなかけらになってしまっていた。「ドナに問題があるんだ。たぶんヘロインをやってるんだな。肉体的な接触は何でもいやがるだろう ジャンキーはセックスへの興味を失うんだ。血管収縮のせいで器官が腫れ上がるから。それでドナは、オレの観察では性欲が不自然に欠けている。もう異常なくらい。それもアークターに対してだけじゃなくて.....」ここで不機嫌そうに口ごもった。「他の男性に対しても」

「ばーか、要するに、テメーになびかなかったってだけだろ」

「なびくよ。扱い方しだいでは。たとえば.....」パリスは謎めかして見上げた。「あの娘と九十八セントで寝れる方法を教えてやろう」

「べつに寝る気はねえよ。クスリが買えりゃいいんだ」チャールズは落ち着かなかった。パリスには、いつもどこかこっちの腹をムズムズさせるような何かがあった。「なんで九十八セントなの？ 向こうだって金なんか受け取らないだろ。売りもんじゃあるまいし。それに、どのみちボブの女だぜ」

「金を直接支払うのではないのだよ」パリスは独特の正確で学のある話し方をした。嬉しさと狡猾さを長い鼻毛の間でふるわせながら、チャーリー・フレックのほうに身

を乗り出した。それだけでなく、彼のグラスンの緑がなお一層濃くなった。「ドナはコカインをやってる。コカインーグラムさえやれば、どんなヤツにでもまちががなく股を開く。特にそのコカインに、ある珍しい薬品が、オレが独自のつらい研究を重ねてきたような純粹に科学的な方法で加えられていればね」

「頼むからあの娘のこと、そういう言い方すんなよ。どのみちコカインーグラムってたら今じゃ百ドルは下らないぜ。誰が出すんだよ」

くしゃみが出そうなパリスは告げた。「わたくしめは純粹なコカインーグラムを、労働コストをのぞいた原材料費一ドル未滿完全にこちらもちで、分離してごらんにいれましょう」

「ぬかせ」

「やってみせようか」

「その原材料とやらはどっから来んの？」

「セブン・イレブン」とパリスは立ち上がり、興奮してパティ・メルトのかけらをパラパラ落とした。「ここ払っという。そしたら見せてやる。家に仮設の実験室をつくってあるんだ。モチツとましなのをつくるまでのつなぎにね。オレがセブン・イレブンでおおびらに買った、ごく合法的な材料からコカインーグラムを抽出するのを見せてやるから。一ドル以下だぜ」と廊下を歩き出した。「来いったら」せかすような声だった。

「おう」とチャールズ・フレックは伝票をとってあとを追った。かま野郎め、きれてやがる。でも、ひょっとするかも。あれだけ化学実験ばっかやって、郡図書館で本を読みまくってるもんな……意外といけるかも。なんせ利益はすごいぜ。そんだけありゃ何でもできる！

パリスは軍放出のパイロット・ジャケットを着てカルマン・ギヤのキーを取り出しながらレジを通り過ぎるところだった。チャールズ・フレックはそれを急いで追った。

セブン・イレブンの駐車場にためて下りると店内に入った。いつもどおり、でかい間抜けなオマワリが入口カウンターでエロ雑誌を読んでいるふりをしていた。ホントは店に入るやつらに全員チェックを入れて、店を襲う気がないかどうか見ているのだ。

「ここで何買うの？」チャールズ・フレックはパリスにきいた。パリスは食料品の積みあがった中の通路をブラブラしている。

「ソーラーケーン。スプレーのやつ」

「日焼けどめのスプレー？」チャールズ・フレックとしては、こんなことがあり得るとは信じがたい気分だったが、でもわかるもんか。まだ何とも言えんよ。パリスのあとについてレジに向かった。今度はパリスが払った。

ソーラーケーンの缶を買い、オマワリの前を無事通過して車に戻った。パリスは急発進して駐車場を出ると、ポスターの速度制限表示を無視して道をどんどん高速で流し、とうとうポップ・アークターの家の前でとまった。家の前庭ののびた雑草には、誰も開いていない古新聞が点々としている。

車をおりて、パリスは後部シートから電線がぶらさがったものを取り、屋内に運び込もうとした。電圧計か、とチャールズ・フレックは見定めた。それにその他の電子計測機器と、はんだごて。「それ、どうすんの？」ときいてみた。

「ながくてつらい作業が待ってるもんでね」パリスはさまざまな機器と、それにソーラーケーンを抱え、家の前の道を玄関まで歩いていった。そしてチャールズ・フレックに玄関



の力を渡した。「金がもらえるわけでもないのにな。まあ、いつものことだ」

チャールズ・フレックがドアをあけ、二人は家に入った。ネコ二匹とイヌがじゃれついてきて、もの欲しそうに鳴いてみせた。チャールズとパリスは、そいつらをブーツでそっと脇へ押しやった。

ダイニングキッチン奥の奥に、パリスは何週間もかけて、いいかげんな研究室まがいをでっちあげていた。びんだのがらくただのがあちこちに散らばり、パリスがいろいろなところからかっぱらってきた、何の価値もなさそうな物体が置いてある。パリスは儉約よりも工夫を信じているのだ。本人からそう聞かされていたのでチャールズ・フレックもそれを知っていた。自分の目的を果たすために、何でも手当たり次第使えるようにしておかなければならないのだ、とパリスはほざいていた。指サック、紙クリップ、組み立て式の物体の一部で残りが壊れていたりなくなっていたりするようなもの……チャールズ・フレックには、ネズミが店を出しているようにしか見えなかった。ネズミ好みのもので実験をやってみてみたいだった。

パリスの最初の行動は、流しの横のロールからビニール袋をとってきて、スプレー缶をなかにどンドンスプレーして行って、缶を空にするか、少なくともガスを全部出し尽くすことだった。

「ウソくせえよ。最高ウソくせえ」とチャールズ・フレック。

パリスは作業を行いながら喜々として言った。「メーカーが何を意図したかと言うと、コカインを油と混ぜて抽出されないようにしたわけだ。でもオレの化学の知識は並じゃねえから、コカインを油と分離するにはどうすりゃいいか、ばっちり知ってるわけ」と、今度は袋の中のドロドロした液体に塩を派手にふりはじめた。そしてそれを全部ガラスのびんに注ぎ、ニヤリとして告げた。「こいつを凍らせる。するとコカイン結晶は空気より軽いから　じゃなくてつまり油より軽いから、上に浮いてくる。それから最終工程では、むろんオレだけの秘密だけど、複雑な手順を踏んだ濾過処理を実施することになる」冷蔵庫の上の冷凍庫をあけて、びんをそっとなかに置いた。

「どんくらい入れとくの？」とチャールズ・フレック。

「三十分」パリスは手巻たばこを一本取り出すと、火をつけ、電気試験機器の山のほうへ大股に向かった。そしてそこで立ったまま、ひげの生えたあごをさすりながら思索にふけた。

「へえ」とチャールズ・フレック。「でもつまりさ、これで丸ターグラムの純粋なコカインができて、それをドナにを使って……ほら、その、かわりに股を開かせるなんてできないよ。なんか彼女を買ってるみたいじゃん。要するにそうなるだろ」

「交換だよ」とパリスは訂正した。「お前さんが彼女をハイにしてやる、彼女もお前さんをハイにする。女のいちばん大切な贈り物でもって」

「彼女なら、すぐにお買われてるってわかるぜ」これまでドナを見てきてそのくらいは見当がついた。ドナならこんなインチキ即座に見ぬいちゃう。

「コカインは催淫剤だ」とパリスは、半ば独り言のようにつぶやいた。ボブ・アークターの脳彩スコープの横に試験装置をセットしているところだった。ボブ・アークターのいちばん高価な持ち物だ。「ある程度吸いこめば、ドナもすぐに身体の栓がゆるむよ」

チャールズ・フレックは喰ってかかった。「バカヤロー、貴様、相手はボブ・アークターの恋人だぞ。ボブは友だちだし、お前とラックマンの同居人じゃねえか」

パリスは一瞬そのぼさぼさ頭をあげた。そしてチャールズ・フレックをしばらくねめつ

けた。「ボブ・アークターについてはお前さんの知らんことが山ほどある。オレたちのだれ一人として知らんこともね。お前さんの見方は単純で幼稚だから、あいつの思惑通りのことを鵜呑みにしてるだけだ」

「いいやつじゃん」

「そりゃそうだ」とパリスはにやにやしてうなずいた。「それは疑問の余地なくそうだ。世界で最高にいいやつ一人だ。でも、オレ　オレたちだな、アークターを冷徹かつ注意深く観察した我々　は、あの男にいくつかの矛盾点を見いだすに到ったんだ。それも人格構造と行動の両面における矛盾だぜ。彼の生への関与性のすべてにおいて。彼の生来のスタイルにおいて、とでも言おうか」

「なんか確証でもあんの？」

パリスの目が、緑のグラスンの後ろで踊った。

「お前の目ん玉が踊ったって、おれには何の意味もねえぞ。なんで脳スコープなんかいじってんの？　どっかおかしいの？」チャールズ・フレックは近づいて自分の目で確かめようとした。

パリスは中央シャーシを倒した。「底の配線を見て、何がわかるか言ってみろ」

「電線が切れてるのが見える。それに故意にショートさせたようなところが山ほど。誰がやった？」

それでもパリスの勝手知ったる楽しそうな目は、ことさら嬉しそうに踊ってみせるだけだ。

「こんなクズのご大層なガラクタなんざ、おれにはクソほどもわかんねえよ。この脳スコープを壊したのは誰だ？　いつ壊された？　お前もつい最近見つけたわけ？　こないだ会ったときはアークターはなんも言ってなかったぜ、おとついだったけど」

「まだ話すほど心の準備ができてなかったんじゃない？」とパリス。

「フン。おれに言わせりゃお前のしゃべってることなんかイカレきったなぞなぞばっかだ。まったく、ニュー・パスの宿舎に本気で行ってこようかな。入所してゾットする禁断症状とかになって治療を受けて、連中のいいようめちゃくちゃにされて、昼も夜もあいつらといっしょにいれば、貴様みたいな謎めかしたわけのわかんねえやつと暮らさなくてすむし。この脳スコープが壊されまくってんのはわかるけど、お前は何も教えてくれない。お前が言いたいのはつまり、ボブ・アークター自身がこれを、自分の高い装置にやっただってことか、それともちがうのか。何が言いてえんだ？　あーあ、ニュー・パスで暮らしてりゃよかったのになあ。そうすりゃ毎日毎日、テメーとか、さもなけりゃ同じくらいイカレまくったガイキチにつき合わされることもねーし、面白くもねえもったいぶったクソを聞かされずにすむのに」とチャールズ・フレックはにらんだ。

「オレはこの送信ユニットを破損したおぼえはない」パリスは考え深そうに、ヒゲをピクピクさせながら言った。「そしてアーニー・ラックマンがやったとは、まず考えられない」

「それを言やあ、アーニー・ラックマンがこれまで何であれ破損したことがあるとは考え難いね、おれには。いつか悪いLSDで悪酔いして、居間のコーヒーテーブルだのその他もろもろをアパートの窓から放り出したときは別だけど。あいつとあのジョーンって女のいたアパートから、全部駐車場に放り出しただろ。あん時や別。いつもはほかのおれたちみんなよか、ずっとしっかりしてるじゃん。うん。だからアーニーは他人の脳スコープを壊したりはするまい。それとボブ・アークターだけど　これはあいつのだろ、ちがうか？　そのなんだ、あいつが自分でも知らないうちに夜中にこっそり起き出して、こん

な、自分をヤバくするようなことをしたってか？ こりゃ誰か他のやつが、あいつをヤバい目にあわせようってんでしたことだよ。そうに決まってる」どうせお前がやったんだろう、このヤキの回ったクソつたれめが。お前なら技術的なノウハウも持ってるし、頭も狂ってるし。「これをやったやつは、国立神経失語症クリニックに入ってるか、あの世行きになってるべきだ。できれば、おれとしては後者であってほしいね。ポブはいつもこのアルテックの脳スコープがすごく気に入ってたのに。いつもあいつは夜に仕事から帰って来ると、すぐにこいつをつけて、つけて、とにかくもう玄関に入ってすぐにだったじゃん。男はみんな何かしら宝物を持ってるもんだ。あいつの宝物はこれだったのに。だからよ、あいつにこんなことするなんてクズだぜ、まったく、クズだ」

「オレの言ってるのもそのことだ」

「お前の言ってるのがどのことだって？」

「『あいつは夜に仕事から帰って来ると』とパリスは復唱した。「オレはこしばらくというもの、ポブ・アークターが本当は誰に雇われてるのか、オレたちにさえ話せないようなその組織とは具体的にどこかについて、探りをいれてきたんだ」

「あのブルー・チップのクソ景品引き換えセンターだよ。プラセンティアにある。前にそう話してたぜ」

「いったいそこで何してるんだらう」

チャールズ・フレックはため息をついた。「チップを青色に塗ってるんだろ」ホントはパリスなんか好きじゃなかった。どっかよそにいればよかったのに。出くわしたり電話をかけた最初の人間からキメるんだ。帰っちまおうか、と思ったが、そこでフリーザーの中の油とコカインのびんを思いだした。九十八セントで買った百ドルの代物。「おい、あのブツはいつできる？ お前、ナメてるだろ。だいたい一グラムも純粋なコカインが入ってるなら、なんでソーラーケーンの連中はあんなに安く売れるんだよ。利益がでるわけねえだろ」

「大量に買うんだよ」パリスはきっぱり言った。

頭のなかで、チャールズ・フレックは即席の妄想を上映。コカインでいっぱいダンブカーが、バックしてソーラーケーンのどこぞにある工場に入ってくる。クリーブランドあたりにあるのかな。その工場の方の端に、トラックが何トンも何トンもの純粋な、混じりつけなしの、高品質コカインをぶちまけて、それが油や不活性ガスやその他のゴミと混ぜられて、それからきれいな小さいスプレー缶に詰められて、何千単位でセブンイレブンやドラッグストアやスーパーマーケットに積み上げられる。となるとやるべきことは、そのダンブカーを一台襲うことだ、と彼は思い巡らせた。積荷を全部奪うんだ。たぶん三百とか四百キロ いや、もっとずっとたくさんかも。ダンブカーってどのくらい積めるんだらう。

パリスはもう空になったソーラーケーンのスプレー缶を持ってきて、チャールズ・フレックに調べさせた。ラベルを示す。そこには含有物がすべて書いてある。「見る。『ベンゾカイン』。こいつは一部の恵まれた人々しか知らない、コカインの商標名なんだ。もしラベルにコカインって書いといたら、みんなそれに気がついて、いずれはオレのやったのと同じことをするだろ。みんな学がないもんで気がつかないんだ。オレの受けたみたいな科学的訓練を受けてないやつはね」

「その知識でなにやってんの？ ドナ・ホーソンをソノ気にさせるほかは？」

「いずれベスト・セラーを書こうと思ってるんだ。法律を破らずに、一般人でも台所で

安全にヤクがつかれるテキスト。つまり、いまだって法律は破ってないわけ。ベンゾカインは合法だから。ちゃんと薬屋に電話して確かめてある。いろんなものに入ってるんだって」

「すごいじゃん」チャールズ・フレックは感嘆した。そして腕時計を見て、あとどれだけ待たされるのかを見た。

ボブ・アークターは、ハンクことミスター・Fの命令で、近くのニュー・パス入院センターを調べることになっていた。彼が見張っていた大手売人がとつぜん消えたのを見つけるためだ。

ときどき売人は、自分がブチこまれそうだと気がついて、中毒者が助けを求めるようなふりをしてシナノンとかセンター・ポイントとかXカーライとかニュー・パスとかの麻薬リハビリセンターに逃げ込むのだった。いったん入ってしまえば、財布も名前も、身元を示すあらゆるものが剥奪されて、麻薬に依存しない新しい人格を作り上げる準備がなされる。この剥奪の過程で、法執行役人が容疑者を見つけだすのに必要なものはほとんど消えてしまう。そして、やがて捜査の手が緩めば、売人はそこを出て、以前のシャバでの活動に戻るのだ。

これがどの程度起きているのかはだれも知らなかった。麻薬リハビリ側は、自分たちをそんな具合に利用している連中の見分けをつけるよう努力はしていたが、かならずしもうまくはいっていなかった。四十年の懲役におびえる売人は、自分を受け入れるか拒絶するかを選択権を持つリハビリ・スタッフに対し、うまい作り話をするだけの十分な動機がある。その時点での彼の苦悩は、かなり本物なのだ。

カテラ大通りをゆっくり流しながら、ボブ・アークターはニュー・パスの看板とその木造建築を探した。かつては個人用住宅だったが、いまではこの地域のリハビリ職員が精力的に活動しているのだ。彼としては、助けを求める入所志望者のふりをしてリハビリ施設にインチキこいてもぐりこむなんて気に入らなかったが、これしか方法がなかった。もし麻薬捜査官としての身分を明らかにして、だれそれを探していると言えば、リハビリ職員

すくなくともその大多数は成りゆき上こちらを避けるような行動をとるだろう。やつらはファミリーの一員がサツにつつまわされるのを嫌っているし、首をつっこめばそれを思い知らされることになるだろう。元中毒患者たちは、ここにすれば安全なのだということになっていた。入所にあたって、リハビリ職員が必ず公式にそう告げるようになっていた。一方で彼の追っているこの人物は第一級の売人であり、それがこんなふうになりハビリ施設を利用することは万人の利益に反することだ。したがって自分としても、彼にスペード・ウィークスをマークさせたミスター・Fとしても、ほかに選択の余地はなかった。ウィークスはもうとてつもなく長いことアークターの主ターゲットだったが、まだ何の成果もあがっていなかった。そして今や、丸十日間も姿をくらましている。

のっぺりした看板を見つけ、ここのニュー・パス支所がパン屋と共有している小さな駐車場に車をとめると、ポケットに手をつっこみ、「ヤク漬けて惨め」という演技をしながら、よろよろと入口まで通路を歩いて行った。

少なくとも署のほうは、スペード・ウィークスを見失ったことについて彼をとがめなかった。署の公式見解では、これは単にウィークスがいかに狡猾であるかを証明しただけだった。専門的に言えば、ウィークスは売人と言うよりは運び屋だ。メキシコから不定期に、生のヤク荷をどこかロス付近に運んできて、そこで買付け人たちが集まってブツを分

ける。荷を国境越しに持ち込むやり口も冴えたものだった。国境を越えるとき、自分の前にいるカタギ連中の車の下にブーツをテープで貼りつけておいて、アメリカ側に入ったらそいつの後をつけ、折りを見て撃ち殺す。アメリカの国境警備隊がカタギの車の下に貼りつけてあるヤクを見つけても、ムショに入るのはカタギの方でウィークスではない。麻薬所持はカリフォルニア州では明白な違法行為。カタギやその妻子はいい迷惑だ。

ボブはオレンジ郡覆面捜査官の誰よりもうまく、ウィークスを一目で識別できた。デブの黒人、三十代、独特のゆっくりしたエレガントな話し方をする。どこかイギリスのインチキ学校で覚えたような話し方だ。本当はロスのスラム出身だった。ことば使いはどこかの大学図書館で借りた教育用テープで学んだ、というのが一番ありそうだ。

ウィークスは、医者か弁護士のような、控えめだが高級な服装をするのを好んだ。よく高価なワニ革のアタッシュ・ケースを持ち歩き、角縁の眼鏡をかけていた。それに、いつもは武装していた。ショットガンにカスタム・メイドのイタリア製拳銃グリップをつけたもので、非常に豪華かつかっこいい。でも、ニュー・パスでは、そんなインチキの詰め合せも全部はぎとられてしまったはずだ。ほかのみんなと同じように、寄付された服を適当に着せられ、アタッシュ・ケースは戸棚にしまわれただろう。

かたい木のドアをあけて、アークターはなかに入った。

陰気なホールとラウンジが右手にあって、男どもが何か読んでいる。奥のつきあたりには卓球台があって、その向こうが厨房。壁にかかったスローガンは、一部手書きで一部印刷。「本当の失敗とは他人を見捨てることだけ」などなど。音も活動もほとんどない。ニュー・パスは小売業をいろいろ営んでいる。おそらく入所者のほとんどは、男も女も、この美容院やガソリンスタンドやボールペン工場へ働きに出ているのだ。彼はそこに立ったまま、けだるそうに待った。

「はい？」女が現われた。やたらに短い青い綿のスカートと、乳首から乳首へ「ニュー・パス」とプリントしたTシャツを着ている。

彼は太いしわがれた恥ずかしそうな声で言った。「おれ　もうダメなんだ。なんかゴチャゴチャになっちゃって。すわってもいい？」

「うん」と女が手をふると、平凡な見てくれの男が二人、平然とした様子で現われた。「この人をすわらせてあげて。それとコーヒーね」

こりゃダメだ、と男二人にひきずられてケチくさいパンパンのソファーに向かいながらアークターは考えた。陰気な壁だ。陰気で低級な寄付のペンキ。こいつら寄付に頼ってるからな。予算獲得がままならないせいだ。「ありがと」彼は耳ざわりな震える声で、まるでそこにいてすわれるだけのことが心底ありがたそうに言った。「ふう」と髪をなでつけようとした。が、うまくいかずにあきらめるふりをした。

女がこっちの真正面に立って、断言した。「あなた、ひどいナリだわね」

「まったくだ」と男二人が、意外にも吐き捨てるような口調で言った。「ゴミくず同然だぜ。あんた、何してたんだい、自分のクソにでもまみれてたのか」

アークターは呆然とした。

「あんた、誰だい」男の一人が詰問した。

「そんなの見りゃわかる」ともう片方。「しょうもないゴミの山から来たクズ野郎だよ。見ろ」とアークターの髪を指さした。「シラミだ。だからさっきからかゆいんだよ、ジャック」

女がそれをおさえ、落ち着いた、だがいささかも温かみのない声で言った。「なんでこ

こに来たの？」

心のなかでアークターはこう思った。それは貴様らが大物運び屋をこのどこかに飼ってるからだ、そしておれはサツだ。そして貴様らはバカだ、一人残らず。だが、そう言うかわりに卑屈な態度で口ごもった。向こうの期待通りに。「いまなんて」

「ええ、コーヒーはあげるから」女があごをしゃくると、男の一人が諾々と厨房に向った。間。そして女がかがんでこっちのひざにふれた。「気分悪いでしょう」と優しく言う。うなずくしかなかった。

「いまの自分が恥ずかしくて情けないでしょう」

「うん」彼は同意した。

「自分をこんなに汚しまくって。肥だめね。来る日も来る日も注射針を自分のケツにつっこんで、自分のからだに」

「もうやってけなくなっちゃったんだ」とアークター。「もうここしか望みはないんだよ。おれ、ここに入ったダチがいてさ、わかんないけど、来るって言ってたから。黒人で、三十代で、学があって、すごく上品で」

「ファミリーには後で会えるわ。資格が認められればね。うちの基準を満たしてないとダメなのよ、わかる？ 最初の基準は、心底なおりたがってることよ」

「それはだいじょぶ。心底なおりたい」とアークター。

「ここに入るにはホントにひどくないとダメよ」

「ひどいよ」

「どのくらい漬かってるの？ どの程度の中毒？」

「一日三十グラム」

「純粹のを？」

「うん」とうなずく。「砂糖つぼに入れてテーブルに置いてあんの」

「超つらいわよ。一晚中枕をかじって羽を出しちゃって、起きたらあたり一面羽だらけになるわよ。痙攣起こして泡もふいて。病気の動物みたいにウンコまみれになって。それでもいいの？ ここじゃ何にもあげないのよ、わかってる？」

「もう何も無い」こりゃ最低だ、と思い、落ち着かずいらした。「おれの相棒だけど、あの黒人。あいつ、ちゃんとここに来た？ 途中でイヌにとつかまんなきゃよかったんだけど、もうホントいかれきっててよお、まともに運転もできないくらいだったし。あいつさあ」

「ニュー・パスでは個人同士のつきあいはないの。いずれわかるわ」

「うん。でも、あいつ来られた？」もう時間の無駄なのがわかった。まったく、こりゃダウンタウンでの探りよりひでえ。それでこの女はツユほども漏らしやがらん。ここの方針か。まるで鉄の壁だ。いったんこの手の場所に入ったら、娑婆にとっては死んだも同然。スペード・ウィークスめ、この仕切り壁の向こうで聞き耳をたてて、はらわたがよじれまくるほど笑いころげてるかもしれん、あるいはここになんかいないのかも、あるいはその中間のどんな可能性だってある。逮捕状を持ってたって、そんなもの効きやしない。リハビリ職員たちはずっとぼけたりグズグズしたりしてみせて、その間に、ここで警察に追われているような連中は、みんな裏口から抜けてたり施設のなかにとじこもっちゃったりする。だってここの職員たちも、もともとは中毒患者だったんだから。それに、法執行機関のほうでもリハビリ施設を荒すのは嫌っていた。世論がやたらにうるさいからだ。

スペード・ウィークスはそろそろあきらめか。おれもこことオサラバだ。いままでここ

の捜査にやられなかったわけがわかったよ。ここの連中が非協力的だからだ。そして、おれはと言えば、主ターゲットを失ったというわけか。スペード・ウィークスはもはや存在しない。

戻ってミスター・Fに報告して、次のターゲットを待つか。くそっ。彼はがくがくと立ち上がり「おれ、帰る」と言った。男二人が戻ってきたところだった。一人はコーヒー・カップを持ち、もう一人はパンフレットを持っている。説明書の類にちがいない。

「あんた、ケツまくる気？」女は横柄に軽蔑をこめて言った。「自分の決断をとことん貫くだけの根性もないのね。ヤクをやめるんじゃないの？　こそこそ逃げ出す気？」三人とも怒りをこめてこっちをにらんだ。

「こんど」とアークターは出口のドアに向かった。

「ヤク中のくず」と女が背後で言った。「根性なし。いかればんちの脳なし。逃げたきゃ逃げなさいよ。それがあんたのご決心なら」

「また来るから」アークターはイライラした。ここの雰囲気は息苦しくて、帰ろうとするとそれがなお圧迫感を増した。

「こっちはお前なんかに来てほしかねえぞ、根性なしめ」と男の一人。

「土下座することになるぞ。はいつくばって土下座させてやる。それでも今度は入れてやらないかもしれないぜ」ともう一人。

「今度どころか、いまだって入れてやらないから」と女。

ドアのところでアークターは立ち止まり、振り向いて糾弾者たちと向き合った。何か言ってやりたかったが、どうしても何一つ思い浮かばなかった。こいつらのせいで頭が空っぽになってしまったのだ。

脳がはたらかない。思考も反応もやつらへの解答も、つまらないとんちんかんなものですら思いつかなかった。

変なの、と思ってまごついた。

そして建物を後にして駐車した車に戻った。

おれにしてみれば、スペード・ウィークスが永久に消え失せたというわけだ。絶対にあんなところには二度といくもんか。

別のやつをマークする頃合だ。別のターゲットを要求しよう。むかつく思いだった。

こいつら、おれたちよりタフでいやがる。





## 第4章

スクランブル・スーツを着た、フレッドの名で任務についているぼやけたもやは、ハンクと名乗る、これまたぼやけたもやと向かい合っていた。

「ドナとチャールズ・フレックとに関してはこんなもんかな、それと　えーと……」ハンクの金属的で抑揚のない声が一瞬カチッと途切れた。「うんうん、ジム・パリスも押さえてくれた、と」ハンクは前に置いたパッドに書き込みをした。「で、ダグ・ウィークスはおそらく死んだか、あるいはこの地域にはいないものと思われる、と」

「あるいは隠れているか足を洗ったか」とフレッド。

「アールとか、アート・デウィンターとかいう名を誰かが口にしなかった？」

「いいえ」

「じゃあモリーって女は？　でかい女だ」

「いいえ」

「じゃあ黒んぼの二人組は？　兄弟で二十歳くらい、名前はハットフィールドとか何とか。ヘロインをキロ単位の袋で取引してるらしい」

「キロ単位？　キロ単位の袋でヘロインを？」

「そうだ」

「いいえ。そんなのがあったら忘れませんよ」

「スウェーデン人、背が高くスウェーデンっぽい名前のやつは？　男。しばらくくらいいこんで、皮肉なユーモアのセンスを持ってる。大男だけどやせてて、大金を持ち歩いている。おそらくは今月はじめの荷の分け前だろう」

「いいえ」とフレッド。「キロ単位ね」とかぶりをふった、というか、ぼやけたもやが波打った。

ハンクはホログラフィの記録をめくった。「で、こいつは服役中か」と写真をしばらく掲げてから、裏を読んだ。「いや、死んだのか。死体は下にあるそうさ」彼はめくり続けた。時が流れた。「ジョラって娘は売りをしてるんだろうかね」

「いや、そんなことはないでしょう」ジョラ・カジャスはたった十五歳だった。すでに物質Dの静脈注射に中毒しきっていて、ブレアのスラム部屋に住み、暖房は湯沸しポットだけ、収入源はカリフォルニア州の月ぎめ奨学金だけ。知る限りでは、この六ヶ月というもの、一度も講義には出席していない。

「売りがわかったら知らせてくれ。そしたらこの娘の親を洗うから」

「OK」フレッドはうなずいた。

「まったく、ガキどもは堕ちはじめるとすぐだからなあ。こないだも一人ここで取り調べたんだけどね　見たとこ五十。髪はバサバサで灰色、歯は抜けてて、目は落ちくぼんで、腕はパイプクリーナーみたいで……それでいくつだかきいたんだよ、そしたら『十九』

だと。ききなおしちゃったよ。女看守の誰かが『あんた、自分がいくつに見えるか知ってる？』って言ってね、『鏡をごらんなさい』って。それでその娘は鏡を見た。泣きだしたよ。で、いつから射ってるのか聞いてみた」

「一年」とフレッド。

「四カ月」

「最近街場に出回ってるブツはヒドいから」と言いながら、フレッドは十九で髪が抜け落ちていたその娘の様子を思い描かないようにした。「いつもよりヒドいクズを混ぜてあるらしくて」

「その娘がどうやってヤク漬けになったかわかる？ 兄弟がいて、二人とも売人だったんだけど、そいつらがある晩ベッドルームにやってきて、押さえつけて、ヤクを射って、それから犯したんだと。二人ともだぜ。妹を新しい生活に引きずり落とすためなんだろうな。以来数カ月街角に立ってたところを、ここにしょっぴかれたんだ」

「その兄弟はどこに？」いずれ出くわすかもしれないと思ったのだ。

「麻薬所持で六カ月くらってる。娘は淋病にもかかって、しかも自分じゃ気づいてなかった。だからもう体の芯にまで入りこんじゃってる。あれはそういう病気だからね。兄弟たちはそれを聞いて面白がってたよ」

「大したやつら」とフレッド。

「絶対にゾットする話があるよ。ほら、フェアフィールド病院に赤ん坊が三人いるだろ、まだ禁断症状に耐えられる歳じゃないので毎日ヘロインを射ってやんなきゃならない子たち。それである看護婦が」

「ああゾットする」とフレッドは、機械的な抑揚のない声で言った。「もうたくさん。どうも」

ハンクは続けた。「新生児がヘロイン中毒になるのをどう思う、それも」

「どうも」フレッドと呼ばれるぼやけたもやは繰り返した。

「生まれたての赤ん坊を、おとなしく泣かないようにしようとして、ヘロインのおしゃぶりをやるような母親の刑期は、どんなもんだろうね。郡農場で一泊？」

「そんなもんですかね。泥酔者みたく週末だけとか。ときどき発狂できればいいのになっていませんか。もうやりかたを忘れちゃいましたけど」フレッドは単調な声で言った。

「失われた技だよな。発狂のしかたのマニュアルがあったりして」とハンク。

「昔、一九七〇年頃に『フレンチ・コネクション』って映画があったんですよ。麻薬捜査官の二人組チームの話で、そいつらがヤクを射たら一人が完全にイカレちゃって、目に入ったヤツを上司だろうと何だろうと、誰彼かまわず片っ端から撃ちまくるんです」とフレッド。

「じゃあわたしが誰だか知らないのはいいことかもしれんな。偶然でない限りきみに殺られずに済むから」

「いずれは我々みんな、誰かに殺られるんです」

「そうなりゃありがたいよ。すごくありがたいよ」ハンクは記録をさらにめくった。「ジェリー・フェイビン。うん、こいつはリストから外す、と。クリニック行き。奥の連中の話だと、フェイビンはクリニックに付き添った警官にこんな話をしたんだと。身の丈一メートルで脚なしの、台車に乗った殺し屋に、昼夜を問わずゴロゴロ追われてるって。それまで他人に話さなかったのは、もし話したらみんなアワ喰って逃げだして、友だちや話相手が誰もいなくなるからなんだとさ」

「ええ。フェイスはヤキがまわってます。クリニックからの脳波分析を見ましたよ。あいつはもう問題外ですね」フレッドは超然としていた。

ハンクと向き合って報告だのなんだのをする時は、いつでも自分自身の内部で深い変化が起きるのを感じていた。通常、それに気がつくのは報告が済んでからだったが、コトの最中には、自分が抑制された無関心な態度を取るのはいくらに理由あつてのことだと感じていた。報告の内容が何であろうと誰についてだろうと、こういう会合の間はフレッドにとって何ら感情的な意味を持たなかった。

はじめのうちは、それが両者の着ているスクランブル・スーツのせいだと思っていた。お互いを肉体的に感じられないから。あとになって、スーツは実は何ら関係がないと結論した。問題はこの会合という状況なのだ。ハンクは、プロとしての仕事上の理由から、いつもの暖かみや多方面への関心を意図的に抑えていた。怒りも愛も、強い感情は何一つとして、どちらにとっても役に立たない。二人が扱っているのは、フレッドに近い、場合によってはラックマンやドナみたいに、フレッドにとって大切な人々による犯罪、それも重犯罪なのだ。自然で真摯な気遣いがいったい何の役にたつ？ だから自分を無色透明にする必要があつた。二人ともそうだ。特にハンクよりフレッドがそうだった。そこで無色透明になった。無色透明な話し方をした。無色透明な外見をとった。やがて、特に心の準備をせずとも、それが簡単にできるようになった。

そして、あとになってから感情がジワジワと戻ってくる。

自分が目にしたさまざまな出来事に対する憤り、そして恐怖さえもが、あとからやってくる。ショック。予告編なしで、ものすごい圧倒的な映画が上映されるような。それもその音声が、頭の中でボリュームいっぱい鳴り響く。

でも、テーブルごしにハンクと向かい合っているときは、そんなものはまるで感じなかった。理論的には、自分が目撃したことを何でも無感動に述べることができる。あるいは、ハンクが語るのを無感動に聞ける。

たとえば、平然とこんなことが言えるはずだ。「ドナは肝炎で死にかけていて、できるだけ多くの知り合いを道連れにしようってんで、自分の使った注射針を誰彼かまわず使わせてます。やめるまでピストルの握りでぶんなぐってやるのがいちばんいいでしょうね」自分の女のことなのに……だが、もしそれを目撃したり、それを事実として知っていれば、言うだろう。あるいは「ドナはつい先だって、安っぽいLSD類似体のせいでひどい血管収縮症を起こして、脳の血管半分が血栓を起こしてます」あるいは「ドナは死にました」だとか。するとハンクがそれを書きとめて、たぶん「女にブツを売ったのはだれだ？

どこでつくってるブツだ？」とか、「葬式はどこでやる？ 来たやつ免許番号と名前を押さえてこう」とか言って、フレッドは何一つ感じずにそれについて話しあうだろう。

フレッドはそういうやつだった。でも、あとでフレッドはボブ・アークターへと、どこかビザ・ハットとアルコ・ガソリンスタンド（いまならレギュラーがリッター二十七セント）の間あたりの歩道で移行し、すると悲惨な色彩が、好むと好まざるとにかかわらず戻ってくるのだった。

このフレッドとしての彼に生じる変化は、感情面での経済則に則つたものだった。消防士や医者や葬儀屋たちも、仕事上で同じ変化を体験する。みんな、いちいち飛び上がってわめきたてるわけには行かない。そうでないと、だんだんと自分をすり減らし、役たたりとなり、やがて他のみんなもすり減らしてしまう。仕事をやる技術者としても、人間としても、すり減ってしまうのだ。一個人の持つエネルギーなんてたかが知れている。

この無感動ぶりは、ハンクがこっちに強制したものじゃない。ハンクはこっちがそうなるのを許してくれたのだ。フレッド自身のために、である。この点、フレッドは感謝していた。

「で、アークターは？」とハンクがたずねた。

ほかのみんなのことといっしょに、スクランブルスーツを着たフレッドは当然ながら自分についても報告していた。そうしないと、上司は　そして上司を通じて全法執行機関が　スーツを着ていようといまいとフレッドの正体を知ることになる。機関内のスパイが報告をして、やがてボブ・アークターとして居間にすわってほかのヤク中といっしょにヤクを喫ったりのんだりしていると、身の丈一メートルの殺し屋が台車に乗ってゴロゴロと、この自分をもつけまわしているのに気づくのだ。そして彼の場合、ジェリー・フェイピンとはちがって幻覚というわけにはゆくまい。

「アークターは大したことはしてません」いつもと同じ返事。「どこぞのブルーチップの仕事で働いて、日中はメタンフェタミンを混ぜたデスを二、三錠　」

ハンクは書類を一枚取り出してもてあそんだ。「そうかな。ある情報提供者からの情報が入って、こいつのネタはいつもなかなか使えるんだが、それによるとアークターはブルーチップ景品引き換え所の給料をはるかに上回る金を持ってるんだと。こっちも電話して手取りをきいてみた。大した額じゃない。なんでそんなに少ないのかつっこんでみたら、一週間フルタイムの常勤じゃないんだとさ」

「まさかそんな」フレッドは憂鬱そうに言った。「はるかに上回る」金というのは、もちろん麻薬捜査官としての仕事で与えられる金のことだと承知していた。毎週、ブラセンティアのバー兼レストランで、ドクター・ペッパー自販機に偽装した機械から小額紙幣で支給されるのだ。その内訳のほとんどは、有罪判決をもたらすのに役立つ情報に対する報酬だった。ときにはこの金額が異常に多くなる。大がかりなヘロイン源が逮捕されたときなどだ。

ハンクは考えこみながら読みすすんだ。「それとこの情報によれば、アークターは家の出入りも怪しい。特に日暮れあたりの出入りが。家に帰ると飯を食って、それから何やら口実らしきものをつくってはまた出かける。ときには即座に。でも、あまり長く外出することは絶対ない」ハンクは　スクランブル・スーツは　目をあげてフレッドを見た。「きみはこういうことに気づいてたか？　これ本当かね？　何か裏があると思う？」

「愛人のドナのところに行ってるってのがいちばんありそうですがね」とフレッド。

「ほう、『いちばんありそう』ってのは？　きみはちゃんと知ってるはずだろう」

「ドナですよ。女のところに入りびたって、昼も夜もハメ狂ってるんです」えらく居心地が悪かった。「でも、調べてみてまた報告します。この情報提供者ってのは誰です？　アークターをハメようっていうガセかもしれない」

「いやあ、我々も知らんのだ。電話でね。声紋もない　こいつ、なにやら古臭い電子変調をかけてるんだ」とハンクは笑った。こうして金属的な音となって聞こえてくると、異様な感じだ。「でも、それがちゃんと効いてるんだよな、これが」

「まったく、そいつはあのヤキのまわったシャブ中のジム・パリスが、分裂じみたガセをアークターの首にひっつけようとしてんですよ！　パリスは軍で電子修理コースを次から次へとってたし、重機械整備のコースもとってたんです。わたしなら、あいつを情報提供者扱いして時間を無駄にしたりはしませんね」

「パリスだと決まったわけじゃないし、それにパリスはただの『ヤキのまわったシャブ

中』じゃなさそうぞ。その件は数人にあたらせてる。いまんときみの使えそうなネタは全然あがってきてないがね、まだ」

「でも、アークターの友だちの誰かなのは確かです」

「ああ、怨恨がらみのガセネタにはちがないけどね。ああいうヤク中どもめ　キレかかるたんびにお互い同士でタレこみ合うんだ。そう、実はこいつ、確かにアークターを間近でよく知ってるような感じだったな」

「いいやつだ」フレッドは苦々しげに言った。

「ま、それでこっちにもネタが入るんだからな。それにきみのやってることだって五十歩百歩だろうに」とハンク。

「わたしは私怨でやってるわけじゃない」とフレッド。

「それじゃ何でやってるんだ、実のところ？」

しばらく間があってからフレッドは言った。「クソッ、知るもんですか」

「ウィークスからは外れてくれ。とりあえずの任務としては、主にボブ・アークターを見張ってもらおうか。こいつ、ミドル・ネームはあるのか？　いつもイニシャルだけPと」

フレッドは、首を締められたような口ポットじみた声を出した。「なぜアークターを？」

「秘密裡に収入を得ていて、秘密裡の行動をしていて、敵をつくるような活動をしている。アークターのミドル・ネームは？」ハンクのペンは律儀に身構えた。そして聞き耳をたてている。

「ポッスルスウェイト」

「綴りは？」

「しりません。クソッ、知るもんですか」

「ポッスルスウェイトね」とハンクはちょっと書きとめた。「こりゃどこの国の名前？」

「ウェールズ」フレッドはぶっきらぼうに言った。ほとんど何も耳に入らなかった。目もかすみ、一つ、また一つとほかの感覚もかすんでいった。

「ウェールズってえと、ハーレックの人々って歌を唄う連中だろ。『ハーレック』って何？　どこぞの町か何か？」

「ハーレックは一四六八年にヨーク人に対する英雄的な防衛戦が　」フレッドは口を閉じた。クソッ、こりゃひでえ。

「さて、こいつは書いておきたい」とハンクはペンで走り書きしていた。

フレッドは言った。「これはつまり、アークターの家と車に監視装置をつけるってことですか？」

「うん、新型のホログラフィ・システムを使おう。あっちのほうがいいし、今なら使用中でないヤツがたくさんあるから。記録もプリントアウトもみんな要るだろ、え？」ハンクはそれも書きとめた。

「手に入るだけください」とフレッド。この一件で完全にブツ飛んだ気分だった。この報告会がさっさと終わってくれないかと願いながらこう思った：まったく、二、三錠のめたら

向いのぼやけたもやは書きまくっていた。在庫使用申請番号を片っ端から記入している。承認が下りれば、そのハイテク・ガラクタはやがてフレッドの手元に来て、おかげでフレッドは、最新型の常駐モニターシステムを、自分の家に、そして自分自身に対して仕掛けることができるようになるわけだった。

パリスはもう一時間以上も、価格十セント以下の普通の家庭用雑貨で、銃の消音器を完成させようと努力を続けていた。アルミホイルとフォームラバーを使って、ほとんど完成しかかったところだった。

ポブ・アークターの裏庭の夜陰に乗り、雑草やごみくずの山に囲まれて、パリスは自家製消音器をつけた自分の拳銃を撃とうとしていた。

「近所に聞こえるぜ」チャールズ・フレックは不安そうだった。そこらじゅうの窓の灯がついていたし、みんなテレビを見たりマリファナ煙草を巻いたりしてるにちがいない。

ラックマンは、こちらからは見えないが向こうからは見える位置にいるらしく「この近所なら、殺してもない限り警察呼んだりしないよ」と言った。

チャールズ・フレックはパリスにたずねた。「なんで消音器なんか要るんだよ。だって違法だろ」

パリスは思わせぶりに言った。「こういう時代のこういう時期で、しかも住んでるのがこの種の墮落した社会で個人が疎外されてるところだと、何かしらの価値を持った人間は常に銃が必要なんだ。身を護るためにね」そして目を半ば閉じると、自家製消音器付きの銃を撃った。ものすごい銃声がひびきわたり、一時的に三人はつんぼになった。はるか遠くの裏庭で、犬どもが吠え出した。

にやにやしなながら、パリスはフォーム・ラバーからアルミホイルをはがした。面白がっているようだった。

「まったく大した消音器だぜ」とチャールズ・フレック。いつ警察が現われることやら。それもパトカーが山ほど来るぞ。

パリスは、フォームラバーの黒くこげた弾道をラックマンとフレックに見せながら説明した。「こいつが何をしたかってと、音をおさえずに増幅しちまったんだ。でも、もうほとんどわかった。原理はこれで押さえたから」

「そのピストルいくら？」とチャールズ・フレック。銃を持ったことはなかった。ナイフは何度か持っていたけれど、いつも誰かに盗まれてしまう。ある時なんか、便所に行ってるすきに女に盗まれてしまった。

「大した額じゃない。中古で三十ドルくらいだな、これも中古だけど」パリスにその銃を差し出されて、フレックはこわごわと後ずさった。「お前さんに売ってやるよ。ホント、一丁持ってたほうがいいで、誰かにやられたときに身を護れるように」

「そういうヤツ、多いよ」ラックマンはいつもの皮肉な調子で、ニヤニヤしながら言った。「こないだもロサンゼルス・タイムズに載ってたよ、フレックを最も効果的に痛めつけたやつに、トランジスタ・ラジオを無料進呈って」

「ボルグ・ワーナー製のタコメータと交換しよう」とフレック。

「あの通り向いのやつのガレージから盗んだヤツだろ」とラックマン。

「ケッ、そのピストルだってたぶん盗品だろ」とチャールズ・フレック。どうせ多少なりとも価値のあるものなんて、どれも元はといえばくすねられたものなんだ。逆に、盗まれるってことは、そのブツに何かしら価値があるってことだ。「それを言やあ、そもそも通り向いのやつだってあのタコメータを盗んだんだよ。たぶんもう十五人くらいの手を渡ってきたはずだぜ。だってよ、すごいいいタコメータなんだもん」

「なんでやつが盗んだってわかる？」とラックマンがたずねた。

「いやあ、だってよお、あいつ、ガレージにタコメータを八個も持ってんだぜ、みんな

切れた電線がぶら下がってるの。盗んだんじゃないきゃ、いったいそんなたくさんで何してやがるんだよ、え？ 誰が八個もタコメータを買いこむもんか」

パリスに向かってラックマンが言った。「お前、脳スコープの修理で忙しいんじゃないの？ もう済んだの？」

「昼も夜もブツ通してアレの作業をするわけには行かないよ。だってすごく複雑な代物だからね。オレだって気晴らしが要るよ」パリスは複雑なポケットナイフで、フォームラバーをもう一かたまり切りとった。「今度のヤツは完全に無音のはず」

「ボブはお前がセフスコープを直してるって思ってるんだぜ」とラックマン。「あいつがあすこの自分の部屋のベッドに寝ころがってそう思ってる一方で、お前はここでピストルなんか撃ってる。でも、ボブとお前との話し合いだと、お前の借りになってる分の家賃をチャラにするかわりに」

「うまいビールみたいなもんで、破損した電子機器の複雑かつ困難な修復を」

「いいからそのご大層な我らが時代の十一セント消音器を撃ちまえて」とラックマンはゲップをした。

もうたくさんだ、とロバート・アークターは思った。

薄暗いベッドルームで、一人仰向けに横たわり、陰気に宙を見つめていた。枕の下には32口径のポリス・スペシャル・リボルバーがあった。パリスの22口径が裏庭で発射されるのを耳にして、反射的に自分の銃をパッドの下から取り出して手の届きやすいそこに移したのだ。あらゆるすべての危険に対する安全策だ。ほとんど無意識のうちにとった行動だった。

でも、自分のいちばん貴重で高価な所有物の破損などという非常に直接的でない攻撃に対しては、枕の下の32口径も大して役にはたつまい。ハンクへの報告会から帰ってすぐに、ほかの機器類についても全部チェックしたが、ほかはOKだった。特に車だ。こんな状況ではまず何よりも車が先。何をやられたにせよ、誰がやってるにせよ、そいつがひねくれてセコいのだけは確かだ。日影の人生を歩いてるような、根性も度胸もないどっかのガイキチが、我が身はこっそりと安全に、間接的な盲撃ちをやってやがる。そいつは人間というよりも、おれたちの生きざまの隠れた病気に脚が生えたものとも言ったほうがいい。

前はこんな暮らしじゃなかった時期もある。そう、枕の下に32口径、気狂いが裏庭で、何のためだか知らんがピストルを撃ちまくって、誰か別の、それとも同じアホが、自分自身のショートしきった脳の状態を、二階の目の飛び出るほど高価で大切な脳スコープにも味わせたりするようなこんな暮らしじゃなかった。この家のみんな、それにその友だちみんなが大好きな脳スコープだったのに。そう、昔のボブ・アークターはちがう生活を営んでいた。人並に妻もいて、幼い娘が二人、毎日掃いて拭いてゴミを出す安定した家庭、目を通されもしなかった古新聞は、玄関からゴミバケツへと運ばれ、時には新聞が読まれることだってあった。でもある日、流しの下から電気ポップコーンメーカーを持ち上げようとして、頭上の食器棚のかどに頭をぶつけた。痛みと頭蓋の切傷は、まったく予想外で不当なものだったが、なぜかそれで頭のモヤモヤが晴れた。即座に気がついたのが、自分の嫌いなのは食器棚じゃないってこと。嫌いなのは妻であり、娘二人であり、家すべてであり、電動芝刈機ともども裏庭であり、ガレージであり、輻射式暖房システム、前庭、フェンス、この胸クソ悪い場所すべてとそこ人間すべてだった。離婚したい。オサラバ

したい。で、間もなくそうした。そして、だんだんと、そういうものすべてを欠いた、新しい裏ぶれた暮らしへとまわっていった。

たぶんこの選択を後悔すべきなんだろう。後悔していなかった。前の生活には興奮も冒険もなかった。安全すぎた。生活を構成するすべての要素が目の前にあって、新しいことは絶対に期待できなかった。一度考えたことだが、まるで永遠に航海を続けるプラスチックの船みたいだ。事故もなく、いつの日か沈むまで走り続ける。そして沈めば万人が秘かにホッとする。

でも、いま自分がトグロを巻いている裏の世界では、薄汚いことやびっくりするようなことや、ごくごくたまーにちょっとした素晴らしいことが絶えずふりかかってきた。何一つアテにできない。たとえば、アルテックの脳彩スコープに対する故意の悪意に満ちた損傷など。あれはおれのスケジュールの楽しい部分の核を成していたのに。みんながリラックして優しくなる、そんな時間。それを誰かがダメにするなんて、正気の沙汰とは思えない。でも、ここの長く暗い夕方の影たちに、正気の部分なんかさほど残されていなかった。少なくとも、厳密な意味での正気は。こんなわけのわからんことをしそうなヤツはいくらでもいたし、その理由だっていくらでもある。知り合いや、会っただけのやつのうち誰であってもおかしくない。いかれポンチ、気狂いの詰合せ、ヤキのまわったヤク中、幻覚の中の恨みを幻想じゃなくて現実に持ち込むような精神異常のパラノイドたち百人近くの誰でもありえる。それどころか、一度も会ったことさえない誰かが、こっちを出鱈目に電話帳で選びだしたのかもしれない。

それとも一番の親友かも。

ジェリー・フェイビンが、病院に運ばれる前にやったのかも。あいつはまさにヤキのまわった中毒野郎だったもんな。あいつと数億のアリマキ。自分が「感染」したのはドナが悪い　と言うよりすべての女が悪いだと。おかまめ。でも、もしジェリーが誰かにヤキを入れたがるとすれば、それはおれじゃなくてドナだろう。それに、あいつだったら脳スコープの底板の外しかたもわからなかったはずだ。やってみようとはしても、まだそこにいて同じネジを外してはつけ、外してはつけてるはずだ。それとも底板をハンマーで外そうとするとか。それに、ジェリー・フェイビンがやったんなら、装置の中はあいつから落ちたムシの卵でいっぱいだろうよ。頭のなかでボブ・アークターは苦笑した。

哀れなやつ、と思うと内部の笑いも消えた。哀れな寄り辺ないおかまめ。複雑な重金属がほんのわずか脳に運ばれただけで　ま、もうそれっきり。長い列にもう一人、似たようなやつらの中の虚ろな存在物、脳をやられたほとんど無数のかたわどもの一人。生物学的な意味での生命は続く。でも、魂も、精神も　その他あらゆるものは死んでる。反射だけの機械。昆虫にそういうのがいる。これからは呪われたパターン一つを、何度も何度も繰り返すだけ。それがその場にふさわしいかなんてお構いなし。

昔はあいつ、どんなやつだったんだろう。ジェリーとはあんまり長いつきあいじゃなかった。チャールズ・フレックの主張だと、前は結構まともで使えるやつだったって。この眼で見るとまでは信じられんな。

ハンクにおれの脳スコープの破損について言っといたほうがいいのかも。連中なら即座にウラを理解できるはず。でも、どうせ何をしてもらえぬわけでもなからうに。この手の仕事にはつきもののリスクなんだ。

こんな仕事、やってられないぜ。クソつたれなこの世には、こっちにまわってくるだけの金がないからな。でも、どのみち金目当てでやってる仕事じゃない。「なんでこんな稼



業を？」とハンクにきかれたっけ。どんな仕事でだって、自分がその仕事を選んだ本当の動機を知ってるヤツなんかいるもんか。退屈、かな。ちょっと動いてみたいという欲望。友だちも、女たちさえも、身のまわりの誰も彼もに対する秘かな憤り。それとも恐ろしい積極的な理由があるのかも。他人を監視したい、それも自分が深く愛し、ごく親密になり、抱いて寝てキスして心配して友だちになって、なによりも崇拜している人間を監視したい　温かい生身の人間が内側からダメになるのを、芯から外側へとダメになって行くのを監視したいという欲望。ダメになって、昆虫みたいにギクシャクと、同じ文を何度も何度も繰り返すようになる。録音テープみたいに。エンドレステープみたいに。

「……ヤクをもう一発射ちさえすれば……」

すっかりよくなる。そして、ジェリー・フェイビンみたく、脳の八割が腐りきってもまだ同じせりふを言ってる。

「……ヤクをもう一発射ちさえすれば、おれの脳はひとりで間違いなく治るはずなんだ」

そのときひらめいた。ジェリー・フェイビンの脳が、脳彩スコープの滅茶苦茶にされた配線みたいになっている図が。電線が切られ、ショートされ、電線がよじられ、パーツが過負荷になって壊れ、線にサージが流れ、煙をあげて悪臭が発生している。そして誰かが電圧計をもってそこにすわり、回路をたどって「おやおや、こりゃ抵抗やコンデンサをかなり取り替えんとな」とかなんとかつぶやく。それからとうとうジェリー・フェイビンから聞こえるのは60ヘルツのブーンというハム音だけになる。そしてみんなあきらめる。

そしてボブ・アークターのリビングでは、千ドルもするカスタム製並の性能のアルテック製脳スコープが、修理もどきを経たあと、鈍い灰色の字で壁にこんな小さなスポット文を一つ投影する：

「ヤクをもう一発射ちさえすれば……」

そうなる、修理不可能なほど壊れたセフスコープと、修理不可能なほどに壊れたジェリー・フェイビンは、同じゴミ箱送りとなる。

ま、でも、ジェリー・フェイビンなんて、誰にも必要とされてないし。ジェリー・フェイビン本人以外には。あいつは前に、友だちへのプレゼント用に全長三メートルの台つきテレビ・コンソール・システムの設計製作を夢みたことがあった。できあがったらものすごく巨大で重くなるのに、どうやってガレージから友だちの家まで運ぶんだ、ときかされると「まかしてけて、え、パタパタってたたんじまうんだよ　もうちょうつがいは買ってあるし　たたんじまって、折ってたたんで封筒に詰めて送ってやるんよ」だと。

とにかくこれでもう、ジェリーが遊びにきたあとで、アリマキを家から掃き出すようなことはしないでよくなるか。それを考えると、笑いたいような気分だった。前にみんなでジェリーのアリマキ妄想について、精神分析的な説明をでっちあげたことがあった。みんなというか、おもにラックマンだ。あいつはそういうのが得意だった、滑稽で気がきいて。もちろん、コトはジェリーの幼時体験と関係があった。つまり、ある日、小学校一年生のジェリー・フェイビンくんが、教科書なんかを脇に抱えて、陽気に口笛をふきながら学校から帰ってくると、食堂でお母さんの隣にすわってるのが身の丈一メートル二十もの巨大なアリマキ。お母さんはいとおしげにそいつを見つめている。

「どうしたの？」小さなジェリー・フェイビンくんは問いただす。

「この子はおまえの生き別れのお兄さんなんだよ。これからはいっしょに暮らすからね。あたしゃおまえよりこの子のほうが好きだね。おまえにやできないようなことがいろいろ

とできるからね」

そしてそれ以降ジェリー・フェイビンの両親は、何かにつけてアリマキさんとジェリーとを比べては、ジェリーをけなすのだった。両者が育つにつれて、ジェリーはますます劣等感をつのらせてゆくことになる。無理もない。高校を出ると、兄さんは大学への奨学金を手にして、一方のジェリーはガソリンスタンドで働きに出る。その後、アリマキさんは高名な医者か科学者になる。ノーベル賞も取る。ジェリーはまだガソリンスタンドでタイヤを転がし、時給一ドル五十で働いている。両親はこの事実を思い知らせてくれるのを決してやめなかった。絶えず、

「おまえも兄さんみたいになってくれればねえ」

と言い続ける。

とうとうジェリーは家出する。でも、まだ無意識のうちにアリマキのほうが自分より優れていると信じている。最初は自分が安全だと思っているが、やがて髪の中や家のまわりなど、そこら中にアリマキが見えるようになる。これは彼の劣等感が一種の性的後ろめたさと結びついたせいで、アリマキはジェリーが自分自身に科した罰なのである等々。

いまじゃ笑えなかった。ジェリーが真夜中に、自分の友だち連中の依頼によって連行されたいまとなっては、友だち連中、その晩ジェリーといっしょにいた全員が、自発的に通報することに決めたのだった。もう先送りしたり避けたりすることはできなかった。ジェリーはその晩、家の中のあらゆる物、ソファだの椅子だの冷蔵庫だのテレビだの、かれこれ五百キロものガラクタの寄せ集めを玄関に積み重ねて、他の惑星からやってきた巨大な超知的アリマキが外にいて、ドアを押しやぶってオレを捕まえようとしている、とみんなに話すのだった。そしてこの一匹をやっつけても、この先追加がどンドン着陸してくるんだ、と。このETアリマキはどんな人間よりずっと頭がよくて、必要とあれば直接壁を通り抜けて入ってくるとか、そんなふうに分たちの秘められた真の能力を発揮することもあるのだと言う。わが身をなるたけ長く護るため、ジェリーは家を青酸ガスで充満させねばならないと言い、それを実行する準備を整えていた。どんな準備か？ すでに窓やドア類はすべてテープで封じて気密状態にしてあった。それから台所と洗面所の蛇口をすべてあけて、家を水浸しにして、ガレージの温水タンクは水じゃなくて青酸を満たしてあるんだと主張。これは長いこと知っていたけれど、最後の砦としてギリギリまで使わないでいたのだと言う。こっちも全員死ぬけれど、少なくとも超知的アリマキは締め出しておける。

友だちが警察に電話して、警察が玄関をぶち破り、ジェリーをクリニックに引きずっていった。ジェリーが最後にみんなに言ったのは「あとでオレの物を持ってきてくれよな

背中にビーズのついた新しいジャケットを持ってきて」だった。買ったばかりだったのだ。すごく気に入っていた。まだあいつが気に入ってる唯一のものだった。自分の他の持ち物はすべて汚染されていると思っていたのだ。

いや、もう笑えない、とボブ・アークターは思い、以前にそれで笑えたことも不思議に思った。恐怖の産物かも知れない。ジェリーの身のまわりにいて過去数週間みんなが感じていた惨めな恐怖。ジェリーはみんなにこう語っていた。ときどき夜中に敵の存在を感じ、ショットガンを持って家の中をうろつくのだ、と。射たれる前にこっちから射つ。敵もそう考えてる、と。

そしていまでは、このおれに敵がいる、とボブ・アークターは思った。というか、敵の尻尾をつかんだ。痕跡を見つけた。ジェリーみたいな末期症状のどうしようもないクズが

また一人。そいでそのクソの末期症状が襲うときは、ホント強烈に襲うんだ。ゴールデンタイムのテレビCMに出るような、どんな特製フォードやGMだってかなわない。

ベッドルームのドアにノック。

枕の下の拳銃に触れた。「あん？」

モグモグ。パリスの声だ。

「入れよ」とアークターは手をのばし、ベッドサイドのランプをパチッとつけた。

パリスが目キラキラさせながら入場。「まだ起きてた？」

「夢で目がさめた。宗教的な夢。ものすごいでかい雷鳴がとどろいて、突然天が裂け、神が現れて神の声がおれにわめくんだ　なんて言ったんだっけ？　そうそう。『おまえにはあきれはてたぞ、わが子よ』だと。それでにらみつけるんだ。おれは夢のなかで震えながら、見上げて、こう言った。『今度は私、なにをしてしまったんでしょうか、神よ』すると『おまえはまた歯磨きのキャップをしめ忘れたな』って。そこでその神さまが昔の女房だって気がつくんだ」

すわりながら、パリスは革のつぎをあてたひざに両手をおいて、いずまいをただすと、頭を振り、アークターと対面した。すごく上機嫌なようすだった。「さて、悪意をもってシステムチックにお前さんの脳スコープを破損したやつが誰かという件について、まず理論的な視点を提供したいんだがね。再犯の可能性もあるんだぜ」

「やったのがラックマンだってつもりなら　　」

「聞けよ」パリスは興奮してからだを前後にゆすった。「も、も、もしオレが、数週間も前に家電器具のどれかに重大な故障が発生するのを予測していたとしたらどうする？　それも特に高価で修理の難しいやつにだぜ。オレの理論はこれが起きるのを予言していたんだぜ！　この事件はオレの総合理論を証明してくれたんだ！」

アークターは相手をにらんだ。

ゆっくりともとの位置に沈みこみながら、パリスはいつもの冷静で賢そうな微笑を取り戻した。「あんた」とこっちを指さした。

「おれがやったってのか。自分の脳スコープを滅茶苦茶にしたと。保険もかけてないのに」アークターは身中を嫌悪と怒りが走るのを感じた。それに夜も遅い。寝ておかないとダメなのに。

「ちゃうちょう」パリスはがっかりしたように、急いで打ち消した。「お前さんは今、あれをやった人間を見てるわけ。脳スコープをブツ壊したやつを。それがオレの意図した全声明なんだ、本来は公表すべきでないものだけだ」

「お前がやったってのか？」狐につままれたようにボブはパリスを見た。その目はある種の暗い勝利で曇っている。「なんで？」

「いやつまり、オレの理論によるとオレがやったことになるってこと。明らかに催眠術下の命令でやったんだな。あとで思い出せないように記憶を消すような暗示もかけられてる」パリスは笑いだした。

「あとにしてくれ」とアークターはベッドサイド・ランプをパチッと消した。「ずっとあとに」

パリスはうろたえて立ち上がった。「おい、でもわかんない？　オレは高度なエレクトロニクス技術的な能力もあるし、脳スコープに手が出せる位置にいた　だってここに住んでるんだもん。でもわかんないのは、オレの動機なんだ」

「イカれてるからやったんだろ、お前は」とアークター。

「もしかすると秘密勢力に雇われたのかもしれない」パリスは困惑してつぶやいた。「でも、そしたらその連中の動機はなんだろう。おそらくはオレたちの間に疑惑ともめ事を起こさせて、いさかいを引き起こして、お互いに嫌悪を抱かせて、誰が信用できて誰が敵なのかわかんなくしてしまうとか、そんなことだろう」

「じゃあそいつらは成功したわけだ」とアークター。

「でも、なんでそいつらはそんなことをしたがるんだろう」パリスはドアのほうに動き始めていた。手はあわただしく振り回されている。「あんな面倒なことを 底板をはずしたり、玄関の鍵を手にいれたり 」

まったく、ホロ・スキャナーが手に入って家中に設置したらせいせいするだろうよ、とボブ・アークターは枕の下の銃に触れて力づけられた。それから、弾はいっぱいかどうか確認すべきだろうか、と思った。でも、そうしたら撃鉄がなくなっていないかとか、弾の火薬が抜かれていないかとか、次から次へと憑かれたように、こわいのをまぎらわそうと歩道の割れ目を数え続ける男の子みたいに思い悩み続けるだろう。小学校一年生のボブ・アークターくんが、小さな教科書を抱えて、行く手に横たわる未知のものにおびえてる。

腕をのばしてベッドのフレームの裏に手をまわし、ゴソゴソたどって行き、ついに指でゼロテープを探り当てた。それを引きはがし、まだ室内にいるパリスの目の前でインチキ薬混じりの物質Dを二錠取った。口に持っていき、のどに放りこんで水なしに飲みこみ、後ろにもたれてため息をついた。

「失せる」とパリスに言う。

そして眠った。

## 第5章

ボブ・アークターの家をしかるべく（すなわち間違いなく）盗視盗聴するためには、彼が一定の時間、外出してくれることが必要だった。盗聴には電話も含まれる。電話線はどこかよそでも盗聴されていたのだが。さて、盗視盗聴機設置のためには普通、対象となる家を監視して、その家の全員が、しばらくは戻らないと思われるような様子で外出するのが確認されるのを待つ、ということが行なわれる。官憲側は何日も、ときには何週間も待たなくてはならなかった。最終的に、ほかの手がうまく行かなければ、なんらかの口実をでっちあげる。居住者は、殺虫剤の散布とか、その手のウソ臭い人物が、午後いっぱい仕事をしにくるから、全員たとえば六時ぐらいまで家にいるべからず、と通告される。

しかし今回は、容疑者ロバート・アークターは大人しく家をあげ、二人のルームメイトもいっしょにつれて、パリスが彼のを修理し終えるまで借りられそうな、脳彩スコープの検分にでかけた。三人はアークターの車に乗り、真面目で決然としていた。そのあとでフレッドは、どこか便利な場所、ここではガソリンスタンドの公衆電話だったが、そこからスクランブル・スーツの音声グリッドを使って、残り一日中誰一人として家にはいないと報告した。三人が、サンディエゴまでずっとドライブして、どっかの野郎が五十ドルほどで売りに出してる、安い盗品の脳スコープを見に行くことにしようと言っているのを盗み聞いたのだ、と報告する。ペイ中並の値段。その値なら、長いドライブとそれだけの時間を費やすだけのことはある。

それとこの機会に、当局側は誰も見ていないのをいいことに、覆面捜査官よりもちょっとばかり派手な違法捜査を行なうこともできた。役所の引出しを引っ張り出して、裏に何がテープでとめてあるか調べるとか。ランプのポールをバラすと錠剤が何百錠も飛び出してこないとか。便器の底をのぞきこんで、トイレトーパー製の小さな包みが見えないところに止めてあって、水を流すと自動的に流れてしまうようになってないとか。冷蔵庫の冷凍室の中をのぞいて、冷凍インゲンだの冷凍エンドウと書いてある包みが、実はあざとく誤表示された冷凍ヤクの包みじゃないかを調べるとか。一方、複雑なホロスキャナーが設置され、係官たちがいろいろな場所にすわってスキャナーの具合を試す。音声のほうも同様。でも、ビデオ部分のほうが重要だったし、時間もかかった。それと、もちろんスキャナーは決して見つかったはならなかった。そのようにスキャナーを設置するのは技術を要した。様々な場所を試してみる必要があった。これを行なう技術者の払いはよかった。もしまづい仕事をして、あとでスキャナーがその現場の居住者の誰かに発見されれば、その居住者すべてが、自分たちが嫌疑をかけられて探られているのを知り、活動を控えるだろう。加えて、ときには容疑者が全スキャナー・システムを取り外して売り払ってしまうこともあった。

住居に違法に設置された電子探査装置を窃盗して故売したからといって、法廷で有罪

判決を得るのは困難なのは、経験的に証明されてきたっけ、とボブ・アークターは、サンディエゴ自動車道を南へ流しながら思い起こした。警察は、何か他の法律違反で、別件でくらいこませることしかできない。でも、似たような状況に置かれた売人たちは、もっとダイレクトに反応した。こんなケースがあったっけ。あるヘロインの売人が、女をハメようとして、彼女のアイロンの取っ手にヘロインを二包み仕込み、密告ダイヤルに匿名でタレコミの電話を入れた。このタレコミで捜査官が動く前に、女はヘロインをみつけたが、それをトイレに流すかわりに売り払った。警察は、来たが何も見つけられず、タレコミの電話の声紋を調べて、当局にガセネタを流したとして売人を逮捕した。保釈中のある晩遅く、売人は女を訪ねて死ぬほどぶちのめした。つかまって、なんで女の片目をつぶして両腕と肋骨数本を折ったのか、ときかれて、自分の高品質ヘロインを見つけていい値で売ったのにあの女は分け前をよこさなかったからだ、と答えた。売人の精神構造ってのはそういうもんだ。

ボブ・アークターは、ラックマンとパリスの二人をおろし、セフスコープの探索行に送りだした。これで両者を拘束して、盗視聴装置設置進行中の家に帰るのを防ぐと同時に、こちら一月ほど会っていなかったある人物にチェックを入れることが可能になった。この方面にはなかなか来なかったし、この女も一日二、三回メタンフェタミンを注射して、その払いのために売春する程度のことしかしなかった。一緒に住んでいるのが売人、ということつまり彼女の愛人だった。そのダン・マンチャーは、日中は出かけていることが多い。結構。この売人もヤク中だったが、何の中毒かまではつきとめていなかった。複数のヤクに中毒してるのは間違いない。とにかく、何の中毒にせよ、ダン是不気味で凶暴になり、気まぐれで乱暴になった。近隣騒乱罪でずっと昔に地方警察に捕まっていなかったのが不思議だった。ひょっとしたら警察は、袖の下でももらってるのかも。あるいは、これがいちばんありそうだが、単に気にしていないだけかも。この連中は、老人やその他の低所得者に混じってスラム住宅に住んでいた。クロムウェル・ヴィレッジの建物群や関連ゴミ捨て場、駐車場、荒れた道路に警察がやってくるのは、大犯罪のときだけだった。

人々をむさくるしさから救いだそうと設計された、玄武岩ブロック造の建築物群だったが、これほどむさくるしさに貢献しているものは他になかった。車をとめ、しかるべき小便臭い階段を見つけ、暗い中へと昇り、第4ビルのGと記されたドアを見つけた。ドレイノのフルサイズの缶が置いてあり、反射的にそれを拾い上げて、ここらではどのくらい子供が遊ぶんだろうと思った。一瞬、自分の子供たちのことと、過去何年も自分が子供らのために行なってきた保護のための行為を思いだした。この、缶を拾い上げるのもその一つだった。その缶でドアを叩いた。

しばらくするとドアのロックがガチャガチャいってドアが開いたが、チェーン錠はしたままだった。女、キンバリー・ホーキンスが顔をのぞかせた。

「はい？」

「よう。おれだ、ボブだよ」

「それ、何持ってんの？」

「ドレイノの缶」

「ウソ」女は面倒くさそうにチェーン錠をはずした。声も面倒くさそうだった。落ちこんでいるのが見てとれた。すぐ落ちこんでいた。それと、片目にあざができていて、唇が切れていた。見回すと、この小さなだらしのないアパートの窓が割れているのが目についた。ガラスの破片が床に散り、それに混じってひっくり返った灰皿やココアコーラのびん。

「一人？」

「うん。ダンとけんかしてさ、あいつ出たんだ」半分チカーノの娘は、小柄であんまり美人じゃなくて、結晶狂い特有の黄ばんだ顔色で、何を見るでもなく目をおとしたが、その声がうわずるのがわかった。そうなるヤクもある。このアパートには暖房が入らないだろう、あんな割れた窓じゃ。

「ぶちのめされたの？」アークターはドレイノの缶を、高い棚のペーパーバックのポルノの上に置いた。ポルノのほとんどは時代遅れだった。

「まあ、あいつナイフは持ってなかったから。助かったね。ほら、最近あいつがシースに入れてベルトにつけてるケースナイフ」キンバリーはスプリングが飛び出したパンパンの椅子にすわった。「で、きょうは何なの、ボブ？ あたしやすっからかんよ。ホント」

「あいつに戻ってほしい？」

「そうねえ」ちょっと肩をすくめる。「まあ別に」

アークターは窓に寄って外を見た。ダン・マンチャーは遅かれ早かれ必ず姿を現わす。この娘は収入源だったし、女も蓄えが尽きれば定期的なヤクの補給が必要になるのはダンも承知していた。「あとどんだけ保つ？」とボブ。

「もう一日」

「ほかに手に入れるアテは？」

「うん、でもあんなに安くはないけど」

「のど、どうした？」

「カゼ。風が吹き込んでくるから」

「医者に」

「医者に行ったら、結晶やってんのがバレちゃう。行けないわよ」

「医者が気にするもんか」

「気にするわよ」そこで女は聞き耳をたてた。車の排気音。まばらで大音量。「あれ、ダンの車？ レッド・フォードの『七九トリノ』？」

窓のところでアークターがでこぼこの駐車スペースを見おろすと、べこべこのトリノが停車するところで、ツイン・エキパイから黒い煙があがり、運転席側のドアがあくところだった。「うん」

キンバリーはドアをロックした。ロックを二つ余計にかけた。「たぶんナイフを持ってる」

「電話ある？」

「ううん」

「電話ぐらいつけるよ」

女は肩をすくめた。

「殺されるぜ」とアークター。

「いまはだいじょぶ。あんたがいるもん」

「でも、あとでおれがいなくなったら」

キンバリーはまた腰をおろしてもう一度肩をすくめた。

まもなくドアの外に足音が聞こえ、ノックがした。それからドアを開けると女に怒鳴るダンの声。女はノーと怒鳴りかえして、連れがいるんだと怒鳴った。ダンはかん高い声で怒鳴りかえした。「OK。おまえのタイヤを切り裂いてやる」そして階下に駆けおりた。アークターと娘がいっしょに割れた窓から見おろすと、やせた短髪のホモっぽいダン・マ

ンチャーが、ナイフを振り回しながら女の車に向かうのが見えた。まだこっちに向かって怒鳴っていて、その声は住宅地域中にひびきわたっていた。「おまえのタイヤを切り裂いてやる、タイヤをな！ それからおまえをブツ殺す！」身をかがめて、女の古いドッジのタイヤをまず一つ、続いてもう一つと切り裂いた。

キンバリーは突然あわてふためき、はじかれたようにアパートのドアにとびついて、カギを端から外しはじめた。「止めないと！ タイヤがみんなやられちゃう！ 保険もかかってないのに！」

アークターはそれを止めた。「あすこにはおれの車もあるから」もちろん銃は持ってきてなかったし、ダンはケース・ナイフを持っていて手に負えない状態だった。「タイヤなんて」

「あたしのタイヤ！」金切り声をあげながら、女はドアをあけようと格闘した。

「向こうはそれを待ってんだぜ」とアークター。

「下の階」キンバリーはあえいだ。「警察に電話すれば 下の階には電話があるから。放して！」女はものすごい力でこっちをふりほどいて、なんとかドアを開けた。「警察呼んでくる。タイヤが！ 一つは新品なのに！」

「おれも行く」ボブは女の肩をつかんだ。女は先に立って階段をころがるように降り、ボブはついて行くのがやっとだった。すでに女は下のアパートにたどりつき、ドアをたたいていた。「開けて、お願い！ お願い、警察を呼ぶの！ ねえ、警察呼びたいんです！」

アークターは女の横にきてノックした。「電話を貸してください。緊急なんです」

年配の男が、灰色のセータとしわくちのフォーマル・スラックスとネクタイ姿でドアを開けた。

「ありがとうございます」とアークター。

キンバリーは男をおしのけて中に入り、電話に駆け寄り、交換を呼んだ。アークターはドアのほうを向いて立ち、ダンの現れるのを待った。もう何も聞こえなかった。キンバリーが交換手に向かってベチャクチャ言ってるだけ。話の中身はゴタついていて、なにやら七ドルのブーツをめぐる口論の話だった。「あいつは自分のだって言うのよ、あたしがクリスマスプレゼントで買ってやったんだからって。でも、金を出したのはあたしなんだからあたしなのよね。そしたら無理矢理とろうとするんで、かかるとどこをカン切りで破いてやったもんで、あいつ」ここで黙った。そしてうなずき、「ええ、どうも、ええ、つないで」

年配の男はアークターを見つめ、アークターは見つめかえした。隣の部屋ではプリント地の服を着た年配の婦人が、恐怖に顔をこわばらせて黙ってそれを見ていた。

「どうもご心配かけてすみません」アークターは老人二人に言った。

「いつものことですよ。毎晩毎晩、夜通しけんかしてるのが聞こえて、いつも男の方が殺してやるって言うんです」と男の方が言った。

「だからデンヴァーに帰ればよかったんですよ。言ったでしょうに、故郷に引っ越したほうがいいって」と老婆。

「ひどいけんかばかりでね。ものを壊したりして、しかもその音ときたら」老人は悲嘆にくれた顔でアークターを見つめ、助けてくれ、さもなければわかってくれ、とでも言いたげだった。「いつもいつも、全然きりがなくて、それともっとひどいの、御存知でしょうかね、毎度」

「そうそう、話したげなさいよ」と老婆。



「もっとひどいのが」と老人は威厳をもって、「毎度わたしたちが外に出て、買物とか郵便を出すとかで外に出ると、踏んずけちまうんですよ……その、犬のアレを」

「犬の糞よ」と老婆は憤慨して言った。

地方警察のパトカーが来た。アークターは、法執行捜査官としての身分は明かさずに、証人として証言を行なった。おまわりは彼の供述を書きとめ、キンバリーの供述もとろうとしたが、女の発言は意味をなさなかった。ブーツの話ばかり次から次へと、なぜそれを買ったのかとかそれがどんなに大切かとかをべらべらしゃべくだけだった。おまわりは、クリップボードと紙を手になすわっていたが、チラリとアークターのほうを見上げた。その表情は冷たくて、判然とはしなかったけれど、気持ちのいいものではなかった。おまわりはとうとう、電話をつけて容疑者が戻ってまた面倒を起こすようだったら電話しろキンバリーに告げた。

「切り裂かれたタイヤのことは記録した？」帰りかけたおまわりにアークターは言った。「駐車場のこの娘の乗用車を調べた？ 自分で切り裂かれたタイヤを記録した？ 最近つけられた鋭い器具による切り口を検査したり　まだ空気がもれ続けてるかとか？」

おまわりは、また同じ表情でこっちをチラッと見て、それ以上何も言わずに去った。

「ここにいるとまずいぜ」とアークターはキンバリーに告げた。「おまわりめ、ここを離れろって忠告すりゃいいのに。ほかに行くところがあるかきくとか」

キンバリーはクズの散った居間のみすばらしい長椅子にすわった。捜査官に自分のおかれた状況を説明しようという有意義な努力を終えて、女の目はまた輝きを失っていた。肩をすくめる。

「おれがどっかへ車で送ってやるよ。誰か友だちいない　」

「出てってよ！」突然キンバリーは、悪意のこもった、ダン・マンチャーによく似た、でももっとトゲトゲしい声で言った。「出てけよ、ボブ・アークター　行って、行けたら、ちくしょう。消えてったら！」その声は金切り声になり、絶望のうちに途切れた。

ボブはそこを出ると、階段を一段一段のろのろと降りた。一番下の段にたどりついたとき、うしろから何かがガンガン転げ落ちてきた。ドレイノの缶だ。女が次々とドアのロックをかけるのが聞こえた。有意義なロックだぜ。何もかもクソ有意義。調査の警官は、容疑者が戻ったら電話するようにと言う。アパートから出ないでどうやって電話しろってんだ？　出たらダン・マンチャーは、タイヤと同じく女もメッタ刺しにするだろう。それと

ここで下の階の老夫婦の苦情を思いだした　たぶん、まず犬のクソをふんずけて、それから死んで犬のクソのなかに倒れこむんだろうよ。あの老夫婦の持つ物事の優先順位の感覚を考えると、ヒステリックに笑いだしたい気分だった。上の階のヤキのまわったガイキチが、何はなくともものに連鎖球菌症を患った女中毒患者が自分をだましているというので夜毎その娘をブチのめして殺すと脅して、おそらくはいずれホントに殺すというだけでなく、そのうえ犬の糞が

ラックマンとバリスを乗せて北に向かって戻りながら、声を出して笑ってしまった。「犬のクソかよ。クソッ」思いつきさえすりゃ犬のクソにもおもしろみはあるんだ。笑っちゃまうぜ、犬のクソか。

「車線かえて、あのセーフウェーのトラックをぬかそうぜ。あんだけ荷を積んでて全然動いてないし」とラックマン。

そこで車を追い越し車線に入れて速度を上げた。ところが、スロットルから足を離す

と、ペダルはいきなりフロア・マットにはりつき、同時にエンジンが轟音をあげて全開となり、車はすさまじい猛スピードで突進をはじめた。

「スピードさげろ！」ラックマンとバリスが同時に叫んだ。

いまや車はほぼ百五十キロちかくでいた。前方にはVWのバンが姿を見せしている。アクセルペダルは死んでいる。戻らないし、何の役にもたたない。となりにすわっているラックマンと、うしろにすわっているバリスが、二人して本能的にお手上げの格好をした。アークターはステアリングをひねり、VWバンの左をすりぬけた。高速のコルベットが割りこむ寸前の、わずかな車間に突っこむ。コルベットはクラクションをならし、急ブレーキの音が聞こえた。いまではラックマンとバリスはわめいていた。ラックマンがいきなり手をのばしてイグニッションを切った。一方、アークターはギヤをニュートラルにシフトした。車はスピードを落とし、アークターはブレーキをかけて走行車線に戻り、エンジンがやっと止まってトランスミッションがギヤから切れると、路肩の緊急避難スペースに惰性で入り、徐々に停止した。

コルベットは自動車道のずいぶん先まで行っていたが、まだ怒ってクラクションをならしていた。そして今度は巨大なセーフウェーのトラックが横を走り過ぎ、これまた警告に大クラクションを鳴らしてこっちは一瞬つんぼになりそうだった。

「いったい全体、何事だい？」とバリス。

アークターは、手も声もその他のからだの部分もふるえていた。「スロットルのアクセルの復帰用スプリング。はさまったか切れたかだ」と下を指さす。一同がペダルをのぞきこむと、そいつはまだペタンと床にはりついたままだった。エンジンは最高回転数まで回転数をあげたらしい。この車だと大したものだ。最終的な路上最高速度は記録しておかなかったけど、おそらく百五十キロは優に越えてるはず。それと、ほとんど反射的にブレーキを踏んでいたのに、車はちょっと速度を落としただけだったっけ。

だまりこくって三人は非常用の路肩に出ると、ボンネットを開けた。オイル・キャップと、それに下のほうからも白煙がたちのぼっていた。そして沸騰寸前の水が、ラジエータのオーバーフロー用の穴から吹き出している。

ラックマンは熱いエンジン越しに腕をのばして指さした。「スプリングじゃねえぞ。ペダルとキャブの連結部だ。見や。外れてる」長いロッドは無目的にエンジン・ブロックにもたれかかり、無益かつ無為に、ロック用のリングを定位置につけたままぶら下がっている。「それで足を離してもアクセルが戻らなかったんだ。でも」としばらくキャブを調べて、顔をしかめた。

「キャブには優先式安全装置がついてる」とバリスは人工物めいた歯をのぞかせてニヤニヤした。「この機構は、連結が外れると」

「なんで外れたんだよ」とアークターは割って入った。「このロック用のリングでネジはちゃんととまってるはずだろ」とロッドをつついた。「こんなあっさり外れるなんてわきゃないだろ？」

聞こえなかったかのように、バリスは続けた。「もし何らかの理由で連結がいかれると、エンジンの回転は落ちてアイドル状態になるはずだ。安全策としてね。でも、こいつは逆にずっと回転数をあげた」とからだをひねってもっとよくキャブを見ようとする。「このネジが右にまわしきってある。アイドル調整ネジ。だから、連結が外れたとき、安全装置は回転を落とすかわりに上げたわけ」

「そんなバカな。事故でひとりでにネジがまわりきっちゃうなんてことがあるもんかね」

とラックマンが声高に言った。

答えずに、パリスはポケットナイフを取り出し、小さい刃を出して、アイドルリング調整ネジをゆっくりもとに戻していった。回転数を彼は口に出して数えた。ネジをもとに戻すのに二十回転。「アクセル連結用ロッドを固定するロッキング用リングとネジをゆるめるには、特殊な工具が必要になる。それも一つじゃ済まない。オレの見積では、こいつを元通りにするのに三十分。うん、工具ならオレの工具箱にあるけど」

「お前の工具箱は家だろ」とラックマン。

「うん。ということは、ガソリンスタンドに行ってそこで工具を借りるか、それともそのレッカー車を連れてくるかだな。うん、連中に来てもらって、運転する前に一通り見てもらった方がいいよな」

「なあ、よお、こりゃなんかの事故で起きたの？ それとも故意？ あの脳スコープみたくな？」とラックマンは大声で言った。

パリスはためらったが、あのずるそうな憐れむような笑みは絶やさなかった。「それについてははっきりしたことは言えない。通常は、車の破壊工作や事故を起こさせるための悪意あるダメージとは……」ここでこっちをチラッと見たが、その目は緑のグラサンに隠れて見えなかった。「オレたち、ほとんどオシャカだった。あのコルベットがもうチトでも速く走ってたら……そしたらもうどこにも行き場はなかったぜ。コトに気がついた時点でお前さんがサッサとイグニッションを切りやよかったんよ」

「だからギヤを切った。気がついてすぐに。一瞬、何が起きたのかわかんなかったから」もしやられたのがブレーキだったら、ブレーキ・ペダルが床にはりついたんだったら、おれももっとはやく気がついてたのに。どうすればいいかも早めにわかったのに。こいつはあまりに　不気味だった。

「誰かがわざとやったんだ」とラックマンは声高に言った。そして怒り狂ってグルグルと歩き回り、両腕をふりまわしていた。「クソつたれめがあ！　こっちはほとんどハマるところだったじゃねえか！　ほとんどやられるところだった！」

パリスは、自動車道路の脇の、そこを流れる激しい交通量すべてからまる見えのところで、デス錠削入りの角型カギ煙草入れを取り出して数錠のんだ。そしてラックマンに差し出し、ラックマンが数錠のんでから、アークターにまわした。

「ひょっとしてこいつのせいでヤバいことになってんじゃねえの、脳がやられて」とアークターはいらいらして顔をそむけた。

「ヤクはアクセルの連結だのキャブのアイドルリング調整だのを壊したりはせんよ」と容器をアークターに突きつけ続けた。「お前さん、最低三錠はやったほうがいい　一級品だけど、マイルドだよ、ちょっとメタンフェタミンで割ってあるから」

「そんなカギ煙草入れなんかしまいやがれ」頭の中で大声が歌っているのが感じられた。ひでえ音楽。身の回りの現実が苦々しくなっちゃったみたい。いまじゃ何もかも　高速で走る車、男二人、ボンネットをあけた自分の車、スモッグ臭、白昼のまぶしく暑い陽射し　そのすべてが腐ったような感じで、自分の世界が腐敗したみたい、というのが一番妥当な表現だろう。世界がこの事件のせいでいきなり危険に思えるとかおっかないものになるとかじゃなくて、むしろ腐ってゆくような、見た目も音も匂いもプンプンしてくるみたいな感じ。うんざりして、目を閉じ、身震いした。

「なんか嗅ぎつけたのかよ。なんか手がかりでも、え？　エンジンの匂いになにか怪しげな　」

「犬のクソだ」とアークター。エンジンのあたりから匂ってくる。身をかがめて鼻をクンクンさせる。一層強く、はっきりと匂ってくる。不気味な。イカれててクソ不気味。

「お前らも犬のクソの匂いがしない？」とバリスとラックマンにきいてみた。

「んにゃ」とラックマンはこっちを見つめた。そしてバリスに言った。「あのヤクに幻覚剤は入ってた？」

バリスは微笑しながらかぶりをふった。

熱いエンジンの上にかがみこんで、犬のクソの匂いを感じつつも、それが幻覚なのはアークター自身が承知していた。犬のクソの匂いなんかしちゃいない。それでもまだ匂った。そして今では、エンジン・ブロックの特に下の方のプラグのあたりに、暗褐色の染みがなすりつけてあるのが見えた。汚い物質だ。オイルだろう。こぼれたオイルかあふれたオイルか。シリンダー・ヘッドのガスケットが漏ってるのかも。でも、確認のために手をのぼしてさわってみる必要があった。自分自身の合理的な判断を裏付けるためにも。指がベトつく茶色い物質に触れた。そして指ははじかれたように退いた。指を犬のクソにつっこんだのだ。エンジンブロックにも配線にも、一面に犬のクソがぬりたくってあった。それと、エンジン室の隔壁にもぬりたくってあるのに気がついた。目をあげると、ボンネットの裏の防音部にも塗ってあった。匂いに圧倒され、アークターは目を閉じて身震いした。

「オイオイ」ラックマンはあわててこっちの肩をつかんだ。「フラッシュバックでも見てんだろ、え？」

「ただで映画が見られるってやつね」バリスも同意してクスクス笑った。

「お前、すわったら」ラックマンはアークターを運転席まで連れ戻してそこにすわらせた。「よお、お前ホントにプツ飛んでんのな。とにかくすわってるって。いいからさ。誰も死にやしなかったんだしよ、これでみんな、用心するようになるし」とアークター側のドアを閉めた。「もう万事OKだから、な？」

バリスが窓のところに顔を出して「犬のウンコのかたまりはいかがかな、ボブ？ 喰わない？」と言った。

ゾツとして目をあげ、アークターはバリスを見た。バリスの死んだ緑のグラスンは、何一つ、ヒントすら与えてくれなかった。こいつ、ホントにあんなこと言ったのか？ それともおれの頭が勝手に作りだしたもののなのか？ 「何だって？」

バリスは笑いだした。そして笑って笑って笑い続けた。

「そっとしといてやれって、え」ラックマンはバリスの背中をどやした。「いい加減にしろよ、バリス！」

アークターはラックマンに言った。「たった今、こいつはなんて言った？ 正確にはおれになんて言ったんだよ？」

「知らんよ。バリスが他人に言うことなんか、半分もわかりゃしない」

バリスはまだ微笑していたが、もう黙っていた。

「このバリスのちくしょうめが。お前がやったのはわかってんだ。脳スコープを滅茶苦茶にして、今度は車だ。貴様がやりやがったんだ、このガイキチ発狂クソつたれ野郎」この声は、自分にはほとんど聞こえなかったけれど、これを微笑むバリスに向かってわめくにつれて、犬のクソのひどい臭気は増していった。しゃべるのをあきらめて、役たたずの車のハンドルを前にすわり、吐かないよう努力した。ラックマンが一緒だったのはありがたい。さもなきゃおれは、今日で一貫の終わりだった。このヤキのまわったクソ野郎の手

にかかって、モ口におしまいってとこだった。この野郎め、おれと一緒に住んでるってのに。

「落ちつけよ、ボブ」ラックマンの声は、吐き気の波越しに、くぐもって聞こえた。

「こいつなのはわかってんだ」とアークター。

「えっ、なんで？」ラックマンはこう言った、あるいは言おうとしているらしかった。「こんなことすりゃ自分の命だってヤバくなるのに。なんでだよ、え？ どうして？」

まだ微笑んでいるパリスの匂いに圧倒され、ボブ・アークターは自分の車のダッシュボードに吐いた。千もの小さな声が沸き起こり、こちらに降り注ぎ、匂いはやっと退いていった。千の小さな声が自分たちの奇妙さを叫んでいる。ことばの意味はわからなかったけれど、少なくとも目には見えたし、匂いは去っていった。彼はガタガタふるえて、ポケットのハンカチに手をのばした。

「くれた錠剤になんか入れたか？」ラックマンは微笑するパリスを詰問した。

「おいおい、オレだつてのんだんだぜ。お前さんだつて。けどオレたちはこんなバッド・トリップになんなかっただろ。だからヤクのせいじゃない。それに早すぎるよ。ヤクのはずがないだろ。胃が吸収できないし」

「貴様が毒を盛ったんだ」アークターの口調はキツかった。視界はほとんど晴れ、精神も、恐怖以外は落ち着きつつあった。いまでは恐怖がはじまっていた。狂気ではなく、合理的な反応だ。起こりかけた事故に対する恐怖、それが意味するものへの恐怖、微笑するパリスと、あいつのかぎ煙草入れと、説明と不気味な物言いと、習慣やくせや性向や出入りに対する恐怖、恐怖、おそろしい恐怖。それとロバート・アークターに関する警察への匿名電話と、結構うまく働いたホントの声をかくすためのチンケな音声変調器への恐怖。でも、それがパリス以外の人間であるはずはなかった。

このクソ野郎、おれを狙ってやがる、とボブ・アークターは思った。

パリスがしゃべっていた。「こんなスグにラリっちゃうやつは見たことないよ。でも、やっぱ」

「おいボブ、だいじょぶか？ ゲロは始末しといてやっから、心配すんなって。だから後ろの席に移れて、な？」ラックマンとパリスが二人してドアをあけてくれた。アークターはガタつきながら外に出た。パリスに向かってラックマンが言った。「お前、ホントにこいつに何も盛らなかったんだな？」

パリスは、とんでもないとばかりに両手をあげて振ってみせた。



## 第6章

項目。覆面麻薬捜査官が一番恐れるのは、撃たれたりぶちのめされたりすることではなくて、なにか幻覚剤を大量にのまされて、その後一生、頭の中で恐ろしい妄想映画が無限に流れ続けることだ。あるいは半分ヘロインで半分物質Dのメックスとか、あるいはメックスと幻覚剤の両方とかに、ギリギリ死なない程度のストリキーネみたいな毒を混ぜたやつでも同じことだ。一生中毒、一生ホラー映画。ヤク溶解用スプーンと注射針三昧の存在に落ちぶれるか、精神病院で壁に頭をたたきつけているか、最悪の場合には連邦クリニックにまで落ちてしまう。日夜アリマキを振り払おうとしたり、なんで床にワックスがけできなくなっちゃったのかを永久に思い悩むようになる。そしてこれがすべて、意図的にもたらされるのだ。誰かがこっちのやっていることに気がついて、ハメる。それもハメかたが最悪。その物質を売っているがゆえにこっちがやつらを追っている、まさにその物質を使うのだ。

ということは、売人も捜査官も、街場のヤクを使うとどうなるか知ってるってことだ。この件に関しては、両者は合意を見ていた。家に向かって慎重に車を走らせながら、ボブ・アークターはそう考えた。

こっちが車をとめた場所の近くのユニオンのガソリン・スタンドが修理車を出して車を点検して、三十ドルでやっとなおしてくれたのだった。ほかに特におかしいところはないようだった。ただ、メカニックはかなり長いこと、前輪左のサスペンションを調べていた。

「そこ、どうかしたんですか？」とアークター。

「この感じだと、急ハンドルのときに問題がありそうですね。横揺れとかしませんか？」とメカニック。

横揺れはしなかった。少なくともアークターは気づかなかった。でも、メカニックはそれ以上何も言ってくれなかった。ただ、スプリングとボールジョイントと油圧式ダンパーをつつき続けただけだった。アークターは金を払い、レッカー車は走り去った。アークターは車に戻り、ラックマンとバリス　　こんどは二人とも後部座席にすわった　　といっしょにオレンジ郡めざして北上を始めた。

運転しながら、アークターは売人と麻薬捜査官の双方の皮肉な合意事項について思いをめぐらせた。知り合いの麻薬捜査官のなかには、覆面捜査で売人のふりをして、やがてホントにハッシシとか、ときにはヘロインまで売ったりするようになるやつらもいた。偽装としてはいいんだけど、一方でそっちのほうの収入がだんだん増えてきて、本来の月給や、逮捕だの大規模取引を押しやるのに功績があったときのボーナスをずっと上回るようになってしまう。それと、捜査官自身もヤクを使いはじめるとどんどんはまって行き、いずれは生き方まで変わってしまう。捜査官であると同時に金持ちの売人中毒者になって、しばらくすると、売人稼業に専念するために法執行活動をお留守にするやつも出てくる。で

も一方では、売人の方にだって、敵を陥れるためとか逮捕が迫っているとかが嗅ぎまわるようになり、その方向にどんどん進んで非公式の覆面捜査官になりはてることだってあった。暗い話だ。でもヤク業界ってのは、誰にとっても暗い世界なのだ。たとえばボブ・アークターにとっては、いまが暗かった。この午後、サン・ディエゴ自動車道を流しながら、相棒二人といっしょにすんでのところまで殺されかけた間、当局が自分になり代わって自分たちの家に 願わくば 盗視聴器をしっかりと仕掛け、もしこれがうまく行っていたら、今後は今日起こったみたいな出来事からは逃れられるだろう。ちょっとツイていたというわけだけれど、究極的にはこのツキが、毒を盛られたり撃たれたり中毒にさせられたりするか、それとも自分の敵を、自分を狙って今日ほとんど成功しかけた誰かをつきとめるかの違いを案外うみだすのかもしれない。いったんホロ・スキャナーが設置されてしまえば、自分に対する妨害工作や攻撃はほとんどなくなるだろう。少なくともそれが成功することはまずなくなるだろう。

考えて元氣の出ることといえば、それぐらいしかなかった。後ろ暗いやつは、誰に追われずとも逃げ出すことがある、と午後遅くの混雑のなかをできるだけ気をつけて走りながら、アークターは考えていた。人から聞いた話だったけれど、そういうもんかもしれない。ただ、確実に言えるのは、後ろ暗いやつは、誰かに本当に追われたときは逃げる逃げる、必死で逃げるし、そのための用心をたっぷりとしてあるってことだ。追ってるやつが本物のエキスパートで、同時に覆面捜査をしていけばね。そしてそいつが近いやつならばね。たとえば、この車の後部座席ぐらいに近ければ。ここでなら、もしあいつがあドイツ製いんちきピストルと、同じくセコいチャチな自称サイレンサーを持ってれば、ラックマンがいつものように寝てしまったことだし、おれの後頭部に成型炸薬弾をぶちこんで、おれはポビー・ケネディーみたいにくたばちまう。ポビー・ケネディーも同じ口径の銃創で死んだんだっけ あんなに小さい穴のために。

それもヤバいのは今日だけじゃない。毎日。そして毎夜。

ただ、家の中では別。おれがホロ・スキャナーをチェックするようになれば。じきに家中のみんなが、自分自身も含め、何を、いつ、なぜしてるかまでも、かなりはつきりわかるようになる。自分が夜中に小便に起き出すのをながめるとかね。全部の部屋を一日二十四時間監視することになる。もっとも、記録されてから見るまでに時間のズレはあるけど。軍の兵器庫からヘルズ・エンジェルズがかっぱらってきた方向感覚喪失ヤクを、コーヒーにしこたま盛られたところをスキャナーがとらえても、あんまりおれの役には立たんな。研究所の誰かほかのやつが記録ドラムを再生して、おれがもはや目も見えず、自分が誰でどこにいるのかもわかんなくなっただうちまわってんのを見る羽目になる。後悔しようにも、その時にはこっちはそれさえできなくなってる。誰かほかのやつが代わりに後悔してくれるしかない。

ラックマンが言った。「一日中家をあけて、何か起きてないといいけどね。だってよ、ボブ、これで誰かに本気で狙われてんのがはつきりしたわけじゃん。帰ってみたら家が消えてたりして」

「うん。そいつは考えなかった。それに脳彩スコープも借りられなかったし」アークターは、投げやりで陰気な声を出そうとした。

パリスが、驚くほど陽気な声を出した。「オレならそんなにクヨクヨしないよ」

ラックマンは怒って言った。「クヨクヨしない？ パカヤロー、押し入られておれたちの持ち物を全部盗まれたかもしんないのに。少なくともボブの持ち物は。それとか動物た



ちを殺すとかふんずけるとか」

パリスは言った。「オレ、今日の留守中に家に入ろうとするやつのために、ちょっとしたおみやげを残してったんだ。今朝方早くに完成させたの……動くまでがんばったんだぜ。電子的なおみやげ」

不安を隠しながらアークターは鋭く言った。「電子のおみやげってどんなやつだ？ あれはおれの家なんだぜ、ジム。そんな装置を勝手に取りつけるなんて」

「まあまあ、おさえておさえて。ドイツ語で言うなら『leise』、つまり落ち着けてね」  
「何なんだ」

「留守中に玄関が開いたら、テープレコーダが録音を始める。ソファの下に取りつけておいたんだ。二時間テープを入れてある。無指向製のソニーのマイクを三本、三カ所に設置して」

「そういうことはちゃんとやっていてくれよ」とアークター。

「窓から入られたら？ それとか裏口から来たら？」とラックマン。

「そういう非一般的な方法じゃなくて玄関から入る可能性を増すために、オレは向こうにとって実に好運なことに玄関のカギをかけずにきたんだ」

しばらく間があって、ラックマンはせせら笑いを始めた。

「カギが開いてるのに気づかなかったら？」とアークター。

「いやあ、メモを残しといたから」とパリス。

「ウソだろ！」

「ホント」パリスはしゃあしゃあと答えた。

「ってことはウソなのかそうじゃないのか、どっちなんだよ？ お前だとわかんねえからな。おい、こいつウソだろ、ポップ？」

「帰ってみりゃわかる。ドアにメモがあってカギが開いてたら、こいつがウソついてないのがわかる」

「たぶんメモは外されるぜ。家を荒らして滅茶苦茶にしてから、玄関にカギをかける。だからわかりゃしない。永久にわかんない。絶対に。またまた迷宮入りだ」

「いやあ、冗談に決まってるじゃん！ 玄関のカギをかけないでメモを残すなんて、気狂いしかやんないって」パリスは勢いこんで言った。

振り返って、アークターはたずねた。「メモにはなんて書いた、ジム？」

「それと誰宛のメモだ？ お前が字の書き方を知ってるとは意外だぜ」ラックマンも割って入った。

パリスはへりくだって言った。「こう書いた。『ドナ、入っててくれ。カギはかかってないから。オレたち』」そこで口を止めた。「ドナ宛だよ」と言い終えたが、口調はぎこちなかった。

「こいつ、ホントにやりやがった」とラックマン。「ホントに。何もかも」

「そうすりゃこれが誰の仕業かわかるだろ、ポップ。それこそが真に大事なことじゃないか」パリスはまたしゃあしゃあと言った。

「連中が、ソファやその他のブツといっしょに、テープレコーダも盗んじまわなきゃな」とアークター。こいつが実際問題としてどの程度ヤバイことなのか、頭の中ですばやく考えていた。パリスのいい加減な幼稚園じみたエレクトロニクスの無益な天才ぶりがまた一つか。やれやれ、最初の十分でマイクが見つかって、それをたどってテープレコーダも見つかるだろう。設置班は、どう対処すべきかズバリ知ってる。テープを消して、巻き戻し

て、元通りにして、玄関のカギをあけたままにして、メモも残しておく。玄関にカギがかかってなければ、かえって作業はやりやすいかもしれん。くそバリスめが。天才的な大計画のおかげで、宇宙まで糞づまりになるってやつだ。どうせテープレコーダだって、コンセントを差しこむのを忘れてるに決まってる。もちろん、コンセントがはずれてるのをバリスが見つけたら

たぶんバリスは、それを誰かが侵入した証拠だと結論づけるにちがいない。思いついて、何日も言い触らしてまわるだろう。誰かが侵入しておれの装置に気がついて、懸命にもコンセントを抜いた、とか言って。だったら、もしコンセントが抜けてるのを見つけたら、差しといてやってほしいよな。それだけじゃなくて、ちゃんと作動するようにしてほしいよな。つまり、どうすればいいかと言うと、バリスの感知システム全体を十分テストして、自分たちのスキャナーと同じような周到な試験にかけて、そいつがうまく完璧に作動するのを確認して、それから巻き戻してブランクにして、何も書かれてないけど誰か たたとえば自分たち が家に入ったら確実になにかが書きこまれるであろう状態にしておくことだ。さもないと、バリスの疑念はいつまでたっても晴れないだろう。

運転しながら、第二のよく知られた例に当てはめて、自分のおかれた状況を理論的に分析し続けた。これは研修所での警察訓練で取り上げられ、記憶に植えこまれたものだった。そうでなければ新聞で読んだのだった。

項目。工業的あるいは軍事的妨害工作でもっとも効果的なものの一つは、与える損害を意図的なものであるとは決して証明しきれない あるいは全然証明できない ものに限定する方法である。目に見えない政治的活動みたいなものだ。それが実在するのかどうか、誰にもわからない。車のイグニッションに爆弾が仕掛けられていれば、これはもう敵がいるのは明白だ。公共建築や政治本部が爆破されれば、政敵がいるってことだ。でも起きたのが事故なら、事故がいくつか続けて起きたなら、ある装置がたまに動かなくなるだけなら、故障がちだとか、それもいきなりじゃなくて、ちょっとした故障や作動不良がたくさん積み重なって自然にゆっくりと起きたら そうしたら被害者は、それが個人であれ政党であれ国であれ、絶対に防御に出て守りを固めたりはしない。

自動車道をすごくゆっくり流しながら、アークターは考察を進めた。たぶんそういう被害者は、自分が神経質になってるだけで実は敵なんかないんじゃないか、と考え始める。自分に自信がなくなってくる。車が壊れたのだって異常なことじゃない。ちょっとツイてなかっただけだ。友だちもそれに同意する。そうそう、お前の気のせいだよ、と。こうして、そいつはきれいに消されてしまう。痕を残すようなほかの方法なんかメじゃない。ただ、時間はかかる。そいつをハメようとする人物ないしは団体は、長い暇をかけて工作したりサボったりうまく機会を利用したりしなくてはならない。一方、被害者の方は、もし相手が誰なのかをつきとめれば、そいつらをやっつけられる可能性は大きい たたとえば望遠照準つきライフルで狙撃されるのに比べれば、反撃できる可能性は絶対高い。それが被害者側の利点だ。

世界のあらゆる国は、大量に作業員を養成して送り出して、あっちのボルトをゆるめたりこっちの糸を切ったり電線を切ったりぼやを起こしたり文書をなくしたり、そういうちょっとした不運を起こさせてるんだ。役所のコピー機にガムを一塊入れるだけで、とりかえしのつかない重要書類を破壊できる。コピーが出てくるかわりに、元の原稿が消えてしまうのだ。せっけんとトイレトーパーを使いすぎるだけで、オフィス・ビルの全下水道がイカレてしまって、全従業員が一週間ばかり休まざるをえなくなる。これは六〇年

代のイッピーも知っていた。車のガソリンタンクにナフタリンを入れておけば、その車が二週間してどこかよその町にいるときにエンジンがいかれる。ガソリンを分析しても痕跡はまったく残らない。杭打ち機がうっかりマイクロ波のケーブルや電力線を切れば、どんなテレビ局・ラジオ局の放送でも止められる。等々。

かつての貴族階級は、女中や庭師やその他の奴隷の仕事ぶりをよく知っていた。こっちで花瓶を割り、かけがえのない家宝が不服そうな手からすべり落ちる……

「なんであんなことをしでかしたんだ、ラスタス・ブラウン」

「え、ちょっとうっかりしとりまして」これでは打つ手がないか、あってもごくわずかだ。裕福な家庭の主にしても、体制側ににらまれている政治評論家にしても、米ソにたてつく新興の小国にしても

あるとき、グアテマラに駐在していたアメリカ外交官の妻がいて、自分の「鉄腕」の夫がこの国の左翼政府をひっくりかえしたんだ、と言い触らしたことがあった。その政権を倒してから、仕事を終えた外交官はアジアの小国に赴任を命じられ、そこでスポーツカーを走らせていて、ハッと気がつくと、干し草を積んだトラックが、わき道からゆっくりと目の前の道に出てきた。一瞬後、外交官は跡形もなくなっていて、ただ細切れになったかけらが山ほどあるだけだった。鉄腕で、一声かければCIA養成の私兵団を丸ごと召集できて、何の役にもたたなかった。彼の妻も、これについてはなんら得意げなせりふは吐かなかった。

干し草トラックの持ち主は、たぶん警察にこう言っただろう。「え、おいら何したって？

何したって、旦那さん？ おいらただ」

それともおれの先妻みたいなことを言ったかも、とアークターは回想した。当時は保険会社の調査員の仕事をしていた（「お向かいのご近所さんがたはよく呑みますか？」）、夜遅くに報告書を作成していると、妻は自分を見ただけで興奮しないのはけしからんと言ってなじるのだった。結婚も末期になると、妻のほうも、こっちが夜遅く仕事をしていると、タバコに火をつけようとして手をやけどするとか、目にごみが入るとか、こっちの書齋を掃くとか、タイプライターの中やまわりでしつこく小物を探し続けるとかいう手口を覚えた。初めのうちは憤慨して仕事を中断しながらも、しづしづ妻の姿を見ただけで興奮するように努めた。でも、その後、ポップコーン製造機を取り出すときに台所で頭をぶつけて、もっといい解決法を発見したのだった。

「やつらが動物を殺しやがったら、焼夷弾をくらわしてやる。皆殺しにしてやる。LAからプロの殺し屋を連れてきてやる、ブラック・パンサーみたいな」とラックマンが言っていた。

「動物なんか殺しやしないよ。動物を傷つけて何の得がある？ 動物は何もしてないし」とパリス。

「おれだって何もしてないぜ」とアークター。

「やつらは明らかにそうは思ってない」とパリス。

ラックマンが言った。「『無害なら、自分で殺せばよかった』だけ。覚えてる？」

「でもあの娘はカタギだったのに」とパリス。「ヤクもやらなかったし、すごい金持ちだった。あのアパート覚えてるだろ？ 金持ちには生命の価値が絶対にわからない。なんか別物なんだよ。おい、テルマ・コンフォードを覚えてる？ あのでっかい胸のチビ女

いつもノーブラで、みんなですわりこんで乳首を觀賞したじゃん。いつだったかオレたちんとこに来て、トンボを殺してくれて言ったろ？ それでオレたちが説明したら

」

のろい車のハンドルを握りながら、ボブ・アークターは理論的考察を忘れて、みんなをあきれさせたあの瞬間を再上映した。タートルネックのセーターにベルボトム・ジーンズといかしたオッパイの、上品で優雅なカタギの女の子が、おっきくて無害なムシを殺してほしがっている図 無害どころか、蚊を始末する益虫なのに。それもその年、オレンジ郡では蚊が媒介する脳膜炎の発生が懸念されていたというのに。そしてそれがなんだかわかって説明してやったのだが、そこで彼女が口にしたのは、一同にとって壁にかけられる悪の金言のパロディめいた、恐れ軽蔑すべきことばだった。

無害なら、自分で殺せばよかった。

この一言が、カタギの敵どものどこが信用できないかを語り尽くしていた。今でもそうだ。まあ、こっちに敵がいるとすればの話だけど。いい教育を受けて財政面でもありったけ優遇されてるテルマ・コンフォードみたいな人間が、その一言をつぶやいただけで敵になった。みんなその日のうちに彼女から逃げ出そうとして女のアパートからなだれ出て、自分たちのちらかった穴ぐらに戻って彼女を困惑させた。こっち側と彼女の側を隔てる深淵が、女をどうやってコマそうかというこっちの思案にもかかわらず、一挙にあらわとなって、そのままそこにとどまった。彼女の心は空っぽの台所とおんなじなんだ。床のタイルと水道管と、ピカピカに磨いた水切り台と、流しのふちにはコップが一個うち捨てられていて、誰も気に止めない。

覆面捜査専門になる前に、留守中に家具を盗まれた上流階級の裕福なカップルの供述を取ったことがあった。明らかにヤク中の仕業だった。まだ当時はそんな連中でも、空き巣団がうろついて盗める物を根こそぎ盗んでいくような地域に住んでいたのだ。プロの空き巣団で、見張りがトランシーバーを持って、数キロ先でカモが帰ってこないか見張ってるような連中だ。その夫婦がこう言ったのをおぼえていた。「家に押し入ってカラーテレビを盗むような連中は、動物を虐殺したりかけがえのない芸術作品を破壊するような犯罪者だ」。ちがう、と供述を書きとめる手を止めて、ボブ・アークターは説明した。とんでもないですよ。ヤク中は、少なくともわたしの経験からすれば、滅多に動物を傷つけたりしません。ヤク中が、ケガをした動物に長期間にわたってエサをやったり世話をしたりするのを目にしてきたが、カタギならたぶんそんな動物はさっさと「永眠させ」てしまっただろう。「永眠させる」というのはカタギ用語（そんなものがあればだけ）で、同時に古いマフィア用語で、殺すという意味だった。いつだったか、完ぺきにイカれきったペイ中二人が、割れたガラスにはまってしまったネコを外してやろうと悲痛な努力をしているのを助けてやったことがある。ペイ中どもは、すでに何も見えずなにもわからない状態になっていたのに、ほとんど丸一時間も器用かつ辛抱強く作業を続けて、とうとうネコを自由にやってやった。みんな、人もネコも少し血が出ていて、ネコはこっちの手の中でおとなしくして、ヤク中の片方がアークターと家の中で、もう一人が尻と尻尾の突き出た外にまわった。ネコはやっと深い傷をおわずに自由の身となり、それからみんなでネコにエサをやった。誰のネコだかは知らなかった。どうやら腹をすかせていて、壊れた窓越しにエサの匂いをかぎつけ、二人の注意をひこうとしたがうまく行かず、とうとう飛びこもうとしたらしかった。二人はネコが悲鳴をあげるまで気がつかなかったが、そのネコのためにそれぞれのトリップや夢をしばらく忘れ去ったのだ。

「かけがえのない芸術作品」の破壊についてはよくわからなかった。というのも、「かけ

がえのない芸術作品」というのが何なのかよくわからなかったからだ。ベトナム戦争中、ソンミ村ではCIAの命令で、かけがえのない芸術が四百五十人も破壊されて殺された。かけがえのない芸術作品に加えて、ウシやニワトリや記録に残らなかったその他の動物たちも破壊された。これを考えるといつも気が滅入って、美術館所蔵の絵とかなんてどうだっていいように思えるのだった。

苦しい思いで運転しながら、アークターはこう言った。「おれたちが死んで、最後の審判の日に神さまの御前に立つとき、おれたちの罪ってのは、やった順に並んでるのかな、それとも重いほうから並んでるのかな、軽いほうからかな、アイウエオ順かな。だって、八十六才で死んだときに神さまがドーンと出てきて、『ほう、一九六二年の昔にセブン・イレブンの駐車場で、コカコーラのトラックからコーラ三本盗んだ坊やじゃないか。言い訳するなら急いだほうがいいぞ』なんて言われるのはヤだもんな」

「クロス・レファレンスつきで出てくると思うぜ。そいでたぶんコンピュータのプリントアウトを渡されるだけで、そこに長い罪の一覧の合計だけが書いてあんの」とラックマン。

「罪ってのはユダヤ・キリスト教の神話だ。もう古いよ」とパリスはクスクス笑った。

「もしかして罪はみんなでっかいピクルスの樽に入れてあんのかもよ」とアークターは振り向いて、反ユダヤ主義者のパリスをにらみつけ、「それもユダヤ式ピクルスの樽にさ。それでそいつをヒョイと持ち上げて、中身を全部こっちの顔にぶちまけんの。で、お前は罪を滴らせながら立ってる。自分の罪と、まちがって混じってた他人の罪をね」

「同姓同名のほかのやつらの罪。ほかのロバート・アークター。ロバート・アークターって何人いると思う、パリス」とラックマンはパリスをつついた。「カリフォルニア工科大のコンピュータならわかる？ ついでにジム・パリス全員分のファイルも検索してくれる？」

ボブ・アークターは内心考えた。実際、ボブ・アークターってのは何人いるんだ？ 気色悪いイカれた考えだ。おれの知ってるだけで二人。片一方はフレッドとって、もう一方のボブってやつを見張ってる。同一人物。でもホントに同一か？ フレッドとボブはホントに同じか？ 誰にわかる？ わかるとすればおれしかない。だって、この世でフレッドがボブ・アークターなのを知ってるのはおれ一人なんだから。でも、おれって誰なんだ？ どっちがおれなんだ？

家に車を乗り入れ、停め、ぐずぐずと玄関に向かった。パリスのメモがあって、カギもあいていたが、おそろおそろドアを開けてみると、何もかも出かける前と同じに見えた。

パリスの疑念がただちに浮上した。入りしな、「ほう」とつぶやく。すばやくドアの横の本棚のてっぺんに手をのばし、22口径ピストルを取り出して、ほかの二人がうろつくのをよそに握りしめた。動物たちがいつものように寄ってきて、エサをねだった。

「さてパリス、お前の言った通りだったな。ここには確かに誰かが入りこんだんだ。だって、ほら ほら、お前もわかるだろ、ボブ ホントなら残っていてしかるべき痕跡がすべて慎重に消されているという事実が、やつらの侵入を証明」そこでラックマンは、うんざりとおならをして、冷蔵庫にビールがないかと台所に向かった。「パリス、お前ホントにいかれてるよ」

まだ銃を手に注意深く動きながら、パリスはラックマンを無視してコトを告げる痕跡を探し続けた。それを見ながらアークターは、こいつホントに見つけるかも知れない、と思った。連中何か残ってたかも。パラノイアがときどき短時間だけ現実と結びつくのは

不思議だ。それも今日みたく、ごく特殊化した状況で。今度はパリスのやつ、謎の侵入者がなにやらできるように、おれが意図的にみんなを家から連れだしたと主張しだすだろう。そのうち誰がとか、何のためにとか、その他何もかもつきとめるだろう。あるいはもうつきとめてあるのかもしれない。それも実はとっくの昔に。つきとめてから、脳彩スコープや車や、その他神のみぞ知るいろんなものに工作して破壊活動を始められるくらい昔に。たとえばガレージの明かりをつけると家が炎上するような仕掛けとかね。でも肝心なのは、盗視聴器設置班の連中はちゃんと来て、モニタを全部取りつけて仕上げたのだろうかってことだ。ハンクに会って話を聞き、モニタのしっかりした配置図をもらい、記録ドラムがどこで見られるかを教えてもらうまではわからない。その時には盗視聴部隊のボスやその他この作戦関係の専門家が入れ知恵したがってる余計な情報までしこたましよいこまされるんだろうよ。ポブ・アークター容疑者に対する連携作戦に必要なことで。

「これを見ろ！」パリスはコーヒーテーブルの灰皿にかがみこんでいた。「来いって！」と二人を呼びつけるので、両者は従った。

手をのばすと、灰皿から熱がたちのぼっているのが感じられた。

「まだ熱いタバコの吸いがらだ」とラックマンは感心していた。「確かに」

やれやれ、やつらホントにしくじりやがった。部隊の誰かがタバコを吸って、何気なく吸いがらをここに入れたんだ。灰皿は、いつもながらあふれていた。職員はたぶん、一個くらい増えても誰も気づかないし、吸いがらもすぐに冷えると思ったんだろう。

「ちょっと待った」ラックマンは灰皿を調べた。タバコの吸いがらの中からほじくり出したのはマリファナたばこだった。「熱いのはこいつだ、大麻だよ。連中、ここにいる間に大麻で一服したんだ。でも何をしてやがったんだろう？ いったい何をしやがった？」怒りと絶望に顔をゆがめ、あたりを見回している。「おいポブ、クソツ　パリスの言うとおりだった。誰かここにいたんだ！ このマリファナはまだ熱いし、鼻の下にもってけば　」とそいつをアークターの鼻先につきつけた。「ホレ、まだ中のほうでちょっと燃えてる。たぶん種のとこだろ。巻く前によくもまなかつたんだ」

「このマリファナ、すっかり忘れてったんじゃないかもよ。この証拠は不注意の結果として残されたんじゃないかもしれない」

「今度はなんだ」と言いながらアークターは、警察盗視聴職員ともあろう者が、同僚たちの前で大麻を吸ったりするもんだろうか、と不思議がっていた。

「こいつはこの家にヤクを仕込もうとして、意図的におかれたのかもしれない。オレたちをハメて、後で電話でタレこむんだ……たとえば電話の中にも、こんなふうにはヤクが隠されてるかもしれない、それとかコンセントの中とか。やつらがタレこむ前に、家中探して徹底的にきれいにしとかなないと。たぶんあと数時間しかない」とパリス。

「お前はコンセントを調べろ。おれは電話をバラす」とラックマン。

「待った。ガサ入れの直前におたついでるところを見られたら　」とパリスは手をあげた。

「何がガサ入れだよ」とアークター。

「もしオレたちが半狂乱で駆けずりまわってヤクを便所に流してたら、ヤクがあつたのを知らなかったって言っても通用しないだろ、ホントのことで。不法所持で本気でつかまっちゃう。それにこれもやつらの計画の内かも知れない」とパリス。

「ええい、クソツ」ラックマンはうんざりして言った。そしてソファにドサリとすわっ

た。「クソクソクソッ。もうどうしようもない。何千箇所も、とうていみつからないような場所に隠してあるんだぜ。おしまいだ」絶望的な怒りでアークターを見上げた。「もうおしまいだ」

アークターはパリスに言った。「お前の電子カセット装置は？ 玄関につないだヤツ」いままで忘れていた。どうやらパリスもだった。そしてラックマンも。

「うん、こうなると非常に重要な情報を提供してくれるはずだな」パリスはソファのよこにしゃがんで、うなり、小さなプラスチック製のテープレコーダを引っ張り出した。「これでいろいろわかるはず」と言いかけて、表情が沈んだ。「まあ、どのみち最終的にはそれほど重要じゃなかったらうよ」と機械の背面から電源コードをぬき、テープレコーダをコーヒーテーブルの上に置いた。「肝心な情報はわかってる 連中が確かに留守中に入りこんだってことだ。それを証明するのがこいつの主要任務だったんだから」

沈黙。

「なんか読めたぞ」とアークター。

パリスは続けた。「入ってすぐに、やつらはこいつのスイッチを『切』にあわせた。オレは『入』の位置に合わせといたんだけど、ホラ 『切』になってるだろ。だからオレが」

「じゃあ録音しなかったわけ？」ラックマンはがっかりしたようだった。

「連中の動きがすばやかだったんだ。録音ヘッドをテープが二センチと通らないうちだもん。ところでこいつはなかなか大した代物なんだぜ、ソニー製。録音、再生、消去にそれぞれ専用ヘッドがあって、ドルビー・ノイズリダクションもついてる。安かったぜ。交換会で。いまだ故障しらず」

「この非常時に、そんなのんきな話が要るのかよ」とアークター。

「もちろん」パリスはうなずいて椅子にすわって後ろにもたれ、グラスを取った。「こうなると、回避戦術の方面では手詰まりだな。おいボブ、お前さんにできることが一つだけある。時間はかかるけど」

「家を売って引っ越すんだろ」とアークター。

パリスはうなずいた。

「ええっ、そんなあ。ここはおれたちんちじゃん」ラックマンは抗議した。

「今、ここらあたりの家の値段は？ 市場価格は？ それと利率も気になるよな。ひょっとすると一財産つくれるかもよ、ボブ。逆に、売り急いで損せざるを得ないかも。でもボブ、お前さんが相手にしてんのはプロなんだから」

「いい不動産屋知ってる？」ラックマンが二人にきいた。

アークターは「売る理由はなんて言う？ 必ずきかれるぜ」と言った。

ラックマンは同意した「うん。ホントのことを言うわけにはいかないし。こんなのはどうか……」とぼんやりビールをのみながら考えこんだ。「思いつかないや。パリス、理由はねえか、うまいごまかしが」

「正直に言えば？ 家中に麻薬が隠してあって、どこにあるかわかんないもんで、引っ越して、かわりに新しい持ち主に逮捕されてもらおうと思ひまして、ってさ」とアークター。

パリスは反対した。「いや、そんなに正直になるのは危険だ。そうだな、ボブ、お前さんがこう言えばいい、転勤になったって」

「どこへ？」とラックマン。

「クリーヴランド」とバリス。

「ホントのことを言ったら？ そうだよ、ロサンゼルス・タイムズに広告うってさ。『最新式3LDK売家、ヤクの容易で迅速な処分に最適な便所二つと、全室に隠された高純度ヤクつき。売値はヤクを含む』」

「でもそしたらみんな電話してきて、どんなヤクかきいてくるぜ。こっちは知らないのに。可能性はいくらでもある」

「それと量もね。買い手は量についても問い合わせってくるかも」とバリスはつぶやいた。

「たとえば大麻がほんの数十グラムとか、その程度のクスかもしないし、ひょっとしたらヘロイン一キロかも」とラックマン。

「こうしよう。郡麻薬濫用対策本部に電話して、この状況をしらせて、ヤクを除去しにきてくれて頼むの。家を探して、ヤクを見つけて、処分してもらおう。だって、現実的に考えれば、家売ってる暇なんかないだろ。この手の、身動きとれない状態に関する法律制度について一度調べたことがあるんだけど、法律書のほとんどは」

「頭おかしいんじゃないの？」ラックマンは、ジェリーのアリマキを見るような目でバリスを見つめた。「麻薬濫用局に電話だあ？ ものの数分で麻薬捜査官が来て」

「望むところだ」バリスはあわてずに続けた。「それでみんな嘘発見機試験を受けて、ヤクが何だったか、あるいはその隠し場所も知らないって証明してもらえばいい。ヤクがオレたちの知らぬ間に許可もなく置かれていたのが証明できる。そう話せば釈放してもらえんぜ、ボブ」と間をおいてから、認めた。「まあいずれはね。公判ですべての事実が明らかになればね」

「でも逆に、おれたち自身の蓄えだってあるんだぜ。そっちのほうは、どこになにがあるか知ってるんだぜ。ってことは、蓄えをみんな流しちまえてこと？ もし流し忘れたのがあったら？ 一つでも？ まったく、ひでえよ！」

「もうどうしようもない。完全にハメられたようだな」とアークター。

ベッドルームの一つから、ドナ・ホーソンが現れた。おかしな短いニー・パンツをはいて、髪はくしゃくしゃにもつれ、眠気で顔がむくんでいる。

「メモ通り入ってたわよ。しばらくすわってたんだけど眠くなっちゃって。いつ戻るか書いてなかったし。なに怒鳴ってるの？ まったくみんなカリカリしてるんだから。目、さめちゃったじゃない」

「いまさっき、マリファナ吸った？ 寝る前に？」とアークター。

「うん。そうしないと眠れないから」

「ドナの大麻だ。返してやれよ」とラックマン。

なんてこった。おれもこいつらと一緒にトリップしてたとはい。みんなあんなに深くハマっちゃってたのか。アークターは頭を振り、身震いして、まばたきした。事情を知っていながら、それでもあんなイカれた偏執狂じみた空間に踏み込んで、こいつらと同じものの見方をしてごちゃごちゃだ。またどんよりしてきた。こいつらを覆ってる暗雲におれも覆われてるんだ。おれたちが漂ってるこの陰気な夢の世界の暗雲。

「きみがおれたちを助け出してくれたんだ」とボブはドナに言った。

「え、何から？」ドナは眠たそうな声で不思議そうに言った。

おれの正体でもなく、今日ここで起こるはずのことに関するおれの知識でもなく、この女が　この女こそがおれの頭を元通りまとめあげて、おれたち三人とも助け出してくれた。このおかしな衣装を着た小さな黒髪女、おれが通報してだましていずれはコマしたい



と思ってる女……またもやセックスと嘘の現実世界で、その中心がこのいかした娘：この理性的な一点のおかげで、おれたちは一気に正気に帰れた。さもなけりゃ、おれたちの頭はどこまでさまよったことやら。おれたち三人とも、完ぺきにはずしきってたんだから。

しかもこれが初めてじゃない。今日初めてですらない。

「家に鍵かけないで出かけちゃダメよ。泥棒に入られて、自分のせいだってことになるんだから。でっかい資本主義保険会社だって、玄関や窓に鍵をかけてなかったら保険金はおろさないってさ。それであたし、メモ見て入ったんだ。あんなあけっぱなしなら、誰かいたほうがいいもんね」

「いつからいたの？」とアークター。ひょっとして盗視聴器設置を妨害したかも。あるいはしなかったかも。たぶんしてないだろう。

ドナは二十ドルのタイムックス製腕時計を見た。アークターがあげた時計だ。「三十八分ぐらい前から。ねえ」と顔を輝かせる。「ボブ、例のオオカミの本、持ってきたわよいま見たい？ すんごいヘビーなネタばっかよ、わかる？」

「人生なんて、ひたすらヘビーなだけだよ。トリップも一つしかなくて、それがずっとヘビーで。ヘビーなまま墓場に続くの。誰にとっても何にとっても」とバリスが、独り言のように言った。

「ね、家を売るとかなんとか言わなかった？ それとも　ほら、あたしの夢だったのかしら。わかんなかったわ。だって聞こえた文句ってイカしてて不気味だったし」

「おれたちみんな夢を見てるんだ」とアークター。自分がヤク中だと最後まで気がつかないのがヤク中なら、自分が本音をしゃべってるのに最後まで気がつかないのも当のしゃべってる人物なのかもしれない。ドナが漏れ聞いた御託のうち、自分はどこまで本気で言っていたんだらう。今日の狂気　おれの狂気　はどこまで本物だったんだらう。それとも状況によって一時的に正気を失っただけなんだろう。ドナは、いつもながら、おれにとっての現実のかなめだった。彼女にとって、さっきの質問は当たり前でごく自然な質問なのだった。答えてやれるとよかったのに。



## 第7章

翌日フレッドはスクランブル・スーツをまとい、盗視聴装置の設置について説明を受けに行った。

「現場で稼働中のホロ・スキャナーは六台。とりあえず六台で十分だろう。こいつらは、アークターの家の並びの、同じ街区の機密アパートにデータを送る」とハンクは、こちらとの間の金属テーブルの上にボブ・アークターの家の平面図を広げて説明していた。それを見てフレッドはゾツとしたが、それでどうなるわけでもない。図面を手にとって、さまざまな部屋のさまざまなスキャナーの配置を調べた。なにもかも、絶えずビデオカメラとマイクの監視下におかれるように、あちこちに据えられている。

「すると再生はそのアパートでやるわけですか」とフレッド。

「そこは付近の近隣で監視下にある家やアパート八軒 あれ、もう九軒になるんだっけな のための再生場所として使ってるんだ。再生中のほかの覆面捜査官と出くわすこともあるだろう。だから必ずスクランブル・スーツ着用のこと」

「アパートに入るのを見られちゃいますよ。家と近すぎる」

「だろうな、でもすごく複雑な設備で、何百という部屋数が必要だし、エレクトロニクス面からも適当なのはそこしか見つからなくてね。我慢してくれ。少なくともどこかよその別の建物に収容をかけるまで。今かかっているとこれから……二街区離れた、もっと怪しまれずにすむ場所だ。あと一週間かそこらだろうな。ホロスキャン画像が、昔のやつみたく、マイクロ波中継ケーブルや電話線経由でもまともな解像度で送れば……」

「アークターとかラックマンに建物に入るところを見られたら、ここのナオンとできるとでも言ってごまかしますよ」実はそれほど事態がややこしくなるわけでもなかった。それどころか、移動時間分の無給時間を節約してくれる。これは大事なことだった。この機密アパートに楽々と乗りつけて、スキャナーの再生をして、何が報告に必要で何が不要かを見きわめ、それからサッと

自分の家に帰れる。アークターの家に。通りを下って、家に戻ればおれはボブ・アークター、知らぬ間にスキャナーを仕掛けられてる重度ヤク中の容疑者だ。それで数日ごとに、おれは何か口実を見つけては家をぬけ出して通りを下り、アパートに入ればおれはフレッドで、何キロも何キロも続くテープを再生して自分が何をやったか見るわけだ。まったく気が滅入る。救いはこれで手に入るはずの保護 それと貴重な個人情報だ。

たぶん、おれを狙ってる誰ぞは、一週間以内にホロ・スキャナーに捕らえられるはず。そう気がつくとホッとした。

「結構です」とハンクに告げた。

「じゃあホロの位置はわかったな？ 調整なり修理なりが必要なら、自分でできるだろう。アークターの家にいてまわりに誰もいないような時に。アークターの家にはしょっ

ちゅう出入りしてるんだろ？」

ああクソッ。そんなことすりゃおれもホロ・スキャナーの再生に映っちゃう。そうなれば、テープをハンクに渡したら、おれはテープに映ってるやつの中の誰かだっただけになって、そうなれば数は限られてくる。

これまでは、自分が容疑者の情報をどうやって集めてきたのかについて、ハンクに説明したことはなかった。フレッドたるこの自分が、効果的なふるい分け装置となって情報を伝えた。でもこうなるとは。音声スキャナーやホロ・スキャナーは、口頭の報告とちがって、自分だけに関することをすべて自動的に削除してくれたりはしない。ホロが不調のときにいじくりまわしているロバート・アークターの顔が、きのこ状にゆがんで画面いっぱい映ってしまう。しかし考えてみれば、記録テープを真っ先に再生して見るのは自分だ。まだ編集・削除することはできる。手間暇はかかるけど。

でも何を削除する？ アークターを完全に削除するか？ アークターこそが容疑者なのに。だからホロ・スキャナーをいじりに来たときだけアークターを削除しよう。

「自分は削除しときますよ。見られないように。わが身の安全のためです」

「当然だろう。今までは削除してなかったの？」ハンクは手をのばして写真を数枚見せてくれた。「でっかい消去装置を使って、自分が情報提供者として登場するところを全部消せばいい。ホロ部分についてはそれで済む。音声部分については、コレという決まった方式はない。でも、そう問題はあるまい。こっちとしては、きみが当然アークターの友人仲間の一人で、あの家によく出入りする人物なんだろうと思ってる。だからきみは、ジム・パリスかアーニー・ラックマンかチャールズ・フレックかドナ・ホーソンか」

「ドナね」とフレッドは笑った。というか、スーツが笑った。それなりのやりかたで。

「それともボブ・アークターか」とハンクは、容疑者のリストを調べながら続けた。

「いつも自分のことは報告してます」とフレッド。

「だから時々は、こっちに渡すホロ・テープに自分も映しとかないとな。だって、もしきみが機械的に自分を削除したら、こっちは消去法できみが誰なのかいやでもわかっちゃう。だからきみは どう言ったらいいかな 発明的、芸術的……いや、そうだ、創造的ってのがいい……創造的に自分を消し去らなきゃいけない。たとえば家に一人でいて捜査をしてるところとか、書類や引き出しを調べてるところとか、別のスキャナーに見えるところでスキャナーをいじってる場所とか、さもなきゃ」

「月一で、制服のまま、誰かをあの家に送ればいいじゃないですか。『おはようございます！ あなたのお宅と電話と車にこっそり仕掛けた監視装置の点検にまいりました』とでも言ったらどうですか。ついでに請求書もアークターにまわして」

「アークターはたぶんそいつを始末して、身を隠すだろう」

スクランブル・スーツのフレッドは「もしアークターにそれほど裏があれば、でしょう。まだそこまで証明されてませんよ」と言った。

「アークターには相当裏があるかもしれんぞ。あいつに関するもっと最近の情報を手にいれて分析させた。まあ、ほぼまちがいないな。あいつはイカサマの三ドル札だ。インチキ野郎だ。だから尻尾を出すまで見張ってる。逮捕して有罪にするだけの証拠が集まるまで」

「ブツを仕込んだらどうです」

「それについてはまた今度だ」

「あいつが、ほら、SD機関の大物だと思ってるんですか」

「こっちが何を思おうと、きみの仕事にはまるで関係ない。判断はわれわれがする。きみは自分の限られた結論を報告すればいい。きみを馬鹿にするわけじゃないが、情報ならきみの以外にも、きみの手には入らないやつが山ほどあるんだ。全体像がね。コンピュータによる見取り図がね」

「アークターがなにかをたくらんでるなら、ツイてないやつだ。しかもその言い方からすると、どうやらホントに何かたくらんでそうですね」

「これでじきにアークターに逮捕状が出せるだろう。そしたら事件簿を閉じて、みんなホッとするといいわけだ」

フレッドはおとなしくアパートの住所と電話番号を記憶したが、そこでふと、このアパートにしょっちゅう出入りするのを見かけた若いヤク中タイプのカップルが、最近ふつり姿を見せなくなっているのに思い当たった。パクられて、アパートがこいつのために収容をかけられたんだ。あのカップルは好きだったのに。女のほうは、長い亜麻色の髪をしていてブラジャーをつけなかった。いつか、彼女が買い物袋を抱えているところに車で通りかかって、乗って行かないかと言ったことがある。その時に話をしたっけ。有機栽培信奉者で、ビタミンの大量摂取と海草と日光の支持者で、親切でおとなしかったけれど、でも捕まってしまった。いまでは理由がわかる。たぶんヤクを持っていたんだろう。それともさばいていた、というほうがありそうだ。でもアパートが必要なだけなら、所持罪だけで済むし、それなら絶対確実だ。

アークターが捕まったら、あいつのちらかってるけどでかい家は、当局にどう利用されるんだろう。もっと膨大な情報処理センターってのがいちばんありそうだ。

「アークターの家は気に入りますよ。ポロでいかにもヤク中らしい汚れかたですけど、でかいですからね。庭もいいし。しげみが多いんです」と口にした。

「うん、設置班の報告もそう言ってた。なかなか有望だっけね」

「ええっ、なんですか？ 『なかなか有望だ』ってのが報告ですか？」スクランブル・スーツからの声は抑揚も語気も変わらぬままペラペラと猛スピードで流れ、それがこちらの憤りを増した。「どう有望ですか？」

「そうね、確実に有望な点の一つは、居間から交差点が見えるから、通過する車両やナンバープレートが把握できる、と……」ハンクは何枚も何枚も書類に目を通した。「でも、あのパートなんとか言ったっけ、設置班の指揮をとったヤツだけど、あいつの話だと家はほったらかしで荒れすぎてるから、収容するのは考えものだって。投資面から見てね」

「どういうふうに？ どういう具合に荒れてるんです？」

「屋根」

「屋根は完ぺきです」

「内装と外装のペンキ。床の状態。台所の棚」

「出鱈目だ」とフレッドは言った、というか少なくともスーツは単調に語った。「アークターは、皿を洗わないで積み上げてあるとか、ゴミを出してないとか、掃除してないとかあるかもしれないですけど、でも、あそこは女手なしに野郎三人が暮らしてるわけでしょ？ アークターは女房に逃げられてますし。そういうのは女の仕事じゃないですか。ドナ・ホーソンが越してきてくれればね、アークターはそう希望してますし、そうなるよう拝みおしてますけど、そうなりゃあの娘が面倒を見るでしょうよ。とにかく、専門の清掃業者を呼べば、半日でピカピカになりますって。少なくとも掃除の面では、で、屋根とは言えば、これはホント頭に来るんですよ」

「じゃあ、アークターが逮捕されて所有権を失ったら、我々があの家を手に入れるのが正しいってこと？」

フレッドは、スーツは、相手を見つめた。

「どうなの？」ハンクは冷静に、ボールペンを構えて待っている。

「別に意見はないです。全然」フレッドは立ち上がって去ろうとした。

「まだ用済みじゃないよ」とハンクは、席に戻るように合図した。「メモが来てて」

「いつもメモばっかですね。誰のことでも」とフレッド。

「このメモの指示によると、帰る前にきみを二〇三号室に寄らせろって」とハンク。

「例のライオンズ・クラブでやった反麻薬スピーチの件なら、もうお灸はすえられましたよ」

「いや、その件じゃない」ハンクはぺらりとした紙切れを放ってよこした。「なんか別のことだ。ま、こっちの用はもう済んだことだし、さっそく行って済ましてきたら？」

目の前の部屋は真っ白で、スチール製の機具とスチール製の椅子とスチール製の机があって、みんな床にボルトで止められていて、消毒されて滅菌済みで冷たい病院みたいな部屋で、照明もまぶしすぎた。事実、右手の方には体重計があって、「専門家のみ調整可」とふだがかかっていた。保安官助手二人がこっちに気づいた。二人ともオレンジ郡保安官オフィスの正式な制服を着込んでいたが、医療班のストライプもつけている。

「フレッド捜査官だね？」天神ひげをはやした方が言った。

「はい、そうです」とフレッド。こわかった。

「よろしい。フレッド、まず。これだけ言っておこう。言うまでもなくすでに知っていることと思うが、任務のブリーフィングときみの報告は、記録されてあとで再生される。ミーティングで何か落としてないかを確認するためだ。もちろんこれは規定の行為で、きみに限らず、口頭で報告を行う全捜査官に適用される」

もう一人の医療助手が口を開いた。「それにきみが本部に対して行うあらゆるコンタクトもそうだ。たとえば電話による報告とかね。そしてその他の補足的な活動、たとえばきみが最近アナハイムで、ロータリークラブ相手にやったスピーチとかもそうだ」

「ライオンズ・クラブです」とフレッド。

「きみは物質Dをやってるか？」と左側の医療助手。

「その質問は問題だな。きみの仕事で物質Dをとらざるを得ないのは周知の事実だからね。答えないように。別に物質Dの服用が罪だからってことでなく、単に質問が悪いから」ともう一人が指さしたテーブルには、積み木の山やその他ガラクタめいたプラスチックの物体や、加えてフレッド捜査官には何だかわからない奇妙な代物が転がっていた。「こちらに来てすわるように、フレッド捜査官。これからはばらく簡単なテストを行う。時間はそんなにとらせないし、肉体的な苦痛はまったくない」

「わたくしのやったスピーチの件は」

「こいつが何の件かと言うとだね」と左側の医療助手はすわってペンと書類を取り出し、「この地域で働いている覆面捜査官数名が、この一月間に神経失語症クリニックに収容されたという最近の濫用防止局の調査結果に基づくものなんだ」

「きみは物質Dの持つ高い中毒性を知っているかね」もう一人の助手がフレッドにきいた。

「もちろん。もちろん知ってますとも」とフレッド。

「これからこのテストを行う」すわった方の助手が言った。「順番はこの通り、まずはい  
わゆるB G、またの名を 」

「わたくしが中毒してると思うんですか？」とフレッド。

「きみが中毒かそうでないかは問題じゃない。中毒治療用物質が、軍の化学兵器師団で  
五年以内に開発されるものと予想されているからね」

「このテストは物質D中毒に関するものじゃなくて、むしろ とにかく、まずこの図  
/地判別テストをやってもらおう。絵の図の部分、背景の地の部分からきちんと識別す  
る能力を調べるテストだ。この幾何学的な図形を見てもらおうか」と助手はテーブルのフ  
レッドの前に、何か描かれたカードを置いた。「見たところ無意味な線の中に、誰でもわ  
かる見慣れた物体がある。きみはその物体が何か……」

項目。一九六九年七月、ジョセフ・E・ボーゲンが革命的な論文「脳の反対側：並列し  
た精神」を刊行。この論文で、ボーゲンは無名のA・L・ウィガン博士の一八四四年の次  
のことばを引用している。

精神は本質的に対になっている。精神活動を司る器官が対になっているのと同じ  
ことだ。このアイデアが浮かんで以来、わたしは四半世紀以上もそれを暖めてきた  
が、その間に有効な反論や、可能性のありそうな反論すら一つとして見つけられな  
かった。そこで次のようなことが証明できるものと思われる。

1. 各脳半球は、それぞれ独立した完全な思考器官であること。
2. それぞれの脳半球で、別々の異なった思考過程ないしは推論過程が同時に存在  
できること。

この論文で、ボーゲンはこう結論づけている。「わたしは(ウィガン同様) 各人間は一  
人のなかにふたつの精神を持っていると信ずる。この件については、まだいろいろ細部を  
詰める必要がある。だが、いずれはウィガンの見解に対する最大の反対に、正面から対決  
せざるを得まい。その反対とはすなわち、我々一人一人が抱いている、自分が一つである  
という主観的な感覚である。この自分の一体性への内面的な確信は、西洋人のもっとも好  
むものであり……」

「……を言って、それが絵の中のどこにあるかを指さすこと」

おれは完全にコケにされてる、とフレッドは思った。「こりゃ何事ですか」と絵ではな  
く助手を見つめた。「ライオンズ・クラブのスピーチでしょ」確信があった。

すわったほうの助手が言った。「物質Dを使った人間の多くにおいて、左脳半球と右脳  
半球との切断が起きる。正しいゲシュタルト認識が失われる。これは知覚系と認識系の両方  
に欠陥が生じるためだが、認識系の方は一見正常に機能し続けているように見える。でも  
知覚系から送られてきた情報は、脳梁の切断のために歪められているので、やがて認識系  
の方もだんだん正常に機能しなくなり、しだいに衰えてゆく。さてこの線画の中の見慣れ  
た物体を見つけたかな？ どこにあるか教えてくれるな？」

「神経レセプター部位における重金属の蓄積のことをおっしゃってるんじゃないです  
よね？ 治療不可能だって 」

「ちがう。これは脳の損傷ではなく、一種の汚染、脳の汚染なんだ。脳の汚染による精  
神症で、脳を切断して知覚系に影響を与える。きみの目の前にあるそのB Gテストは、知  
覚系が統一的な総合体としてどれだけ正確に機能できるかを測るんだ。ここにある形がわ  
かるかな？ 一目見てパッとわかるはずだよ」

「コカコーラのびんが見えます」とフレッド。

「正解はソーダ・ポップのびん」とすわった助手が言って、絵をパッとどけ、次の絵を出した。

「わたくしの報告とかを調べて、何か異常に気づいたんですか？ 何かたわごとめいたものとか？」絶対にあのスピーチのせいだ、とフレッドは思った。「わたくしのやったあのスピーチはどうなんです？ あそこで左右間の機能障害の兆候を見せたとか？ それでこんなところでテストなんかを受けさせられてるんですか？」この手の脳梁切断試験については読んだことがあった。ときどき局がやるのだ。

「ちがう。これはただのルーチン・テストだ。フレッド捜査官、われわれとしても、覆面捜査官が任務の性質上、どうしても麻薬を摂る必要があるのはわかっている。連邦失語症クリニックに入れられた捜査官も」

「恒久的に？」とフレッド。

「恒久的な入院はそう多くない。繰り返すが、これは知覚の歪みであって、やがて自然に矯正されることも」

「暗雲だ。何もかも暗雲におおわれてる」とフレッド。

「交連情報はあるかね？」助手の一人が突然たずねた。

「えっ？」わけがわからずフレッドは聞き返した。

「脳の両半球間の情報の行き来だよ。左脳半球にダメージが生じると、左にはふつう言語機能が置かれているんだが、それを右脳ができるだけ補おうとすることがたまにある」

「わかりません。わたくしの知る限りではないようですが」

「きみ自身のものではない思考とか。まるで別の人物なり精神なりが考えてるようなものだ。きみの考え方とはちがう。自分の知らない外国語だって混じったような思考。人生のどこかで右脳が周縁的な知覚から覚えたような思考はないかね」

「そういうのは全然。あればわかります」

「だろうね。左半球障害の人間でそういう交連情報を報告した人によると、どうやら相当に衝撃的な体験らしいから」

「ええ、それならあればわかると思います」

「かつては、大脳右半球はまったく言語機能を持たないと思われていたが、それはこんなにたくさんの人たちが左半球をクスリでイカレさせて、そいつ 右半球 に活躍のチャンスを与える以前のことだった。右が真空を埋めるわけだ」

「じゃあ気をつけておきます」と言ったフレッドは、自分の声のひたすら機械めいた調子に気がついた。学校の優等生みたいだ。権力を持った者が押しつけてくる、どんな退屈な命令にも従います、という感じ。権力を持った者とは、こっちより偉い者、まともなものだろうとなかろうと、権力と意志をこっちに押しつけられる立場にいる者。

とにかく逆らわず、言われたとおりにしてろ。

「この二番目の絵には何が見える？」

「ヒツジ」とフレッド。

「どこにヒツジがいる？」すわっている助手が身を乗り出して、絵を自分に向けた。「図/地判別能力の損傷は、いろいろ面倒だぞ まったく形を認識できないならまだしも、まちがった形を認識するようになるんだから」

犬のクソみたいな形か、とフレッドは思った。犬のクソなら、もちろんまちがった形と言えるだろう。どんな基準からしても。フレッド……



¥beginquotation データの示すところによれば、非言語的な非優位半球はゲシタルト知覚に特化しており、入力情報を扱う際には主に総合的に処理する。言語的な優位半球は、これと対照的に、もっと論理的で分析的でコンピュータ的に機能するようだ。そしてこの発見によれば、人間における脳の極性化の理由として、片方の半球の言語機能の根本的な欠如と、もう一方の総合的知覚機能欠如とが考えられる。¥endquotation

.....は気分が悪くなり、憂鬱になった。あのライオンズ・クラブでのスピーチの時に負けず劣らず。「そこにはヒツジなんかいないんですね？ でも、惜しいとこまでいったでしょう？」

すわったほうの助手が言った。「これはロールシャッハ・テストじゃない。あれならぐちゃぐちゃのシミが、多数の被験者によって、いかようにも解釈され得るんだがね。こいつの場合、描かれているのはある特定の物体だけ。答は一つしかない。この場合、答は犬だ」

「何ですって？」

「犬」

「どうして犬だってわかるんですか？」犬なんか見えなかった。「見せてください」

助手は.....

この結論には、脳梁を切断された動物の各脳半球に、別々の知覚、判断、行動を行わせることができるという実験上の裏付けがある。人間の場合、命題的な思考は片方の半球に特化しているのに対し、もう片方の半球は別の思考様式に特化している。こちらを並列的な思考と呼ぼう。命題的な思考が脳の「こちら側」(読み、書き、しゃべる側)でどのように生み出されるのかについては、構文や意味論や数学的論理などのかたちで、長年にわたり分析されてきた。並列的な思考が脳の反対側で生み出されるときの法則については、これから何年も研究が必要となるだろう。

.....カードを裏返した。裏側には「犬」の輪郭があっさりくっきり描きこまれ、フレッドにもその形が表側の線の中に描かれた形であると認識できた。それどころか、どんな種類の犬かもわかった。腹の引っ込んだグレイハウンドだ。

「犬でなくヒツジを見てしまったというのはどういうことなんでしょうか」とフレッド。

「たぶん、ただの心理的な抑圧だろう」と立っているほうの助手が、重心を左右に移しながら言った。「全部のカードをやってみて、それからほかのテストも二、三やってからでないと」

「このテストがなぜロールシャッハより優れているかと言うとだね」とすわっているほうの助手が割り込んで、次の絵を出し、「こいつは解釈のテストじゃないからだ。まちがった答はいくらでも思いつけるだろう。でも正解はたった一つしかない。正しい物体は、カード一枚一枚についてアメリカ精神画像局が描きこんで、認定してある。それが正しい物体なんだ、ワシントンから渡されたものだからね。結果は正しいかまちがっているかで、もしいくつも続けてまちがえるようなら、知覚機能障害と断定して、しばらくは干してやって、いずれまたテストでOKと出るまでそうしておくことになる」

「連邦クリニックですか？」

「そう。さて、この絵には何が見えるかな？ この白黒の線の中に？」

死の街だ、と絵をながめながらフレッドは思った。見えるのはそれだけ。さまざまな形の死、唯一の正しい形の死だけじゃなくて、あるとあらゆる死。身長一メートルの小さな

殺し屋が、手押し車に乗ってる。

「一つだけ教えてください。問題になったのは、あのライオンズ・クラブのスピーチなんですか？」

二人の医療助手は目を見合わせた。

とうとう立った方が口を開いた。「ちがう。問題になったのは、きみとハンクのやりとりなんだ。それも実は仕事と関係ない、まあ言ってしまうと雑談だな。二週間ほど前だ.....おわかりのように、流れこんでくる生データがあればあると、ガラクタを処理するのに技術的な遅れが出るんだ。まだきみのスピーチの処理は始まってない。あと二、三日は無理だろう」

「で、その雑談と言うのは？」

「盗品の自転車についての話だよ」ともう一人の助手が言った。「七段変速の自転車と称する代物の話。確か、残りの三段分の変速がどこに消えたのかをつきとめようとしていた、そうだったね？」またもや助手二人は視線をかわした。「盗んできたガレージの床にでも置き忘れてきたにちがいないと思ったんだろ？」

フレッドは抗議した。「まったく。あれはチャールズ・フレックのせいなんですよ。わたくしのせいじゃありません。あいつがみんなのケツに火をつけて、みんなヤイヤイ議論を始めたんです。わたくしはおもしろがってただけです」

パリス:(居間の真ん中に、大きな新品のピカピカ自転車を持って立ち、悦に入っている)おーい、二十ドルでこんなもの買っちゃったぜ。

フレック:なんだよ。

パリス:自転車だよ、十段変速の競技用自転車。ほとんど新品同様。近所の庭で見かけて聞いてみたら、四台持ってるとんで現金で二十ドルでどうだって言ったら、売ってくれた。黒人たち。柵越しに自転車を出すのまでやってくれたんだぜ。

ラックマン:新同の十速自転車が二十ドルで手に入るとはね。二十ドルも捨てたもんじゃないな。

ドナ:あたしの向かいに住んでる娘が一月ぐらい前に盗まれたヤツに似てるな。たぶんそいつらが盗んだのよ、その黒人たちが。

アークター:そうに決まってる、だって四台も持ってるとだろ。しかもそんなに安く売って。

ドナ:向かいの娘に返してやってよ、もしその娘んならね。とにかく、見せるだけ見せてやってよ、その娘んかどうか。

パリス:男物の自転車だぜ。だからちがうよ。

フレック:ギヤが七つしかないのに、なんで十段変速なの？

パリス:(驚嘆して)なんだって？

フレック:(自転車に近寄って指さしながら)ほら、こっちに五つ、チェーンの反対側に二つ。五たす二.....

ネコやサル<sup>1)</sup>の交差視神経が矢状方向に切断されると、右目からの入力は右脳だけ、左目からの入力は左脳だけになる。この手術を受けた動物に、片目だけを使って二つの記号の一方を選ぶように訓練すると、あとでもう片方の目を

使って選択させても正しい方を選ぶことが実験で示される。しかし、もし交連部、特に脳梁を訓練の前に破壊しておく、最初にふさいであった目とそれと同じ側にある脳半球は、初めから訓練し直さねばならない。つまり、交連が切断されていると、訓練の成果が片方の半球からもう一方の半球に伝わらないのである。これがマイヤースとスペリーによる根本的な脳梁切断実験である（一九五三；スペリー、一九六〇；マイヤース、一九六五；スペリー、一九六七）。

……は七だ。だからこいつはたった七段变速の自転車だ。

ラックマン：うん、でも七段变速でも二十ドルの価値は十分にある。どのみちいい買い物だよ。

パリス：(いらだって)あの黒人連中は十速で言ったんだぜ。ボられた。

(みんなよってたかって自転車を調べる。何度も何度もギヤを数える)

フレック：あれ、今数えたら八つだ。前に六つ、後ろに二つ。それだと八つだ。

アークター：(論理的に)しかし十あるべきだ。七速とか八速の自転車なんて存在しない。少なくともおれは聞いたことない。残りのギヤはどうなったんだろう？

パリス：あの黒人ども、何か細工して、技術的な知識もなしに、いい加減な工具でバラしたりなんかしたんじゃないかな。それで組み立てなおしたとき、ガレージの床にギヤ三つ置きっぱなしにしたんだろう。まだそのまま放ってあるんじゃない？

ラックマン：だったら行って、残りのギヤを返せって言わないと。

パリス：(腹立たしそうに考え込んで)いや、そこがインチキの要なんだろうな。たぶん、ギヤをちゃんと渡さないで、売りつけようとするんだぜ。ほかにも何かいじくってないだろうな(と自転車を隅々まで調べる)

ラックマン：おれたちみんなで行けば、ちゃんとよこすよ。絶対だって。みんなで行こうぜ、な？(同意を求めて見回す)

ドナ：ホントにギヤ七つしかないの？

フレック：八つ。

ドナ：七つでも八つでもいいけどさ。とにかく、つまり、そいつらんとこに行く前に、誰かにきいてみたら？ だって、どう見てもバラすとかそんなことしてあるみたいには見えないし。行って派手に責めたる前に、調べなさいよ。言いたいことわかる？

アークター：その通り。

ラックマン：誰にきいたらいい？ 誰か知り合いに、競技用自転車の権威っている？

フレック：出くわした最初のヤツにきいてみよう。ドアからその自転車を押してってさ、どっかのイカレぼんちが来たらそいつにきくの。そうすればガックリするような見解が得られるぜ。

(みんなして自転車を押して玄関を出ると、車をとめたばかりの若い黒人に会う。みんなで問いただすように七つ 八つ？ のギヤを指さして、いくつあるかたずねる。こっちには チャールズ・フレックは別だけど 七つしか見えない。チェーンの一端に五つ、反対側に二つ。目で見てわかる。どうなってるの？)

若い黒人：(平然と)前のギヤと後ろのギヤの数をかけなきゃダメ。足すんじゃなくてかけるの。だって、ほら、チェーンはギヤからギヤへと移動するだろ、するとギヤ比から言えば、前の二つのうちの一つ(と指さす)に対してまず五つ(と後輪のギヤ五つを示す)

これで1×5で五つね、それでハンドルのこのレバーを操作すると（と実演）チェーンは前の二つのもう一方に移って、後輪の同じ五つとまたかみあうわけ。これでもう五つ。だから足し算でやるなら、五たす五で十ね。仕組み、わかる？ だからギヤ比を求めるには必ず

（みんな礼を言って、黙って自転車を家の中に押し戻す。若い黒人は、見たことない顔で、十七才足らず、すさまじくおんぼろのパンを運転していたが、車の鍵を閉めにかかっていた。みんな玄関を閉めて、そこに立ち尽くす）

ラックマン：誰かクスリ持ってない？ 『薬あるところ希望あり』ってね。（誰も……

以上の証拠すべての示すところでは、脳半球の分割によって一つの頭蓋の中に、すなわち一つの器官内に、二つの独立した脳が創り出される。この結論は、意識というものを人間の脳を持つ見えざる能力であると考えている人々にとっては不愉快なものである。ほかの人々にとってはまだ時期尚早と思われるかも知れない。現時点で明らかになった右脳半球の能力は、オートマトン・レベルでしかないからだ。なるほど、現在の事例においては半球間の不均衡が存在するのは確かだが、これはわれわれが研究対象とした個人の特性によるものかもしれない。もし、ごく若い人間の脳が分割されたなら、その結果として、両半球がそれぞれ別々に独立したかたちで、通常の間では左半球のみで達成されているような水準の、高度な精神機能を発展させる可能性は十分にある。

……笑わない)

「きみがあそこにいた人間の誰かなのはわかっている」とすわった方の医療助手が言った。「誰だかは問題じゃない。きみたちの誰一人として、自転車を見て、あのごく簡単な機構におけるギヤ比を求めるための簡単な数学を思いつかなかったね」助手の声の中には一種の同情が聞き取れた。親切にしてやろうといった響き。「中学校の適性試験に出る程度の数学だよ。みんなヤク漬けにでもなったのかね？」

「いいえ」とフレッド。

「子供用の適性試験問題だよ」ともう一人の医療助手。

「じゃあ、なぜわからなかったんだね？」と最初の助手。

「忘れまして」とフレッド。もう黙った。それから口を開いた。「それ、知覚というよりも認識上のまちがいじゃないんですか？ そういうのには抽象的な思考が関係してくるでしょう。だから」

「そう思うかもしれないが、テストによれば、認識系がまちがえるのは正確なデータが受信できていないせいなんだ。言いかえると、入力が歪められていて、それについて何か理屈をたてようとする、その理屈がまちがってしまう。つまりきみは」最初の助手は身ぶりをして、何とかそれを表現しようとした。

「でも十段変速の自転車には確かにギヤが七つあるじゃないですか。だからわれわれの目は正しかった。前に二つ、後ろに五つ」とフレッド。

「でも、きみたちの誰も、それがどうかみあうかは気がつかなかった。後輪の五つが前の二つのそれぞれとつながる。その黒人にはわかった。高等教育を受けた人だったのかな？」

「たぶんちがいます」とフレッド。

「あの黒人が見たものは、きみたちみんなの見たものちがっていたんだ」と立った助手。「後輪ギヤと前のギヤとの間に、二つの別々の接続線を見たわけだ。前のギヤ二つから後輪ギヤ五つのそれぞれに向かう別々の線が、同時に認識できたんだな……きみたちが見たのは、後輪ギヤすべてに対して連結線一つだけだった」

「でもそれならギヤは六つになります。前のギヤは二つでも連結が一つだから」とフレッド。

「それも不正確な知覚だね。だれもあの黒人の子にそんなことを教えちゃいない。あの子が教わったことは、といってもそんなことをことさら教わったとは思えないけど、その二つの連結の持つ意味を、認識によってつかむことだった。きみたちは連結の一つを完全につかみそこねてしまった。一人残らず。きみたちが何をやったかと言うと、前のギヤを二つ数えておきながら、それを同一のものだと知覚してしまったんだ」

「こんどはちゃんとやります」とフレッド。

「こんどって？　こんど盗品の十段変速自転車を買うとき？　それとも日々のあらゆる知覚情報を抽象するとき？」

フレッドは黙ったままだった。

「テストを続けよう」とすわった助手。「これには何が見えるね、フレッド？」

「ゴム製の犬のクソ。ロサンゼルスあたりで売ってるような。もう行っていいですか？」またまたライオンズ・クラブのスピーチの繰り返しだ。

ところが、助手二人は笑った。

「なあフレッド、そんな具合にユーモアのセンスをなくさなければ、たぶん何とかできるかもしれんよ」

「何とかできる？」とフレッドは繰り返した。「なにができるんです？　いい仲間ができる？　女とデキる？　立派にできる？　何とかできる？　うまくできる？　意味をなせる？　金ができる？　時間ができる？　用語を定義すること。『できる』をラテン語で言うとき *facere* で、こいつを見るといつも *fuckere*、ラテン語の『オマンコする』を思い出すんだけど、おれ……」

高等動物の脳は、ヒトも含め、二重になった器官で、右半球と左半球から構成され、その間を脳梁と呼ばれる神経組織の峡谷で結ばれている。およそ十五年前、ロナルド・E・マイヤーズとR・W・スペリーが驚くべき発見を行い、続いてシカゴ大でも同じ発見がなされた。その発見によると、脳の二つの半球間の接続が切断されると、各半球はまるで完全な脳のように、独立して機能したのである。

……、最近は何もコマンキめてなくてさ、ホント、ゴムのクソほどもだぜ、もう全然どんなクソも。あんたら、心理学者とかそんなんで、おれのハンクへの果てしない報告を聞いてたんなら、ドナの扱いをどうすりゃいいのかわ教えてくれない？　どうやって近づいたらいい？　つまりさ、どうすりゃいいの？　ああいうかわいいユニークでガードのかたい娘を相手にするときはさ？」

「そりゃ女によってちがうからね」とすわった助手。

「言ってんのは、ちゃんと倫理的に言い寄るってことだよ。ヤクだ酒だって飲ませて、居間の床に寝ころがってるところをつっこむなんてのはなしで」とフレッド。

「花を買っておやり」と立った助手。

「え？」とフレッドは、スーツ越しに目を見開いた。

「この季節だと、かわいらしい春の花が買えるよ。そうだね、ペニーズとかKマートの苗木売り場で。ツツジなんかどうだね？」

「花ね。それってプラスチックの花のこと？ たぶん本物の花だろうけど」

「プラスチックのやつじゃだめだ。すごく……にせものくさいからね。何でもかしらんにせものなんだ」

「もう行っていいですか？」

目を見合わせてから、助手は二人ともうなずいた。「きみの検査は、またそのうちってことで。そんな急ぎでもないし。次のアポイントの時間はハンクから聞いてくれ」と立った方の助手が言った。

奇妙なことだが、フレッドは去る前に二人と握手したい気になった。が、しなかった。何も言わず、ちょっと落ちこんで、ちょっと当惑して、そのまま去った。当惑していたのは、これがわけもわからないうちに、いきなり目の前に飛び出してきたからだろう。あいつら、おれの資料を何度も何度も調べて、おれがイカレた兆候を見つけようとして、たぶん何か見つけたんだろう。少なくともこんなテストをしたくなるほどのネタは。

春の花か、とエレベータのところまで来て考えた。小さなヤツだ。地面のごく近くに生えて、みんなに踏んづけられるんだろう。野生かな。それとも特別な市販の苗床とか、巨大な農場で育ててるのかな。いなくてどんな感じだろう。畑とか何かがあって、不思議な匂いがする。それと、いなくてどこにあるんだろう。どこに行くんだろう。どうやって行くんだろう。どうやって住むんだろう。それってどういう旅行なのかな、どんな切符がいるのかな。それとその切符はどこで買うんだろう。

それと、行くときは誰か一緒に連れていきたいな。ドナとか。でもどうやってそんなこと頼むんだろう。言い寄るのさえできないような娘に？ いろいろたくらんでも、いっこうに仲が進展しないってのに 一歩たりとも。おれたち、急いだほうがいいな。だって、あいつらの話してくれたみたいなの春の花は、やがてみんな枯れてしまうから。

## 第 8 章

ボブ・アークターの家では、いつもヤク中が群れてうっとりトリップしてるのが常だったが、そこに向かう道々、チャールズ・フレックはパリスをひっかけるためのギャグを考えていた。先日のフィドラズ・スリー・レストランでの、脾臓がどうしたというフカシの仕返しだ。警察がそこら中に仕掛けたネズミ取り装置を上手にかわしながら（ドライバーをねらう警察のネズミ取り用バンは、いつも安っぽいフォルクス・ワーゲンのバンに偽装してあって、くすんだ茶色に塗られ、運転しているのもヒゲをはやしたイカレぼんちに見せかけてあった。そういうバンを見かけたら速度を落とす）頭の中で自分のハメ手の妄想版の試写を上映した。

フレック：(さりげなく) おれ、今日メセドリンの木を買ったぜ。

パリス：(えらそうな顔をして) メセドリンは覚醒剤だよ。スピードみたく。シャブとか。結晶で、アンフェタミンで、化学工場で人工的に合成される。したがって、大麻とちがって有機体じゃない。植物の大麻とは異なり、メセドリンの木なんてもんは存在しない。

フレック：(ここでオチを相手にぶつける) いや、おれの叔父さんが遺産を四万ドル残してくれて、さる野郎のガレージに隠してあったメセドリン製造プラントを買ったんだよ。つまり、そいつはメセドリンを製造する設備を持ってるわけ。おれの言ってるプラントは

運転しながらだと完ぺきなせりふを思いつけなかった。心の一部が周囲の車や信号に向けられていたからだ。でも、アークターんここに着けば、超見事にパリスをはめてやれるのは絶対だった。それに、もしほかに人がたくさんいれば、パリスはエサに喰いついて、みんなの前で、アホぶりをモ口にはっきりさらけ出すことになる。そしてそれは超すごい仕返しになる。パリスは誰にも増して馬鹿にされるのを嫌っていたから。

車をとめると、パリスが外でアークターの車をいじっていた。ボンネットをあけて、パリスとアークターが車両用工具を山ほど持って並んでいた。

「いよう」とフレックはドアをパタンと閉めて、さりげなくぶらぶらと近づいた。すぐに「おいパリス」とクールに言って、パリスの肩に手を置いて注意を引こうとした。

「あとで」とパリスはうなった。作業服を着ている。もともと汚かった生地が、グリースだのなんだのにまみれている。

フレックは「おれ、今日メセドリンの木を買ったぜ」と言った。

パリスは苛立たしそうににらんだ。「サイズは？」

「サイズって？」

「プラントのサイズだよ」

「えーと」フレックはどう続けようか思案した。

「いくらした？」と言ったアークターも、車の修理でグリースまみれだ。キャブとエア・フィルターとホースと、いろんなものをはずしてあるのが見えた。

フレックは「十ドルほど」と言った。

「ジムならもっと安く手にいれてやれたのに」とアークターは作業に戻った。「だろ、ジム？」

「メセドリンのプラントなんて、ただ同然で配ってるよ」とパリス。

「だってガレージ丸ごといっぱい設備なんだぜ！ 工場なんだ！ 日産百万錠 錠剤を丸める機械からなにから全部。全部！」とフレックは反論した。

「それが全部で十ドル？」パリスは派手にニヤニヤしていた。

「どこにあんの？」とアークター。

「ここじゃねえよ」フレックはもじもじして言った。「ちくしょう、貴様ら死ぬよ」

作業の手を止めて 誰かに話しかけられたときも、そうでないときも、パリスは作業中にしょちゅう手を止めた。パリスは言った。「おい、フレック、メセドリンのんだり射ったりしすぎと、声がドナルドダックみたいになっちゃうぜ」

「それがどうした」とフレック。

「したらお前さんが何言ってんのか、誰にもわかんなくなんの」とパリス。

「なんてった、パリス？ 何言ってんのかわかんないぜ」とアークター。

表情をうれしそうに踊らせながら、パリスはドナルドダックの声のまねをしてみせた。フレックとアークターは、ニヤニヤしておもしろがっていた。パリスは調子によってそれを続け、最後に身ぶりでキャブレータを示した。

「キャブレータがどうかした？」と言ったアークターは、もう笑っていなかった。

パリスはふつうの声に戻って、だがまだ大きな笑みを浮かべて言った。「チョークのシャフトが曲がってんの。キャブを全部組み立てなおさないと。そうでないと高速を流しているときにチョークに閉じられて、そしたらプラグがかぶってエンジンが死んで、どっかの間抜けに追突されちまう。それとシリンダーの内壁をつたうガソリンが 長く続けただけど オイルを洗い流して、そうすつとシリンダーが焼きついて、完全にオシャカだ。そうになったらシリンダーの壁を削って、ボアアップするしかない」

「なんでチョーク・ロッドが曲がってるんだ？」とアークターはきいた。

肩をすくめて、パリスはキャブの分解を続け、返事をしなかった。その疑問はアークターとチャールズ・フレックにまかされた。フレックはエンジンのことなんか何も知らなかったし、こういう複雑な修理となればなおさらだった。

ラックマンが家から出てきた。いかしたシャツとカッコいいタイトなリーバイスのジーンズを着て、手には本を持ち、グラサンをかけている。「電話したら、この車で組み直したキャブがどんくらいすっか調べてくれるって。折り返し電話するって言うから玄関をあけといた」

パリスが言う。「ついでだからさ、こういうバレル二つのやつじゃなくて、四つのやつをつければ？ でもそれだとマニホールも新設しないと。中古のやつならそんな高くないよ」

「アイドリングが高くなりすぎるぜ。お前の言うてるのは ロチェスターの4バレルとか、そんなやつだろ？ それに、まともにシフトしてくれなくなる。ギヤがあがなくなるぜ」



「アイリング用の噴射装置を小さいのにすればいい。それでおさえられる。それとタコメータをつければ、回転数をあげすぎないように見てられるだろ。タコを見ればシフトアップしてないのはわかる。ふつうなら、アクセルをちょっとゆるめればシフトアップするよ。AT機構がやんなくてもね。タコの調達場所も知ってるし。というか、オレが持っている」

「そうかよ。それじゃもし、高速で非常時に突然トルクが要るようなときに、こいつが思いっきりアクセル踏んでギヤを落として追い越しかけようとしたら、車はシフトダウンして回転数がものすごく上がって、ヘッドのガスケットを飛ばすか、それとももっとひどいことになるぜ。もうエンジン全体がふっとぶかも」とラックマン。

パリスは辛抱強く言った。「そしたらタコがはねあがるから、それを見てすぐアクセルを戻すだろ」

「追い越しかけてるときに？」とラックマン。「クソでかいセミ・トレーラーを追い越しかけたときに？　パーカ、そうになったら回転数が高くて踏まざるを得ねえだろ。アクセル戻すより、エンジンふっとばす方を選ぶしかないもん。だって、もしアクセル戻したら、いつまでたってもそいつのケツを拝むことになるんだぜ」

「勢いがある。こんなに重い車なら、アクセルゆるめても勢いだけで追い越せる」とパリス。

「登りだったら？　追い越しかけてんのが登りでなら、勢いだけじゃ大したことないぜ」とラックマン。

アークターに向かって、パリスはきいた。「この車、どんくらい……」と身をかがめて、車種を見る。「この……オールズモービル」

「重量五百キロくらい」とアークター。彼がラックマンにウィンクするのをチャールズ・フレックは見た。

「じゃあお前さんの言うとおりで」とパリスは同意した。「そんな軽量なら、慣性質量は大したことないや。それともあるかな」とペンと書くものを手探りした。「五百キロの物体が時速百三十キロで運動したら、生じる力は　　」

「五百キロってのは、人が乗っててガソリン満タンでトランクにでっかい煉瓦のつまった箱が入ってるときだぜ」とアークターが割って入った。

「何人乗ってるの？」とラックマンはとぼけてみせた。

「十二」

「というと、前に六人、後ろに　　」

「ちがう。後ろに十一人で、前には運転手が一人ですわってる。そうすりゃ、ほら、後輪にもっと重量がかかって摩擦が増えるだろ。そうすつと尻ふりしないから」

パリスは険しい顔で見上げた。「この車、尻ふりすんの？」

「後ろに十一人乗せないとね」とアークター。

「だったらトランクに砂袋でもつめたほうがいい。百キロの砂袋を三つ。そしたら乗る人をもっと均一に配分できるから、乗り心地がずっとよくなる」とパリス。

「三百キロの金の箱じゃどう？」とラックマンがきいた。「百キロの砂袋三つなんかじゃなくて　　」

「いいから黙ってるよ。この車が百三十キロで走るときの慣性質量を計算してんだから」とパリス。

「百三十は出ないよ。気筒が一本死んでる。言うの忘れてた。昨日の晩にロッドがいかれたんだ。セブンイレブンから帰る途中で」とアークター。

「そんならなんでキャブなんかバラしてんだ？」パリスは詰問した。「そういうことならエンジン・ヘッドごとバラさないよ。いや、それだけじゃ済まない。うん、ひょっとするとエンジン・ブロックにひびが入ってるかも。そうか、それでエンジンがかかかんないのか？」

「エンジンがかかかんないの？」フレックはボブ・アークターにきいた。

「かかかんないのは、キャブがひっこぬいてあるからだよ」とラックマン。

困惑してパリスは言った。「なんでキャブをバラしたんだっけ。忘れちゃった」

「バネとかのセコい部品をとっかえるんだよ。故障して殺されかけたりしないように。ユニオン・ガソリンスタンドのメカニックがそうしろって」とアークター。

「貴様らがそこでぐちゃぐちゃ口をはさまなけりゃ、今ごろは計算済ませられたんだぜ。四バルブの口チェスター・キャブにうまく小さめのアイドルリング用燃料噴射つけてうまくいくかもわかってたのに」パリスは本気でカリカリしていた。「いい加減黙れって！」

ラックマンは抱えていた本を開いた。それから、いつもよりずっと大きく息を吸いこんだ。厚い胸がふくれ、二頭筋もふくれあがった。「パリス、本を読んでやろう」と言って、ことさら朗々と朗読をはじめた。「『キリストを、この世のほかのいかなる現実よりも一層リアルなものとして見る能力……』」

「なに？」とパリス。

ラックマンは読み続けた。「『……リアルなものとして見る能力、キリストがいたるところに遍在し、いたるところで一層偉大さを増し、キリストが究極の到達点であり宇宙の原形質とも言うべき原理であることを見る能力を授かった者にとって……』」

「なんだ、そりゃ？」とアークター。

「シャルダン。ティヤール・ド・シャルダン」

「おいおい、ラックマン」とアークター。

「『……人が生きるゾーンは、まさにいかなる多様性も人の意気を落としめることはない場所であり、したがってそのゾーンは、宇宙的な充実感のもっとも活発な作業場となるのである』」ラックマンは本を閉じた。

非常に物騒なものを感じて、チャールズ・フレックはパリスとラックマンの間に割って入った。「おい、落ち着けよ、二人とも」

「どきな、フレック」とラックマンは右腕を引き、盛大なノックアウト・パンチの構えをとった。「やんのか、パリス。仲間にあんな口ききやがって。パッチリにしてやるかな」

露骨にうろたえた声を派手にあげて、パリスはフェルトペンとメモ帳を落とし、開けっ放しの家の玄関に向かって慌ててヨタヨタ逃げ出し、走りながら振り返ってこう叫んだ。「組み立てなおしたキャブの件での電話が聞こえる」

みんな、それを見送った。

「ほんのシャレのつもりだったのに」とラックマンは下唇をさすった。

「あの拳銃と消音器を持ってきたらどうしよう」フレックの不安は完ぺきに限界を越えていた。だから駐車した自分の車の方へジワジワ移動した。パリスが現れて撃ち出したら、すぐに車のかげに隠れるつもりだった。

「おいおい」とアークターはラックマンに言った。二人はいっしょに車の作業に没頭し、一方のフレックは心配そうに自分の車のまわりでうろろうろしながら、そもそも今日はなんだってここに顔を出そうなんて思ったんだっけ、と思案していた。今日は、いつもの楽し

い感じがまるっきりなかった。ふざけてる時も、その裏にハナっから良くないノリが感じられた。いったいくソ全体どうしちまったんだろう。彼は陰気に自分の車に戻って、エンジンをかけようとした。

ここもだんだんコトが重苦しくて悪くなってくのかな。ジェリー・フェイビンの家でいっしょに暮らしてた、最後の何週間かもそうだった。昔はここも楽しかったのにな。みんな楽にしてハイになって、アシッド・ロックにシビれて。特にストーンズね。ドナは革ジャンとブーツ姿ですわってヤクのカプセルをつめて、ラックマンはマリファナたばこを巻いて、UCLAでヤク吸いとマリファナたばこの巻き方についてのゼミを開講する話とか、いつの日か突然に完ぺきなマリファナたばこが巻けるようになって、それがアメリカ史の一部として、それ相応の意義を持つ品々とともに、憲法記念ホールのヘリウム入りガラスケースに陳列される話とかしたっけ。いまにして思えば、こないだジム・パリスとフィドラーズですわってたときだって……あの時だって、いまよりはマシだった。発端はジェリーだ。それがここにまで及んでるんだ。あのジェリーを連れ去った領域が。あんなに良かった日々やできごとや時間が、こんなに急に汚れちゃうなんて。それも理由なし、まともな理由が一つもないのに。ただ 変わっただけ。原因もなしに。

「おれ、行くわ」フレックは、ラックマンとアークターに告げた。エンジンをふかしたので、二人はこっちを見ていた。

「おい、行くなって、ねえ、コラ」ラックマンは暖かい微笑を浮かべた。「お前が要るんだから。兄弟分だろ」

「んにゃ。このへんで」

家からはパリスがおそろおそろ顔を出した。トンカチを持っている。「まちがい電話だった」と叫んで、すごく警戒しながら進んでくる。ときどき止まってはあたりを見回している。ドライブ・イン・シアターでかかる三流SF映画に登場するような、カニの化け物みたいだ。

「トンカチなんかで何する気だ？」とラックマン。

アークターが「エンジン修理だろ」と言った。

「何となく持ってこようと思ったわけ。家の中にいて目についたもんで」と説明しながら、パリスは慎重にオールズモービルに戻った。

「この世でいちばん危険な人間は、自分の影を恐れる人間だ」とアークター。走り去るフレックが最後に聞いたせりふだった。いったいアークターは何が言いたいんだろう。ひょっとしてこのオレ、チャールズ・フレックのことかしら。恥ずかしかった。でもチクショウ、あんな超つまらんとこに、へばりついてるこたあなかるう。それで失せたって、臆病者よばわりされるいわれはねえや。ヤバいとこには首つっこむな、だぜ。これがオレの人生訓。そこで後も見ないで車で走り去ってるわけ。あいつら、勝手にお互いの首を締めあってりゃいい。あんな連中、誰も必要としてないんだし。でも、事態が悪い方に変わるのを目撃しておきながら、連中を見捨ててきたことで、すごく、すごく後ろめたい気がした。なぜ悪くなったんだろう。なにか意味があるんだろうか。でも、事態がまた逆の方に動いて、好転するかも知れないと思いついて、気が晴れた。おかげで、見えない警察の車をおかしながらも、頭の中で短い妄想映画を上映したほどだ。

みんな昔どおりにすわっておりました。

死んだやつらも、完全にイカレきったジェリー・フェイビンみたいなやつらも。みんなあちこちにすわって、なにやら透明な白光に包まれている。日光じゃなくて、もっといい光で、海みたいにみんなの下に横たわり、同じく頭上にも漂っている。

ドナとその他数人の女がすごくそそのる感じ　ホルターとホットパンツか、ノーブラでタンクトップを着ている。音楽が聞こえたけど、何のLPのどの曲かははっきりとはわからなかった。ヘンドリックスかも！　うん、古いヘンドリックスの曲か、それとも一瞬にしてジャニス・ジョップリンに変わったりして。なんでもかんでもだ。ジム・クロウチー、それとジャニス、だけど特にヘンドリックス。「死ぬ前に、生きたいように生きさせて」とヘンドリックスがつぶやいていた。けどそこで妄想編は一気に破綻した。ヘンドリックスが死んだこと、ヘンドリックスとジョップリンも、クロウチーは言うまでもなく、どうして死んだのかを思い出してしまったのだ。ヘンドリックスとジャニスはヒロインの射ちすぎ。二人ともそれで死んだ。あんな最高にキメたクールなすごい人たちだったのに、あんなずば抜けた人間たちだったのに。それと、ジャニスのマネージャーが、彼女にはたまに数百ドルずつ渡すだけだったって話を聞いたっけ。あれだけ稼いで、もらえたのはたったそれだけ。ヤク中だからって理由で。すると、頭のなかで彼女の「すべては孤独」が聞こえてきた。泣けてきた。その状態で、家に向かって車を走らせた。

居間で友だちとすわり、必要なのが新品のキャブなのか、再生品のキャブなのか、それともキャブとマニホールドの改造品なのかを見きわめようとしながら、ロバート・アークターは、ホロ・スキャナーの絶え間ない無音の詮索、電子的な存在を感じていた。いい気分だった。

「気分よさそうじゃん」とラックマン。「おれなら百ドル出すのにそんな上機嫌じゃいらんないな」

「街を流して、おれと同じオールズモービルを探すことにしたんだ。見つけたら、そいつのキャブを口八ではずす。知り合いはみんなやってることだろ」とアークターは説明した。

「中でもドナね」とパリスは同意した。「こないだオレたちが出かけてたときも、ドナには家に入ってほしくなかったね。だってドナは持てるものならなんだってガメるし、持てないものでも、かっぱぎ団の仲間に電話して、そいつらがやってきて、かわりに持ってってちまうんだもん」

「そういやドナのことでこんな話を聞いたっけ」とラックマン。「あるとき、ドナは切手の自販機に二十五セント入れたわけ。あのコイル式の切手を売るやつ。で、機械がイカレてて、切手がつながったままでどんどん出てきたんだと。とうとう切手はスーパーマーケットのかごいっぱいになった。それでもまだ切手は出てきた。最終的に、ドナはかっぱぎ団の連中と数えたんだって　十五セントの切手一万八千枚以上を手に入れたわけ。それはそれですごいんだけど、ただドナ・ホーソンにしてみれば何の役にもたたないわけ。生まれてこのかた、手紙なんざ書いたことない女だもん。ただ、弁護士宛は別か。ヤクの取引でカモられた相手を訴える時とか」

「ドナって、そんなことしてんの？　非合法取引の債務不履行用に、弁護士を雇ってんの？　そんなことできるわけないじゃん！」とアークター。

「たぶん、そいつに金を貸してあるとだけ言うんだろ」

「考えてもみろよ、ヤクの取り引きの件で、弁護士から『払わなきゃ裁判ざただぞ』みたいな手紙がくるなんて」と言いながら、アークターはいつもながらドナに感服していた。

ラックマンは続けた。「とにかくだ、ドナはかごいっぱい十五セント切手を、少なくとも一万八千枚持ってたわけ。どうすりゃいいと思う？ 郵便局で払い戻してもらおうわけにはいかない。郵便局が点検にきたら、機械がイカれたのはすぐわかるし、そこへ誰かがそんだけの十五セント切手を持って窓口に残れたら　ホレ、向こうはすぐに気づく。それどころか、ドナが来るのを待ちかまえてるんじゃない、だろ？　そこでドナは考えた　ああ、もちろん切手のコイルをMGに積んで、その場を離れてからね　それでつるんでるかっぱぎ狂いどもをもっと電話で呼びつけて、削岩機なんかを持ってこさせたの。水冷式で水防音式で、すげえ変わった特殊なヤツで、そうそう、当然かっぱらったヤツね。それで夜中に切手の自販機をコンクリートから掘り出して、フォード・ランチェロの後ろに積んでドナンちに持って帰ったの。フォードも盗品だろうな。切手用に盗ったんだぜ」

「つまり、そいつらその切手を売ったわけ？　自販機で？　一枚一枚？」アークターは感服していた。

「そいつら、自販機を　いや、おれは聞いただけだけどね　どっかの人通りの多い交差点の、郵便収集車に見つかんない裏手に据えなおして、また作動させたわけ」

「公衆電話でも荒らしゃよかったのに」とバリス。

「それでそいつらは切手を売りだした。二、三週間ぐらいして切手が切れるまで。いづれは切れざるを得ないもんな。で、切れたらお次は何だ？　これをドナの頭脳が何週間か考えていたのが想像つくね。あの百姓めいたケチな脳……あの娘の先祖ってのは、どっかヨーロッパの田舎の百姓の家系だろうよ。とにかく、コイル切手が切れた時点で、ドナはそいつを清涼飲料の自販機とすげかえることにしたわけ。それも郵便局から持ってこようという……すげえ見張りがキツイのにな。しかもつかまりゃ一生ブタ箱だぜ」とラックマン。

「それ、ホント？」とバリス。

「ホントって、何が？」とラックマン。

「あの娘、精神障害だよ。精神病院に強制入院させるべきだ。彼女が切手を盗んだせいで、オレたちみんなの税金が上がるんだぜ」バリスはまた腹立たしそうな口調だった。

「政府に手紙書いて教えてやったら？　切手はドナにわけてもらえよ。売ってくれから」ラックマンの表情はバリスへの嫌悪で冷たかった。

「売るって、定価でだろ」バリスも同じく怒った声だった。

ホロスキャナーは、こんなのを高価なテープ何キロメートルもかけて記録するわけだ、とアークターは思った。何キロもの空テープじゃなくて、何キロもの呆けきったテープ。

ロバート・アークターがホロスキャナーの前にすわってるときに何が起きたか、なんてのは大して重要じゃない。肝心なのは　少なくとも彼にとって……彼って誰？……フレッドにとって肝心なのは　ボブ・アークターがほかで寝てて、その他の連中がスキャナーの有効範囲にいるときだ。だから、おれは計画どおりフケよう。こいつらを残して、それと知り合いをもっとここに呼んでくる。これからは、この家への出入りをすごく気安くしとかないと。

すると忌まわしい、醜い考えが身の内に湧き起こった。テープを再生したら、ドナがスプーンとかナイフで窓をこじあけて　この家に入りこんで、おれの持ち物を破壊

したり盗んだりしているのが写っていたらどうしよう。もう一人のドナ。彼女の本当の姿、というか、とにかくおれの見てない時の彼女。例の「誰もいない森の中で倒れた木の音は」みたいな哲学的問題。誰もまわりで見てないときのドナってどんなだろう？

あの優しくて、きれいで賢くて、すごく親切な、超親切な娘が、即座に何か悪賢い存在に変身してしまうのだろうか。おれが正気を失うほどの変化が見られるだろうか。ドナとかラックマンとか、その他おれが気にかける人間で？ たえばペットの犬や猫が、こっちの留守中に……猫は枕カバーをはずして、値打ち物を片っ端から詰めこむ。電気時計とか、ベッドサイド型のラジオ、ひげそり、飼い主が戻るまで詰めこめるだけ詰めこむ。飼い主がいないと、まったく別の猫と化し、飼い主からガメて全部質屋に叩きこみ、マリファナたばこを吸いまくり、天井を逆さに歩いたり、長距離電話をかけまくったり……その他なんでも。悪夢だ。鏡の向こうの不気味な異世界、恐怖の街に裏返しの物体、そこをわけのわからない存在がうろついている。ドナが四つん這いになって動物のエサ入れからエサを喰っている……底しれず恐ろしい、ありとあらゆるサイケな猛トリップ。

うん、それを言うなら、ボブ・アークターだって、夜中に深い眠りからむっくり起き上がり、その手のトリップをするかも。壁と性関係があったりとか。あるいは見たこともないようなフリーク・ショー、フクロウみたいに首が百八十度まわりきってしまうみたいな手合いが山ほど群れる。そして音声スキャナーが拾うのは、自分とそのフリーク連中のひねくり出したイカレた陰謀で、何やら脳軟じみた目的のために、便器にプラスチック爆弾を詰めてスタンダード駅の男便所をふっとばそうってな具合。自分は毎晩眠っていると想像しているだけで、この手のことが毎晩のように起きているのかも　そして昼になると忘れてしまう。

ボブ・アークターは、小さな革ジャンのドナとかファッショナブルなラックマンとか、あるはパリスに関してよりも、自分について意外なぐらいの新情報を知ることになるのかも。ジム・パリスなんて、まわりに誰もいなけりゃ寝ちまうだけなのかもしれない。みんながまた現れるまで。

でも、それはどうかな。パリスなら、乱雑にごったがえした自分の部屋の中　もちろんそこも、家のほかの部屋と同様に、いま初めて二十四時間のスキャン下におかれているのだが　に隠した送信機を引っ張り出してきて、謎めいた信号を送り出すその先は、あいつが今現在何やらつるんで画策してる、似たような謎めいたクソツタレどもの集団。目的なんか知るか、あの手の連中の企みなりの理由があるんだろう。当局の別の部署かなんかだ。

その一方で、ハンクとかその他ダウントウンの連中としては、ボブ・アークターが姿を消して二度と現れなければ、どのテーブルにも顔を出さなければ、あまり嬉しくはあるまい。何せ、高価なモニターを手間暇かけて設置したんだし。したがって、費用向こう持ちで自分の監視計画を実施するために出かける、というわけにはいかなかった。だって、何と言っても向こうの金なのだ。

こうして撮影されている映画の脚本の中で、おれはいつもスターの俳優になってないと。アークター、アークター。姓はアークター、名はボブ。おたずね者。そして、その首を狙う急先鋒でもある。

自分の声の録音を聞かされても、最初はそれが自分の声だとはわからないと言う。自分の姿をビデオで、あるいはこんなふう、3Dホログラムで見ても、それが自分の姿だとはわからないそう。自分が背の高い黒髪のデブ男だと思ってたら、実はチビでやせた

ハゲ女だった……そんな感じかな？ ボブ・アークターなら確実にわかるだろう。何はなくとも服装や、あるいは消去法で。パリスとラックマン以外でここに住んでるのがボブ・アークターにちがいない。さもなきゃペットの犬か猫だ。自分のプロとしての目を鍛えて、直立歩行してるものだけに集中するようにしよう。

「おいパリス、ちょっと出かけてくる。ベンゼドリンがキメられないかと思って」そこで車がないのを思いだしたふりをした。そんな感じの表情をしてみせたのだ。「ラックマン、お前のファルコン、動く？」

しばらく考えてから、ラックマンは思慮深そうに「いや、残念ながら」と言った。

「ジム、お前の車、借りられない？」アークターはパリスにきいた。

「うーん……お前さんにオレの車が扱いきれるかな」とパリス。

誰かが車を借りようとする、パリスはいつもこれを持ち出して、貸さずに済まそうとした。というのも、パリスは車に秘密の改造を行っていたからだ。改造部分は：

- イ) サスペンション
- ロ) エンジン
- ハ) トランスミッション
- ニ) 後輪
- ホ) 動力伝達部
- ヘ) 電装系
- ト) 前輪とステアリング
- チ) その他時計、ライター、灰皿、グローブ・ボックスなど。特にグローブ・ボックス。パリスはいつもそこに鍵をかけてあった。ラジオも、狡猾に変えてあった(どう変えてあるとか、なぜ変えてあるとかは、まったく説明がなかった)。ある局にあわせると、一分おきにピッピッというだけだった。どの選曲ボタンを押しても、聞こえるのはわけのわからない局が一つだけで、奇妙なことに、このラジオでロックがかかったことはなかった。ときどきパリスの買い物につきあってやると、車をとめてみんなを残して外に出るとき、パリスはそのラジオ局を変な方法でかけて、ボリュームをものすごく上げて行く。いない間にそれを変えると、やけにそわそわして、帰り道に口をきかなかったりするし、理由も絶対に説明しなかった。未だに説明していない。その周波数に合わせたとき、パリスのラジオはたぶん次のいずれかに送信を行っているのだろう：

- － イ) 当局
- － ロ) 軍に準ずる私警団
- － ハ) マフィア・シンジケート
- － ニ) 地球外高等知性体

パリスが言った。「つまりオレの言いたいのは、あの車の走行スピードは」

「ケッ！」ラックマンがきつい口調で割って入った。「ただの六気筒エンジンだろ、大げさな。LAのダウンタウンにとめる時には、駐車場係がちゃんと運転してるんだし、だったら何でボブじゃだめなの？ このポケナス」

さて、ボブ・アークターも自分のカー・ラジオに装置をいくつか取り付け、こっそり改造を施してあった。人には話さなかったけど。実際に改造したのは、フレッドだった。とにかく誰かは改造したわけで、その連中は、エレクトロニクス助手数人がやったとパリス

が主張する改造と、ちょっと似たような改造を二、三行い、一方では行わなかった。

たとえば、あらゆる法執行官の車は、特別な妨害信号を全周波数で送信できる。この信号は、ふつうのカー・ラジオで受信すると、その車のスパーク遮断装置が壊れたような音がする。まるでパトカーのイグニッションが故障しているみたい。しかし、ポップ・アークターは、警察官としてある小道具を支給されていて、これをカー・ラジオに搭載すると、他のほとんどの人には何の意味もないその雑音が、大量の情報を与えてくれるのだった。他の人たちは、その雑音に何か情報が含まれていることすら気がつかない。まず、倍音のちがいによって、ポップ・アークターは信号を出した法執行用車両がどのくらい離れているかを知ることができたし、続いて、それがどの部局の車かもわかった。市警察か郡警察か、高速パトロールかFBIか、その他どこの車か。また、アークターも一分間隔のピッピッという音を受信できた。これは停車中の経過時間チェックに使えた。停車中の車の中にいるとき、腕を動かして腕時計を見るという不審な動作なしに、何分待ったかわかる。これが役に立つのは、たとえばきっかり三分後にある家に踏みこむことにしてある場合だ。カー・ラジオからのジッ、ジッ、ジッという音が、ちょうど三分間たったのを知らせてくれる。

また、あるAM局についてもアークターは知っていた。その局はトップ10タイプの曲ばかり次々にかけ、ものすごい量のDJのおしゃべりを間にはさむのだが、そのおしゃべりの一部は、ある意味でおしゃべりではなかった。その局にダイヤルをあわせておいて、車中にそれが大音量で響きわたっていれば、何気なく聞いている者が耳にするのは、よくあるポップ・ミュージック局と、退屈なDJのトークの見本みたいなもので、誰もそれ以上注意を払ったり、ときどきそのDJまがいが、口調はまったく変えずに急に内容を変えるのに気がついたりすることはなかった。そのDJは、「さて、次の局はフィルとジェーンのリクエスト、キャット・スティーブンスの新曲で、タイトルは」なんて言うのと同じ、鼻にかかったおしゃべりな感じの声で、たまに「車両青は一キロ北のバスタンチュリーへ進み、他の部隊は」とかいったようなことを言うのだ。アークターといっしょのやつらは男や女を山ほど乗せていて、大がかりな手入れが進行中だとか、こっちにも関わりのある大規模な作戦が展開中のときなど、警察無線の指示に従うように命じられているときでも誰一人気づいたためしがなかった。気がついたにしても、たぶん自分一人がトリップしてるかちょっと神経にきてるかだろうと思って、忘れてしまうのだろう。

それと、いろんな覆面パトカーのことも知っていた。たとえば、後部にうるさい(違法な)エキゾーストパイプをつけ、車体にレーシング・ストライプを入れたような古いシボレーを、おっかない感じのヒッピー・タイプが気狂いじみたスピードでとばしていたりする。アークターは、ラジオから全周波数で聞こえる特別な情報搬送雑音のおかげで、後ろからクラクションを鳴らされたり、追い越されたりする時も、それが覆面パトカーだとわかった。だから無視すればいいのもわかる。

それと、本来はカー・ラジオのAM/FM切り替え用だったスイッチを押すと、ある周波数の局が流れて、たえずイージーリスニングっぽい音楽をうなり出したが、こうして彼の車に送信される雑音は、ラジオの中のマイク送信機でフィルターをかけられ、攪乱を解かれ、その時点で車の中で言われたことは、すべてその機械に拾われて、当局向けに送信された。このセコい局の方は、どんな大音量でかけてあっても、当局側には受信されず、車内の話を聞くじゃまにはならなかった。攪乱除去装置で遮断されるからだ。



パリスが行ったと自称している改造は、このボブ・アークターは覆面法執行捜査官として自分のカー・ラジオに持っているものと、ある程度は似ていた。でも、それ以上の改造、たとえばサスペンションとか、エンジン、トランスミッション等については、いかなる改造も行われていなかった。そういうのはダサいし、露骨すぎる。それと第二に、何万ものカー・マニアがいて、その程度のヤバい改造ならできるわけだから、こっちとしてはそこにパワーのある車を支給してもらって、それでよしとしていた。ある程度のハイ・パワー車なら、ほかのどんなハイ・パワー車にでも追いつき、追い越せる。パリスはこの件についていろいろ御託を言っていた。が、フェラーリのサスペンションやハンドリングやステアリングは、いかなる「秘密の特殊改造」もかなわないのだから、パリスなんざクソくえ。おまわりはスポーツ・カーなんか運転させてもらえなかった。安いやつでも。ましてやフェラーリなんか、とんでもない。最終的にすべてを決めるのは、ドライバーの腕なのだ。

ただ、もう一つだけ、法執行官として支給を受けているものがあつた。非常に特殊なタイヤだ。内部に、数年前にミシュランXで導入されたようなスチールバンド以上のものを入れてある。みんな金属製で減りもはやかったのだが、速度や加速の面で有利だった。不利な点といえばコストだが、アークターは物資支給局から無料で手に入れていた。金の場合のようにドクター・ペッパーの自販機でもらえたわけではないけれど。なかなかうまく仕組みだったが、支給を受けられるのは、絶対に必要なときだけだった。支給されたタイヤは、誰も見ていないときに自分でつけた。ラジオの改造を行ったときと同じように。

ラジオについて唯一こわいのは、パリスみたいに誰か嗅ぎ回っているやつがつきとめることではなく、単純に盗まれることだった。盗まれれば、いろんな機器が追加してあるから、つけ直すのは高くつく。いろいろ弁解も必要になる。

当然のことでもあるが、車には銃を隠してあつた。パリスがいくら不気味なLSDトリップをやっても、イカれた妄想にふけても、この車の銃の隠し場所を設計することはできまい。パリスなら、意外な隠し場所を狙っただろう。たとえばステアリング・コラムの空洞部分とか。あるいは、古典映画「イージー ライダー」でコカインの荷を隠してあつたみたいに、燃料タンクの中に針金でつるしておくとか。ちなみに、あそこはオートバイでの隠し場所としては最悪の場所だった。あの映画を見た警官なら、賢い精神分析医連中が苦労してつきとめたことを一瞬で理解しただろう。あの二人のバイカーは、捕まって、できれば殺されることを自ら求めていたのだ。自分の銃は、グローブ・ボックスに入れてあつた。

パリスが絶えず自分の車に施したとほめかしている、毛が三本足りない細工の数々も、現実と多少は関係があるのだろう。現実と言うのは、アークター自身の改造車である。アークターがつけているラジオの小道具の多くは既製品で、テレビの深夜番組で紹介されたり、ネットワークのトーク・ショーで紹介されたりしている。紹介者は、その設計に手を貸したり、それについて業界雑誌で読んだり、実物を見たり、警察の研究所からクビになったのを根に持ってようなエレクトロニクスの専門家だった。だから、一般大衆（あるいは、パリスがいつも、例のいかにも学のあるようなえらそうな態度で言う、典型的一般大衆）も最近ではちゃんと知っている。クアーズ・ピールで舞い上がってハンドルを握っている、荒々しいティーンエージャーらしき人物が、チューンしたレーシング・ストライプ入り五七年型シボレーを突っ走らせていても、パトカーは敢えてそれをとめようとしないうてことを。とめてみると、そいつが獲物を追跡中の覆面麻薬捜査官の車だった

りするからだ。つまり、今日の典型的一般大衆は、なぜ、どうやってあんなだけの覆面麻薬捜査車が、婆さんやカタギどもをこわがらせて、義憤のあまり投書を書かせるほど走り回りながら、たえずお互いや同僚に、自分の身分を知らせあっているのか知っていた……だからどうだというわけではないが。これが問題に　それも恐ろしい問題に　なるとすれば、ヨタども、ホットロッド屋、族、それと特にヤク業者や運び屋や売人が、自分たちの車にそういう高度な機器を製作して組みこむのに成功したときだ。

そうなれば、やつらは自由に行き来できるようになる。おとがめなしに。

「んなら歩くわ」とアークター。最初からそうするつもりだった。パリスとラックマンを二人ともハメたのだ。歩かないわけにはいかなかった。

「どこいくの？」とラックマン。

「ドナんとこ」ドナの家歩いて行くのはほとんど不可能だった。こう言ったのは、どちらも後についてこないのを確実にするためだった。コートを着て玄関に向かう。「じゃ、また」

「オレの車は　　」パリスはまだ弁解がましく続けた。

「おれがお前の車なんか運転したら、まちがったボタンを押して、グッドイヤーの飛行船みたいに大口サンゼルス圏の上空に浮き上がっちゃまって、油田の火事に消火剤を投下させられちまうよ」とアークター。

「オレの立場がわかってもらえてうれしいよ」とつぶやくパリスをあとに、アークターはドアを閉めた。

2号モニターのホログラム・キューブの前にすわって、スクランブル・スーツを着たフレッドは、目の前で変わり続けるホログラムをぼうっと見つめていた。安全なアパートの中では、ほかの監視員が、ほかの設置場所からのホログラムを観ていた。ほとんどは録画の再生だったが、フレッドが観ているのは、目の前で展開するライブのホログラムだった。録画もしているけれど、記録テープをバイパスして、ボブ・アークターの他称ボロ口家から流れ出た瞬間に、その送信を観ているのだ。

ホログラムの中では、広帯域のカラーで、高解像度のパリスとラックマンがすわっていた。居間の最高の椅子にすわって、パリスはここ数日組み立て続けていたハッシシ・パイプの上にかがみこんでいた。パイプの火皿の部分に白糸をグルグル巻きつけ、顔は集中して動かない。コーヒーテーブルでは、ラックマンがスワンソンのTVディナー（チキン）に覆いかぶさり、間抜けな大口あけてかきこみながら、テレビで西部劇を観ていた。テーブルの上には、彼の力強い手で握りつぶされたビール缶　空っぽのやつ　が四つころがっていた。そしてこんどは、半分空いた五つめの缶に手をのぼし、それをひっくり返して、こぼし、缶をつかんで、悪態をついた。それを聞いて、パリスが顔をあげ、ジークフリートに出てくるミーメみたいに見つめてから作業に戻った。

フレッドは観続けた。

「くだんねえ深夜番組」とラックマンは、口に食べ物を頬張ったまま、ガラガラ声をあげ、そして突然スプーンを落とし、よろよろと立ち上がり、ぐらつき、パリスに向きなおり、両手をあげて、何もいわずに身ぶりをして、口は開けた。そこから食いかげの食べ物が服にこぼれている。猫たちがうれしそうに近寄ってきた。

パリスはハッシシ・パイプをつくる手をとめ、あわれなラックマンを見上げた。逆上して、忌まわしい音をのどの奥でたてながら、ラックマンは片手でコーヒーテーブルをなぎ

はらい、ビール缶や食物を床に落とした。猫たちはこわがってサッと逃げ去った。それでもパリスは、彼を凝視するばかりだ。ラックマンは台所のほうにヨタヨタと何歩か進んだ。そのスキャナーがラックマンをとらえ、フレッドのおびえた目の前のキューブでは、ラックマンが薄暗い台所の中で盲滅法にコップをつかみ、蛇口をひねって水をコップに注ごうとしていた。モニターを覗いているフレッドは飛び上がった。2号モニターでは、パリスがまだすわったまま、苦勞しい糸をハッシシ・パイプの火皿にグルグル巻きつけるのに戻るのが見えた。パリスはそれ以上目をあげなかった。2号モニターは、熱心に作業に励むパリスの姿を映していた。

音声テープは、苦悶のあまり物が壊され、引き裂かれる派手な物音をとどろかせていた。窒息する人間の声と、床に落ちるさまざまな物体のすさまじい音。ラックマンがなべやフライパンや皿やお盆をぶちまけて、パリスの注意をひこうとしているのだ。パリスは、騒音の中で、てきばきとハッシシ・パイプの作業を続け、一向に顔をあげようとしなかった。

台所の1号モニター上では、ラックマンが一拳に床に倒れた。ひざをついてじょじょに、というのではなく、一度に、湿ったドサツという音をたてて倒れ、大の字になった。パリスはハッシシ・パイプの糸を巻き続け、いまでは口の端に卑しい微笑をうかべている。

立ち上がって、フレッドは愕然と見つめていた。全身がはじかれたように動こうとしながらも、同時に麻痺している。モニターの横の警察直通電話に手をのばし、手を止め、観続けた。

数分感、ラックマンは身動きせずに台所の床に横たわり、パリスは糸をグルグル巻き続けた。パリスは、一心に編み物をする老婆みたいに身をかがめ、ひとりでニコニコしてちょっと身をゆずっている。そして突然パリスはハッシシ・パイプを投げ捨て、立ち上がり、台所の床のラックマンの姿態をじっくり眺め、その横の割れたコップや屑やフライパンや割れた皿を一通り見て、それからパリスの顔はうろたえたふりを見せた。いつものグラサンをかなぐりすて、目をグロテスクに見開き、恐怖で腕をバタバタさせて、あちこち右往左往して走り回り、それからラックマンに駆け寄って、一メートルほど離れてとまり、息をきらせながら駆け戻った。

演技を練ってやがるんだ、とフレッドは気づいた。発見してパニくる演技をだんだんまとめあげてる。たったいま舞台上に登場したみたいに。2号モニターのパリスは、身をよじり、悲嘆にくれ、顔はドス黒くなり、それから電話の方にヨタヨタ向かい、受話器をつかみ、とり落とし、ふるえる指で拾い上げ……たったい今、ラックマンが、台所でたったいひとりで、食い物をのどにつまらせて死んだって図か。それを聞きつけて助けるやつはだれもいなかった。そして今、パリスが狂ったように助けを求める。が、手遅れだった、というわけ。

電話に向かって、パリスは変なかん高い声でゆっくりしゃべっていた。「あ、交換さん？  
えっと、あれ、吸入班ってんですか、蘇生班ってんですか」

電話の盗聴機がフレッドの横のスピーカーでがなった。「もしもし？ 誰か呼吸困難な  
んですか？ なんなら」

「見たところ、心搏停止じゃないかと思うんだけど」こんどのパリスは、低い切迫した  
専門家然とした平静な声を出していた。差し迫った危険と、事態の重大さと、時間がどん  
どんなくなって行くのを承知しきった、寒気のするような声だ。「さもなければ気管部へ  
の食塊の偶発的吸入」

「そちらの位置は？」交換が割って入った。

「位置ね、そう、何だっけ、位置は 」  
フレッドは立ったまま「まったく」と言った。  
突然、床にごろんと横たわっていたラックマンが、けいれん状に嘔吐した。身震いして、のどに詰まっていた物体をもどし、吐き散らして目をあけた。混乱して血走った目つきでキョロキョロしている。  
「あっ、もう大丈夫みたい」パリスはサラリと電話に言った。「どうも。もう助けは要らないから」そしてさっさと電話を切った。  
「まったく」と身を起こしながら、ラックマンはボソッとつぶやいた。「クソッ」そしてゼイ息をつき、空気を求めて咳こんだ。  
「だいじょぶ？」気遣うような口調でパリスが言った。  
「のどが詰まったみたい。おれ、気絶してた？」  
「いや、そうとは言えない。ただ、異なった意識状態に突入していたとは言えるな。数秒ほどだけど。たぶん 波状態だろう」  
「ゲッ！ おれグチャグチャじゃん！」よろよると、弱々しく、ラックマンは何とか前後にふらつきながらも立ち上がった。壁に手をつけてからだを支えている。「もう完ぺきにどうしようもなくなってきてるな。まるで老いぼれアル中だ」と嫌悪をこめてつぶやき、あぶなっかしい足どりで流しに向かい、顔を洗おうとした。  
一部始終を目撃して、フレッドは恐怖がからだから退いてゆくのを感じた。あいつはもう大丈夫だ。でも、パリスめ！ なんてヤツだ！ ラックマンが回復したのも、パリスのおかげじゃない。あの気狂いめ。変態の気狂いめ。あんなボサッとしてるだけなんて、何考えてやがる！  
「ああして終局になっちまうヤツもいるんだろうな」流しでからだを洗いながら、ラックマンは言った。  
パリスは微笑した。  
「おれってホント頑丈にできてっからよ」とラックマンはコップの水をがぶ飲みした。「おれがブッ倒れてるとき、お前は何してたんだ？ せんずりでもこいてたか？」  
「見ただろ、電話をかけてたのを。救護員を呼びつけた。しっかり行動に移って 」  
「よく言う」ラックマンはキツイ口調で言い、新鮮できれいな水を飲み続けた。「おれがおっちゃんらお前が何をするかぐらい、お見通しだぜ おれの蓄えをガメるんだろ。死体のポケットまで探るんだろうよ」  
「人体の限界ってのも驚くべきもんだな。食べ物と空気が同じ通路を共有してるってわけだ。したがってその分の危険も 」  
何も言わず、ラックマンはパリスに向かって中指を立ててみせた。

きしるブレーキ。クラクション。ボブ・アークターはサッと夜間交通に目をやった。スポーツ・カーだ。エンジンを切らずに、路肩につけ、女の子が乗って手をふっている。  
ドナだ。  
「まったく」このせりふは今日二度目だった。ボブは路肩に向かった。  
MGのドアを開けながら、ドナが言った。「ピビッた？ あんたんとこへ行こうとして、そしたら歩ってたのがあなただって気がついたもんで、Uターンして戻ってきたの。乗んなさいよ」  
黙って車に乗り、ドアを閉めた。

「なにブラついてんの？ 車は？ まだ直ってないの？」

「ちょっと狂ったのを一篇ほど。妄想トリップとかじゃなくて、ただ……」ボブ・アークターは肩をすくめた。

「あんたのブツあるわよ」

「えっ？」

「デス千錠」

「デス？」ボブは繰り返した。

「うん。上等のデス。車、出したほうがいいや」ドナはロー・ギヤにシフトして、発進すると道に出た。すぐにスピードを上げすぎた。ドナはいつもスピードを出しすぎて、車間距離も全然とらなかったけれど、運転はうまかった。

「あのくそバリスめ！ あいつの手口知ってる？ 死んでほしいヤツがいても、手は下さない。まわりでウロウロしてて、相手が死ぬような状況になるのを待つ。そして、死ぬのを横で見てるだけ。というか、手を下さずに相手が死ぬようお膳立てまでする。具体的にどうやるのかはわからないけど。とにかく、相手が勝手に死ぬように仕組むの」ここで彼は黙りこくって、考えこんだ。「たとえばさ、バリスなら、人の車のイグニッションにプラスチック爆弾を仕込むようなマネはしないわけ。あいつのやり口は」

「お金、ある？ ブツの払いの金。ホント一級品で、お金がスグ要るの。今夜中にももらわないと、ほかのブツの受け渡しもあるし」

「もちろん」金はちゃんと財布にあった。

運転しながらドナは言った。「バリスって嫌い。信用できないわ。ホラ、あの人、狂ってるじゃない。それであの人のおそばにいと、その人も狂っちゃうでしょ。それでそばを離れると、また正気にかえるわけ。今のあんたも狂ってるわ」

「おれが？」ボブはハッとした。

「うん」ドナは平然と言った。

「へえ。そりゃまた」何と書いていいかわからなかった。特に、ドナは決してまちがえなかったから。

「ねえ」ドナが熱をこめて言った。「ロック・コンサートにつれてってよ。来週、アナハイム球場であるんだけど。ねえったら」

「わかったわかった」ボブは機械的に答えた。その後で、ドナのせりふの意味がひらめいた。おれにデートしてくれて頼んでるんだ。「やあったあ！」うれしかった。気が戻ってきた。大好きな黒髪の女が、自分を再び希望の世界へ連れ戻してくれたのだ。「いつ？」

「日曜の午後。あのベタベタした黒いハッシシ持ってって、とことん吸いまくるわ。わかりゃしないって。ヤク中なんて山ほど来てるんだし」そこでドナは値踏みするようにこっちを眺めた。「でも、まともな格好してきてよ。ときどき着てるみたいなダサいのじゃなくて。だって」ここで声が和らいだ。「あなたイカしてるんだから、イカした格好してほしいの」

「OK」彼は夢中だった。

「あたしんちに行くわね」とドナはその小さな車を夜道に駆った。「それであなたはお金持ってるから、それをあたしにくれて、そしたら何錠かやってゴロゴロしてスッゴイいい気分になって、そうだな、あなたが八百ccのサザンカンフォートを買ってくるとかして、そしたら同時にぐでんぐでんになれるでしょ」

「すげーじゃん」彼は心から言った。

ドナはギヤを落として車を自分の通りにまわし、自宅の車寄せに入れた。「今晚本気で何したいかって言うとな、ドライブ・イン映画に行きたいの。新聞買って、何やってるか見たんだけど、いいのはトランス・ドライブ・インでしかやってなくて、それがもう始まっちゃってるの。五時半開映。クッソウ」

ボブは時計を見た。「じゃあもう」

「ううん。まだ大部分は観られるはず」車を止めてエンジンを切りながら、ドナは暖かく微笑んでみせた。「『猿の惑星』シリーズ全十一本連続上映なの。夜の七時半から明日の朝八時までブツ通し。ドライブ・インから直接仕事に出るから、今のうちに着替えとかないと。映画観てヤクでうっとりして、一晩中サザンカンフォート飲むの。ねえ、すごいじゃない？」ドナは期待をこめてこっちを見た。

「一晩中」彼は繰り返した。

「そうそうそう」ドナは跳ね降りて、車をグルッとまわり、こっちの小さなドアを開けるのを伝えてくれた。「ねえ、最後に『猿の惑星』シリーズ全部観たのっていつ？ あたし、今年の初め頃にほとんど観たんだけど、終わりの方で気分悪くなって帰っちゃったの。ドライブ・インの自動販売機のハムサンドのせいよ。ホント頭にきたわ。最後のヤツも見逃しちゃったの。ほら、あのリンカーンとかネロとか、歴史上の有名な人が実はみんな猿で、初めっから人間の歴史を操ってたのが明かされるやつ。それで今こんなに行きたいわけ」玄關に向かいながら、ドナは声を落とした。「あんなハムサンド売りつけて、あたしをポッタわけじゃない？ それであたしがどうしたかって言うと 密告らないでよ

次にそのドライブ・インに行ったとき、ラ・ハブラにあるやつなんだけど、その自動販売機のコイン・スロットに、曲げたコインをつっこんでやったの。それとついでにもう二、三台にも。ラリー・タリングと二人で ラリーって覚えてるでしょ？ 昔あたしがつきあってた男 万力とでかいレンチ使って、二十五セント玉だの五十セント玉だのを山ほど曲げてったのよ。もちろん、やった自販機が全部同じ会社の持ち物なのは確かめたわ。それでそいつらを山ほど、たぶんほとんど全部ブツ壊してやったわよ」ドナは、暗い明かりの下で、ゆっくりと重々しく玄關の鍵をあけた。

「きみをボるの考えもんだよな、ドナ」彼女の小さくこぎれいな家に入りながら、ボブは言った。

「カーペット、踏まないで」とドナ。

「じゃあどこ踏んでいいの？」

「じっとしてるか、新聞の上」

「ドナ」

「新聞の上を歩くぐらいでガタガタ言わないでよ。カーペットのクリーニングにいくらかかるか知ってるの？」ドナは立ってジャケットのボタンをはずしていた。

「ケチ」自分のコートを脱ぎながらボブは言った。「フランス百姓式のケチ。いっさい物を捨てないちだらう。短すぎてどうしようもないような糸の切れっ端だって、捨てずに」

革ジャンを脱ぎながら、ドナは長い黒髪をサラリと後ろに払いのけた。「いつかあたしも結婚するわ。そのときに、しまっといた物が全部要り用になるのよ。結婚したら、何でもかんでも要るようになるんだから。たとえば、隣んちの庭にでっかい鏡があって、柵を越えるのに三人がかりで一時間以上かかったんだけど。いつか」

「そのしまつてある物のうちで、買ったのはどのくらい？ 盗んだのはどのくらい？」

「買った？」ドナはわけがわからない様子で、こっちの顔を観察した。「買ったって、どういう意味？」

「だからたとえばヤクを買うときみたいにさ。ヤクの取引だよ。今みたく」とボブは財布を取り出した。「おれが金をわたす。だろ？」

ドナはうなずいた。こちらをおとなしく見つめ（実は礼儀上そうしていただけたのだが）ているが、威厳は保っている。そしてちょっと値踏みするような感じ。

「そしたら引き換えに、きみはヤクをいっぱいくれる」とボブは札を差し出した。「おれの言う『買う』ってのは、おれたちがたつた今やってる、ヤクの取引引きみたいなのを、もっとでかい、人間の商取引の世界に拡大したものだ」

「わかつたよな気がする」ドナの黒い目は穏やかだつたが機敏な感じだつた。何でも学んでやろうという目だ。

「どんだけ たとえばいつだつたか、コカコーラのトラックのケツにつけてコーラを盗んだとき どんくらい盗んだ？ 何本？ 何ケース？」

「一月分くらい。あたしの友だちの分」

ボブはとがめるような目つきをした。

「物々交換みたいなもんよ」とドナ。

「きみは何を 」ボブは笑いだした。「きみは向こうに何を与えるわけ？」

「精いっぱいのをね」

ボブはゲラゲラ笑い始めた。「誰に？ トラックの運転手に？ その運転手、たぶんあとで散々しぼられて 」

「コカコーラの会社って資本主義の独占企業なのよ。コカコーラを作れるのはあいつらだけでしょ、電話したけりゃ電話会社のでしか電話できないみたいに。みんな資本主義の独占企業なのよ。ねえ、知ってる？」 と女の黒い目が輝いた 「コカコーラの製造法って、時代を超えて慎重に守られながら伝承されてきた、秘伝なのよ。知ってる人は数人しかなくて、それもみんな同じ一族なの。だから、製造法を覚えてる最後の一人が死んだら、コカコーラはなくなっちゃうかもね。だから、バックアップ用に、どっかの金庫に、製造法が書いてしまつてあるはずだな」ドナは物思いにふけりながらつけくわえた。「どこかな」と目を輝かせながら、思いをはせた。

「きみだの、きみのかつぱぎ仲間だのなんか、百万年かかつたつてコカコーラの製造法なんて見つけられやしないつて」

「だれもコカコーラなんか製造したかねーよ、トラックからいくらでもカップラえるつてのに。それにトラックはいっぱいあるし。いつだつて走つてるじゃん、ノロノロ。チャンスがあれば、いつだつてケツにつけて、あおつてやる。向こうはカンカンになるけど」ドナは、こつそりと、抜け目ない、美しく可愛らしい、おちゃめな微笑をこつちに向けた。まるで彼女の奇妙な現実に、こつちをだまして連れこもうとしているみたいだ。ここではドナが、のろいトラックのケツに張りついてはあおりまくり、とんとん腹をたてて、いらいらして向こうが路肩に寄せて止めると、ほかのドライバーみたいに横をかつとんで行くのではなく、自分も路肩に寄せて、トラックの積み荷をありつたけ盗む。それはドナが泥棒だからとか、あるいは仕返しのためですらなくて、ただ向こうがようやく止まる頃までに、ドナはコーラのケースをあんまりながいこと眺めていたので、それだけ全部をどう処分すればいいのかが、頭のなかで固まつてしまつたからなのだ。いらいらが、工夫に変

わったというわけ。そこで車を MGじゃなくて、その頃ドナが乗っていた（がその後オシャカにした）もっと大きなカマロ 何ケースものコーラでいっぱいにして、それからの一月というもの、ドナとそのイカレた友だちは、無料のコカコーラを好きなだけ飲み散らし、そしてその後

あきびんをあちこちの店に返して、びんの保証金をせしめたのだ。

「キャップはどうしたの？」ときいてみたことがあった。「モスリンに包んで、桐のたんすにでもしまっただけなの？」

「捨てた」ドナはむっつりして言った。「コーラのキャップなんて、どうしようもないもん。もうコンテストとかそういうのもないし」

さて、ドナは別の部屋に消えて、すぐにポリ袋をいくつか持って戻ってきた。「数える？ 確実に千あるからね。お金を払う前に、はかりでちゃんと計ったもん」

「いいよ」アークターは袋を受け取り、ドナは金を受け取り、アークターは思った。ドナ、これでまたおれは、きみをムショ送りにできる。でも、たぶんきみが何をしようと、このおれをどんな目にあわせようと、おれはきみをムショに送ったりはしない。きみには何かすばらしい、生に満ちた優しいものがあって、おれにはそれを破壊できないからだ。わけがわからないけれど、そういうことだ。

「十くれない？」とドナ。

「十？ 十返せって？ いいよ」袋を一つあけて ほどくのはむずかしかったけれど、慣れていて 正確に十錠数えて渡した。それから自分の分を十。そして袋の口をしばりなおした。それから袋を全部、たんすのコートに運んで隠した。

「いま、カセット屋ってどうしてるか知ってる？」戻ってみると、ドナは元気いっぱいだった。十錠はどこにも見あたらなかった。もう隠してしまったのだ。「テープについて？」

「逮捕するんだろ、盗むと」

「そんなの昔っからよ。今はね、どうしてるかって言うと ほら、LPとかテープをカウンターに持ってくと、シールの値札をはずすじゃない。するとお。するとよ。あたし、捕まる寸前までいってつきとめたんだ」ドナは椅子にどさっとすわり、期待に顔をほころばせ、アルミホイルに包んだ小さな立方体を取り出した。包みを開ける前から、それがハッシシなのは見ただけでわかった。「あれってただの値札シールじゃないの。中に何か合金のかけらが入ってて、カウンターの係員がそれをはがさないままでドアを出ようとすると、警報が鳴るわけ」

「その『捕まる寸前』ってのは？」

「あたしの前のガキ女が、コートの下に一個隠して出ようとしたら、警報がなって、捕まって、サツに引き渡されたの」

「きみはいくつ隠してたの？」

「三つ」

「そのとき車にヤクを積んでなかった？ だってもしテープの万引きで捕まったら、車も没収されるんだぜ。そうしないと、このあたりじゃ顔が知られてて警戒されるからってんで、ダウンタウンに出かけて盗みをしたりするだろ。だから車はごく当たり前のこととしてレッカー移動されて、ヤクが見つかって、そしたらそれも罪状に加えられるよ。そのテープ屋だって、どうせこのあたりじゃなかったんだろ。どうせそれをやったのも、どこか 」どこか取りなしてくれるような法執行機関の知り合いがいなくて、とつい



かけた。でも、それは言えなかった。知り合いというのは自分のことだからだ。もしドナが逮捕されれば、少なくとも自分の顔がきくところなら、死んでも助けてやろうとするだろう。でも、たとえばLA郡で捕まったら、どうすることもできない。そしてそうなれば、そうなるのも時間の問題だろうが、もうどうしようもない。助けるどころか、耳にすら入るまい。すると、頭の中であるシナリオが上映され始めた。ホラー妄想だ。ドナが、ラックマンと同じように誰にも聞かれず、気にもかけられず、何もしてもらえずに死んでゆく。連中は聞きつけるかもしれないけれど、パリスみたいに、彼女が完全に終わってしまうまで、平然と手をこまねいているだろう。ドナの場合、ラックマンみたいに文字どおり死んでしまうわけじゃない。え？ ラックマンだって、まだ死んじやいない。つまり、言いたかったのは、死にかけたってこと。でも、ドナは物質Dに中毒してるから、ただ牢屋に入っただけじゃなくて、ヤクをやめなきゃならない。こいつはキツイ。それにドナは使っただけじゃなくて売人でもあったから、それに最初の窃盗罪のお勤めもあるし、かなり長いことくらいこむことになる。すると、他の諸々のこと、悲惨な出来事がドナにふりかかる。だから出所してきたら、もう以前のドナじゃなくなってるだろう。あの大好きな、柔和で用心深い表情、あの暖かさ、それがすっかり変わって、何になるかは神のみぞ知る。とにかく、何か空っぽで消耗しきったものになっているだろう。ただのモノになってしまったドナ。いずれはみんな、ただのモノになってしまうけれど、ドナの場合、それが起きるのは遙か遠く、おれが死んだずっと後であってほしい。それと、おれが助けられないような場所であってほしくはない。

「スプーキーなしのスパンキーか」ボブは悲しそうに言った。

「何、それ？」一瞬して、彼女も理解した。「ああ、あの交流分析治療か。でも、ハッシシやると……」ドナは専用の小さな丸いセラミック製のハッシシ・パイプを取り出した。カシパンみたいで、ドナの手製で、いま、それに火をつけていた。「そうずっとあたし、スリーピー」うれしそうに目を輝かせてこっちを見上げ、ドナは笑って、貴重なハッシシ・パイプを差し出し、宣言した。「口移ししたげる。すわって」

すわると、ドナは立ち上がり、ハッシシ・パイプを派手にふかして、よたよた歩いてきて身をかがめ、こっちが口を開けると、まるでひな鳥みたいだ。ドナにこうしてもらったときにはいつもそう思う。ドナは大量の力強い灰色のハッシシの煙流を中に吹きこみ、自らの熱く大胆で手に負えないエネルギーで彼を満たした。それはまた、彼ら二人、口移しするドナと、されるボブ・アークターを共にゆったりさせ、メロウにしてくれる、鎮静物質でもあった。

「ドナ、愛してる」この口移し、これこそボブが得る、ドナとの性関係の代用品だった。性関係よりもっといいものかもしれない。それだけの値打ちはあった。すごく親密で、しかも性関係として見るとすごく奇妙なものだった。つまり、まずドナが何かを彼の中に入れて、それから、彼女が望めば、こっちが何かを彼女の中に入れてやれる。平等な、交互のやりとり、それがハッシシの尽きるまで続く。

「へえ、すごいじゃーん、あんたがあたしを愛してるなんて」ドナはクスクス笑い、こっちの横にすわり、ニヤニヤして、自分用にハッシシ・パイプから一服しようとしていた。



## 第9章

「ねえ、ドナ、おい。猫って好き？」

ドナは赤い目をパチパチした。「小便たれよね。地上三十センチぐらいをフワフワして」

「フワフワってのはちがうよ、足は地につけてる」

「小便たれよ。家具の後ろとか」

「じゃあ、かわいい春の花は？」

「うん。それいい　かわいい春の花ね。黄色のやつも入れて。最初に咲いたヤツ」

「誰よりも先に取ってくる」

「うん」とドナはうなずき、目を閉じて自分のトリップに浸った。「誰かに踏んずけられる前にね。踏まれると　消えちゃうから」

「おれを知ってるだろ。おれの考え、読めるだろ」

ドナはからだを倒し、ハッシシ・パイプを置いた。火が消えていた。「もうダメ」と言い、その微笑もゆっくりと薄れていった。

「どうかした？」

「別に」ドナはかぶりを振ったきりだった。

「腕をまわしていい？　抱きしめたいんだ。いい？　ぎゅっと、みたいに。いい？」

ドナの黒い、瞳孔の開いた、焦点のあわない疲れたような目が開いた。「ダメ。ダメよ。あんた醜くすぎるもん」

「何だって？」

「ダメだったら！　あたし、コカインをたくさんやってるから。すごく気をつけてないと、コカインやってるし」

「醜くい、だと？」ポブは荒っぽく怒鳴り返した。「この腐れ女が」

「いいからあたしのからだに触らないで」とドナはこっちを見つめた。

「そうかよ。そうかよ」ポブは立ち上がって後ずさった。「誰が触ってやるもんか」自分の車に戻って、グローブ・ボックスからピストルを取ってきて、この女の顔をふっとばしてやりたい気分だ。頭蓋骨をプチぬいて、目玉を粉々にしてやりたい。やがてそれがおさまった。あの、ハッシシ特有の憎悪と怒りは、「クソッ」惨めだった。

「ひとにからだをいじくられんのって、好きくないのよね。あたしコカインいっぱいやってるから、ホント気をつけてないと。いつか、アソコにコカインニキ口入れて、カナダ国境を越えるつもりなの。カソリックで処女だって言うわ。どこいくの？」今ではドナも慌てていた。そして立ち上がりかけた。

「帰る」

「車ないじゃない。あたしが乗せてきたげたんでしょ」女はヨロヨロ立ち上がった。混乱していてわけもわからず、しかも半分寝たままだ。たんすのほうにフラフラと向かって

革ジャンを出した。「送ったげるから。でも、あたしがアソコを守らなきゃならないってのもわかるでしょ。コカイン二キロってたら」

「冗談じゃねえや。そんなどっぷりヤクに浸りこんでたら、三メートルと運転できるもんか。それにおまえ、ほかの誰にもあのポンコツを運転させないし」

こっちに向き直って、ドナは激しく叫んだ。「そうよ！あたしの車を運転できるやつなんて、ほかに誰もいねえんだよ！みんな半端な扱いしやがって、特に男！運転でも何でもそう！あんただって、手をあたしの股につっこみかけ」

気がつく、ポブはどこか外の暗闇の中で、コートもなしにふらついていて。街の見慣れないあたり。ひとりぼっち。クソひとりぼっちだ、と思ったとき、ドナが後ろから走って、追いついてきた。息を切らせているのは、彼女が最近マリファナやハッシシばかり吸っているために、肺がヤニで半ばふさがってしまっているためだ。ポブは立ち止まったが、ふりむかなかった。待ちながら、気分は最悪だった。

近づきながら、ドナは歩調をゆるめ、ぜいぜい息をついた。「ごめん。ホントごめん、傷つけちゃって。あんなこと言ったりして。どうかしてた」

「だろうよ。醜くすぎる、だと！」

「一日中働き詰めで、超超疲れてるときとか、最初の一発がガーンと効いちゃうの。ねえ、戻らない？どうすんの？ドライブ・イン行きたい？サザン・カンフォートの件は？あたしじゃ買えないの……売ってくれないから」とドナは口ごもった。「あたし、未成年だから。でしょ？」

「OK」とポブ。二人は引き返した。

「あれ、ホントいいハッシシでしょ、ね？」とドナ。

ポブ・アークターは言った。「あのハッシシは黒くてベタベタしてる。つまり、阿片アルカロイドをしみこませてあるんだ。きみの吸ってんのは阿片だよ、ハッシシじゃないわかってんの？だからあんなに高いんだよ、わかってんの？」自分が声高になるのが聞こえた。足をとめた。「きみはハッシシ吸ってんじゃないんだぜ、お嬢ちゃん。阿片を吸ってんの。ってことは、中毒が一生続いてその代償に……その『ハッシシ』と称する代物って、キロいくら？それできみは、吸ってはうつらうつらばっかしてて、車のギヤも入れられず、トラックのおかま掘ったり、毎日仕事に出かける前に吸わずにいられなくなって」

「今でもそうよ。仕事に行く前に一服。それと昼と、家に帰ってすぐのとき。だから売人やってんのは、ハッシシ買うから。ハッシシって最高。もうハッシシで決まりよね」

「阿片だよ。その『ハッシシ』とやらって、今いくら？」

「キロ七千ドルくらい。いいヤツだと」

「ゲゲッ！ヘロイン並じゃん！」

「あたし、針はやんない。やったことないし、これからだって。針でやると、何やってもからだ半年しかもたないもん。もう水道の水を射ってもそうね。中毒になって」

「きみだって中毒になってる」

ドナは言った。「みんなそうでしょ。あなたは物質Dをのむ。別にいいじゃん。いまさらどうでもいいじゃん。あたし、しあわせ。あなただって、しあわせでしょ？毎晩帰ってきて、上等のハッシシが吸える……これ、あたしのトリップ。あたしを変えようなんて思わないで。ぜったいあたしを変えようなんてしないで。あたしも、あたしの生き方も。あたしはあたしよ。ハッシシでいい気分。これがあたしの生活」

「歳とった阿片中毒の写真って見たことない？ 昔の支那のやつとか？ それとか今のインドのハッシシ吸いが、歳とってどんな姿になってるかとか？」

「長生きするつもりはないわ。なによ。長生きなんかしたくないもん。あんた、したいの？ なんで？ この世に何があるっての？ それに見たことある チッ、ジェリー・フェイピンはどうよ。物質Dにハマりすぎてさ。ホント、この世に何があるのか教えてよ、ボブ。この世なんて、ただの来世の前の停留所よ。あたしたちが罪を背負って生まれたんで、罰を与えようって所よ」

「モロ、カソリックだなあ」

「この世では罰を受けてるんだから、たまにトリップしてここから抜け出せるんなら、ケッ、やりゃあいいじゃん。こないだなんか、MGに乗って仕事に行く途中でほとんど死にかけてたわよ。8トラックのステレオかけてて、ハッシシ・パイプ吸ってたもんで、八十四年型フォード・インペレータに乗ったヤツが来てんのに気がつかなくて」

「ばか。大ばか野郎」

「そうよ。あたし、早死にするわ。どうしたってそうよ。何をするにしても。たぶん高速道路で死ぬ。MGのブレーキも、ライニングがほとんど残ってないし。気がついてた？

それに今年になって、スピード違反キップを四枚ももらっちゃって。だから交通安全講習に出なきゃならなくて。うんざり。丸六カ月もあんの」

「するといつの日か、何の前触れもなく、きみの姿を二度と目にすることができなくなるわけか。だろ？ 二度と絶対に」

「交通安全講習のせい？ ううん、六カ月が終われば」

「墓石の下だ。カリフォルニア州の法律、州のクソ法律下で正式にビールやウィスキーが買えるようになる以前に」

「そうだ！」ドナはハッとして叫んだ。「サザンカンフォート！ それぞれ！ サザンカンフォート八百cc買って、猿の惑星観ながら飲むんじゃないの？ ねえったら！ まだ八本残ってる、それも一本は」

「話を聞けよ」ボブ・アークターはドナの両肩をつかんだ。女は本能的に身を引いた。

「いや」

「一度でいいからきみに何をさせてあげればいいのか、わかる？ たった一度だけでも？ 一度でいいから、合法的に酒屋に入れて、缶ビールを一本買わせてあげるべきなんだ」

「なんで？」ドナは不思議そうに言った。

「きみがいい娘だから、プレゼントとして」

「それ、一度あった！」ドナはうれしそうに叫んだ。「バーで！ カクテル系のウェイトレスが あたし、ちゃんとした服を着てたし、まともな人たちとっしょだったから 何にするかってきいてくれて、あたし『ウォッカ・コリンズにするわ』って。そしたら出してくれたの。それもラ・パスだよ。すごいイカしたとこで。わあっ、信じられる？ ウォッカ・コリンズってのは、広告でみたのを覚えてあったの。バーでそんなふうにかかれたときに、カッコいいようにと思って。ね？」ドナは突然ボブと腕を組み、歩きながらこっちの腕にしがみついた。いままでほとんどやったことのない真似だった。「あれがあたしの一生で、オールタイム・ベストのトリップ」

「それじゃあきみは、ちゃんとプレゼントをもらったわけだ。一度だけのプレゼントを」

「もう最っ高！ 最っ高よ！ みんなは あたしがっしょにいた人たちね 後から、テキーラ・サンライズとかのメキシカン・ドリンクを注文したほうがよかったって教

えてくれたわ。だって、ホラ、そこってメキシコ風のバーだったから。ラ・パスのレストランといっしょになっててさ。こんどはそれも覚えとく。メモリー・バンクのテープに記録してあるから、次に行ったときには思い出せる。ねえボブ、あたしね、いつかね、北の方に引っ越して、オレゴンに行って、雪の中で暮らすんだ。毎朝、玄関の前の雪かきして。小さな家と、庭に野菜畑を持つんだ」

「それじゃ貯金しないとね。金は全部貯金しないと。高いよ」

ドナは、急に恥ずかしそうにこっちを見た。「あの人を買ってもらうの。ほら、名前なんだっけ」

「誰？」

「ほら、わかるでしょ」秘密を打ち明けるその声は、やわらかかった。このボブ・アークターが友だちで、信用できるから明かしてくれているのだ。「いつか現れるはずの、あたしの理想の人よ。どんな人かも見当つくな アストン・マーチンに乗ってる人で、それに乗せて北に連れてってくれるんだ。それでそこに、あたしの小さな古い家が、雪に包まれてんの。ここの北のどこかで」間をおいて、彼女は言った。「雪って素敵なんですよ？」

「知らないの？」

「雪のあるとこなんて、行ったことないもん。前に一度、サン・ベルドーの山は行ったけど、そんな時は融けかかって泥んこで、もうころんじゃったわよ。そんな雪じゃなくて、ホンモノの雪のこと」

いささか重い心を抱えながら、ボブ・アークターは言った。「それ、全部本気？ ホントにそうなるって思うの？」

「絶対そうなるって！ あたしの宿命だもの」

それから二人は黙って歩き続けた。ドナの家に戻って、MGを出すのだ。ドナは自分の夢や計画にくるまって、ボブは ボブはパリスを想い、ラックマンとハンクと安全なアパート想い、そしてフレッドを想った。

「ねえねえ、おれもきみといっしょにオレゴンに行っていいい？ 出発いつ？」

ドナはボブに微笑みかけた。穏やかに、痛いほどの優しさをこめて、ノーと告げた。

これまでのつきあいから、それが本気なのはわかった。しかも気を変えることはあるまい。ボブは身震いした。

「寒い？」ドナはたずねた。

「うん。すごく寒い」

「MGに、ちゃんとヒーター入れといたから。ドライブ・インで使おうと思って……そこであったまるといいよ」ドナはボブの手を取り、ぎゅっと握りしめて、それからいきなり、それを放した。

でも、ドナの手の感触は、ボブの心の中にとどまり続けた。それだけが残った。この先一生、ドナなしで過ごす長い年月、彼女に会うこともなく、手紙をもらうこともなく、生きているのか幸せなのか、死んだのかどうかさえわからない長い年月の間、この感触は彼の中に封じこめられ、封印されて、絶対に消え去らなかつた。ドナのたった一度の手の感触だけが。

その晩、ボブはコニーというかわいい注射専門の女を連れて帰った。メックス十発分入りの袋と交換に、セックスするためだ。

つやのない髪をしたやせた娘は、こっちのベッドにすわって乱れた髪にブラシをかけて

いた。この娘がついてきたのは初めてで 会ったのは、ヤク・パーティーでだった  
電話番号は何週間も前に聞いてあったけれど、ほとんど知らないに等しい娘だった。注射  
専門だから、もちろん不感症だったけれど、だからってセックスを嫌がるわけでもなかつた。  
自分自身が快楽を得るという意味でのセックスには無関心になっていたが、一方では、  
どんなセックスの相手をしても気にしなかった。

見るだけでそれはわかった。服を脱ぎかけで、靴をぬぎ、口にヘアピンをくわえ、ぼん  
やり視線をさまよわせ、頭の中で一人妄想にふけているようだ。顔は長く骨っぽくて、  
力強かった。たぶん骨が浮いているせいだろう。特にあごの線。右頬にはにきびがあつた。  
それについても気にしていないし、気づいてさえいないにちがいない。セックスと同じく、  
にきびも彼女にとっては大したことじゃないのだ。

ちがいがわからないのかも。この娘みたいに注射専門でながいこと続けてると、セック  
スもにきびも似たような、ひょっとしてまったく同じ類いのしろものになるのかもしれない。  
ヤク中の頭をのぞいてみると、すげえ考えが出てくるもんだ。

「あたしが使っていい歯ブラシない？」とコニー。そしてちょっとうなずいて、ブツブ  
ツ言い始めた。夜のこの時間になると、ヤク中はそうすることが多い。「ま、いっか  
たかが歯だもん。朝になってから磨けば……」声がどんどん沈んで、彼女が何と言っている  
のか聞き取れなかった。くちびるの動きから見て、ブツブツ言い続けているのは確かな  
のだが。

「洗面所、どこだか知ってる？」とボブはきいた。

「洗面所って？」

「この家のヤツ」

我にかえて、コニーはまたぼんやりとブラッシングをはじめた。「こんな遅くまでウ  
ロウロしてるの、あれ誰？ マリファナ巻いたりしてガタガタしてさ。ここでいっしょに  
暮らしてんの？ そりゃそうよね。あれならまちがいないわ」

「あの中の二人はそう」とアークター。

女の死んだ鱈みたいな目が、こっちに焦点をあわせた。「あんたおかま？」

「そうならないように努力してる。だからきみを連れてきたワケ」

「まだまだおかまの誘惑に負けずにいられそう？」

「夢疑うなかれ、だぜ」

コニーはうなずいた。「うん。どうせすぐにわかることよね。ホモッ気があるんなら、  
あたしにリードしてほしいでしょ。横になって。あたしがしたげるから。脱がせてほし  
い？ OK、あんたは寝てるだけでいいわ、あたしが全部やったげる」と女はチャックに  
手をのばした。

しばらくして、薄暗がりの中、ボブは いわば おのれの一発からぼんやり目を覚  
ました。脇ではコニーがいびきをかいて眠り続け、仰向けでシーツだけ掛け布団の上に出  
している。その姿はぼんやりとしか見えなかった。こいつら、ドラキュラ伯爵みたいに眠  
るからな、ヤク中って連中は。じっと仰向けで寝ていて、それがまるで、位置Aから位置  
Bに切り替えられた機械みたいに、突然パッと起きあがる。「も・う・あ・さ・かぁ」と  
ヤク中は言う、少なくともそいつの頭の中のテープがそう言う。そうやって、そのテー  
プがそいつに指示を出しているのだ。目覚まし用のタイマーつきラジオの音楽みたいなも  
んだ……きれいな曲かもしれないけど、でもこちらに何かをやらせるためのものでしかな

い。タイマーつきラジオの音楽は人を起こすためだし、ヤク中の出す音楽は、そいつがもっとヤクを手に入れられるように、どんな方法でもいいからこっちに協力させるためのものだ。機械であるそいつが、こっちをも自分のための機械に変えてしまうのだ。

ヤク中なんて、みんな録音なんだ。

こんな悪いことを考えながら、ボブはまたうつらうつらした。やがてそのヤク中は、そいつが女なら、自分のからだ以外売るものがなくなる。コニーみたいに。まさにこのコニーみたいに。

目を開けて、横の女のほうを向くと、それはドナ・ホーソンだった。

ガバッと身を起こした。ドナ！ 女の顔がはっきりと見分けられた。まちがいない。なんてことだ！ とボブはベッドサイドの明かりに手をのばした。指が触れたが、ランプは倒れて転げ落ちた。でも、女は眠り続けた。見つめていると、やがてだんだんと、その姿はコニーになっていった。細面の、アゴのきつい、頬の落ちくぼんだ、やつれたヤク切れジャンキーの顔。コニーで、ドナじゃない。こっちの女で、あっちの女じゃない。

惨めな思いで、また横になり、今の出来事の意味だのなんだのをいろいろと考えているうちに、意識が薄れ、しばらく眠った。

「クサクたっていいもん。まだあいつを愛してたんだから」横で眠る女が、あとで寝言をつぶやいた。

誰のことだろう。ボーイフレンド？ 父親？ 雄猫？ 子供の頃に大事にしていたぬいぐるみ？ あるいはそのすべてか。でも、この女は「愛していた」と言った。「いまでもまだ愛してる」とは言わなかった。どうやらその「あいつ」というのは、何であれ誰であれ、いまはもういないのだ。連中（連中ってのが誰だかはわからないけど）が、この女に「そいつ」を放り出させたのかもしれない。そいつがあまりにクサイと言って。アークターはふとそう思った。

たぶんそうなんだろう。その時、この娘はいくつだったのかな。おれの横で、まどろみながら回想にふける、このポロポロのジャンキー娘は。



## 第 10 章

スクランブル・スーツを着て、フレッドはホロ再生装置の群れの前にすわり、ジム・パリスがボブ・アークターの居間でキノコについての本を読んでいるのを見ていた。なぜキノコなんだ？ とフレッドは不思議に思い、テープを早送りして一時間後にあわせた。パリスはまだすわっていて、本に没頭し、メモを取っている。

やがてパリスは本を置き、家を出てスキャナーの有効範囲を出た。戻ったときには茶色い紙袋を持っていて、それをコーヒーテーブルの上に置いて開けた。そこから乾燥したキノコを取り出し、それを一つ一つ、本のカラー写真と比べ始めた。パリスにしてはまれに見る、非常な注意をはらって、一つ残らず比べた。最後に、みずばらしいキノコを一つだけ横にどけ、残りを紙袋に戻した。ポケットから空のカプセルを一つかみ取り出して、それから正確な手つきで、そのキノコを砕き、カプセルに入れてふたをした。

それがすむと、パリスは電話をかけはじめた。電話盗聴機が、かけた先の電話番号を自動的に記録した。

「もしもし、ジムだけど」

「で？」

「おい、すごいキメた」

「冗談」

「シロサイピ・メキシカーナ」

「なにそれ」

「珍しい幻覚性のキノコ。数千年前の南米の秘教でも使われてた。空が飛べたり、透明人間になったり、動物のことがわかったり」

「いらない」ガチャン。

またかける。「もしもし、ジムだけど」

「ジムって？ どのジム？」

「ヒゲはやしてて……緑のサングラス、レザーパンツ。ワンダんとこのハブニングで会った」

「ああ、そうか、ジムね。うん」

「有機性幻覚剤をキメる気は？」

「うーん、そうねえ……」不安。「あんた、ホントにジム？ なんか声がちがうけど」

「信じがたいもんが手に入ったの。珍しい南米の有機性キノコで、数千年前のインドの秘教でも使われてた。空が飛べたり、透明人間になったり、車が消えたり、動物のことがわかるようになったり」

「車なんてしょっちゅう消えるよ。レッカー車移動の駐車禁止ゾーンにとめたときなんか。ハッハッハ」

「このシロサイビ、六カプセルほど都合できるかも」

「いくら？」

「一つ五ドル」

「そいつはすごい！ マジ？ おい、どっかで会おう」それから疑惑。「ねえ、確かおまえ お前、一度おれをカモらなかつたっけ。そのキノコって、どこで手に入れた？ 薄めたLSDじゃないって保証は？」

「土偶につめてアメリカ国内に持ちこんだの。美術館宛の芸術品の一つとして厳重な警備をつけて、この土偶だけ印をつけといた。税関のイヌども、全然気づきゃしない」そしてパリスはつけ加えた。「もしトリップできなきゃ金は返す」

「うーん、そんな約束は意味ないよ。そいつで脳がやられて、猿になって木の枝をとびまわるようになったりするかもしれないし」

「二日前に自分で試してみたよ。もう最っ高のトリップ 極彩色。メスカリンよりは絶対がいいね。客にガセをつかませるのは嫌いだから、ブツはいつも自分で試す。保証付き」

フレッドの背後から、別のスクランブル・スーツもホロ・モニターを覗いていた。「何をさばいてんの？ メスカリンとか言ってたけど？」

「キノコをカプセルにつめたヤツ。こいつだか、他のやつだか、そこらへんで採ってきたキノコ」

「ものすごく毒性の強い毒キノコもあるのに」とフレッドの背後のスクランブル・スーツは言った。

第三のスクランブル・スーツが、自分のホロ・スキャナーの検分をしばらくやめて、こちらに加わって立った。「テングダケ科のキノコには、赤血球破壊成分の毒素が四種類含まれてる。死ぬまで二週間。治療薬はない。途方もなく苦しいんだって。野生のキノコをちゃんと見分けられるのは、専門家だけだよ」

「知ってる」とフレッドは、当局の便宜のため、テープのその部分のテープ位置番号を書きとめた。

パリスはまたダイヤルをまわしていた。

「この件での違法事項は何になるんだろう」とフレッド。

「不当広告表示」と他のスクランブル・スーツの一人が言い、二人とも笑って、自分のスクリーンに戻った。フレッドは自分のを覗続けた。

4号ホロ・モニターで家の玄関が開き、しょんぼりしたボブ・アークターが入ってきた。「よう」

「いよう」パリスはカプセルをかき集め、ポケットの奥深くにつっこんだ。「ドナとはしっぽり？」とクスクス笑う。「後ろから前からってな具合だろ、え？」

「お前、いい加減にしろよ」とアークターは4号モニターから消え、一瞬後、ベッドルームで5号モニターに捕らえられた。そのドアを蹴飛ばして閉めると、アークターは白い錠剤の入ったビニール袋を多数取り出した。一瞬どうしようかと迷っていたが、それをベッドのカバーの下に押しこんで隠した。そしてコートを脱いだ。ぐったりして悲しそう。顔もやつれている。

ボブ・アークターは、しばらく乱れたベッドの端に、たった一人ですわっていた。やがてようやく頭を振り、迷いつつ立ち上がる……それから髪をなでつけて部屋を出た。そしてパリスに近づくのを、居間の中央スキャナーが捕らえる。その間に、一方の2号モニ

ターでは、パリスがキノコ入りの茶色い袋をソファのクッションの下に隠し、キノコの解説書をもとの目だたない場所に戻すのが目撃されていた。

「何してた？」アークターがきいた。

パリスはきっぱりと言った。「研究」

「何の？」

「デリケートなある菌類の性質について」とパリスはクスクス笑った。「かわいいデカパイ嬢とは、あんまりうまいこといかなかったらしいね、え？」

アークターはパリスをにらんでから、台所にいってコーヒーポットのコンセントをさした。

パリスがのんきそうに後から来た。「ボブ、オレの言ったことで、何か気を悪くしたんならごめん」アークターがコーヒーの温まるのを待つ間、パリスは意味もなく指で拍子を取りながら、そこらをうろついていた。

「ラックマンは？」

「たぶんどっか外で公衆電話の金を盗もうとしてるんだろう。お前さんの水圧式ジャッキを持ってったから。それって、あいつが電話をブツ壊しに行くときだろ？」

「おれのジャッキを」アークターは繰り返した。

パリスが言った。「ねえ、オレならお前さんの努力を専門的にアシストしてやれるんだけどな、あのかわいいデカパイ嬢をコマそうって」

フレッドはテープを高速で早送りした。メーターはとうとう二時間後を示した。

「 たまった分の家賃を払うか、さもなきゃ脳スコープの修理にかかれよ」アークターが激しい口調でパリスに言っていた。

「抵抗はもう頼んであるから」

フレッドは再びテープを早送りした。もう二時間分が過ぎた。

今度は5号モニターが、寝室のアークターを写していた。ベッドに入っていて、目覚ましラジオがFMのKNXに合わせてあって、フォーク・ロックを小さな音で流している。居間の2号モニターは、パリスが一人でまたキノコについて読んでいるのを写していた。二人とも長いこと何もしなかった。一度、アークターが身じろぎして、ラジオのボリュームをあげた。好きな曲がかかったようだ。居間では、パリスが身動きもせずに読み続けた。アークターもついにベッドに横たわり、身動きしなかった。

電話が鳴った。パリスが手をのばして受話器を耳に当てた。「もしもし？」

電話盗聴機で、電話をかけてきた男の声が言った。「アークターさんですか？」

「はい、そうですが」とパリス。

こいつはおったまげた、とフレッドは胸の中で言った。手をのばして電話盗聴機のボリュームを上げる。

正体不明の相手は、ゆっくりした低い声で言った。「アークターさん、こんな遅くにお電話いたしまして申し訳ないんですがね、例のあなたの小切手が銀行で清算でき」

「ああ、そうでした。その件でお電話しようと思ってたところだったんですよ。こちらの事情を申し上げますとですね、内臓性流行感冒症のひどい発作がありまして、体温低下、幽門部けいれん、腹痛……とにかく今はもう自分のことでパニックになってまして、そんなセコい二十ドルの小切手を清算するだけの余裕がないんですよ。それにはっきり言って、そうじゃなくと清算する気はもともとないですし」

「何ですって？」男は慌てた様子はなかったが、しゃがれ声で言った。不吉な声で。

「ええ、その通り。まさに今申し上げた通りでして」

「アークターさん、あの小切手はもう二回も銀行から突っ返されてるんですよ。それにあなたのおっしゃってたインフルエンザの症状ですが」

「いやあ、どうも誰かに悪いもん喰わされたみたいでして」パリスの顔にはきつい微笑が浮かんでいた。

「それじゃ、あなたはまるで」男はことばを探した。

「何とでも言ってくださいよ」パリスはまだにやにやしていた。

男の荒い呼吸が電話越しにもわかった。「アークターさん、あたしやあの小切手を地方検事に持ってきますからね。それと、この際ですから言わせてもらえれば、あんたらみたいな」

「ターン・オン、チューン・アウト、グッド・バイ」と言って、パリスは電話を切った。

電話盗聴ユニットは、自動的に相手方の電話番号を記録していた。電話がつながるとすぐに発生する、耳には聞こえない信号によって、電子的に得られるのだ。メーターに出ているその番号を読んで、フレッドはホロ・スキャナーのテープの再生をすべて切り、自分の警察電話を取って、その番号の持ち主のプリントアウトを求めた。

「エングルゾーン錠前店、アナハイム、ハーバー三四三よ、色男さん」と警察の情報オペレータが告げた。

「錠前店ね。わかった」それをメモって電話を切った。錠前店……二十ドルだとかなりの金額だ。ということは、店外に呼んで仕事をさせたな　たぶん来てもらって、合い鍵をつくらせたんだろう。「持ち主」が鍵をなくしたってことで。

仮説。パリスはアークターのふりをして、エングルゾーン錠前店に電話して不法に「合いカギ」をつくらせた。家のカギか、車のキーか、あるいは両方。エングルゾーンには、キーホルダーごとなくした、とでも言ったんだろう……でも、錠前屋のほうは、念のために身分証明書がわりに小切手を切るようパリスに要求したんだろう。パリスは家に戻って、アークターの未使用小切手帳をガメて、そこから錠前屋に小切手を切ってやったんだろう。その小切手が、清算されなかった。でも、なぜだろう。アークターの預金残高はいつもたっぷりあったし、その程度の小切手なら問題なく引き落とせるはず。でも、もしそうなったら、あとで戻ってきた清算済み小切手を見て、それが自分のじゃなくてパリスのものだとわかってしまう。だからパリスはアークターのたんすを嗅ぎまわって、たぶんかなり昔に、すでに解約した口座用の古い小切手を見つけてきて、それを使ったんだろう。口座は閉じていたから、小切手も清算されない。今やパリスは窮地に立たされている。

でも、どうしてパリスは出向いて小切手を現金で買い戻さないんだろう。今のやりかただと、債権者のほうはすでにカンカンで電話までしてきて、いずれ小切手を地方検事に持ちこむだろう。するとアークターにバレる。パリスは首まで面倒に浸かることになる。でも、すでに怒り狂った債権者に対するパリスの口のききかたは……コスく挑発していっそう怒らせ、相手が何をするかわからない状態にまでした。もっと悪いことに　パリスの説明した「インフルエンザ」の症状は、ヘロインが切れかけたときの症状なのだ。少しでもものを知ってる人間ならすぐにわかる。それにパリスは、自分が重症のヤク中だと露骨に宣言して電話を切った。それがどうしたって？　それをみんな、ポブ・アークターの名義でやったのだ。

こうなると錠前屋のほうも、自分にヤク中の債務者がいて、不渡り小切手をよこしておきながら気にもせず、それを清算するつもりもないのを知ったわけだ。そしてそのヤク中

がそんな態度なのも、ヤクのせいでラリっててイカれてて正気じゃなくなってるせいだ、ということになる。これはアメリカに対する侮辱だ。それも意図的なものだし、たちが悪い。

事実、パリスの「ターン・オン、チューン・アウト、グッド・バイ」という切りぎわのせりふは、ティモシー・リアリーによるすべての体制やカタギに対するセコい最後通牒「ターン・オン、チューン・イン、ドロップ・アウト」をほぼそのまま引用したものだ。ここはオレンジ郡だというのに。そういう連中の大嫌いな、パーチ会員だのミニットメンだのがうようよしているところなのに。それも銃を持って。そいつらが、ヒゲ面のヤク中がこの手のタメ口たたくの、手ぐすね引いて待ちかまえてるところなのに。

パリスはボブ・アークターを陥れて、爆弾攻撃にさらそうとしている。最低でも不良債券による逮捕、最悪の場合は爆弾とかその他の大規模報復攻撃。アークターは、何が起きているのかを把握する暇もない。

なぜだ？ とフレッドは思った。メモ帳に、その部分のテープ位置番号を記録し、さらに電話盗聴の番号も記録。パリスはなんでアークターに仕返ししようとしてるんだ？ アークターがいったい何をたくらんだっていうんだ？ この様子だと、アークターはパリスをかなりひどい目にあわせたいらしい。こいつは純粋な悪意だ。セコく、下劣で、悪どい。

このパリスって野郎はクソつたれだ。こいつ、いずれ誰かを死に追いやる。

機密アパート内のスクランブル・スーツの一つが、こちらの考えごとを妨げた。「この連中を知ってるの？」スーツはフレッドの前の、すでに消えているホロ・モニターのほうを示した。「覆面捜査で連中に混じって暮らしてるわけ？」

「そっ」とフレッド。

「こいつがばらまいてるキノコの毒性について、どうにかして注意してやっても罰はあたんないと思うよ。ほら、あの緑のグラスのふざけた野郎がさばいてたじゃないの。覆面捜査がバレないように忠告できないもんかね」

近くにいたスクランブル・スーツのもう一人が、回転椅子から口を出した。「やつらの誰かがいずれものすごい吐き気を催したら　それがキノコ中毒の症状だったりするから」

「ストリキーネみたいに？」とフレッド。その脳裏に、冷たい閃きが取りついた。キンバリー・ホーキンスと犬のクソの日のことがよみがえる。自分の車のなかで気分が悪くなって

このおれが。

「アークターに言っとく。あいつになら言えるから。向こうに怪しまれることもない。扱いやすいやつだよ」

「でも醜男だな。アークターって、肩を落として入ってきて、すぐに潰れたやつだろ？」とスクランブル・スーツの片方。

「まあ」とフレッドは自分のホロ・モニターに向き直った。なんてこった、あの日、パリスは道ばたでおれたちにあの錠剤をくれたんだ　そう考えたとき意識がグルグル回り、さまよい出してからまっぴたつに割れた。気がつくと、その安全なアパートの洗面所において、水の入った紙コップを手に口をゆすぎながら、一人きりで考えごとをしていた。考えてみると、アークターってのはそもそもおれだ。スキャナーに映ってるのはこのおれで、錠前屋との不気味な電話でパリスがハメようとしてた容疑者もおれだ。それなのにおれは、「こんなに執念深くパリスに狙われるなんて、アークターは何をたくらんだんだ？」なんて考えていた。どうかしてる。おれの頭はどうかしてる。こんなのウソだ。とても信

じられん、自分自身を、フレッドを見ていながら あそこに映ってるのは、スクランブル・スーツなしのフレッドなのに。あれがスーツなしのフレッドの姿なのに！

そしてフレッドは先日、毒キノコのかげらでほとんど殺されかけたんだ。この機密アパートに来て、ホ口を再生するのもできなくなるところだった。でも、今回はこうして来られた。

今度はフレッドに分がある。ごくわずかだが。

いかれたどうしようもない仕事をあてがいやがって。でも、おれがやらなきゃほかの誰かがやる。そしてそいつらは誤解するかも知れない。おれを アークターを 罠にかけられるかも。ボーナス目当てに密告するかも。こっちにヤクを持たせて捕まえる。どうしてもあの家を見張るんなら、多少の問題はあっても、それは圧倒的におれの仕事だ。あの変態くそバリスからみんなを守るというだけでも、十分に正当化される。

それに、もし誰かほかの捜査官がバリスの行動を見張っていて、おれがたぶん見るようなものを見たら、たぶんアークターが西アメリカ最大の運び屋だと確信して やれやれ抹殺するよう進言するかもしれない。そして当局の秘密部隊にやられる。東部から借りてきた、黒ずくめの連中で、いつも忍び足で望遠照準つきウィンチェスター八〇三ライフルを持ってる。あの新式の、赤外線狙撃照準とシンクロした電子制御式銃弾を使うヤツ。あの連中、給料ももらわず、ドクター・ペッパーの自販機からの金ももらわない。自分たちのなかの誰が次期アメリカ大統領になるか、それを決めるくじを引かせてもらえるだけ。神サマ、あいつらは空飛ぶ飛行機だって撃ち落とせる。しかもそれを、エンジンの一つが鳥の群れを吸いこんだように見せかけることもできる。あの電子制御式銃弾ってのは クソ、なんでおれがこんな目に。あいつらならエンジンの残骸に鳥の羽根の跡を残して、それだけのために鳥たちを皆殺しにするかも。

こんなことを考えながら、フレッドは思った。こりゃひどい。アークターが容疑者ならともかく、アークターが……何だろ。標的になってしまうってのは。おれはアークターを見張り続けよう。フレッドは、フレッドとしての役目を続ける。そっちのほうがずっといい。編集して自分の解釈を提出して「こいつがホントに何かしでかすまで待ちましょう」とかいくらでも言い続ければいい。これに気がついて、フレッドは紙コップを投げ捨てて、機密アパートの洗面所を出た。

「ぐったりしてるね」とスクランブル・スーツの片方。

「そうね。墓場へ行く途中でおかしな目にあったもんで」頭の中に、超音波タイトビーム発生装置の写真が浮かんだ。これのせいで、四九才の地方検事が心停止を起こして死亡した。ちょうど、ここカリフォルニアで起きた悲惨で有名な政治的暗殺事件の審理を再開しようとしたところだった。「ほとんど自分が墓場行きになっちゃったんです」とフレッドは口にした。

「ほとんどはほとんどで、行き着いたわけじゃないだろ」とスクランブル・スーツ。

「え。ああ、そうね」とフレッド。

「すわって仕事に戻れよ。さもないと週末返上で公務ばっかになるぜ」とスクランブル・スーツ。

「ねえ、この仕事を、こんな技能に関する仕事として登録したらどうかな、つまり」とフレッドは言いかけたが、ほかのスクランブル・スーツ二体は興味を示さなかったし、それどころか聞いてさえいなかった。だからフレッドはすわりなおして、タバコに火をつけた。それからホ口のバッテリーを始動させた。

おれのやるべきことは、今すぐに、気が変わって忘れちゃわないうちに、通りを戻って家に帰り、さっさとパリスを捕まえて撃ち殺すことだ。

それだって仕事のうちだ。

こう言おう。「なあおい、おれ、切らしててさ　マリファナー一本分けてくんない？　ードルあげるから」すると向こうがくれて、そしたら逮捕して、車にひきずってって、中に押しこんで、高速道路に出て、ピストルでぶんなぐってトラックの前につきだす。それで、あいつが逃げようとして、もみあううちに飛び出したんだ、と言えればいい。よくあることだ。

だって、そうしないと家の中の封をしてない食べ物や飲物に、いっさい口をつけられなくなる。おれだけじゃなくて、ラックマンもドナもフレックも。さもないと、おれたちみんなが毒キノコのかけらでくたばるはめになる。その後でパリスは、おれたちが森へ行って手あたり次第にキノコをとっては食っていた、と説明して、自分は止めようとしたんだけれども、大学教育を受けてない連中だったから耳を貸そうとしなかった、とか言うんだろう。

法廷の精神分析医たちが、パリスは完全にヤキのまわったいかれボンチだときとめて、死ぬまで精神病院にプチこんだとしても、誰かが死ぬことになる。たとえば、ドナとか。大麻で浮かれて、おれと約束の春の花をさがしてフラッとやってきたところへ、パリスが特製ゼリーの入ったどんぶりをあげて、十日後にドナは、集中治療病棟で苦しみ悶え、そうになったらパリスがプチこまれたって何の役にもたたない。

そんなことになったら、おれはあいつをドレイノで煮込んでやる。風呂桶で、熱いドレイノでグツグツと、骨しか残らなくなるまで煮つめて、それから遺骨をあいつの母親か子供か、どっちかいる方に送りつけてやる。もしどっちもいなかったら、骨は野良犬にくれてやる。それでも、ドナがひどい目に合わされたのは取り返しがつかない。

フレッドはスクランブル・スーツ二体に向かって、脳裏に妄想を浮かべた。もしもし、この夜分に、五十キロ入りドレイノの缶を買えるところはないですかね。

いい加減にしようぜ、とフレッドはホ口のスイッチを入れた。機密室のほかのスーツからの雑音は、これ以上ひろわないようにしよう。

2号モニターでは、パリスがラックマンに話しかけていた。ラックマンは、どうやら泥酔して玄関のところにうずくまっているらしい。どうせリップル酒を飲んだんだろう。潰れてしまおうと、自分の寝室のドアを見つけようとして、苦闘している。それに向かってパリスは言っていた。「アメリカにおいては、ほかのどんなドラッグ中毒患者よりも、アルコール中毒患者の数の方が多いんだよ。それに、アルコールや不純物による脳障害や肝臓障害も　」

ラックマンは、パリスがいることさえまるで気がつかずに消えた。がんばれよ、とフレッドは思った。役にたたない声援だな。少なくともそう長持ちはしない。あのクソ野郎がいるから。

でも、フレッドだっている。でも、フレッドには後知恵しかない。ただ、もしかしてホロ・テープを逆回転させられれば話は別だ。そうすればパリスの先回りができる。おれのやることはパリスの機先を制する。おれに先回りされて、あいつが何かするとしての話だけだ。

その時、頭のもう片側が沈黙を破り、もっと穏やかに語りかけてきた。もっと単純なメッセージを持った別の自分が、事態をどう扱えばいいか教えてくれた感じだった。

「錠前屋の小切手を片づけるには、明日朝一でハーバーにでかけて、小切手を清算して買い戻してくる。何よりもそれが先決。まずそれだ。そいつをその時点で消しとめておくこと。その後で、それさえ済んだら、ほかのもっと深刻な問題に手をつける。わかった？」わかった、とフレッドは思った。そうすれば不利な立場からは逃れられる。そこから手をつけないと。

テープをどんどん早送りにして、メータの読みから判断して、もうみんなが寝静まった夜の場面になっているはずのあたりに進めた。ここでの自分の勤務時間を切り上げるための、準備としてである。

明かりは消え、スキャナーは赤外線モードになっていた。ラックマンが自室のベッドで寝ている。パリスも。そしてアークターも、自室で、女と並んで二人して寝ていた。

えーと、コニー何とかいう女だったっけ。コンピュータのファイルによると、キツイヤクに中毒しきってて、売りをやってて売人もしてる。まさに敗残者。

「少なくともホシのセックス現場は見なくて済んだわけだ」と、通りすがりのスクランブル・スーツが後ろからのぞきこんで言った。

「そりゃありがたい」とフレッドは、ベッドで眠る二人の姿を生真面目に観続けた。頭の中は、錠前屋の件と、行って何をしなければならぬか、ということはいっぱいだった。「嫌いなんだよね、いつも」

「やるのはいいけど、見るのはちょっとね」とスクランブル・スーツは同意した。

アークターは、ナオンと寝てる。まあ、すぐ早送りにしてもいい。目をさましたときに、こいつらが一発やるのはみえてるけど、それでこの二人はおしまいだ。

それでもフレッドは観続けた。眠るボブ・アークターの姿……ぐっすり、何時間も。そのとき、今まで見過ごしていたことに気がついた。あの女、どう見てもドナ・ホソンにしか見えないぞ！ あのベッドの中で、アークターといっしょに寝てる女。

つじつまが合わん、とフレッドは手をのばしてスキャナーを止めた。テープを巻き戻し、それからまた再生。ボブ・アークターと女だが、ドナじゃない！ ジャンキー女のコニーだ！ いいんじゃないか。二人は並んで横になり、眠っている。

すると、フレッドの目の前で、コニーの顔の硬い輪郭がとけて、薄れ、柔和になり、ドナ・ホソンの顔になった。

またテープを止めた。混乱して立ち上がれない。わけがわからん。まるで

えーと、なんて言うんだっけ？ そう、まるで映画の技法のディゾルブみたいだ！ クソッ、こりゃいったい何だ？ テレビ放映用の事前編集か？ どっかに監督がいて、特撮でも使ってるのか？

もう一度テープを巻き戻し、再生しなおした。コニーの容貌の変化が最初に始まったところで、テープ送りを止めて、ホログラム再生装置いっぱい一つのフリーズ・フレームだけが写るようにした。

拡大装置のノブをまわす。ほかの再生キューブは消した。さっきまで八つあったキューブが合わさって、巨大なキューブ一つを形成した。たった一つの夜の光景。ベッドの中で動かぬボブ・アークター、その横で動かぬ女。

立ち上がって、フレッドはホロ・キューブの三次元投影像の中に足を踏み入れ、ベッドのそばに立って、女の顔をよく吟味した。

変わりかけてるところだな。まだ半分はコニーだ。すでに半分はドナになってる。こいつは研究所に渡したほうがいい。誰か専門家がこいつを改竄してる。おれはいんちきテー



ブをつかまされたんだ。

誰の仕業だろう？ フレッドはホロ・キューブから出て、それを消して小さいキューブ八つに戻した。まだすわりこんで、思索している。

誰かがドナの映像をまぎれこませたんだ。それをコニーの映像に重ねた。アークターがホーソンと寝たという証拠をでっちあげた。何のために？ オーディオ・テープやビデオ・テープと同じく、いい技術者ならホロ・テープも修正できる。今それを見せられたばかりだ。面倒ではあるが、しかし.....

もしこれが、一定時間ごとにスイッチが入ったり切れたりするインターバル方式のスクリーンなら、アークターがこれまでベッドを共にしたこともないし、今後もないであろう女と寝ている場面の連続シーンが、テープにばっちり写ることになるんだろう。

それとも映像の混信とかエレクトロニクス上の故障かな。エンジニアたちがプリンティングと称するもの。ホロ・プリンティング。テープ上のある部分の記録が、別の部分に移ってしまうのだ。テープが長いこと放置されてあるとか、もとの録画レベルが高すぎるとかすると、それが隣に移ってしまう。やれやれ、それでドナが、この前だか後だかのシーンから移ってきたのかも。たとえば、居間のシーンとかから。

こいつの技術面をもっと知ってりゃよかった。銃に飛びつく前に、もっとこの件の裏をとらないと。別のAM局が混信してきて、受信妨害してるみたいなの

クロストークだ。そんなふうな、偶然のものだ。

テレビのゴーストみたいなもんだ。機能上の、故障。トランスジューサーが一時的にいかれたとか。

またテープをまわした。またコニーだ。そして今度はコニーのままだった。すると.....フレッドはまた、ドナの顔が溶けこんでくるのを見た。そして今回は、女の横でベッドに寝ている男のボブ・アークターが、一瞬して目をさまし、ガバッと身を起こして横手のスタンドに手をのばした。スタンドは床に落ち、アークターは身を起こしたまま眠る女を、眠るドナを見つめ続けた。

コニーの顔がだんだん戻ってくると、アークターはホッとした様子で、ようやく横になってまた眠った。でも、不安そうだった。

うーむ、これで「技術的な混信」説は崩れたな。プリンティングでもクロストークでもない。アークターだってそれを見たんだ。目をさまし、気づき、見つめ、そして投げた。

神よ、とフレッドは、目の前の機器のスイッチをすべて切った。「とりあえずもうたください」と宣言して、ひざをガクガクさせながら立ち上がった。「いい加減もうダメ」

「変態セックスでも見ちゃったの？ いずれこの仕事にも慣れるって」とスクランブル・スーツが言う。

「この仕事には絶対に慣れないね。賭けてもいい」とフレッド。



## 第 11 章

翌朝、今や脳スコープのみならず車まで修理待ちの状態にあったので、フレッドはタクシーでエングルソーン錠前店に乗りつけた。四十ドルと、胸には多大なる心配を抱えている。

店は古い木造の雰囲気、看板は多少現代的な感覚だったが、カギの種類を示すウィンドウには、小さなしんちゅう製のがらくたがいっぱいあった。セコい飾りつきの郵便受け、人間の頭に似せたイカしたドアノブ、でっかいにせの黒い鉄カギ。薄暗い店に入った。まるでヤク中の住処みたい。なかなかおもしろい皮肉だ。

カウンターには巨大な合いカギ製作用のグラインダーがデンと据えられ、元カギが何千とぶらさがったラックもあった。太った老婦人が迎えてくれた。「おはようございます。なにかお探しですか？」

アークターは言った。「実は、銀行に突っ返されたという……」

Ihr Instrumente freilich spottet mein,  
Mit Rad und Kammern, Walz' und Bugel:  
Ich stand am Tor, ihr solltet Schlüssel sein;  
Zwar euer Bart ist kraus, doch hebt ihr nicht die Riegel.

……わたしの小切手の清算をしようと思ひまして。確か二十ドルの小切手だったと思うんですが」

「まあ」婦人は愛想よく、カギのかかった金属製ファイルを取り出し、開けるカギを探して、それから実はカギがかかっていなかったのに気がついた。それを開き、すぐさまメモのついた小切手を見つけた。「アークターさんでございますか？」

「ええ」とさっそく金を取り出す。

「はい、確かに二十ドルでございます」メモを小切手からはがして、アークターが来店して小切手を買戻したのを、一生懸命書きつけ始めた。

「ほんとにすみませんでした。まちがえて、今の口座じゃなくて昔の口座用の小切手を切っちゃったもんでして」

「はあはあ」と婦人は、書きながら微笑した。

「それとですね、先日お電話をいただいたんですが、その節はたいへん失礼いたしましたとご主人にお伝え願えれば」

「カールでしょう、実は弟なんですよ」婦人は背後にチラリと目をやった。「カールが妙な口のききかたをしたんですしたら……」と身ぶりをまじえて微笑。「小切手のことになると、たまにカッとなるもので……謝りますわ、もし……ほら、つまり、失礼なことを申し上げたんですしたら」

「電話をいただいた時は、こっちも取り乱してたもんでして。だからその件でも申し訳なかったとお伝えください」あらかじめ考えてあったせりふ通りに話した。

「ええ、確かそんなことを申しておりましたっけ」婦人はこちらの小切手をよこした。こちらは二十ドルを渡した。

「手数料とかは？」

「いえ、結構でございますよ」

「取り乱してたのは、友だちが一人、急死したもんでして」とアークターは小切手小切手をチラッと見てからポケットにしまった。

「あらまあ」

アークターは、まだぐずぐずしていた。「自分の部屋で、肉をのどにつまらせて、ひとりぼっちで窒息死したんです。誰もそれを聞きつけなかった」

「それが原因で死ぬ人って、意外とたくさんいるんですよ、アークターさん。読んだ話ですけど、お友だちと食事をしているとき、相手がしばらく何もしゃべらないでじっとすわっているようなら、身を乗り出して、しゃべれるかどうかきいてあげたほうがいいんですって。つまり、しゃべれなくなることがありますからね。窒息していてそれを告げることもできなくなるとか」

「ええ。どうも。その通りです。それと小切手の件も、どうも」

「お友だちのことはお気の毒でした」と婦人。

「ええ。最高の友だちでした」

「まあ、それはさぞかし……その方、おいくつでしたの」

「三十代はじめです」とアークターは言ったが、嘘ではなかった。ラックマンは三十二才だった。

「まあ、おかわいそうに。カールには言っておきますので。それとわざわざご来店くださって、有り難うございました」

「いえ、こちらこそ。それとエングルソンさんにもお礼を申し上げていただけますか。お二人とも、本当に有り難うございました」別れ、暖かい朝の歩道に戻り、まぶしい太陽とよどんだ空気の中でまばたいた。

電話でタクシーを呼び、帰り道は、特にヤバイ目にもあわずにパリスの仕かけた網から見事に逃れたことについて、鼻高々だった。なんせ、もっとずっとひどい事態になることだって有り得た。小切手はまだ店にあったし、錠前屋の本人とは顔を合わせずに済んだ。

小切手を取り出して、パリスがどこまでこっちの筆跡を真似てきたかを調べた。うん、確かに解約した口座だ。小切手の色ですぐわかった。完全に解約した口座で、銀行も「口座解約済み」のハンコを押していた。錠前屋が怒り狂うのも無理はない。その時、走るタクシーの中で小切手を調べながら、アークター筆跡が自分のものなのに気がついた。

パリスの筆跡とは全然ちがう。完ぺきな偽造だ。書いた記憶がないという点さえなければ、これが自分の筆跡でないとは絶対に思わなかっただろう。

ああ、パリスめ、これまでどんだけこの手のことをやらかしやがった？ おれの総資産の半分も使いこみやがったんじゃないだろうか。

パリスは天才だ。といっても、どうせトレースして複製したか、どのみち機械的な偽造なんだろうけど。でも、おれはエングルソン錠前店なんかに小切手を切ったことはないし、トレースってことは有り得ない。こいつは一枚限りの小切手だ。当局の筆跡鑑定部にまわして、どうやって偽造したのかつきとめてもらおう。ひたすら練習しまくっただけか

もしれない。

キノコがらみの御託については 面と向かって、「人に聞いたんだけど、お前、幻覚キノコをさばこうとしてるそうだな」と言おう。それで、「やめとけ」って。誰か心配になったやつから、話が戻ってきたってことにしよう。当然そういうやつはいるだろうし。

でも、こういうのは、あいつのたくらみをランダムに断片的に示すものでしかない。それも最初の再生でたまたま見つかっただけの。おれが直面しているもののサンプルではないんだ。その他あいつが何をしでかしたかは神のみぞ知る。ブラブラして参考書を読んで、計画だの策謀だの陰謀だのをめぐらす時間はいくらでもあるヤツだ.....そうだ、さっそく電話にトレースをかけて、盗聴されてないか確かめたほうがいい。パリスはエレクトロニクスのハードウェア入りの箱を持ってるし、電話の盗聴用に使える誘導コイルなんて、たとえばソニーですら製造販売してる。たぶん盗聴されてるはずだ。それもたぶんかなり以前から。

盗聴といっても、おれ自身が最近 必要上 仕掛けた盗聴器以外のヤツだけだ。

ガタガタと走るタクシーの中で、再度小切手を調べながら、突然ひらめいたことがあった。もしこれを書いたのが自分だったら？ アークターがこれを書いたんだとしたら？ そういえばそうだったような気もする。うすらボケのアークター自身がこの小切手を書いたような気がする。それもすごい殴り書きで 字が傾いている どういうわけか、急いでいたらしい。あわてて、まちがった小切手を持ち出してきて、あとでそれをすっかり忘れてしまった。小切手を書いたことすら忘れてしまったのだ。

忘れたのは、アークターが.....

Was grinsest du mir, hohler Schadel, her?  
Als dass dein Hirn, wie meines, einst verwirret  
Den leichten Tag gesucht und in der Dammrung schwer,  
Mit Lust nach Wahrheit, jammerlich geirret.

.....あのサンタ・アナでのでっかい麻薬ハブニングから逃げ出したときのことだ。そこであのかわいいブロンドの娘に会ったんだっけ、歯並びが悪くてブロンドの長い髪とでかいケツをしてて、すごく生き生きしてて気さくで.....車を発進できなかった。ヤクにいかれきってたから。トラブルづくめだった その晩はヤクを山ほどのんだり射ったり鼻で吸ったりして、それが夜明けまで続いた。物質Dが山ほど、それも一級品。超最高級品。アークターのブツ。

身を乗り出して、運転手に告げた。「そのシェルのガソリンスタンドで止めて。そこで降りる」

降りて、タクシーの運転手に金を払って、電話ボックスに入って、錠前屋の番号を調べて、電話した。

老婦人が出た。「エングルゾーン錠前店です、おはようござ 」

「先ほどのアークターです。たびたびお騒がせしてすいません。さっきの小切手分の作業をなさったときですが、どこに呼び出されました？ 住所、わかりますか？」

「えー、ちょっとお待ちくださいね、アークターさん」婦人が受話器を置いた音がガタッと聞こえた。

遠くでくぐもった男の声。「誰だ？ 例のアークターか？」

「そうよ、カール、でもお願いだから黙っててちょうだい。あの方、たった今お見えに

なって 」

「一言いってやる」

間。それからまた老婦人。「もしもし？ 住所はこうなってますけど」彼女が読み上げたのは、アークターの自宅の住所だった。

「弟さんはそこに呼ばれたんですか？ そこでカギをつくったんですか？」

「ちょっとお待ちを。カール？ アークターさんのカギをつくりに行ったとき、トラックでどこに行ったの？」

遠くで男のうなり声。「カテラ」

「ご自宅じゃなくて？」

「カテラ！」

「カテラのどこかだそうですよ、アークターさん。アナハイムの。いえ、じゃなくてサンタ・アナのメインだってカールが申してます。それで 」

「どうも」と電話を切った。サンタ・アナ。メイン。例のクソ麻薬パーティーがあったところだ。確か三十人ほどの名前と同じくらいの車のナンバープレートを通報した晩だ。常連になってるパーティーじゃなかった。メキシコからでかい荷が着いたとこだった。売人たちがそれを分けて、売人にはよくあることだが、分けながら味見してたわけだ。あの半分は、たぶんもうおとり捜査官に逮捕されてブタ箱に……うん、まだあの晩のことは覚えてるじゃないか。もっとも正確に思い出すことは決してないだろうけど。

だからといって、あの電話がかかってきたときに予謀の犯意をもってアークターのふりをしたパリスが許されるわけじゃない。ただ、証拠によれば、パリスは事前に計画してあったわけじゃなくて、その場でデッチあげたわけだけど 即興したんだ。クソッ、ひょっとしてパリスは、あの晩にラリってて、ラリってる連中がみんなするようなことをしただけなのかも。つまり、とりあえず成り行きに悪のりする、みたいな。アークターがあの小切手を書いたのは確実。パリスはたまたま電話に出ただけ。ヤキのまわった頭で、いいシャレだと思ったことをやっただけ。無責任だっただけで、それ以上の何物でもない。

それにアークターだって、こんなに長い間あの小切手を放っとくなんて、さほど責任ある態度ともいえない、とタクシーの番号を回しながら考えた。そっちはアークターの責任だろうに。もう一度小切手を取り出して、日付を見る。一月半も前。まったく、誰が無責任だって？ こいつのためにアークターは、ブタ箱の中で外を眺めてることにもなりかねなかった。あのカールのアホが未だに地方検事のところに行っていなかったのは、天恵以外の何物でもない。たぶんあの優しいお姉さんが止めたんだらう。

アークターはもっとしっかりしたほうがいい。当人が、いままでおれの知らなかったようなイカれたことをやらかしてるんだから。パリスだけじゃない。それどころかパリスが最悪でもないのかも。まず一つ、パリスのアークターに対する強い猛烈な悪意の原因についてはまだ不明だ。人は何の理由もなしに、あんなに長期にわたって他人を陥れようと謀るもんじゃない。それにパリスは、ほかには誰も陥れようとはしていない。たとえばラックマンとかチャールズ・フレックとかドナ・ホーソンには手を出してない。ジェリー・フェイピンを連邦クリニックに送り届けるとき、誰よりも骨折したのはパリスだったし、家の動物たちにも優しい。

いつだったかアークターは、犬の一匹が芸を覚えないので なんてったっけ、あの黒いチビ犬は、ポポだっけ 保健所に送って始末してもらおうとしたことがあって、その

ときパリスは何時間も、いや何日もボボにつきっきりで、優しく話しかけたり訓練したりして、犬もだんだん落ちついて芸を覚えるようになって、殺されずにすむことになった。もしパリスがあらゆるものに悪意を抱いているなら、そんな真似、善い真似はしないはずだ。

「タクシーのご用命ですか」と電話。

シエルのスタンドの所在地を告げた。

それに、もし錠前屋カールがアークターに重症ヤク中のレッテルを貼ったとしても、それはパリスのせいじゃない、とタクシーを待ってあたりをブラブラしつつ考えた。アークターのオールズモービルのカギを作るため、カールが朝の五時にトラックでやってきたとき、アークターはたぶん、ゼリーの歩道を歩いたり壁をよじのぼってるているみたいな足どりで、浴びせられる冷たい視線をふりはらっていたり、その他ヤク中トリップでやりそうな、ありとあらゆることをやっていたにちがいない。カールが判断を固めたのはそのときだったんだろう。カールが新しいカギを削っている横で、アークターはひっくり返ってフワフワ舞い上がり、逆立ちで跳ね回り、わけのわからないことを口走っていたんだろう。カールとしてはクソおもしろくもなかったはずだ。

実は、パリスは度重なるアークターの失敗をなんとかカバーしようとしているのかもしれない。アークターは、もはや車もまともに整備できないし、不渡り小切手は出すし、それも意図的にやってるんじゃない、脳がヤクでボロボロになってるせいなんだ。意図的にやるよりもずっとひどい。パリスはできるだけのことをしている、という可能性もある。ただ、パリスの脳もボロボロだ。全員の脳が.....

Dem Wurme gleich' ich, der den Staub durchwuhlt,  
Den, wie er sich im Staube nahrend lebt,  
Des Wandrers Tritt vernichtet und begrabt.

.....ボロボロで、ボロボロのやりかたで相互にやりとりしている。ボロボロがボロボロを率いている図。それもまっすぐ破滅へと。

ひょっとすると、脳スコープの配線を切って曲げてショートさせたのも、みんなアークターの仕業かも。真夜中に。でも、動機は？

こいつは難しい質問だ。なぜ？ でも、脳がボロボロなら何でも有り得たし、どんなねじくれた そう、あの配線みたいに 動機だって有り得た。そんなのは、覆面捜査の仕事でいくらでも見てきた。別に目新しい悲劇じゃない。コンピュータのファイルにもう一件つけ加わるだけ。ジェリー・フェイビンの場合と同様、こいつは連邦クリニックに入る前の段階なのだ。

この連中はみんな同じゲーム盤の上を歩いている。今はそれぞれ別のコマにいて、ゴールからの距離も様々だし、ゴールに到着する時期もばらばらだろう。でも、みんないずれはゴールに着くのだ。連邦クリニックというゴールに。

彼らの神経組織に刻み込まれた宿命だった。と言うよりも、神経組織のまだ残った部分に、と言うべきか。今ではもう、この宿命を止めたり撤回できるものは何もない。

中でも特に、ボブ・アークターにとってはそうだ、と彼は考え始めていた。パリスの行動とは関係なしに生まれたばかりの直感だ。プロとしての新たな洞察だ。

それに、オレンジ郡保安官事務所の上司だって、ボブ・アークターに注目すると決定している。こちらは何も知らされていないが、それなりの理由があるのはまちがいない。い

ろんな事実が相互に補強しあったのだろう。当局はアークターへの関心を高めているし、だって、アークターの家にホロ・スキャナーを設置したり、その出力を分析するおれに金を出したり、おれの報告に基づいて何かしらの判断を行う上司に給料を出したりで、当局としては大金をつぎこんでいるわけだし、パリスもアークターに対して並々ならぬ関心を抱いているし、両者とも、アークターを最大のターゲットとして選んだ点で共通している。でも、おれ自身は、アークターの行動で明らかに不審なものを見たことがあるか？ この両者の関心とは別に、自分の目を見たもので、何か不審だったか？

憶測でない、何か確実なものに出くわすまで、もうしばらく監視を続ける必要があるな、とタクシーにゆられながら考えた。明日にもモニター上に現れる、といった性質のものではない。長期的な監視態勢に入って、いくらでも待てるような位置に身を置かなくては。

でも、一度ホロ・スキャナーで何かを捕らえれば、アークターの行動で、何か得体の知れない不審な挙動さえ見つければ、三点からアークターの位置が断定できる。他の二者の興味に加え、おれの第三の確証が。もちろんそれが裏付けとなる。万人の関心のためにかかった、費用も時間も正当化される。

パリスはこっちの知らない何かをつかんでるんだろうか。呼び出して、きいてみたほうがいいかな。でも、パリスとは別個のネタを集めたほうがいい。さもないと、こっちのネタはパリス、こいつが何者か、何を代表しているのかは知らないが、のやつのコピーになってしまう。

ここで彼は思った。いったいおれは何を考えてるんだ？ どうかしてるんじゃない？ おれはボブ・アークターを知ってる。いいやつだ。何もたくらんじゃない。少なくとも怪しげなことは。それどころか、あいつは密かにオレンジ郡保安官局のために働いている。たぶんそれが理由で……

Zwei Seelen wohnen, ach! in meiner Brust,  
Die eine will sich von der andern trennen:  
Die eine halt, in derber Liebeslust,  
Sich an die Welt mit klammernden Organen;  
Die andre hebt gewaltsam sich vom Dust  
Zu den Gefilden hoher Ahnen.

……アークターはパリスに狙われているのだろう。

でも、それではなぜオレンジ郡保安官局に狙われているのかは説明できない。それも、あれだけのホロ・スキャナーを設置して、捜査官をフル・タイムではりつけて監視報告させるほどに狙う理由はまったくわからない。こいつは説明がつかない。

つじつまが合わん。あの家、クズまみれのボロ家と雑草だらけの庭と、いつまでたっても砂を換えてもらえない猫のトイレと、台所のテーブルの上を歩く動物たちと、誰も出さないのであふれかえっているゴミの家では、もっと、ずっと多くのコトが進行しているにちがいない。

あんないい家が、もったいないいたらありゃしない。いくらでも使い道はあるのに。家族が、子供たちと妻が住める家だ。そういう設計の家なのだ。寝室三つ。もったいない。ホントもったいないよ。あの家をあいつから取り上げるべきだ。事態に介入して、あいつらを排除すべきだ。そうするかも。そしてもっと有効利用する。家だってそれを望んでいる。もっといい目を見たこともある家だ。そういう日々が帰ってくる。もし、誰か別の種



類の人間が持ち主で、ちゃんと手入れさえすれば。

特に庭ね。新聞の散らばった家の車寄せにタクシーが乗り入れた時、そう思った。

タクシーの運転手に金を払い、玄関の鍵を出し、家に入った。

すぐに、何かに見られているのを感じた。ホロ・スキャナーがこっちを見てる。こっちが敷居をまたぐと同時に。たった一人 家の中にはおれしかいない。ウソ！ おれのほかにスキャナーがいる。陰険に隠れていて、おれを監視して記録している。やることなすこと。手をだすことすべて。

公衆便所で小便してる時に見る、壁の落書きみたいだ。「はーい笑って！ ビックリカメラですよ！」ってわけ。事実、この家に入った途端、おれはビックリカメラに映ってるわけだ。気色悪い。気に入らん。自分を意識してしまう。この感覚は、初日にみんなで家に帰ってきた時以来、増加している。そう、あの「犬のクソの日」以来。こう考えながらも、スキャナーのことを考えずにはいられなかった。スキャナーの存在は日増しに意識されてくる。

「誰もいないみたいだな」いつも通り口に出して言った。それをスキャナーが捕らえたのも承知していた。でも、絶えず用心が必要だったのだ。自分はスキャナーがあるのを知らないことになっている。映画のカメラの前のアークターってわけ。カメラを意識していないように演技しないと、ぶちこわしになっちゃう。そうなりゃー巻の終わり。

そして、このクソの場合、テイク2はない。

かわりに消される。それも、おれが消される。スキャナーの裏にいる連中じゃなくて、このおれが。

こいつから抜け出すんなら、この家を売ればいい。どうせボロ家だ。でも……おれはこの家が好きだ。絶対売りたくない！

おれの家なんだもの。

誰もおれを追い出せない。

連中にどんな理由があろうとも。

そもそも「連中」とやらがいればの話だが。

それとも「連中」がおれを見張ってるなんて、単なる想像かもしれない。被害妄想。それとも、「それ」というべきか。非人称の「それ」。

おれを見ている「それ」がなんだかは知らないけど、人間じゃないのは確か。

少なくともおれの基準では。おれにとってそんなのは人間じゃない。

バカげた話ではあるけれど、でも怖い。おれにチョッカイ出してるやつがいて、それが単なるモノで、しかも現場はおれの家。それもおれの目前で。

その何かの目自体の中で。何かモノの視界の中で。こいつは、かわいい黒目のドナとはちがって、絶対まばたきしない。スキャナーは何を見るんだろう。見るって、つまり本当の意味で見るってこと。頭の中も見る？ 心の底も見る？ 昔使われてた受動性の赤外線スキャナーや、現在使われている最新型のホロ・スキャナーがおれの 人間の 内部を見るとき、はっきり見えるんだろうか、それともおぼろげにしか見えないんだろうか。はっきり見えてほしいもんだ。最近じゃもう、自分でも内面がはっきり見えない。見えるのは暗雲だけ。外に暗雲、内に暗雲。万人のためにも、スキャナーにはもっとちゃんと見れてほしい。だって、もしスキャナーさえもが、おれ自身と同じくおぼろにしか見れないんなら、おれたちはみんな呪われてる。これまでずっとそうだったみたいに、重ねて呪われて、そのままおっ死ぬ。知ってることはほんのわずか、そしてそのわずかな断片さえも

まちがってる、というふうに。

居間の本棚から、一冊適当に取り出した。見るとそいつは「性愛図鑑」だった。いい加減に開き、ページを見て　そこには喘ぐ女と、その右おっばいに嬉しそうにかじりついている男が写っていた　まるで音読するかのように、誰か有名な昔のお偉い哲学者を引用しているかのように（実はそうではなかったけれど）唱えはじめた。

「いかなる人間といえども、真実の全貌のごく一部しか見るができない。そしてあまりにしばしば、と言うより実はほとんど必ずと……

Weh! steck' ich in dem Kerker noch?  
Verfluchtes dumpfes Mauerloch,  
Wo selbst das liebe Himmelslicht  
Trub durch gemalte Scheiben bricht!  
Beschränkt mit diesem Bucherhauf,  
Den Wurme nagen, Staub bedeckt,  
Den bis ans hohe.

……言っているほど、その貴重な真実の断片についてさえ、人は自分自身を意図的に欺く。人間のある一部が自分自身に刃向かい、別人のようにふるまい、自分自身を内側から倒す。人の中の人。だがそれは人ではないのだ」

ページに書かれた不在のことはの知恵に感動したかのごとく、うなずきながら、彼はその大きな赤い金箔押し「性愛図鑑」を閉じ、本棚に戻した。スキャナーがこいつの表紙にズームインして、おれに恥をかかせたりしませんように。

チャールズ・フレックは、知り合いみんなの身の上に起きたことのせいで、一層どんどん絶望して、とうとう自殺することに決めた。彼が出入りしているグループ周辺では、自殺するのに苦労はなかった。大量のバルビツールを手に入れて、安酒といっしょにのんで、しかも夜遅くに、電話の受話器をはずして誰にも邪魔されないようにするだけでいい。

計画すべきこととしては、後世の考古学者たちに、何といっしょに発見されたいか、という品々の選択しかなかった。こっちがどういう階層の人間かわかってもらえるにはどうすればいいか。それと、自殺を実行したときにどういう精神状態だったかもわかってほしい。

品物を決めるのに数日かけた。これは自殺を決めるのにかけた時間よりずっと長く、十分な量のバルビツールを集めるのに要した時間とほぼ同じだった。発見されたときには、ベッドに横たわっていて、アイン・ランドの「水源」(こいつは自分が理解されずに大衆に疎外された超人で、したがってある意味で、大衆の嘲笑に殺されたようなものだ、ということを示す) ガソリン用クレジットカードをキャンセルしたことに対するエクソン宛の書きかけの抗議文がいっしょに見つかるはずだ。こうすれば、体制を糾弾することになり、死が奪うものを超えた何かを、死によって達成できる。

実は、二つの品物が達成するものに対して、死が何を奪っていくのかについては、あまり頭のなかでもはっきりしていなかった。でも、とにかく筋は通っていたし、とりあえず準備を始めた。避けられない終わりが近づいたとき、死期を感じて、自然の定めた本能のプログラム通りに行動する動物と同じだった。

最後の最後になって（終わりのとき間近になって）重要な点に関する決意を変えて、バルビツールをのみ下すのに、リプルやサンダーバードみたいな安酒ではなく、鑑定済みワインを使うことにした。そこでいま一度、最後のドライブに出かけ、高級ワインの専門店トレーダー・ジョーに行き、一九七一年もののモンダヴィ・キャベルネ・ソーヴィニオンを一本買った。三十ドル近くの出費　手持ちをはたいた勘定だ。

家に戻って、ワインのコルクを抜き、空気に触れさせ、まず何杯か飲んで、数分間を「性愛図鑑」のお気に入りのページ（騎乗位の写真）を鑑賞するのに費やし、バルビツール入りビニール袋をベッドの横に置き、アイン・ランドの本とエクソン宛の未完の抗議文とともに横になって、何か意味深なことを考えようとしたけど何も思いつかず、騎乗位の女ばかりが頭に浮かんで、それから、キャベルネ・ソーヴィニオンといっしょに、バルビツールのカプセルを全部一気にのみ下した。その後、コトをなしとげた彼は、横になって、アイン・ランドの本と手紙を胸にのせて、待った。

しかしながら、チャールズ・フレックはだまされていた。カプセルは、表示通りのバルビツールではなかったのだ。何やらいかげんしい幻覚剤、これまでのんだこともないようなヤツで、たぶん何かの混合物らしく、街場でも新しいブツらしかった。静かに窒息してゆくかわりに、チャールズ・フレックは幻覚を見始めた。やれやれ、まさにおれの人生そのものだ、と彼は思慮深げに考えた。いつもペテンにかけられて。自分がのみこんだカプセルの量を考えると、相当なトリップを迎えつつあるという事実は認めざるを得なかった。

気がつくやうに、次元の裂け目から現れた生き物がベッドの横に立って、こっちをとがめるように見おろしていた。

生き物は、からだ中一面にたくさん目がついていて、超モダンで高そうな服を着て、身の丈二メートル半。それと、巨大な巻物を持っている。

「おれの罪を読み上げるつもりだな」とチャールズ・フレック。

生き物はうなずいて、巻物の封を切った。

フレックは、どうすることもできずにベッドに横たわったまま、「それで、これは十万年もかかるんだ」と言った。

多数の複眼でこっちを見据えながら、次元の裂け目から来た生き物は言った。「われわれはもはや、世俗的な宇宙にはいない。『時間』『空間』といった物質的存在に関する低次元なカテゴリーは、もうお前には適用されない。お前は超越的な領域に引き上げられたのだ。お前の罪は、途絶えることなく、交代制で、永遠に読み上げられ続ける。リストが終わることはない」

汝の商売相手を知れ、とチャールズ・フレックは考えた。人生の最後の三十分を取り消すことができればいいのに。

千年たって、彼はまだベッドに横たわり、胸にアイン・ランドの本とエクソン宛の手紙を乗せ、そいつらが自分の罪を読み上げるのを聞いていた。小学校一年生の、六才の時の罪を読んでいるところだった。

一万年後、小学校六年生のときまで来た。

自慰を始めた歳だ。

目を閉じて、身の丈二メートル半の多眼生き物が果てしない巻物を次々に読み続けるのはまだ見えた。

「さて次は　」と言っている。

---

少なくとも、ワインはよかった。チャールズ・フレックはそう考えた。

## 第 12 章

その二日後、フレッドは不審に思いつつ3号ホロ・スキャナーを見ていた。ホシのロバート・アークターが、自宅の居間の本棚から、なんだかいい加減に本を抜き出している。後ろにヤクが隠されているのかな？ と思って、スキャナーのレンズをズーム・インさせた。あるいは電話番号か住所がメモってあるんだろうか。読むために本を取り出したのではないことは見てとれた。家に戻ったばかりで、コートも脱いでいない。そして妙な雰囲気漂わせている。張りつめていながら、同時にぐったりしているのだ。不承不承の緊急事態、という感じ。

スキャナーのズームレンズがとらえたページには、女の右乳首にかじりついている男の写真があった。二人ともはだかだ。女はどうやらオルガズムに達しているようだ。目を閉じかけて、口はだらんと開いて無言のうめき声を発している。アークターのズリネタだろうか、とフレッドは見続けた。でも、アークターは写真にはいっさい興味を示さなかった。かわりに、何やら謎めかしたせりふを、つかえながら暗唱した。一部はドイツ語で、どうも盗み聞きしてるやつを不思議がらせてやろうという腹らしい。ひょっとしてこいつ、同居人たちが家のどこかにいると思っていて、こうやっておびき出そうとしているのかもしれない、とフレッドは思った。

誰も現れなかった。長いことスキャナーを見ていたフレッドにはわかっていたことだが、ラックマンは物質Dと混ぜたバルビツールをしこたまのんで、服を着たままバッドルームでのびていた。ベッドまであと数歩ってところ。パリスは家を出たきりだった。

アークターは何してるんだ？ とフレッドは思って、この部分のテープ位置番号を書き留めた。こいつ、どんどんおかしくなってきた。こいつのことを密告してきたタレコミ屋の言い分も、もっともだ。

それとも、アークターが唱えた文章は、あいつが家に設置した電子装置への音声コマンドかもしれない、とフレッドは推測した。スイッチを入れるコマンドか切るコマンドかはわからないけど。あるいは対スキャナー用の妨害力場を作り出すようなコマンドかも。これみたいなスキャナーを無効にするやつ。でも、あの文句が、アークター自身にとって以外に、いささかでも意味や目的があるうとは思えなかった。

こいつはイカレてる。本気で。自分の脳スコープが壊されてんのを見つけた日以来車を、命にかかわるようなやりかたでいじくりまわされて帰ってきた日には、もう確実に

あいつはずっとイカレきってる。それ以前にも多少はそのケがあったけど。でも、あの「犬のクソの日」とアークターが呼んでいる日以降は完全におかしい。

しかし、あいつを責めるわけにもいくまい。あんなことがあれば、誰でもおかしくなる。アークターが疲れた様子でコートを脱ぐのを見ながら、フレッドは思った。でも、みんなはふつう、回復するもんだ。こいつはしなかった。それどころかひどくなる一方。誰

もないのに、ありもしないメッセージを、しかも外国語で読んでみせるなんて。

こいつがおれをだましてるんじゃないかなければの話だが、と考えると、フレッドは動揺した。自分が監視されているのを、何らかの手段でつきとめて、そして……実際の行動を隠そうとしてるのでは？ それともおれたち相手にパズルをしてるだけとか？ ま、いずれわかることだ。

おれはこいつがだましてるんだと思うね。人によっては、見られているのがわかる。第六感ってやつ。偏執狂じゃなくて、ただの原始的な本能。ネズミとか、狩られる動物にはみんな備わっている。自分が狙われているのがわかるのだ。感じるのだ。こいつ、おれたちのためにくだらないことをやって、こっちを引っ張り回そうとしてる。でも 断定はできない。嘘に嘘が重なってるから。何層も。

寝室のスクリーンを見ると、アークターがブツブツと朗読する音でラックマンが目を見ました。ラックマンは、もうろうとしたままからだを起こし、聞き耳をたてた。そして、アークターがコートをかけようとしてハンガーを落とした音を聞いた。ラックマンは、長くたくましい脚で立ち上がり、ベッド横のテーブルに常備してある手斧を一動作で手にした。すっと立って、獣のようになめらかに、寝室のドアに向かった。

居間では、アークターがコーヒータブルの手紙を取って目を通しはじめた。でかいグズ手紙をごみ箱に投げこんだ。はずした。

寝室で、ラックマンがそれを聞いた。ビクツとして、空気の匂いを嗅ぐかのように頭をあげた。

アークターは、手紙を読みながら、不意に顔をしかめて「クソッ、まったく」と言った。

寝室では、ラックマンが緊張をゆるめ、カタンと斧を起き、髪をなでつけてドアを開け、部屋を出た。「よう。どうかした？」

アークターは言った。「車でメイラー・マイクロフィルム社のビルの横を通りがかってさ」

「またフカシかよ」

「で、連中は棚卸しをやってた。でも、社員の誰かが、どうやら在庫をかかとにくっつけて持ち出しちゃったみたいで、それだもんでみんなピンセットと小さい虫メガネ持って、メイラー・マイクロフィルム社の駐車場に出てたの。それと小さな紙袋も持って」

「礼金でも出たの？」ラックマンはあくびをしながら、手のひらで引き締まったかたい腹を叩いた。

「出るには出たけど、それもなくなしたんだって。小さなコインだったから」

「運転してると、この手の事件にはよく出くわすの？」とラックマン。

「オレンジ郡でだけだよ」とアークター。

「メイラー・マイクロフィルム社のビルって、大きさどんくらい？」

「高さ約三センチ」

「重さの見積は？」

「社員込みで？」

フレッドはテープを早送りした。メータの読みで、テープ一時間分送ったところで止めてみた。

「約五キロ」とアークターが言っているところだった。

「じゃあ、横を通ったってわかんないじゃん、そんな高さ三センチで重さ五キロなんてんじゃ」

アークターは、今ではソファにすわって脚を投げ出していた。「でっかい看板があんの」  
まったく！ とフレッドは、またテープを早送りした。今度は、直感で、たった十分ほど  
たったところで止めた。

「それってどんな看板？ ネオンとかのやつ？ 色は？ そんなんあったっけ。目  
だつの？」

「ホレ、見せてやるよ。持って帰ってきたんだ」とアークターはシャツのポケットを  
探った。

フレッドはまたテープを早送りした。

「バレないでどっかの国にマイクロフィルムを持ちこむ方法って知ってる？」と  
ラックマンが話していた。

「そんなのどうにでもなるじゃん」アークターはふんぞりかえってマリファナを吸って  
いた。空気に煙が充満してきた。

「いや、つまり税関の絶対に考えつかないような方法。パリスがないしょで教えてくれ  
た方法なんだけど。本に載せるからって口止めされてるんだ」

「本って？ 『一般家庭用ヤクと 』」

「ちがう。『アメリカへのお手軽密輸輸入マニュアル 持ち出すか持ち込むかはキミし  
だい』。マイクロフィルムはヤクの荷と一緒に密輸するんだって。たとえばヘロインとか  
と。マイクロフィルムはヤクの袋の底に入れとく。すごく小さいから誰も気がつかない。  
誰も 』」

「でもそしたら、どっかのヤク中が、半分ヘロインで半分マイクロフィルムの注射を射っ  
ちゃうぜ」

「うーん、ま、そしたら、そいつはお目にかかったこともないほどクソ物知りなジャン  
キーになるだろうよ」

「マイクロフィルムの内容次第だけだね」

「あいつ、ヤクを持って国境を越える方法をもう一つ考えついた。ほら、税関で、何か  
申告するものはないかって聞かれるじゃん。それでヤク持ってますなんて言えないだろ  
」

「わかるわかる。どうやんの？」

「うん、つまり、まずでっかいハッシシのかたまりを持ってきて、それを人間の形に彫  
る。それから中に空洞部をつくって、そこに時計みたいなゼンマイ仕掛けと、ちっちゃい  
テープレコーダを入れといて、税関の列でそいつを前に立たせて、そいつが税関を抜ける  
直前にゼンマイを巻いてやる。するとそいつは税関の係官のところに行って、向こうが  
『何か申告するものはありますか？』って言うと、そのハッシシのかたまりが『ありませ  
ん』って答えて歩き続ける。それで国境の向こう側まで行くわけ」

「ゼンマイのかわりに太陽電池みたいなのにしといて、そしたら何年も歩き続けられる。  
永久に」

「そんなことしてどうなんの？ いずれ太平洋か大西洋に行き着くだけだろ。それどこ  
ろか、地の果てを踏み外して、まるで 』」

「そいつがエスキモーの村に行ったら面白いな。高さ百八十センチのハッシシのかたま  
り、時価 えーと、時価でどんくらいかな」

「十億ドル」

「もっとする。二十億」

「そのエスキモーたち、革を嚙んでなめしたり、骨を削って槍をつくったりしてるところへ、この二十億ドル相当のハッシシのかたまりが雪のなかをやってきて、何度も何度も『ありません』って言う」

「みんな、どういう意味だろうって不思議がる」

「永久に謎になる。伝説になるぜ」

「たとえば孫とかに話してやるわけよ。『わしはこの目で見たんじゃ、二十億ドルもする、身の丈百八十センチのハッシシのかたまりが、一寸先も見えんような霧のなかから現れて、あっちの方に歩いていきおった。『ありません』と言いながら』孫はそいつを精神病院にプチこむぜ」

「いや、ホレ、伝説ってだんだん誇張されてくじゃん。何世紀かずっと、そいつらこんな話しをしてるよ。えーと、『わしのご先祖さまの時代のある日、身の丈三十メートルで八兆ドル相当の超高級アフガニスタン産ハッシシのかたまりが、炎を滴らせ、「死ね、くそエスキモーどもめ！」と絶叫しながら我々に向かってきたんじゃ。わしらは戦い続けて、ようやくそいつをしとめたんじゃよ』」

「それだってガキは信じないぜ」

「もうガキは何一つ信じねーもん」

「ガキに何言ってもガツカリするだけだよ。前にガキがこうだぜ。『最初の自動車を見たときはどう思った？』 バカヤロー、こちとら一九六二年生まれだぜ」

アークターが言った。「へえっ、前に知り合いに、シャブでいかれたヤツがいて、そいつが同じときいたぜ。そいつは二七才で、おれはそいつより三つ年上なだけだったんだけど。もう何もわかんなくなってたんだよ。そいつ、しばらくしてもっとシャブやってというか、シャブと称して売りつけられたものを作って そしたらしょんべんたれて、ウンコたれて、それで「おいドン、だいじょうぶか」とかきくと、おうむ返しにするだけなの。『おいドン、だいじょうぶか』って」

沈黙。煙の立ちこめる居間で、マリファナをふかす二人の男の間に沈黙。長く、陰気な沈黙。

とうとうラックマンが口を開いた。「ね、ボブ……おれも前は、ほかのみんなと同じ歳だったんだよな」

「たぶんおれもそうだったと思う」とアークター。

「なんでこうなったのか、さっぱりわからん」

「いや、ラックマン。おれたちみんながなんでこうなっちゃったのか、お前は充分わかってるはず」とアークター。

「ま、その話はよそう」ラックマンは騒々しくマリファナを吸い続けた。馬面が、薄暗い午後の陽射しの中で黄ばんで見えた。

監視用アパートの電話が一台鳴った。スクランブル・スーツが出て、それをフレッドにまわした。「おいフレッド」

フレッドはホ口を切って電話に出た。

「先週ダウンタウンの署に来たのをおぼえてるね。B Gテストを受けただろう」と声が言った。

しばらく黙りこんでから、フレッドは「ええ」と言った。

「出直してくるようになってたろう」ここでも間があった。「きみに関するもっと最近の



ネタを処理したんだがね……それできみに知覚テストの標準パッケージすべてと、その他のテストもいくつか受けてもらうように、わたしのほうでスケジュール調整をしておいた。きみには明日、午後三時に、前と同じ部屋に来てもらうことになる。所用時間は全部で四時間ほど。部屋番号は覚えているかね？」

「いいえ」とフレッド。

「気分はどう？」

「まあまあです」フレッドは冷静だった。

「仕事上に限らず、何か特に問題は？」

「ガールフレンドとけんかしました」

「混乱はないか？ 人や物を識別するのに苦労したりしない？ 物が裏がえったり逆転して見えることは？ ついでだから、時空間や言語的な失見当は？」

「いいえ。皆無です」フレッドはむっつり答えた。

「明日、二〇三号室で会おう」と心理学助手。

「わたくしのネタの何が」

「その件も明日だ。必ず来るように。いいね？ それとだな、フレッド、気を落とすなよ」ガチャン。

あんたにもガチャンだぜ、とフレッドも電話を切った。

向こうがこっちを脅して、やりたくないことを無理強いしようとしてるのを感じ、イライラしながら、スキャナーのスイッチを入れ直して出力モードにした。キューブが明るくなって色が現れ、その内部で三次元の光景がうごめいた。音声テープからは、無意味でうとうしいフレッドにとってはダベリが流れた。

ラックマンがだらだらしゃべっていた。「その女が腹ぼてになって、アレが四カ月もなくして腹も目に見えてふくれてきたんで、中絶しようとしたのね。でも中絶費用のことでグツグツ言ってるだけでさ、なんでか知らないけど公共の補助金がもらえないんだって。で、ある日おれがその娘んちに行ったら、その友だちってのもいて、ただの想像妊娠だって言うてんの。『あんたは自分が妊娠したって思いたいだけなのよ。後ろめたいから。中絶だの、それにかかる大金だの、罪悪感を打ち消すための苦行なんですよ』とかさ。それで妊娠した娘おれ、この娘ホントに気に入ってたんだは静かに目をあげて、『わかったわよ、それじゃもしこれが想像妊娠なら、あたし想像中絶受けて想像金で費用を払うわ』だって」

「想像五ドル札には誰の顔が描いてあんのかね」とアークター。

「そうだな、一番想像力豊かな大統領って誰だった？」

「ビル・ファルクス。自分が大統領だって想像しただけだった」

「そいつが就任したつもりになったのはいつ？」

「一八八二年あたりに、二期務めたつもりになった。あとで、さんざん治療を受けてから、自分が務めたのは一期だけだと思うようになって」

フレッドは激怒してスイッチをたたきつけ、ホロを二時間半分先に進めた。こんなヨタ話がいつまで続くんだ？ 一日中？ それとも永久に？

「それで子供を医者に、心理学者んとこに連れてって、この子はいつも叫んでばっかでかんしゃく持ちだって言うの」ラックマンの前のコーヒーテーブルには、大麻二包みと缶ビールがあった。「それにウソつき。その子はウソつきなワケ。すぐに話を誇張してみせる。それで心理学者はその子を診察して、診断は『奥さん、お宅のお子さんはヒステ

リーです。あなたはヒステリー症の子をお持ちなんですよ。でも、原因はわかりません。すると母親のお前が、ここぞとばかりにまくしたてるワケ。『あたしにはわかりますわ、先生。それはあたしが想像妊娠したせいなんです』」ラックマンもアークターも笑った。それにジム・バリスも。彼は二時間の間に帰っていて、二人といっしょだった。また例のセコいハッシシ・パイプに白糸を巻く作業にかかっていた。

フレッドはまたテープを丸一時間分早送りにした。

「この男はね」とアークターが何となく見守る向かいで、ラックマンは、覆いかぶさるようにして、大麻のつまった箱を磨きながら言っていた。「テレビに出て、世界的に有名な詐欺師だって名乗ったんだ。誰を詐称したのかレポーターに聞かれて、ある時はジョンズ・ホプキンス医科大学の名外科医、ある時は、政府の研究費で高速素粒子を研究してるハーバード大の理論物理学者、ある時はフィンランドのノーベル賞作家、ある時はアルゼンチンの亡命大統領で妻は」

「それで無事逃げおおせたわけ？ 一度も捕まらずに？」とアークター。

「実はそいつ、外科医だの大統領だのになりすましたことは一度もなかったんだ。唯一なりすましたのが、その世界的に有名な詐欺師。あとでロサンゼルス・タイムズ紙にスッパぬかれた。全部調べあげられたんだぜ。そいつ、もとはディズニーランドで掃除夫をしてただけど、ある時、その世界的に有名な詐欺師 本物は別にいたワケ の自伝を読んだんだって。それで『ケッ、おれだってこいつみたいに、いろんな国の連中のふりをして逃げおおせられるぜ』だけどころでこう考えた。『そうだ、そんなことしなくてもいいじゃん。詐欺師を詐称する詐欺師になればいいんだ』それでずいぶんぜ二を稼いだって、タイムズの記事によると、本物の世界的に有名な詐欺師と並ぶくらい稼いだ。しかもずっと簡単だったって」

一人すみっこで糸を巻いていたバリスが言った。「オレたちだって、詐欺師ならときどき見かけるよ。日常的に。でも素粒子物理学者のふりはしてないけど」

「イヌのことだろ」とラックマン。「うん、イヌね。知り合いでイヌのやつってどんくらいいるのかな。どんな格好してるんだろ」

「そんなの、詐欺師ってどんな格好してるのかきくようなもんだ」とアークター。「前にいつだったか、大物のハッシシ売人と話をしたんだけど、そいつ、ハッシシ五キロ所持してて捕まったんだって。逮捕したイヌがどんな格好してたかきいてみた。ホラ なんてんだっけ おとり捜査官か。そいつが、友だちの友だちってふりをして、やってきて、ハッシシを売らせたわけ」

「オレたちそっくりだったんだろ」とバリスは糸を巻く。

「おれたち以上だったんだって。そのハッシシ売人の野郎 もう判決もくらって、次の日にはブチこまれることになってたんだけど そいつはこう言った。『あいつ、おれたちより長髪だった』そこで教訓だけど、おれたちそっくりのヤツには近づくな」

「女のイヌもいるんだって」とバリス。

「おれ、イヌに会ってみたいな。もちろん、承知の上でだけど。確実にそれとわかる状態でさ」とアークター。

「フン、そいつに手錠をかけられる日が来れば、いやでも確実にわかるだろうよ」とバリス。

アークターは言った。「だからさ、イヌにも友だちっているのかな。どういう日常生活なのかな。奥さんとかは知ってるのかな」

「イヌに女房がいるもんか。連中は洞窟に住んで、駐車した車の下から、こっちが通るのをのぞいてるんだぜ。トロールみたく」とラックマン。

「何を喰ってんの？」とアークター。

「人間」とバリス。

「いったいどうやるんだろう。イヌのふりなんて」とアークター。

「ええっ？」バリスとラックマンが同時に言った。

「げっ、おれイカしてるわ。『イヌのふり』だって　　「すげえ」とアークターはニヤニヤした。

それを見つめながら、ラックマンが言った。「イヌのふり？　イヌのふりだと？」

「きょうは脳がぐちゃぐちゃなんだよ。寝たほうがいいね」とアークター。

ホ口の前のフレッドは、テープをポーズさせた。キューブがすべて凍りつき、音がやんだ。

「休憩？」スクランブル・スーツの一つが声をかけてきた。

「うん。疲れた。しばらくやってると、このクズが鼻につきだすもんで」フレッドは立ち上がってタバコを取り出した。「こいつらの言ってることって、半分もわからないし、すごい疲れた。もうウンザリだよ、こいつらの会話を聞くなんて」

「ホントに連中の中に混じっていると、それほど悪いもんでもないぜ。だろ？　あんただって、たぶん　　たった今あの現場にいたんじゃないの？　もちろん変装してだけど。ちがう？」

「おれは絶対にあんな変態どもとツルんだりしないね。囚人みたいに、同じせりふを何度も何度も繰り返して。何であんなことしてるわけ？　すわってダベってるだけだろ」

「じゃあ、おれたちは何でこんなことしてるわけ？　この仕事だって、言ってしまえば死ぬほど単調だろ」

「でもおれたちはやらざるを得ない。仕事だもの。ほかにどうしようもない」

「囚人と同じにね。ほかにどうしようもない」とスクランブル・スーツが指摘した。

イヌのふり、だと。いったい何のことだ？　誰にもわからない……

詐欺師のふりをする、か。駐車した車の下に住んで、土を喰ってる詐欺師。世界的に有名な外科医でもなければ小説家でもなければ政治家でもない。人がテレビで聞きたいと思うようなものでは全然ない。正気の間人なら誰も関心を持たないような……

わたしは塵のなかを這い

塵に住み、塵を喰い

やがて通行人に踏みつぶされるミミズに似ている

そう、うまい表現だ。あの詩。ラックマンが読んでくれたんだっけ。それとも学校で読んだんだっけ。思いついてのは変なもんだ。こんなのを覚えてるとは。

テープを止めたのに、アークターのイカれたことばがまだ脳裏にこびりついていた。忘れられればいいのに。しばらくでいいから、あいつのことを忘れられるといいのに。

「ときどき、こいつらが次に何を言うか、事前にわかってるような気がする。一字一句まちがいない」とフレッド。

スクランブル・スーツが同意した。「デジャ・ヴュってやつだよ。アドバイスさせてもらえればだね、まず、テープを再生する間を、すごく長くとるんだ。一時間とかじゃなくて、六時間分くらい、テープをまとめて早送りにする。それで何もなければ、何かにプチ

当たるまでテープを逆回しで再生する。前進じゃなくて、逆回しね。そうすれば、向こうの話のテンポにひきずりこまれないですむ。六、七時間早送りにして、その分まとめて逆再生……すぐにコツがつかめる。無意味な部分は何キロも続いているところと、どこかモノになる部分とが、すぐに嗅ぎ分けられるようになる」

「それと、使える部分にいき当たるまで、ことばが耳を素通りするようになる。寝てる母親みたいに。トラックが横を通ろうとなにしようと、絶対に目をさまさないけど、自分の赤ん坊の泣き声がすれば はね起きる。どんなかすかな泣き声でも。何に聞き耳をたててればいいのかかわかると、無意識は選択的に働くからね」ともう一方のスクランブル・スーツ。

「それ、わかる。おれも子供が二人いるから」とフレッド。

「男の子？」

「女。娘が二人」

「最っ高じゃん！ おれも娘が一人。まだ一歳」

「名前は出さないようお願いしますぜ」もう片方のスクランブル・スーツのせりふに、みんな笑った。少しだけ。

とにかく、課題が一つ見つかったな。元のテープから抜き出して、上にまわさないで。あの『イヌのふり』とかいう謎めいたせりふ。アークターといっしょに家にいた他の連中だって、びっくりしてた。あした三時に署に出頭するときは、あそこのコピーを持っていこう。音声部分だけで充分だろう。前回以来おれがつかんだ他のネタとしっしょにして、あしたハンクと相談してみよう。

いや、これがつかんだ唯一のネタでもいい。手始めなんだから。このアークターの二十四時間監視が、無駄ではなかったことを証明できる。

おれが正しかったのを証明できる。

あの一言はうかつだった。アークターも尻尾を出した。

でも、その意味となると、まだわからなかった。

でも、いずれつきとめてやる。いずれボ口を出すまでボブ・アークターを見張る。あいつやその仲間を、ずっと見て聞いてなきゃならないのは、確かに不愉快だけど。あいつの仲間連中も、五十歩百歩だからな。よくまあおれは、あんな連中と一日中家にこもってられたもんだ。なんて生きざまだろう。同僚がいまさっき言ったように、果てしない無。

あんな暗雲の底で、精神内部の暗雲と、同じく精神外部の暗雲。どこもかしこも暗雲。あいつらが、あの手の人間であるがために。

タバコを持って、洗面所に戻り、ドアを閉めて鍵をかけ、それから、タバコの箱の中からデスを十錠取り出した。紙コップに水をくんで、十錠全部のんだ。もっと持ってくればよかったなあ。まあ、仕事を終えて家に帰れば、もう何錠かやれるか。時計を見て、あとのくらいか計算しようとした。意識が濁っている。まったくいつまでかかるんだろう。おれの時間感覚はどうなってるんだ？ あのボ口を見てるせいでダメになったらしい。もう、今何時かが全然わかんなくなってる。

LSDやって洗車場に入ったみたいな感じ。せっけんまみれの巨大な回転ブラシがこっちに向かってくる。おれは鎖で黒い泡のトンネルを引きずられてゆく。ひでえ生き方だぜ、と洗面所のドアを開けて、仕事に いやいやながら 戻った。

テープに再生をかけると、アークターがちょうど「おれの判断する限りでは、神は死んだ」と言っているところだった。

ラックマンが答えて「へえ、しらなかったな。病気でもしてたの？」

「おれのオールズモービルが、いつまでたっても手つかずなもんだから、売っぱらって  
ヘンウェイ買うことにした」とアークター。

「ヘンウェイって？」とバリス。

フレッドはつぶやいた。だいたい一キロ半。

「だいたい一キロ半」とアークター。

翌日の午後三時、医療担当官二人 前回の二人じゃなかった がフレッドにテスト  
を何種類か行った。フレッドは昨日よりずっと気分が悪かった。

「見慣れた物体がたくさん、次々と続いて、まず右目の前を、次に左目の前を通過する  
のを見てもらう。同時に、きみの正面の照明パネルに、こういった物体の輪郭がいくつか  
同時に現れる。そこで、そのパンチペンで、その時点で見えている物体の輪郭として正しい  
ものをその中から指摘してほしい。物体の方の現れ方はかなり速いから、あまり迷わない  
ように。選択の正確さと同時に、選択の速さも検査の対象になる。いいね？」

「はい」フレッドはパンチペンをかまえた。

それから見慣れた物体が山ほど目の前を走り過ぎ、フレッドはその下の照明パネルの写  
真をパンチしていった。これが左目の前で行われ、続いて右目の前で行われた。

「次に、きみの左目を覆って、見慣れた物体の写真を右目に示す。きみは左手で  
いいね、左手だよ いろんな物が入っている山を探り、写真に写っていた物体を見つけて  
ほしい」

「はい」サイコロの写真を見せられた。左手で、前に置かれた小さな物体の山をひっか  
きまわし、サイコロを見つけだした。

「次のテストでは、左手で、文字をいくつか見ないで触ってもらう。まず左手で触って、  
それから右手で、その文字がつづっていた単語を書いてほしい」

そうした。あつい、という単語だった。

「では、そのことばを言ってみて」

そこで「あつい」と言った。

「次に、両目に目隠しをして、この真っ暗な箱に手を入れて、ある物体に左手で触って、  
それが何だか調べてほしい。わかったら、それを見ないで、何だか言ってほしい。続き  
て、互いに似通った物体を三つ示すから、その三つの中で、きみが触った物に一番近い物  
体を言うこと」

「はい」フレッドはそうした。その他のテストも含め、合計一時間ほど。探って、片目  
で見て、選ぶ。探って、何だか言って、逆の目で見て、選ぶ。何だか書いて、絵を描く。

「次のテストでは、また目隠しをしてもらう。右手と左手でそれぞれある物体をさわ  
ってほしい。そして、右手の方の物体と、左手の方の物体が同一かどうかを言ってほしい」

そうした。

「いろんな置き方の三角形が次々に示される。それが同じ三角形か、ちがうかを言  
って  
」

二時間後には、複雑な形のブロックを複雑な形の穴にはめさせられて、所用時間を測ら  
れた。まるで小学校一年生に戻ったような気分だった。しかもくじってるような感じ。  
本当に一年生だった頃よりも出来が悪いみたい。フィンケル先生だ。オールドミス  
のフィンケル先生。一年生の頃、後ろに立って、おれがこういうクズをやるのを見張って、交流

分析でやるみたいに「死ね！」とかいうメッセージを送り続けてる。死ね。存在するな。魔女のメッセージ。それを山ほど。とうとうおれがしくじるまで。フィンケル先生は、もう死んだだろう。たぶん誰かが彼女に「死ね！」のメッセージを送り返して、それに当たったんだろう。そう願いたい。おれの送ったメッセージだったのかも。おれはそういうメッセージをモ口に送り返してたから。いま、この心理検査官に対してと同じように。

今のところ、あまり有効ではないみたいだった。テストは続いた。

「この絵のまちがいをを見つけること。中に一つ、なかまはずれがいる。きみはそれを示し」

そうした。それから、実際の物体でやらされた。なかまはずれはどれか。手で、なかまはずれの物体を取り出して、それから、テストが終わるとき、さまざまな「集合」と称される物の中からそれぞれなかまはずれを選ばせられ、そのなかまはずれの物体が共通に持っている性質があれば、それを指摘させられた。なかまはずれの物体同士は「集合」になるか、というわけ。

それが終わらないうちに、時間切れが宣告され、テストがすべて終わり、外にいったコーヒーでも飲んで、呼ばれるまで待っているように言われた。

しばらくしてフレッドにはやたらと長く思えたが試験官が現れて、「もう一つあった、フレッド。血液検査をしたい」と紙切れをくれた。検査室用の書類だった。「廊下をずっと下って、『病理検査室』っていう部屋でこいつを渡して、採血が終わったらまた戻ってきて待てるように」

「いいですけどね」フレッドはむっつりと、書類を持って出かけた。

血液に痕跡がないか、それを調べようとしてるのか。

病理検査室から二〇三号室に戻り、試験官の一人をつかまえた。「結果待ちの間、上にいった上司と相談してきてかまいませんか？ 今日はいもうじき帰っちゃうはずなので」

「よろしい。採血することにしたから、検査結果が出るのはもう少しかかる。いいよ。いって来たまえ。戻ってほしいときには電話するから。ハンクのところだろ？」

「ええ。上でハンクといいます」とフレッド。

心理試験官が言った。「しかし今日のきみは、最初に会ったときよりずっと落ちこんでるねえ」

「え？」とフレッド。

「最初にきみが来たときより。先週だよ。きみは冗談を言って笑ってた。すごく緊張はしてたけど」

見ると、それは最初に出くわした医療助手二人の片方なのだった。でも、何も言わなかった。鼻を鳴らしてオフィスを去り、エレベータに向かっただけだった。まったくがっかりだ。何もかも。どっちの医療助手だったっけ。ピンとしたヒゲのほうか、そうでないほうか……そうでないほうだろうな。ヒゲをはやしてなかったし。

「左手でこの物体をさわって、同時に右でそれを見てほしい。それから、自分なりの表現で、それが何だか」とフレッドはつぶやいた。が、これ以上のナンセンスは思いつけなかった。あいつらの助けがなきゃダメだ。

ハンクのオフィスに入ると、別の男がいた。スクランブル・スーツを着ていない。隅っこにすわって、ハンクと向かいあっている。

ハンクが言った。「この方は、例の変調装置で、ボブ・アークターについて電話してき

た情報提供者の方だ　前に話したろ」

「ええ」フレッドは身動きせず立っていた。

「この方がまた電話してきて、ボブ・アークターについてさらに情報を提供してくださった。もう一步踏みこんで、身分を明かしてもらわないとダメだ、と言って、出頭してもらえないかとお願ひしたら、来てくださった。この方は知ってる？」

「もちろん」フレッドは、ニヤニヤしてはさみをいじくっているジム・パリスを見つめた。不安そうで、醜かった。超醜い、とフレッドは嫌悪をおぼえた。

「お前、ジェームズ・パリスだろ、え？　逮捕歴は？」

「身分証明書によると、この方はジェームズ・R・パリス。本人もそう名乗っておられる」とハンク。「逮捕歴はない」とつけ加えた。

「こいつ、何が目当てです？」フレッドは、パリスに向かって言った。「ネタは何だ？」

パリスは低い声で言った。「アークター氏が、ある巨大な秘密地下組織に加わっているという証拠を持っています。この組織は豊富な資金を持ち、あちこちの武器庫の兵器が自由に使えて、暗号を使い、たぶん政府の転覆のために　　」

ハンクが割りこんだ。「そこはあなたの憶測ですね。そいつらが何をたくらんでいるかというあなたの推測でしょう。証拠は？　直接情報じゃないネタはご遠慮くださいよ」

「精神病院に入院したことは？」フレッドはパリスに言った。

「いえ」とパリス。

「提供する証拠や情報に関して、地方検事のオフィスで宣誓の上、公証供述書に署名するつもりは？　裁判所に出廷して、宣誓のうえで証人として　　」

「すでにそうするとおっしゃってるよ」ハンクが割りこんだ。

「わたしの証拠は、今日はほとんど置いてきましたが、いつでも提供できますし、内容は口パート・アークターの電話での会話を録音したものです。むろん、向こうはこっちに聞かれてるとは気がついていません」

「その組織というのは？」とフレッド。

「おそらく　　」とパリスは口を開いたが、ハンクが手をふってそれを制した。「政治組織です」パリスは汗をかき、ちょっとふるえていたが、上機嫌のようだった。「しかも反体制の。外部からのもので、アメリカの敵です」

「アークターと物質D供給源とのつながりは？」とフレッド。

パリスは目をぱちくりさせて、それから唇をなめて顔をしかめた。「わたしの証拠の中に　　」ここでことばにつかえた。「わたしの情報をすべて調べてもらえれば　　つまりわたしの証拠を、ということですが　　まちがいなくおわかりいただけると思うんですが、物質Dを生産しているのはアメリカ合衆国の転覆を狙う外国で、アークター氏はこの組織にどっぷり漬かっていて　　」

「誰かほかに、その組織に所属する人物の名前を教えてくださいませんか？　アークターが会っているような人間です。法執行当局に虚偽の情報を与えるのが犯罪であり、それを犯せば召喚され得るし、おそらくされるだろう、ということは承知していますね」とハンク。

「承知のうえです」とパリス。

「アークターの共謀者は？」とハンク。

「ドナ・ホーソンという女性です。いろんな口実をつくっては彼女の家に行って、定期的に謀議しています」

フレッドは笑った。「謀議とはね。たとえば？」

「わたしは車でアークターの後をつけたんです。気づかれずに」パリスはゆっくり明瞭にしゃべった。

「そんなにたびたび？」とハンク。

「ええ。もうしょっちゅうです。だいたい」

「ドナはアークターの愛人だよ」とフレッド。

パリスは言った。「アークター氏はまた」

フレッドに向かって、ハンクが言った。「モノになると思う？」

「ええ、こいつの証拠は絶対に見てみるべきでしょう」とフレッド。

ハンクはパリスに指示した。「証拠を持ってきてください。全部です。一番ほしいのは名前なんです。名前、ナンバー・プレートの番号、電話番号。アークターが大量の麻薬に関わっているのを見たことは？ ただの常用者以上の量を持ってたりとか？」

「そりゃもう」とパリス。

「どんな麻薬？」

「いくつかあります。サンプルがありますよ。こっそりサンプルを取っておいたんです。分析してもらおうと思って。それも持ってこられます。量もかなりありますし、種類も多いですよ」

ハンクとフレッドは、チラリと視線をかわした。

パリスは、何を見るときもなしに、視線をまっすぐ正面にむけて微笑んだ。

「ほかに言っておきたいことは？」ハンクはパリスに言った。そしてフレッドに、「警官をつけて、証拠を持ってくるのを手伝わせようか」と言った。本当は、こいつがビビってフケたり、気が変わって手をひこうとしたりしないための用心だ。

「もう一つだけ言っておきたいんですが。アークター氏は中毒者です。物質Dに中毒してます。今じゃ精神が錯乱しています。ゆっくりと、時間をかけて錯乱してきたんですが、今の彼は危険です」

「危険？」フレッドは繰り返した。

「ええ」とパリスは断言した。「すでに、物質Dによって生じる脳傷害で起きるような症状を示しています。視神経交差がやられているらしくて、弱い方の同側構成器官が……それに加えて」と咳払いして、「脳梁部もかなりやられてるみたいです」

「そういう根拠のない憶測は、すでに申し上げたように、警告したように、無価値です。とにかく、証拠を取りに行くのに誰かつけましょう。いいですね？」

にやにやしてパリスは言った。「でももちろん」

「私服警官を用意します」

「わたしは殺されるかもしれない。アークター氏は、申し上げたように」

ハンクはうなずいた。「ええ、パリスさん、こちらとしては感謝しています。あなたに非常なリスクを冒していただいているのもわかります。もしこれがうまくいけば、もしあなたの情報が、法廷での有罪判決を得るのに重要な役割を果たせば、もちろん」

「そんな理由でここに来たんじゃありません。あの男は病気なんです。物質Dのせいで。わたしがここに来たのは」

「あなたがここに来た理由なんかどうでもいいんですよ。こっちはあなたの証拠やネタが、少しでも使いものになるかだけに興味がある。あとはあなたの問題です」とハンク。

「ええ、どうも」パリスはひたすらニヤニヤしていた。



## 第13章

警察の心理検査室である二〇三号室に戻ったフレッドは、心理学者二人が検査の結果を説明してくれるのを、つまらなさそうに聞いていた。

「きみが示しているのは、障害というよりは競合現象だね。すわって」

「はい」フレッドは冷静にすわった。

もう一人の心理学者が言った。「脳の左右の半球間に競合が起きてる。一つの信号がおかしいとか汚染されてるとかいうんじゃない。むしろ、対立する情報を持った二つの信号があって、それが妨害しあってる感じだね」

「人は通常、左脳半球を使う。自己の体系ないしは自我、あるいは意識がそこに位置している。左が優位半球なのは、言語中枢が必ずそっちにあるせいなんだ。もっと正確に言うと、脳の双極化によって、言語能力ないしは誘意力が左に与えられ、空間的な能力が右に与えられることになる。左脳は、いわばデジタル・コンピュータだ。右はアナログ・コンピュータ。だから、機能の双極化は、単に二重化しただけのもんじゃない。両方の知覚機構が、入力情報を別個にモニターして異なった処理をするんだ。でも、きみの場合、どっちの脳半球も優位じゃない。そして両半球が、お互い補いあうように作動しているわけでもない。片方はああ言い、もう片方はこう言う」

「車に燃料計が二つあるようなもんだよ。片方は満タンだって言って、もう片方は空っぽだって言う。両方とも正しいということは有り得ない。両者は対立する。でも、きみの場合、一つが動いててもう一つが故障してる、というのとはちがう。つまり……こういうことだ。両方の燃料計は、まったく同じ量のガソリンを見てる。同じタンクの、同じガソリンを見てる。実は両者とも、同じものを調べてるんだ。運転手であるきみは、燃料タンクを直接見ることはできない。ゲージを、この場合は複数だけど、それを経由しないとだめだ。極端な話、タンクがスッポリおこちるかもしれない。それでもきみのほうは、ダッシュボードの計器に表示が出るか、エンジンが止まるかするまでは決してわからない。相反する情報を知らせるゲージが二つあったりしてはならない。そうなったら、その件に関する状態について、まったく何もわからなくなるからだ。メインのゲージが一つあって、バックアップ用のゲージがもう一つある、という場合とはちがうよ。その場合には、メインが故障すればバックアップがとって替わるわけだけど」

「つまりどういうことですか」とフレッド。

「自分でもわかってるだろうに。すでに体験しているはずだ。それが何なのか、なぜ起きているのかはわからないにしてもだ」と左手の係官。

「わたくしの脳の両半球が競合しているの？」とフレッド。

「そう」

「なぜ？」

「物質Dだよ。機能面で、よく見られる症状だね。われわれの読みもそうだったし、検査の結果もそれを裏づけている。通常は優位な左半球に障害が生じたので、右がその分を補おうとしているわけだ。でも、この双子機能はうまく融けあっていない。異常な事態で、からだにその準備ができていないからだ。起きるはずがないんだもの。交連情報交換と呼ばれている。脳分割に関連した現象だ。右脳半球を切除してもいいんだが」

フレッドは割りこんだ。「なおりますか、物質Dをやめれば？」

左の心理学者がうなずいた。「たぶんね。ただの機能障害だから」

もう一方がいった。「器官に損傷があるかもしれない。だから恒久的なものの可能性もある。いずれわかる。物質Dをやめてかなり経ってからのことだろうし。完全にやめてから、だよ」

「なんですって？」フレッドには回答が理解できなかった。なおるのかなおらないのか。障害は恒久的なものなのか、ちがうのか。二人はなんて言ったんだろう？

「脳組織の障害だったとしても、ゲシュタルト処理の競合を阻止するために、両脳半球からそれぞれ小部分を切除する実験が行われているよ。そうすれば、もとの左半球が優位を回復するだろうと考えられている」と心理学者の一人。

「しかし問題はだね、その場合、その個人の受容する認識 感覚からの入力データは、その後一生部分的なものになってしまう恐れがあるということなんだ。二つの信号を得るかわりに、半分の信号しか得られなくなる。障害としては、どちらもどっちだと思っただがね」

「うん。でも、部分的であっても競合しない機能のほうが、無機能よりはましじゃないか。競合する脳の交連情報交換なんて、受容器官としてゼロに等しいからね」

「つまりだね、フレッド、きみにはもはや」

「この先一生、二度と物質Dはやりません」とフレッド。

「いまはどのくらいやってる？」

「それほどは」それから間をおいて、「最近が増えてます。仕事上のストレスのせいで」

「もちろんきみは任務を解かれるべきだろうな。何もかも。きみはまちがいに障害を起こしてるんだからね、フレッド。もうしばらくは治らないだろう。どんなに短くても、しばらくはかかる。その後は、誰にもわからない。また完全に復帰できるかも知れない。あるいはできないかもしれない」

フレッドはわめいた。「もしわたくしの脳の半球が両方とも優位だったにしても、なんでその両方が同じ刺激を受けることにならないんですか？ その二つの何だか知らないけど、それをシンクロさせることはできないんですか？ ステレオ・サウンドみたいに」

沈黙。

「だって、右手と左手が物を持つとき、つまり同じ物を持つときだけど、それは」

「たとえばその右手VS左手という話でもいい。それを鏡の世界で考えてみよう。そこでは左手が右手に『なる』わけだろ……」心理学者はフレッドの上に身をかがめたが、彼は顔をあげなかった。「右の手袋と比べて左の手袋を説明しようとしたら、きみはどうする？ それも相手が右とか左とかいう概念をまったく知らないときにだよ。相手に、鏡像じゃない方のヤツを確実に取らせるには、どうすればいい？」

「左の手袋は……」と言ってフレッドは止まった。

「きみの片方の脳半球は、この世界を鏡に映ったようなものとして認識しているようなもんだ。鏡ごしにだよ。ね？ だから右が左になって、その結果としていろいろ起きる。」

われわれは、その『いろいろ』ってやつすら、まだ完全には把握していない。そんなふう  
に裏がえった世界を見るのがどういうものなのか。トポロジー的に言えば、右の手袋は、  
左手の手袋を、無限を経由して引っ張ってきたものなんだけどね」

「鏡を経由して、ですか」とフレッド。闇の鏡だ。闇のスキャナーだ。そしてパウロが  
鏡と言ったとき、それはガラス製の鏡のことじゃなかった。まだ当時はそんなものがな  
かったし。ピカピカの金属の皿の底を見たときに見えた、自分の姿のことだった。神学  
について読んでいたラックマンが、そう教えてくれたっけ。反転を伴わない望遠鏡とかレ  
ンズ系を通してではなく、その他何を通してでもなく、自分の顔が反転した。無限を経  
由して。反射を見たとき。いま、おれが言われてみたいに。ガラスを通してじゃなく  
て、ガラスに反射されて。そして、こっちに戻ってくる反射像：それは自分だし、自分自  
身なんだけど、自分じゃない。そして当時はカメラがなかったから、人が自分自身を見る  
手段はそれしかなかった。裏返しに。

おれは自分を裏返しに見ていたんだ。

ある意味で、森羅万象を裏返しに見始めていたんだ。脳の反対側で！

心理学者の片方が話していた。「トポロジーというのは、ほとんど理解されていない数  
学というか科学というか、まあどっちでもいいんだけどね。宇宙のブラックホール同様、  
いかにして」

「フレッドは世界を表裏逆転させて見ているんだよ」ともう一人が断言していた。「正面  
からと、裏にまわってと両方。推定だけだね。彼にどう見えるのか、われわれには理解し  
がたい。トポロジーってのは数学の一分野で、ある幾何学的な物体あるいはその他の集合  
において、いかなる一対一対応の連続写像によっても変化しないような性質を研究する分  
野だ。でも、それを心理学に適用すると……」

「それで、もしそういう写像を物体に行ったら、その物体がどういう形になってしまう  
のかは誰にもわかるまい。もとの形は想像もつかなくなる。まるで野蛮人がはじめて自分  
の写真を見たとき、それが自分だとわからないように。いくら川面や金属に映る自分の姿  
をみたことがあってもだよ。これは、反射像は左右が逆で、写真はそうじゃないからだ。  
だから、それが同じ人物だとはわからない」

「そいつは左右が逆転した自分の反射像に慣れているせいで、自分がそういう姿だと  
思ってるわけだ」

「録音した自分の声を聞くときも、よく」

「それは別の話だよ。そいつは副鼻洞の共鳴と関係があって」

「世界を鏡みたく裏返しに見てんのは、あんたらのほうじゃねえの？ おれのほうが正  
しい見方をしてるのかもよ」とフレッド。

「きみは両方の見方をしてるんだよ」

「どっちが」

心理学者の一人が言った。「昔はよく、現実の『反映』しか見ていない、とか言ったで  
しょう。現実そのものじゃなくて、その反映。反映、つまり反射像のいけなところは、  
それが本物じゃないということではなくて、それが左右反対だということなんだな。する  
と、だ」彼は奇妙な表情を浮かべた。「パリティ。科学におけるパリティ保存の原則。宇  
宙とその反射像があったとき、われわれはなぜか後者を前者ととりちがえる……それとい  
うのも、われわれが双極的なパリティをもっていないせいだ」

「ところが写真は、脳半球のパリティ不在を補える。写真は物体そのものではないけれ

ど、左右は逆転していない。この相違点によって、写真は像じゃなくて現実の形となる。逆転の逆転というわけ」

「でも写真だって、うっかり裏がえることもある。もしネガを裏返して裏焼きしてしまったらね。字が映ってないと、裏返しかどうかの判断はできないのがふつうだ。人の顔だけなら不可能。ある人物について、ポジは二通り作れる。正常焼きと裏焼きとだ。その人に会ったことがなければ、どっちが正しいほうかはわからない。でも、ちがってるのはわかるし、二つが重ならないのもわかるはずだ」

「さてフレッド、これで左右の手袋のちがいを説明するのがどんなにむずかしいかわかってくれたかな」

そのとき声がした。「それでは記された言い伝えを語るときがきたようだ。死はのみこまれてしまった。勝利の内に」これを聞いたのはフレッドだけらしい。「なぜなら、記されたものが裏返しで現れれば、どちらが幻でどちらが本物かは即座にわかるからだ。混乱は終わり、死、最後の敵である物質Dは、体内にのみ下されるのではなく、勝利の内にも上げられる。聞け、聖なる秘密を伝えよう。われわれすべてが永眠するのではない」

秘義の説明ってことか。秘密の説明。聖なる秘密。われわれは死なない。

反映は去るであろう

それも速やかに

おれたちみんなが変えられる。ということはつまり、もう一度裏返されるということだ。それも

一瞬のまばたきの間に！

だって、おれたちはみんな、今すでに裏がえってるんだから。たぶんおれたちみんな。警察心理学者が診断書を書いてそれに署名するのを見ながら、フレッドは陰うつな気分でそう思った。おれたちみんなとあらゆる物体と、距離と、それに時間だって。でも、どのくらいかかるんだらう。ポジをつくってるとき、焼き付けをしてるとき、写真家が、ネガが裏がえってるのに気がついたとき、それを裏返しなおすにはどのくらいかかるのかな。もう一回裏返して、正しい状態にするには？

ほんの一瞬だ。

これで聖書の中のあの部分の意味は理解した。おぼろなガラス越しに。でも、おれの知覚系は、とことんイカレちゃってる。こいつらの言うように。理解はできても、自分でどうしようもない。

ひょっとして、おれがまともと裏返しとの両面を同時に見てるってことは、おれは人類史上初めて、ひっくり返したのとひっくり返してないのが同時に起きてる人間で、つまりまともな方がどんな具合かを、チラッとでも見た最初に人間になるわけか。といっても、もう一つのいつものヤツも見てるわけだけど。そして、どっちがどっちだ？

どっちが裏返してどっちがそうじゃないんだ？

いつが写真で、いつが反射像なんだ？

それと、おれがヤクぐせにケリをつける間の病気手当や、退職や傷害に対する特別支給金は、いくらぐらいになるんだらう。そう考えながら、フレッドははやくも恐怖をおぼえ、深い絶望と寒気を全身に感じていた。Wie kalt ist es in diesem unterirdischen Gewolbe! Das ist natürlich, es ist ja tief. それでおれはこのクソ中毒を治さなきゃならないのか。

他人が中毒治療をするのは見たことがある。神よ、とフレッドは目を閉じた。

一人がしゃべっていた。「これは形而上学みたいに聞こえるかもしれない。でも数学の研究者たちは、われわれが新しい宇宙論誕生の寸前にいるのかもしれないと」

もう一人が興奮して言った。「時間の無限性、いわゆる永遠というヤツを、ループだと考えればいい！ エンドレスのカセットテープみたいな！」

ハンクのオフィスに戻るはずの時間まで、一時間ほど暇つぶしが必要だった。戻ったら、ジム・パリスの証拠を聞いて調べることになっていた。

気が向いたので、ビルのカフェテリアに足を運んで、制服やスクランブル・スーツや、スラックスにネクタイ姿の人々に加わった。

一方で、心理学者たちの所見が、おそらくはハンクのもとに届けられているのだろう。おれが顔を出す頃にはもう渡っているはずだ。

これで考える時間ができると、思いつつ、カフェテリアにフラリと入って列に並んだ。時間。仮に、時間が地球みたく丸かったら？ インドに行こうとして西に航海する。みんなにあざ笑われるけれど、でもやがて、インドが背後にではなく、正面に姿を現す。時間の場合だと キリストのはりつけはおれたちのみんなの航海する前方にあるのかも。みんなずっと東の過去にあると思っていても。

前方に秘書。ぴっちりした青セーター、ノーブラ、スカートもあってなきがごとし。こうしてチェックを入れているといい気分だった。ジロジロながめ続けていると、ついに向こうもこっちに気づいて、トレイを持ってじりじり離れていった。

キリストの最初の到来と再来は、同じできごとだったんだ。時間がエンドレステープになっていたから。みんなが再来を確信していたのも無理はない。

秘書の後ろ姿をながめ続けたが、こっちが誰だか相手にばれる心配は絶対ないのに気がついた。このスーツを着ている限り、こっちには顔もケツもない。でも、おれの下心は感じとってるな。あんな脚の女なら、男という男から下心を感じるだろうよ。

そうだな、このスクランブル・スーツさえ着てれば、彼女の頭をブン殴ってつつこみやったって、誰がやったかわかりゃしない。おれを見分けることなんかできないんだから。

こんなスーツがあれば、どれほど犯罪を犯せることか。犯罪までいかなくとも、ちょっとしたスリルだって。いつもやりたくてできずにいるようなヤツ。

そこでぴっちりした青セーターの女に話しかけた。「お嬢さん、いい脚してんねえ。まあ、自分でもわかってんだらうけど。そうでなきゃ、そんな超ミニはかないよね」

女は息をのんだ。「え。ああ、あなたが誰だか、やっとわかった」

「ほう？」

「ピート・ウィックマンね」

「誰？」

「ピート・ウィックマンじゃなかったかしら。いつもあたしの向かいにすわってるでしょ　そうよね、ピート？」

「いかにもこのおれは、いつもそこにすわって、キミの脚を観察しては、あれこれよからぬ妄想にふけてる男だよ」

女はうなずいた。

「で、脈ありかな？」

「そうね、場合によるわ」

「いつか晩飯でもどう？」

「いいんじゃない？」

「じゃあ電話番号教えてくれる？ 連絡するから」

女は口ごもった。「あなたが教えてよ」

「教えるかわりに、ここでおれとすわって、コーヒーとサンドイッチ喰うのにつきあってよ。キミが何食べるのかしらないけど」

「だめよ。あっちに友だちがいるもん 待たせてるから」

「だったらおれがキミたち二人につきあえばいいわけだ」

「内々の話があるから」

「わかった」

「そんじゃ、またね、ピート」女はトレーと皿と紙ナプキンを持って、列を流れていった。自分のサンドイッチとコーヒーをとって、空いたテーブルを見つけて一人ですわり、サンドイッチのかけらをコーヒーに落としてはそれをながめていた。

クソッ、あいつらめ、おれをアークターからはずすだ。おれは中毒からぬけるのにシナノンとかニュー・パスみたいなところに入れられて、誰かほかのやつが派遣されて、アークターを観察して評価するんだらう。アークターのことなんぞクソほども知らんようなウンコ野郎だ。また一からやりなおさなきゃならん。

少なくともおれに、パリスの証拠を評価させるつもりではいるらしい。あれを調べ終わるまでは停職扱いにするまい。あれってのが何だかは知らないけど。

もしおれがあの女をホントにヤっちまって妊娠させたら、その赤ん坊は 顔なし。もやだけ。そう思いめぐらせて、身ぶるいした。

おれが仕事をはずされなきゃならんのはわかる。でも、必ずしもいますぐって必要はないんじゃない？ あと少しやらしてくれたら……パリスのネタを処理して、方針決定に参加するとか。あるいはせめて、すみにすわってパリスの持ちこんだものを見るだけでも。アークターが何を企てるのか、個人的興味からも知りたいし。あいつはホントに大物なのか？ それともちがうのか？ やつらにしても、それがわかるまでいさせてくれるくらいの借りが、おれに対してあるはずだ。

ただ見て聞いているだけでいい。何も言わないから。

すわり続けているうちに、ぴっちりした青セーターの女とその友だちに気がついた。友だちのほうは黒のショートヘアで、二人はテーブルを離れて戻るところだった。友だちのほうは、あんましいかさななかったが、しばらくためらってからフレッドに近づいてきた。フレッドはコーヒーとサンドイッチのかけらの上に身をかがめていた。

「ピート？」とショートヘアの女。

顔をあげる。

女はもじもじしていた。「えーとね、ピート、あんまし時間ないんだけど、その、エレンが言いたがったことがあったんだけど、しりごみしちゃったもんでさ、あの娘、もっとずっと以前にでも、あなたのデートを断らなかつたかもしれないんだって。一月前とか、ホラ、三月くらいにとか。もしあなたが」

「もし何？」

「だから、あたしはこう言うように言われただけなんだけど、あの娘、ここしばらくほめかしてたんだけど、あなたがスコープを使えばもっとずっとよくなるって」

「もっと早く気がついてればなあ」フレッドは気乗りせずに言った。

「じゃあね、ピート。またあとでね」女はもうさっぱりした様子で、ニヤニヤしながら足早に立ち去った。

かわいそうなのはそのピートってやつだ。あいつら本気だったのかな。それとも、ここで一人ですわってる彼 おれ を見て、あの陰険な女どもがデッチあげた、ものすごい悪口だったのかな。ただの意地悪なフカシ やれやれ、どうでもいいや。

あるいは本気なのかも、と思いながら口をぬぐい、ナプキンを丸めてつらそうに立ち上がった。聖パウロも息が臭かったのかな。カフェテリアからふらりと立ち去り、手は再びポケットにつっこんでいた。まずスクランブル・スーツのポケットに、それから内側の本物のスーツのポケットに。パウロが後半生をずっと牢屋で過ごしたのもそのせいかな。息が臭いからブチこまれたとか。

こういう時に限って、こんな頭のイカレた妄想に襲われるんだから、とカフェテリアを去りながら思った。今日すでにいい加減クソ面白くもない目に会ってきたのに、あの女め、そのてっぺんにさらに投げ出して行きやがった。まずはあのご大層な心理テストの時代から生まれた、複雑な叡知に基づく大仰な御託。それに続いてこれだ。クソッ。さっきより気分が悪くなった。ほとんど歩けない。ほとんど考えられない。精神は混乱してうなっている。混乱と絶望。とにかく、スコープは全然よくない。ラボリスのほうがいい。ただ、吐き出す時、血を吐いてるみたいに見えるからな。マイクリンがいいか。それがベストかも。

このビルに薬局があれば、上にいってハンクに直面する前に、一本買って使えるのに。そうすれば もっと自信が出るかも。分がよくなるかもしれない。

助けになりそうなものならなんでもいい。どんなものでも。あの娘がくれたみたいなおちょとしたほのめかしや、助言でもいい。憂鬱で恐かった。クソッ、どうすりゃいいんだ？

もし全部の仕事を外されたら、もう誰にも会えなくなる。友だちや、おれが監視して知ってる人たちの誰にも。切り離される。停職は、この先一生続くかもしれないし。とにかく、アークターもラックマンもジェリー・フェビンもチャールズ・フレックも、特にドナ・ホーソンも、見納めはした。もう友だちには誰にも会えない。この先永遠に。終わったのだ。

ドナ。彼は、何年も前に大叔父がドイツ語で歌っていた歌を思い出した。「Ich seh', wie ein Engel im rosigen Duft/ Sich trostend zur Seite mir stellet.」大叔父の説明だと、その意味は「私には見える、天使のような衣装で、私の横に立ち、安らぎを与えてくれる」愛する女が、彼を（歌の中で）救ってくれた女が、ということだそう。そう、歌の中だけのことで、現実の生でのことじゃない。その大叔父はもう死んでしまったし、この歌を聞いたのもずいぶん昔のことだ。ドイツ生まれの大叔父が、家の中で歌ったり、朗読する。

Gott! Welch Dunkel hier! O grauenvolle Stille!

Od' ist es um mich her. Nichts leber auszer mir ...

神よ、ここは何と暗く、そして静まり返っていることでしょう。

この真空の中で、生きているのは私だけ.....

おれの脳がイカレきってなかったにしても、職場に復帰する頃には、誰か別のやつが彼らの担当になってる。あるいは死んでるか、ブタ箱か連邦クリニックか、それとも単に散

り散りに、散り散りになってしまってるだろう。焼き切れて破壊されて、このおれみたいに、何が起きてるのかもわからない。何にしても、おれにとってはどのみち終わったわけだ。自分でも知らないうちに、さよならを言っていたんだ。

おれにできることと言えば、たまにホロ・テープを再生して、忘れないようにするだけだ。

「あの機密アパートに戻らなきゃ……」あたりを見回して口を閉じる。あの機密アパートに戻って、ホロテープをガメておかなきゃ。今のうちだ。ぐずぐずしていると消されちゃうかもしれないし、その先だとおれは出入りできなくなる。当局なんかクソくらえ。請求書はおれの未払い分の給料から引けばいい。倫理的なあらゆる面から見て、あの家とそこの人々を撮ったテープはおれのものだ。

それに今となっては、この一件でおれの手元に残ったものといえば、あのテープしかない。おれが持っていけそうなもの、あのテープだけだ。

でも、テープを再生するには、あの機密アパートにあるホロ通信キューブ投影解像システムすべてが必要になる。解体して、ユニットごとに運び出さないと。スキャナーと録画装置は要らない。送信・再生装置と、特にキューブ投影装置は全部要る。少しづつやればいい。あのアパートのカギならある。返させられるだろうけど、返す前に、今ここで合鍵をつくれればいい。古くさいシリンダー錠のカギだし。だったら、できるじゃないか！  
こう思うと、気分がよくなった。厳格で道徳的でちょっと腹立たしい気分だ。誰も彼も腹立たしい。自分が事態をよくするのだと思うとうれしい。

考えてみれば、スキャナーや録画装置とかもガメたら、自分でモニターを続けられる。おれ一人で。これまでと同じく、監視を存続させる。少なくとも、しばらくの間は。でもそれを言うなら、人生のどんな出来事だって、ごくしばらくしか続かない。これがそのいい例だ。

監視は、基本的に続けられるべきだ。それも、できればおれがやるのがいい。いつもしっかり見張ってて、解明を続けるべきだ。見たことについて何もしないにせよ。すわって、向こうから見られずにこっそり観察するだけでいい。大事なのは、すべての出来事の観察者たるこのおれが、自分の任についてるってことだ。

彼らのためじゃなくて、自分のために。

うん、彼らのためでもあるな、とフレッドは訂正した。ラックマンが窒息したときみたいに、何かが起きたときのために。もし誰かが見てれば おれが見てれば 気がついて助けてやれる。電話で助けを呼んだり。すぐにしかるべき支援を差し向けたり。

さもないと、あいつら死んじまって、誰もどうにかするだけの知恵がなかったりする。どうしていいかわからないとか、気にもしないとかね。

あんなボロボロのシケた生には、誰かが介入してやらないと。少なくとも、彼らの悲しい訪れと逝去を記すぐらいはしてやらないと。記して、できれば永久に記録しておく。彼らが忘れ去られないように。よりよい時代のために、後世になって、いずれみんなが理解してくれる時のために。

ハンクのオフィスでは、ハンクと、制服警官と、汗をかきながらニタニタしている情報提供者のジム・バリスが一緒だった。バリスのカセットの一つが、前の机でかかっている。その横で、テープレコーダがもう一台まわって、再生内容を録音している。当局用にダビングしているのだ。



「……ああ、あなたね。今は話してらんないわ」

「じゃあ、いつ？」

「こっちからかけなおすわ」

「待てない用なんだ」

「え、何なの」

「計画で」

ハンクは手をのばして、パリスに向かってテープを止めるよう合図した。「この声を同定していただけますか、パリスさん」

パリスは喜々としてうなずいた。「ええ。女性の声はドナ・ホーソンで、男はロバート・アークター」

「わかりました」とハンクはうなずいて、フレッドをチラッと見た。ハンクの前にはフレッドの診断書が置かれ、そっちもチラチラ見ている。「テープを続けてください」

「……半の南カリフォルニアを明日の晩にやる。ヴァンデンバーグ空軍基地の空軍兵器廠を襲って自動小銃とセミオートの火器を」情報提供者がボブ・アークターのものと同定した男の声が流れ続けた。

ハンクは診断書を読むのをやめて、スクランブル・スーツでぼやけた頭を傾けて聞き入っていた。

自分自身と、そして今では部屋中の全員に向かって、パリスはニタニタ笑っていた。指は机の上の紙クリップをもてあそび、いじくりまわして、金網を編んでいるみたいだった。編んではもてあそび、汗をかいては編む。

ドナ・ホーソンとして同定された女が言った。「あのバイク連中がかっぱらってきくれた、方向感覚喪失薬はどうするの？ いつになったらあのブツを水源地に」

「組織はまず武器を必要としている。B段階はそれからだ」と男の声が説明。

「OK。でももういかなきゃ。客が来たわ」

カチッ。カチッ。

パリスは、貧乏ゆすりしながら声を出した。「いま拳がっていたバイク連中も同定できません。別のテープでも言及されてまして」

「この手の材料がほかにもあるんですか？ 裏づけになりそうでしょうか？ それともこのテープがほぼすべてですか？」とハンク。

「ほかにもたくさん」

「でも、これと同じような代物なんでしょう？」

「述べられているのは、ええ、同じ陰謀組織やその計画についてのことで、はい。特にこの計画についてです」

「この連中は何者なんです？ 何の組織なんです？」とハンク。

「彼らは全世界的な」

「名前です。あなたの推測はいらない」

「ロバート・アークターとドナ・ホーソンが主だったところです。ここに暗号化したノートもありまして……」パリスはきたならしいノートをもたもた取り出し、開こうとして落としかけた。

「いまここにあるものは、全部押収させてもらいますよ。テープだとか、その他のものも。所有権は一時的にこちらに移ります。こちらで調べさせてもらいますので」

「わたしの手書きのものとか、暗号かしてあるものは」

「その段階になったら、あるいは何か質問があれば、いつでもあなたに連絡して説明していただきますから」ハンクは、パリスではなく、制服警官に向かってテープを止めるよう合図した。パリスがテープに手をのばした。即座に警官がそれを制して、パリスを押しもどした。パリスは、ニタニタ笑いを顔にはりつかせたまま、目をパチクリさせてあたりを見回した。ハンクが言った。「パリスさん、こちらでこの材料を調査し終えるまで、あなたを釈放するわけにはいきませんよ。一応あなたを抑えておく形式としてですね、当局に意図的に虚偽の情報を流したということで逮捕することになります。もちろんこれは、あなたの身の安全のための口実にすぎません。あなたも、私たちも、みんなそれは承知しています。が、とにかく正式な逮捕はさせていただきますよ。地方検事に送検されますが、保留されるということで。よろしいですね？」相手の返答を待たずに、ハンクは制服警官に合図して、ハンクを連れ出させた。残ったのは証拠とクソとその他得体のしれないもの。

オマワリがニタつくパリスを連れ出した。ハンクとフレッドは、散らかったテーブル越しに向き合っていた。ハンクは何も言わなかった。心理学者の診断書を見ていた。

やや間をおいてから、ハンクは電話をとって、内線番号をまわした。「ああ、未評価のネタがあるんだがね　どこまでガセか、調べてみてほしいんだ。そこまでやったら報告をくれ。そしたら次の段階を指示するから。全部で六キロほど。三号の段ボール一個でいいと思う。うん。よろしく」と受話器をおいた。「エレクトロニクス暗号研だよ」とフレッドに告げて、診断書を読みに戻った。

重武装した制服姿の研究所員が二人やってきた。鍵つきのスチール容器を持っている。

「これしかなかったもんで」机の上の物を慎重に箱につめながら、一人が謝った。

「研究所には誰がいる？」

「ハーリー」

「ハーリーに言って、必ず今日中にこいつを調べてもらってくれ。偽造指数が出たら、私に報告するように。絶対に今日中だぞ。そう言ってくれ」

研究員たちは金属の箱に鍵をして、オフィスから運び出した。

診断書をテーブルに放り出して、ハンクはふんぞりかえって言った。「きみの　うん、きみならパリスの証拠をとりあえずどう思う？」

フレッドは、「そこにあるのはわたしの診断書でしょう？」と言って手をのばしかけて気を変えた。「彼の再生したものは、ごくわずかな部分ではありましたが、でも本物らしく思いましたが」

「偽物だよ。無価値だ」とハンク。

「そうかもしれませんが、わたしはそうは思いません」とフレッド。

「ヴァンデンバーグでどうしたとかいう武器庫ってのは、たぶんOSIの武器庫だろう」とハンクは電話に手をのばした。そして独り言で「えーと　あの時おれが話したOSIのヤツって誰だっけ.....あの写真持って水曜にきたヤツ.....」。そこで頭をふって、電話からフレッドに向きなおった。「やっぱり待とう。概略偽造度報告が入るまで待てばいい。おいフレッド」

「わたしの診断書は何て　」

「きみは完ぺきにイカレきってるとき」

フレッドは（精いっぱい努力して）肩をすくめた。「完ぺきに、ですか？」

Wie kant isit es in diesem unterirdischen Gewolbe!

「まともな脳細胞が、せいぜい二つぐらいはチカチカしてる。でもそれでほぼ全部だと。あとはショートとスパークばっか」

Das ist natuerlich, es ist ja tief.

「二つ、ですか。幾つのうちの二つです？」とフレッド

「知らん。脳にはたくさんの細胞があるはずだけど 何兆も」

「細胞間の可能な接続は、宇宙の星の数よりも多い」とフレッド。

「だったら今のきみの打率はあまりよくないな。えーと 六十五兆かそこらのうちの細胞二つじゃね」

「六十五兆というより六十五兆兆ってところでしょ」とフレッド。

「それじゃコニー・マック監督率いるフィラデルフィア・フィリーズよりひどい。あいつらのシーズン終わりの平均打率ってのは 」

「これが業務上でのことだと言ったら、どうなりますか？」とフレッド。

「待合い室にすわって、サタデー・イブニング・ポストやコスモポリタンを無料で山ほど読むことになる」

「どこの待合い室ですか？」

「どこがいい？」

「考えさせてください」とフレッド。

「おれならこうするね。おれなら連邦クリニックには入らない。I・W・ハーパーとか、いいバーボンを六本ばかり買って、山にこもる。サン・バーナディーノ山地の、どこか湖の近くに一人きりでもって、終わるまでそこに一人でいる。誰にも見つからないところで」

「でもいつまでたっても終わらないかもしれない」

「だったらいつまでも降りてくるな。そこらへんに山小屋を持ってるヤツを知らないか？」

「いえ」

「運転はだいじょうぶか？」

「わたしの 」口ごもると、夢の中にいるような力が働きかけてきて、緊張がゆるみ、うっとりした気分になった。室内の空間的な位置関係がすべてずれた。この変移は時間の感覚にまで及んだ。「あれは今……」フレッドはあくびをした。

「覚えてないのか」

「故障中なのは覚えてます」

「誰かに運転させよう。どのみちその方が安全だ」

運転させるって、どこへ？ どこを？ 道を、小道を、歩道を、ジェルの中をハイキングして歩かされるんだろうか。ひもにつけられた雄ネコみたいに、ほんとは家の中に戻りたいか、自由になりたいだけなのに。

フレッドは思った。Ein Engel, der Gattin, so gleich, der fuhr mich zur Freiheit ins himmelische Reich. 「そりゃいい」と言って、ニッコリした。ホッ。ひもを思いきり引っ張って、自由になろうと、そして横になろうと苦闘する。「こんなんちやあって、おれのことどう思います？ こんな ヤキがまわりきっちゃって、まあ、一時的なもんかも

しれませんが。でも慢性かもしれないし」

ハンクは「きみはすごくいいヤツだと思う」と言った。

「どーも」

「銃を持っていけよ」

「ええっ？」

「サン・バーナディーノ山地にI・W・ハーパー持って出かけるときにだよ。銃を持ってくんだ」

「それって、おれがヤク中から立ち直れない時のために？」

「どっちにしてもだよ。きみがやってたはずの量から立ち直るのは……とにかく持ってとけて」

「OK」

「戻ってきたら、電話をくれよ。知らせてくれ」

「だって、スクランブル・スーツがないし」

「いいから電話してくれ。スーツなんかあってもなくてもいいから」

またフレッドは「OK」と言った。どうやらどうでもいいらしい。どうやら終わらしい。

「次の給与の手取りは金額が変わってるよ。今回だけはかなりちがってるはず」

「何かボーナスでも出るんですか、こんなことになっちゃったってことで」とフレッド。

「いや。刑法を読むんだな。自らの意志をもって中毒となり、しかもその事実を速やかに報告せざりし警官は軽罪に問われる　三千ドルの罰金そして／あるいは禁固六ヶ月。きみはたぶん罰金だけだろう」

「自らの意志をもって、ですって?!」フレッドは驚嘆した。

「誰かに銃を突きつけられてヤクを射たれたわけじゃあるまい。誰かがスープにヤクを混ぜたわけでもない。きみは、脳を破壊して方向感覚を喪失させるような中毒性の薬物を、それと知りつつ自発的に摂取したんだ」

「だって仕方なかったんです！」

ハンクは言った。「のむふりをする事だってできたんだ。ほとんどの警官はなんとかしてるよ。それにきみがのんでたはずの量から見て、きみはまちがいがなく　」

「犯罪者よばわりする気ですか。おれは犯罪者じゃない」

メモとペンを取り上げて、ハンクは計算を始めた。「きみの俸給って何号？　もしよければここで計算してあげるけど　」

「罰金は後払いでいいですか？　月賦で、たとえば二十四回の分割払いとかで？」

「おいおい、フレッド」とハンク。

「わかりましたよ」

「時給いくら？」

思い出せなかった。

「そうか、じゃあ、勤務時間の累計は？」

それもダメだった。

ハンクはまたメモを放り出した。「タバコ、いる？」と自分のタバコを差し出した。

「それもやめます。なにもかも。ピーナッツとか、それから……」もう考えられなかった。二人ともすわったままだった。二人とも、スクランブル・スーツを着て、黙っている。

「子供にはよく言うんだがね」とハンクが口を開いた。

「おれにも子供が二人います。娘です」とフレッド。

「そんなはずはないよ。いないことになってる」

「そうかもしれません」フレッドは禁断症状がいつ始まるかを考えようとしていた。それから、あっちこちに隠した物質Dが何錠くらいあるかを考えてみた。それと、給料をもらったら、買うのにどのくらい使えるか。

「手取りの内訳がどうなるか、計算を続けてほしいんじゃない？」とハンク。

「OK」と言ってから、フレッドは力強くうなずいた。「そうして」緊張して、テーブルを指で叩きながら待った。パリスみたいに。

「時給はいくらだった？」と繰り返してから、ハンクはさっさと電話に手をのばした。「給与課にきいてみる」

フレッドは何も言わなかった。顔を伏せたまま、待っていた。ドナならおれを助けてくれるかも。ドナ、今すぐ助けて。

「きみは山までたどりつけそうにないな。誰かに運転してもらっても」とハンク。

「うん」

「どこに行きたい？」

「すわって考えさせて」

「連邦クリニック？」

「いや」

二人はすわり続けた。

いないことになってる、ってのはどういう意味だろう、と不思議に思った。

「ドナ・ホーソンのとこに行くってのは？ きみや他の連中がよこした情報で、きみたちが仲よかったのはわかってるんだ」

「うん。そうだよ」とフレッドはうなずいた。それから顔をあげた。「どうしてわかったの？」

「消去法でだよ。きみが誰でないかはわかる。そして、あの集団の容疑者なんて、無限にいたわけじゃない。ほんの小さな集団だろう。その容疑者たちが上層部に導いてくれるんじゃないかと期待してたんだ。パリスならそれができるかもね。きみとわたしとは、長いこといっしょにしゃべってきた。それで情報をつなぎあわせてみたんだ。もうずっと前につきとめたよ。きみがアークターだって」

「おれが誰だって？」と、フレッドは向かいのスクランブルスーツ、ハンクを見つめた。「おれがボブ・アークター？」信じられなかった。まるで筋が通っていなかった。自分がしたことや考えたことと、まったく一致しなかった。グロテスクだ。

ハンクは言った。「まあいいか。ドナの電話番号は？」

「たぶん仕事です」声がふるえた。「香水店。電話番号は」声のふるえが抑えられなかった。番号も思い出せない。誰にせよ、おれはボブ・アークターじゃない。でも、おれは誰だ？ ひょっとしておれは

「ドナ・ホーソンの仕事先の番号を頼む」ハンクが電話で早口でしゃべっていた。「ホレ」と受話器をフレッドに差し出した。「かけてやるから話すんだ。いや、やめとこう。きみを拾うように私が電話しとこう。どこがいい？ そこまで運転してって降ろしてやるから。彼女とここで会うわけにはいくまい。いい場所ない？ いつもどこで会うの？」

「ドナの家につれてって。自分で入れるから」

「彼女には、きみがそこにいてヤクをやめようとしてるって言っとく。きみの知り合い

で、電話するよう頼まれたとだけ言おう」

「それ最っ高。もぉバッチリ。サンキュ」

ハンクはうなずいて、またダイヤルをまわした。外線だ。フレッドには、ハンクのダイヤルのまわしかたがだんだん遅くなって、永遠に続くように思えた。目を閉じて、意識的に呼吸しながら思った。ワオウ。おれ、ホンキでいかれてるわ。

確かに、と彼は同意した。ブツ飛んで、ショートしてヤキがまわって、メロメロでどうしようもない。完ぺきにどうしようもない。笑いだしたい気分だった。

「きみを彼女の」と言いかけて、ハンクは注意を電話に向けてこう言った。「ああ、ドナ？ オレ、ボブのマブダチなんだけど、え？ いやぁ、あいつちょっとヤバい感じでさ、ほんとマジだよ。それでさ、あいつ」

もぉバッチリ。マブダチがドナに話してるのを聞きながら、彼の精神の仲で二つの声がハモって考えた。それと、おれに何か持ってくるようドナに言っといてくれよな。おれ、ホントつらいんだ。ドナならおれに何かキメさせてくれっかな。よくやるみたく、口移ししてくれるとか。手をのばしてハンクに触れようとしたが、できなかった。手が届かなかった。

「いつかあんたにも同じことしてあげる」受話器を置くハンクに彼は約束した。

「いいから表に車来るまですわってるよ。今呼んでやるから」もう一度ハンクは電話をかけた。今度はこう言っていた。「車両部？ 覆面パトと私服を一人。何か空いてる？」

二人は、スクランブル・スーツの中で、ぼんやりしたかすみは、目を閉じて待った。

「ひょっとして病院につれてかせたほうがいいのかもしれない。かなりひどい。パリスに毒を盛られたかもしれない。われわれが本当に興味をもってたのはパリスのほうで、きみじゃなかったんだ。あの家にスキャナーを仕掛けたのも、パリスに目をつけとくためだった。いずれはあいつをここに引っ張ろうと思ってて……それを果たしたわけだ」フレッドは何も言わなかった。「だから、あいつのテープだの証拠だのが偽造なのは十分承知してるんだよ。鑑識が裏付けをしてくれる。でも、パリスは何かヤバいことに関わってる。ヤバくてイカしてることで、銃のからだコトに」

「だったらおれは何だったんだ？」フレッドはいきなり大声をあげた。

「何とかジム・パリスに接近してハメる必要があった」

「貴様らクズ野郎だ」

「こっちのお膳立て通り、パリス 正体はまだわからんが きみが覆面警官じゃないかという疑いをどんどん強めていった。自分を逮捕するか、上層部に到達するために利用しようとしてるんじゃないかってね、だからヤツは」

電話が鳴った。

「わかった」しばらくしてハンクは言った。「いいからすわってるよ、ボブ。ボブ、フレッド、何でもいいや。楽にしてくれ とにかくあのチンピラは押さえたし、あいつは まあ、きみがいまおれたちに対して言ったようなヤツなんだ。それだけの価値はあった。そうだろ？ あいつをハメることで？ 何をたくらんでたにしても、それを止められて？」

「うん。価値あった」ほとんどしゃべれなかった。機械的に息をつくだけだった。

二人はすわっていた。

ニュー・パスへと車を走らせる途中、ドナは眼下の明かりが一面に見えるところで車を

止めた。でも、禁断症状が始まっていた。ドナにもそれがわかった。もう時間があまり残されていないことも。もう一度だけ彼といっしょにいたかった。グズグズしすぎたってわけ。彼の頬を涙がつたい、嘔吐が始まった。

「しばらくすわってようね」とドナは、彼をつれて茂みや雑草をぬけ、砂っぽい土を横切り、投げ捨てられたビール缶やガラクタを通り過ぎた。「あたしね」

「ハッシシ・パイプ、ある？」ボブはやっとそれだけ言えた。

「うん」とドナ。警察に気づかれないくらい道路から離れる必要があった。少なくとも、警官がやってきたときにパイプを処分できるくらい遠くに。パトカーがヘッドライトを消して、こっそりと、離れたところに停車して、警官が歩いてくるのが見えるだろう。時間はある。

ハッシシの処分に必要なだけの時間はあるんだわ。法を犯しても安全なだけの時間はある。でも、ボブ・アーウターには、もう時間がないんだ。この人の時間は 少なくとも人間の基準では もう使い果たされてしまった。今の彼は、別の時間に入りこんでる。たとえば、ネズミにとっての時間みたいなものに。前後に走り回って、再生産するだけの時間。でも、まだ眼下の明かりくらいは見えるみたい。もっとも、彼にとってはもうどうでもいいことかもしれないけど。

奥まった場所をみつめて、ドナはアルミホイルに包んだハッシシのかけらを取り出し、パイプに火をつけた。横のボブ・アーウターは、気がついた様子もない。ヘドにまみれてしまっていたが、本人はどうしようもないことはドナにはわかっていた。それどころか、気づいてさえいないのだろう。禁断症状ではみんなこうなる。

「ホラ」ドナは身をかがめて、口移ししてやろうとした。でも、こちらにさえ気づかなかった。からだを二つ折りにして腹の苦しさに耐え、吐いてからだをドロドロに汚し、身を震わせて気狂いのように、歌のようなものをうめき出していた。

その時、ドナは昔の知り合いのことを思い出した。神を見た男だ。あいつもこんなふう泣いたりうめいたりしてたっけ。吐いてドロドロになったりはしなかったけど。LSDトリップの後のフラッシュバックで神を見たのだ。水溶性のビタミンを大量に摂取する実験の最中だった。脳の中の神経のひらめきを活発にして、それを同調させるはずの正常生体分子法の実験。でもそいつの場合、単に頭がよくなるだけのかわりに、神を見てしまった。本人も、まったく予想外のことだった。

「自分を待ち受ける運命なんて、わかんないものよね。誰にしても」

横のボブ・アーウターは、うめいだけで返事をしなかった。

「トニー・アムステルダムって人、知ってる？」

返事はなかった。

ドナはハッシシ・パイプを吸い込んで、眼下に広がる明かりを静かに見つめた。空気の匂いをかぎ、耳をすませた。「神さまを見た後は、一年ぐらいうごく気分がよかったんだって。それから、すごく気分が悪くなってさ。もうそれまで一生なかったくらいひどい気分。なぜって、ある日ハッと気がついて、わかっちゃったのよ。自分が二度と神さまを見ることはないんだって。その先、残された人生をずっと生き続けて、何年も、何十年も、下手すると五十年も生きて、見るのはそれまで見飽きたものばかり。あたしたちの見るようなものばっか。神さまを見ないよりもひどい様子だったわよ。それで、ある日ホントに怒り狂っちゃったって話してたっけ。とにかく錯乱して、悪態ついてアパート中のものを叩き壊しはじめたんだって。ステレオまで壊しちゃってさ。もうそのままの状態、何

も見ないで生きてかなきゃならないってわかったから。何の目的もない、食べて飲んで、働いてウンコして、身を粉にして生きてくだけの肉の塊なんだって」

「ほかのおれたちみたく」ボブ・アークターがはじめて言えたせりふだった。一言一言が、むかつくようにつらかった。

「あたしもそう言ってやったわ。指摘したの。あたしたちだって、みんなそういう運命だけど、それで誰も錯乱したりしないって。そしたらこう答えたわ。『きみはぼくの見たものを知らない。きみにはわからないんだ』」

けいれんがボブ・アークターのからだを走り、ひきつけを起こしてから、彼はせきこむように言った。「それ……どんなだったって？」

「スパークみたいな。カラーのスパークの雨ね。テレビがどっか壊れたみたい。スパークが壁を上り、空中にもスパーク。それで、どこを見ても、世界中が生き物みたいな。偶然がなくて、何もかも調和して、ちゃんと目的があって、何かを達成するために未来の目標に達するために起きるの。それから戸口が見えたんだって。一週間ぐらいは、どっちを向いても見えてさ。アパートの中とか、外の店まで歩いてく途中とか、運転してるときとかも。それでそのドアはいつも縦横の比率がおんなじで、すごく狭かったって。すごく 快かったって言ってたわ。そう、快いって。入ってみようとしたことはなかったの。すごく快かったもんで、見てるだけ。鮮明な赤や金の光に縁どられて、スパークが、幾何みたいに集まって線になったみたいでさ。そしたら、それから一生、二度と見ることはなくて、それでとうとうイカレちゃったんだって」

しばらくしてボブ・アークターは「向こう側には何があったの」ときいた。

「向こう側には別の世界があったって。それが見えたって」

「そいつ……一度も向こうに行かなかったの？」

「だからアパート中滅茶苦茶にしまわったわけ。一度も通りぬけようなんて思わないで、戸口に感心してるだけで、後になって全然見えなくなって、もう手遅れだったから。二、三日はそいつのために開いてて、それから永遠に閉じちゃったのね。そいつ、LSDとかその水溶性のビタミンを、何度も何度も山ほどのんでたけど、二度と見えなかったって。あの組み合わせはもう見つからなかったの」

「向こう側には何があったの？」

「いつも夜だったって」

「夜！」

「月光と水があって、いつも同じ。何も動かなかつたし、何も変わらない。インクみたいに黒い水と、岸があって、島の浜辺だったって。そいつ、それがギリシャ、しかも古代ギリシャだって確信してたわ。戸口ってのはたぶん時間の弱い部分で、そこから過去が見えてるんだろう、だって。それで、後になって、もう見えなくなってから、高速でトラックに混じって走って、死ぬほど腹をたてた。動きや騒音ばっかで、何もかもあっち行ったりこっち行ったり、カンカンガタガタ我慢できなかったのね。とにかく、何で自分がそんなものを見せてもらえたのがわからなかった。それが神さまで、戸口は来世への扉なんだってそいつは本気で信じてたけど、結局フタをあけてみたら、おかげでそいつの頭がグチャグチャになっただけなわけ。しっかり自分のものにできなかったから、どうしていいのかもわからない。誰かに会うたびに、そいつはすぐに自分がすべてを失ったって言い出すのよ」

「おれもそうだ」



「その島には女がいたわ。正確にはちがうわね 彫像だわ。キレネのアフロディーテの彫像なんだって。月光を浴びて立っていて、白くて冷たくて大理石なの」

「機会があるうちに戸口を入れればよかったんだよ」

「そいつには機会はなかったのよ。むしろ約束よ。来るべきものの。遠い未来に来るはずの、何か善いものの約束。たぶんそいつが 」ドナは間をおいた。「そいつが死んだ後に来るはずの」

「そいつ、しくじったんだよ。チャンスは一回きり」ボブ・アークターは目を閉じ、苦痛と顔を流れる汗をやりすごした。「とにかく、ヤキのまわったLSD野郎に何がわかるもんか。おれたちの誰だって、何もわかっちゃいない。うまく言えない。どうでもいいや」彼は顔をそむけ、けいれんして身を震わせながら暗闇を見つめた。

「今見せてくれるのは予告編なのよ」ドナは彼に腕をまわしておもいきり強く抱きしめ、ゆっくりと前後にゆすってくれた。「あたしたちが希望を持てるように」

「きみも今、そうしてるわけだ。おれに希望を持たせようとしてる」

「あなたはいい人よ。すごく悪い取引にはめられたのよね。でも、あなたの人生が終わったわけじゃないわ。あなたのことはすごく気になってる。できたら……」ドナは、暗闇の中で黙って彼を抱きしめていた。暗闇は、彼を内側からのみこみつたある。こうしてあたしが抱いている間にも、「あなたは優しいいい人よね。あなたにしてみればこんなあんなりだけど、でも、しかたなかったのよ。できれば最後まで待ってみて。いつか、ずっと先になったら、前みたいに物が見られるようになるから。またもとどおりになるから」回復するわよ。いつの日か、人々から不当に奪われた物がすべて回復される。千年かかるか万年かかるか。でも、その日は必ずやってくる。そしたらすべてのバランスが正される。たぶん、トニー・アムステルダムみたく、あなたが幻視した神の姿は一時的に消えてるだけなのかもね。終わったんじゃないくて、ちょっと姿を隠してるだけ。こうしてる間にもどんどん焦げついてく、ダメになってきてダメになりつつあるあなたの頭の回路では、色彩と光のスパークが何かに偽装して、気がつかれないまま顕現してるのかもしれない。その記憶によって、来るべき年月、悲惨な年月を通じてあなたを導くために。その偽装は、意味不明のことばかもしれないし、目にとまっても理解されてない何か小さな物体かもしれない。星のかけらがこの世のクズと混ざって、あなたがその日まで反射的に導かれるように……でも、その日はあまりに遠い。あたし自身、本気でその日を思い描けないほど。すべてが終わる前に、ありきたりの場所にまじって、別世界からの何かがボブ・アークターの前に姿を現したのかもしれない。今のあたしにできることと云ったら、この人を抱きしめて願うだけ。

でも、もしこの人がそれをもう一度見つけたら、もしあたしたちがツイてれば、パターン認識力が戻ってくる。大脳右半球の比較能力が正常化する。生き残った大脳皮質下の部分でさえ正常化するかもしれない。そして、この人にとってあまりに悲惨で、あまりに高価について、まるで無意味だったこの旅も、終わる。

ドナの目を明かりが照らした。目の前に、警棒と懐中電灯を持ったおまわりが立っている。「二人とも立って、身分証明書を見せてもらえますかね。お嬢さん、まずあんたから」

ドナはボブ・アークターを放した。彼は横だおしになって、地面にころがった。おまわりには気づいていなかった。おまわりは、丘の上の二人のところまで、下のサービス道路からこっそり近づいてきたのだった。ハンドバッグから札入れを取り出して、ドナは警官に合図して、ボブ・アークターに聞こえないところまでつれていった。数分間にわたっ

て、警官は懐中電灯の弱い光でドナの身分証明書を調べて、それからこう言った。

「FBIの秘密捜査官の方でしたか」

「声を下げよ」とドナ。

「すみません」警官は札入れを返した。

「とにかく消えてよ」

警官はちょっとドナの顔を照らして、それから廻れ右をした。やってきたときと同じように、無音で去った。

ボブ・アークターのところに戻ってみると、彼がおまわりに全然気がつかなかったのは明白だった。今の彼はほとんど何にも気づいていなかった。ほかの誰よりも何よりも、ドナのことだけをわずかに認識している。

遠くから、こだまとなって、パトカーがわたちの多い目に見えないサービス道を下ってゆくのが聞こえた。周辺の乾いた雑草の中で、ムシが、それともトカゲが動いている。遠くに高速九十一号線が光の帯となって見えていたが、音はまったく届いてこなかった。遠すぎるからだ。

ドナはそっと言った。「ボブ、聞こえる？」

答なし。

頭の回路すべてが溶けあわさっちゃったのか。溶けてくっついちゃって。誰もその回路を開けない。どんなに努力しても。それでも努力はするのだ。

「しっかりしてよ。そろそろ行かないと」何とか立たせようと、ドナはアークターを引っ張った。

「おれ、セックスできないよ。チンポコが消えちゃって」とボブ・アークター。

「みんなあなたを待ってるのよ。あたし、あなたを連れてかないと」ドナはきっぱり言った。

「でも、チンポコ消えちゃってるのにどうしよう。それでも入れてくれっかな」

「入れてくれるわよ」

不正義をいつ適用すべきか知るためには、最大級の叡知が必要だわ。なぜ、正しいことのために正義が犠牲になるなんてことが有り得るのかしら。なぜこんなことが起きるのかしら。それは、この世に呪いがかかっているから。このすべてがそれを証明してる。証拠はあたしの目の前にいる。どこか最深部で、物の機構や組立がバラバラに崩れて、その残骸から泳ぎ上がってきたのが、もっとも賢い選択があたしたちに演じさせる、いろんな不明瞭でまちがったことをやる必要性なんだ。今じゃそれが万物の性質の一部になっちゃってる。それと、あたしたちの性質の一部にも。それをやらずには、振り返ったり口を開いてしゃべったり決断を下すことさえできない。それがいつ、なぜ、どうやって始まったかなんて、どうだっていい。ただ、いつか終わってくれさえすればいい。トニー・アムステルダムだってそうだ。いつか、まばゆい色のスパークが戻ってきて、しかもあたしたちみんなに見えてくれればいい。向こう側に平安のある狭い戸口も。彫像に海、月光らしきものも。何も動かず、平穩を破るものとてない。

むかしむかし。呪いの前、万人と万物がこんなふうになる以前。叡知と正義が同じだった黄金時代。それがみんな手を切る破片へと砕け散る以前。どんなに努力しても元通りにならない、うまく合わさらないかけらに壊れる以前。

下の暗闇と街の明かりが散らばる中で、パトカーのサイレンが聞こえた。熱い獲物を追うパトカー。殺意に燃える、発狂した動物みたいな音だった。まもなく殺せると確信して

いるようだ。ドナは身震いした。夜風が冷たい。そろそろ行かないと。

今は黄金時代じゃない。暗闇にあんな騒音があるなんて。あたしもあんな強欲な音をたてるのかしら。あたしもあんな代物なのかしら。包囲したり、包囲しつつあったり。

捕まえたり。

横の男を立ち上げさせようとする、身じろぎしてうめいた。立ち上がるのに手を貸して、車に戻るのにも手を貸した。一步づつ、一步づつ、手を貸し、手を貸し、歩き続けるのに手を貸す。下では、パトカーの音が急に止まった。追跡をやめたのだ。仕事を終えたのね。ポブ・アークターを抱きかかえながら、ドナは思った。あたしの仕事も終わったのね、と。

ニュー・パス職員二人は、床の上の物体を立ったままながめていた。それは転がって、ヘッドを吐き、身を震わせて全身ドロドロになり、腕で自分を抱きしめて、自分のからだを抱いて震えを止めようとしているみたいだった。そんなに激しく身を震わせる冷気に対抗するかのよう。

「これ、何？」と職員の一部。

「人」とドナ。

「物質D？」

ドナはうなずいた。

「頭をやられたな。敗残者がまた一人」

ドナは二人に言った。「勝つのは簡単よ。誰だって勝てる」ロバート・アークターの上に身をかがめて、彼女は無言で言った。

さよなら。

帰るとき、職員たちは古い軍放出の毛布をかけていた。ドナはふりかえらなかった。

車に乗って、ドナはすぐに最寄りの高速に乗って、一番混雑したところに入った。車の床に置いたテープの箱から、一番好きなキャロル・キングの「タバストリー」のテープを取り出して、テープデッキに押し込んだ。同時に、ダッシュボードの下に磁石で見えないようどめてあったルガーのピストルを取り外した。トップ・ギヤで、コカコーラのーリットルびんの木製ケースを運んでいるトラックのケツにはりつき、キャロル・キングがステレオで歌うにつれて、数メートル前方のコカコーラのボトルめがけて、ルガーの弾倉を空にした。

キャロル・キングが、すわりこんでカエルになってしまう人々について、慰めるように歌っている間、ドナは銃の弾倉を空にする前にびんを四本破壊できた。ガラスのかけらとコーラのしみが、フロントガラスにはりついた。気分がよくなった。

正義や正直や忠誠なんて、この世の性質じゃないわ。そして、何とドナは、かの仇敵であるコカコーラのトラックに、車をつっこませた。相手は何も気づかずに走り続けた。衝突の衝撃で、ドナの小さな車は回転した。ヘッドライトが暗くなって消え、ひしゃげたフェンダーがタイヤに当たって、すさまじいきり音があがった。車は高速から外れ、待避車線に後ろ向きで止まった。ラジエーターからは水が流れ、通過する車が速度を落とすように驚いている。

戻ってこい、このチクショウめ、とつぶやいたが、コカコーラのトラックはずっと先に行ってしまった。どうせへこんでもいないだろう。キズくらいはついたかも。まあ、遅かれ早かれ起きるはずのことだったのよ。こっちを圧倒するようなシンボルと現実

に対して戦いを挑むってのは。これであたしの保険料も上がる、と考えながら、車から降りた。この世では、悪と戦うのにも冷たい現金を支払わなきゃならない。

ムスタングの最新モデルが速度を落とし、運転手の男が声をかけてきた。「よお、彼女、乗らない？」

ドナは答えなかった。ただ歩き続けた。向かってくる無限のヘッドライトに立ち向かう、小さな姿だった。

## 第14章

カリフォルニア州サンタ・アナにある、ニュー・パス住居棟サマルカンド・ハウスのラウンジに画鋏でとめられた雑誌の切り抜き；

朝、高齢の患者が目をさましてお母さんと呼んだら、お母さんはずっと昔に死んで、あなたは八十才を越えていて、住んでいるのは保養所で、今は一九一三年ではなくて一九九二年なんだから、もっとしっかり現実を受けとめて、事実を認めなくてはならないと言いきかせ

ここの居住者の誰かが残りを破ってしまったので、そこで終わっていた。専門看護雑誌からからの切り抜きらしい。光沢紙に印刷してあった。

職員のジョージが、廊下を先導しながら言った。「ここでまずやることは、便所掃除。床と、流しと、特に便器ね。この建物には便所が三つあるから。各階一つづつ」

「OK」

「これ、モップ。それとバケツ。やりかたわかりそう？ 便所掃除だよ？ やってごらん。見てて、助け船を出してやるから」

裏のポーチの水槽までバケツを運び、中に洗剤を入れてお湯を流しこんだ。見えるのは、目の前の水の泡だけ。泡と、水音と。

でも、見えないところからジョージの声が聞こえた。「あんまりいっぱいしないで。持ち上げられないよ」

「OK」

「自分がどこにいるか、ちょっとわかんないだろ」しばらくしてジョージが言った。

「ぼくはニュー・パスにいる」バケツを床に置くと、水がはねた。つつ立って、それを見つめていた。

「どこのニュー・パス？」

「サンタ・アナの」

ジョージはバケツを持ってきて、ワイヤーの取っ手をどう持てばいいか、歩きながら前後にどう振ればいいのかをやって見せてくれた。「たぶんそのうちに、島か農場のどこかに移ってもらうことになると思う。その前に、皿洗いがあるけど」

「それならできる。皿洗い」

「動物は好き？」

「うん」

「畑仕事は？」

「動物」

「まあ、いずれね。きみのことがもっとよくわかるまで待とう。どうせしばらくはかかるし。みんな一月は皿洗いするんだ。入ってくるやつはみんな」

「なんか田舎で暮らしたいんだけど」

「施設は何種類かある。どこが一番向いてるかはこっちで判断する。そうそう、タバコは吸ってもいいんだよ。勧めはしないけど。ここはシナノンとはちがうから。あそこじゃ吸わせてくれないんだよ」

「タバコ、もう持ってない」

「ここにいる人には、みんな一日一箱あげてる」

「お金は？」持ってなかった。

「無料だよ。ここでは何でも無料。きみはすでに代償を払ったんだから」ジョージはモップを取って、バケツに押し込み、モップのかけかたをやって見せた。

「ぼく、なんでお金を持ってないの？」

「財布や名字がないのと同じ理由だよ。いずれ返してもらえる。全部返してもらえる。そうなるようにしてあげたいんだ。きみの奪われたものを取り戻させてあげたい」

「靴があわないんだけど」

「新品だと、店からの寄付だけが頼りなんだ。そのうち寸法を測ってやれるかも。箱の中の靴は、全部はいてみた？」

「うん」

「わかった。で、これが一階の便所。まずここからやって。で、ここが終わったら、ちゃんとしてしっかり終わったら、完ぺきにできたら、そしたら上に行って　モップとバケツは持ってけよ。そしたらその便所を教えてあげよう。その後で、三階の便所。でも、三階に上がるときは許可がいる。あそこは女が住んでるから、だからまず職員の誰かにきいて。絶対に許可なしで上がるなよ」とジョージは背中をどやした。「いいね、ブルース。わかった？」

「OK」ブルースはモップをかけた。

ジョージは言った。「こういう便所掃除とか、そんなような仕事をしばらくやってもらうよ。カンがつかめて立派にこなせるようになるまで。人が何をやるかなんて大事なことはない。そのカンがつかめて、立派にやって、誇りを持てるかどうか大事なんだ」

「いつか、昔のぼくに帰れるかなあ」ブルースはきいた。

「そういう人間だったせいでここに入れられたんだろ？　もし昔のきみに戻ったら、遅かれ早かれここに戻ってくることになる。この次は、ここにたどりつかないかもしれないよ、ひょっとして。そうだろ？　ここに来られたのは運がよかった。来られなかったかもしれないんだから」

「ほかの人が車で連れてきてくれた」

「幸運だった。次のときは、連れてきてくれないかもよ。どっかの高速道路の脇に放り出して、後は知らない、なんてことになるかもよ」

ブルースはモップがけを続けた。

「いちばんいいやり方は、まず流しをやって、それから風呂おけで、それから便器で、床は最後にやる」

「OK」ブルースはモップを置いた。

「コツがあるんだ。いずれ覚える」

意識を集中させて、目の前の流しのほうろうに入ったヒビを見つめた。そのヒビにクレンザーを流して、お湯を流した。湯気がたちのぼる。湯気が広がる中、動かずに立ちつくした。いい匂いだった。

昼食のあと、ラウンジにすわってコーヒーを飲んでた。誰も話しかけてこなかった。ヤクを断っている最中なのがわかってたからだ。すわってコップのコーヒーを飲んでみると、みんなの会話が聞こえてくる。ここではみんな知り合い同士だった。

「もし死人の体内からものを見たら、一応見えるけど、でも目の筋肉が動かさないし、だから焦点をあわせられない。頭も動かさないし、目玉も動かさない。何か物体が目の前を通り過ぎるのを待つだけ。凍りついたままで、ひたすら待つだけ。悲惨だろうな」

コーヒーからたちのぼる湯気を見つめる。それだけ。湯気がたちのぼる。いい匂いだった。

「ねえ」手が触れた。女の手だった。

「ねえ」

ちょっと目をそらした。

「どう、元気？」

「OK」

「気分ましになった？」

「気分はOK」

コーヒーと湯気だけをながめ、彼女もほかの誰も見なかった。ひたすらコーヒーを見おろしていた。暖かさと匂いが好きだった。

「誰かがまん前を通れば見える。そのときだけは。そのとき自分が向いてる方向だけで、それ以外は全然。葉っぱか何かが目の上に落ちてきたら、もう永遠にそれっきり。葉っぱだけ。ほかには何も見えない。向きを変えられないから。」

「OK」コーヒーを持ってブルースは言った。コップを両手で抱えている。

「知覚はあっても生きていないのを想像してごらん。見て、知ることもできるけど、生きてないの。ただ外を見てるだけ。認識はできるけど、生きてないの。人は死んでもまだやってける。ときどき人の目からのぞいてるものは、子供時代に死んだものかもしれない。中のものは死んでるんだけど、まだ外を見てる。空っぽのからだがかっちを見てるとはちがう。中には何かいるんだけど、そいつは死んでて、ひたすら見続けてんの。見るのをやめられないの」

別の誰かが言った。「死ぬってそういうことだよ。目の前のものを見るのがやめられなくなるっていう。どうしようもないもんがズバリそこに置かれても、こっちには選んだり変えたりすることはいっさいできない。そこに置かれたものをそのまま受け入れるしかない」

「お前、ビールの缶を永遠に見つめ続けるってのはどう？ そんなに悪くないかもよ。何も恐くないわけだし」

食堂で出される夕食の前に、コンセプトの時間があつた。職員が黒板にいるんなコンセプトを書いて、それが討議される。

ひざで手を組んで床を見つめ、火にかけられた大きなコーヒー沸かしの音を聞いていた。そいつがシューシューいうので恐かった。

「生物と無生物は、お互いの持ち分をやりとりしている」

あちこちの折り畳み式の椅子にすわって、みんなこれについて話し合った。このコンセプトは、どうやらニュー・パス式の考え方の一部みたいで、ひょっとしてみんなこれを暗記して、何度も何度も考えてみたのかもしれない。シューシュー。

「無生物の勢力は、生物の勢力よりも強い」

それについて話し合った。シューシュー。コーヒー沸かしの音はどんどん大きくなって、もっと恐かったけれど、移動したりそっちを見たりはしなかった。そのままの位置にすわって、聞いているだけ。コーヒー沸かしのせいで、みんなが何を言っているのか聞き取るのはむずかしかった。

「われわれは無生物の勢力を自分たちの中に取り入れすぎている。そして受動的なちょっと誰かコーヒーポットを見てくれる？ 何であんな音たててんの？」

ひとしきりあって、誰かがコーヒー沸かしを調べた。彼は視線を落とし、待った。

「さっきの、もう一度書くよ。『われわれは、自分たちの受動的な生と、外の現実とを交換しすぎている』」

それについて話し合った。コーヒー沸かしはおとなしくなって、みんなぞろぞろとコーヒーを取りにきた。

背後で声がして、手が触れた。「コーヒー要らないの？ ネットだっけ？ ブルースだっけ？ こいつ何てったっけ ブルース、だよな？」

「OK」立ち上がって、みんなの後についてコーヒー沸かしのところへ行った。自分の順番を待つ。自分のコップにクリームと砂糖を入れるのを、みんなが見ていた。もとの椅子に戻るのもみんなが見ていた。自分がちゃんともとの椅子を見つけたのを確かめて、すわって、また聴くのを確認した。暖かいコーヒーと、その湯気で、いい気分だった。

「活動は必ずしも生命の証拠ではない。ケーサーは活動する。瞑想する僧は無生物ではない」

すわって空のコップを見つめた。瀬戸物のマグだった。ひっくり返してみると、底に印刷があって、うわぐすりにひびが入っていた。古そうなマグだったけれど、デトロイト製だった。

「回転運動は、宇宙で一番不活発なものである」

別の声があった。「もう時間だよ」

これの答は知っていた。時間は丸い。

「うん、そろそろ終わらないとね。最後に何か一言言いたい人はいる？」

「えーと、生き残るためには、抵抗が最小のコースに従うのが原則だっておきたいです。従うのであって、導くんじゃない」

もっと年寄りの声があった。「そう、従う者は導く者より長生きする。キリストみたいに。その逆は成り立たない」

「飯にしたほうがいいぞ。今じゃリックは、五時半ぴったりに食事を止めるから」

「この話はゲームでやろう。今はダメ」

椅子がキーキーガタガタ言った。彼も立って、古いマグをほかのマグのあるトレーに運び、部屋を出る行列に加わった。まわりで冷たい服の匂いがした。いい匂いだけど、冷たい。

どうもこの人たちは、受動的な生がいいって言ってるみたいだ。でも、受動的な生なんてない。そんなの矛盾してる。



生って何だろう。その意味は？ ぼくにはわからないのかもしれない。

けばけばしい服が、山ほど寄付されて届いた。何人かが腕いっぱい服を抱えてつたっていたし、すでにシャツを着て、試着してみんなの賛同を得ようとしていた。

「よお、マイク。きまってるじゃん」

ラウンジの中央に、背の低いごっつい男が立っていた。カールのかかった髪で、顔はずんぐりしている。その顔をしかめて、ベルトをいじっていた。「これ、どうすんの？ ちゃんと止まらないんだけど。ゆるめるにはどうすんの？」彼は幅十センチの金属リングのついた、バックルレスのベルトを手にしていて、どうやってリングで締めたらいいのかわからなかったのだ。目をキラキラさせて、あたりを見回している。「誰も使えないからおれんどこにまわしたんだぜ」

ブルースはそいつの背後にまわって、手をからだの前にまわし、ベルトをリングに輪っか状に通して締めてやった。

「どうも」とマイク。唇をすぼめながら、礼装用シャツをいくつかかきまわしていた。そしてブルースに「結婚するとき、こういうのを着るんだ」と言った。

「すてき」とブルース。

マイクはラウンジの反対側にいる女二人の方へ歩いていった。二人はにっこりした。バーガンディの花柄シャツをからだに当てて、マイクは「街にくりだすんだぜ」と言った。

「よーし、中に入って飯だ！」舎監が力強い声で元気よく叫んだ。そしてブルースにウィンクした。「いよっ、調子どう？」

「いいよ」とブルース。

「風邪ひいたみたいいな声だなあ」

「うん。ヤク切れのせいだよ。ドリストンかなんかもらえ」

「薬はダメ。何も。早く入って喰えよ。食欲は？」

「前よりいい」とみんなの後に続いた。みんな、テーブルからこっちを見てにっこりした。

夕食後は、二階へ続く広い階段の半ばにすわっていた。誰も話しかけてこなかった。会議が行われていたのだ。会議が終わるまですわっていた。みんなが現れて、廊下にあふれた。

みんながこっちを見るのが感じられたし、中には話しかけた人もいたかもしれない。階段にすわって、背中を丸め、腕を自分のからだにまわして、ひたすら見続けた。目の前の暗いカーペットを。

やがて声がしなくなった。

「ブルース？」

身じるぎもしなかった。

「ブルース？」手が触れた。

何も言わなかった。

「ブルース、ラウンジにこいよ。ホントは部屋に戻って寝てなきゃいけないんだけどよでもさ、お前と話がしてえんだ」マイクは先に立って、後に続くよう合図した。マイクに従って階段をおり、ラウンジに入った。空っぽだった。ラウンジに入ると、マイクはドアを閉めた。

自分が深い椅子にすわってから、マイクは向かいの椅子にすわるよう合図した。疲れているみたいだった。小さな目のまわりに隈ができて、おでこをこすっていた。

「今朝は五時半から起きてんだ」とマイク。

ノックがした。ドアが開き始めた。

すごい大声で、マイクは怒鳴った。「誰もここに入ってくんじゃねえ。話してんだ。わかったか」

ぶつぶつ声。ドアが閉まった。

「なあおい、シャツは一日に二、三回替えたほうがいいぜ。ときどきすげえ汗かいてるぞ、お前」とマイク。

うなずいた。

「カリフォルニアのどっから来た？」

何も言わなかった。

「こう、気分が今くらい悪くなったら、おれんどこに来んだぜ。おれも経験済みだからよ、一年半ばかり前かな。前は車で乗り回してくれたんだ。今とは職員もちがっててよお。エディに会ったかい。背の高い、禁酒野郎ですぐみんなをけなすやつ。おれを八日ぶっ続けでドライブに連れてってくれた。絶対一人にしとかなかった」マイクはいきなり叫んだ。「おい、出てってくれよな。おれたちここで話してんだから。テレビでも見てこいよ」声を落としてブルースに目を向けた。「たまにはやんなきゃならないんだよな。絶対に誰かをひとりぼっちにしないって」

「なるほど」とブルース。

「ブルース、自殺したりすんじゃねえぞ」

「はい、わかりました」ブルースは下を向いて言った。

「そんなあらたまった口きくなって！」

うなずく。

「おまえ、軍にいたのかよ？ そういうわけ？ 軍でブツにイカレたわけ？」

「いいえ」

「射ってたの、のんでたの？」

無言だった。

「『はい、わかりました』だもんな。おれもお勤めは十年もやっててよ。いつだったか、同じ房列のやつらが、同じ日に八人も自分の首をかき切ったのを見たこともあったな。寝るときは便器に足をつっこんで寝たもんよ。ハコが狭かったもんでね。ムショってそういうもんだぜ、便所に足をつっこんで寝るってなとこ。ムショに入ったことないんだろ、え？」

「ない」

「でも逆に、八十才の囚人が喜々として生き延びて、この先も生き続けたがってるってこともあった。ヤク漬けだった頃を思い出すなあ。おれ、射ってたんだ。十代で射ちはじめて。ほかにはなんにもやんなかった。射って射って、十年くらった。射ちすぎてヘロインとDを混ぜたもんだった　もうほかにはなんにもやんなかった。ほかにはなんにも見えなかった。いまじゃヤクもやめてムショも出て、ここにいるわけ。何がわかったと思う？ 何がいちばん変わったと思う？ 今じゃ外の道とか歩いてて、ものが見えるんだよ。森へ行ったときも、水の音が聞こえるんだ　いずれほかの施設にも連れてってもらえっからよ、農場とか。道を歩いててもさ、ふつうのそこの道だけ、それで犬とかネ

コカが見えるんだよ。前は全然見たことなかった。見えたのはヤクばっか」彼は腕時計を見た。「だから、お前の気分はよっくわかんよ」

「やめるの、つらい」とブルース。

「ここじゃみんなやめたんだぜ。まあ、また始めるやつもいるけどよ。もしここを出たら、また始めちゃうんだぜ。知ってるだろ」

うなずく。

「ここにいるようなやつは、みんなつらい目に会ってきてんの。いや、お前の人生がつかなくなかったって言ってんじゃないぜ。エディならそう言っただろうけどよ。あいつにかかると、お前の苦勞なんざママゴトだって話になっちゃう。ママゴトみたいな苦勞なんかねえよなあ。みんなつらいときはつらいんだから。お前の苦勞はわかるぜ。でも、おれだってその苦勞は味わってるんだ。今じゃずっといい気分。ルームメイトって誰？」

「ジョン」

「ああそう、ジョンね。だったら地下室にいるわけか」

「気に入ってる」

「うん、あったかいもんな。お前、すごく寒くなったりすんだろ。ほとんどみんなそうだったし、おれだって確かそうだった。いつも震えてて、クソもらしちゃうの。ま、言っとくけど、このニュー・パスにいれば、この一回だけで済むからな」

「どのくらいいれば？」

「残り一生」

ブルースは顔をあげた。

「おれだって出らんないんだぜ。外に出たら、ヤクに逆戻りだもん。外には仲間が多すぎるもんでよ。また街角に立って、さばいたり射ったりして、そんでムシヨに二十年くらいこむ。そうだなあ おれ、もう三十五才で、今度初めて結婚すんだ。ローラに会った？ おれの婚約者」

よくわからなかった。

「きれいな娘で、ぼちゃっとしてて。プロポーションがよくて」

うなずく。

「ローラも外に出るのが恐いの。誰かがついてってやないとダメ。おれたち、動物園に行くんだ……来週、理事の坊やをサン・ディエゴ動物園につれてくんだけど、ローラは死ぬほど恐がっててさ。おれよりも恐がってるんだぜ」

無言。

「聞こえてんの？ おれが動物園に行くのが恐いっての？」

「うん」

「動物園に行っただって記憶がなくてさ。動物園って、何すりゃいいの？ お前なら知ってるかも」

「いろんな檻とか、放し飼いになってる囲いとかの中を見るの」

「どんな動物がいるわけ？」

「いろんな」

「たぶん野生のだろうな。ふつうは野生のやつ。それとか珍しいのとか」

「サン・ディエゴ動物園には、ほとんどあらゆる野生動物がいるんだよ」とブルース。

「ああいう……なんてんだい？ コアラぐまとかいうのも？」

「うん」

「前にテレビでコマーシャルを見て、そこにコアラぐまが出てきた。跳ねるんだ。ぬいぐるみみたいだったけど」

「子供たちの持ってるような、昔のテディ・ベアは、二十年代にコアラぐまをもとにつくられたんだ」とブルース。

「ほお、そうかい。コアラぐまを見るにはオーストラリアに行かなきゃなんねえんだろ。それとももう絶滅しちゃったかい？」

「オーストラリアにはいっぱいいるよ。でも輸出は禁止されてる。生きたままでも毛皮だけでも。ほとんど絶滅しかかったからね」

「おれ、どこにも行ったことないなあ。ブツをメキシコからブリティッシュ・コロンビアのヴァンクーヴァーまで運んだときだけだ。そのときはいつもおんなじルートで行ったんだ。だから何も見なかった。とにかくブツとばして、早いとこ片づけちまおうってだけ。おれ、今じゃこの財団の車を運転してんだぜ。お前、その気になったら、気分が悪くなったら、おれがちょっとドライブに行行ってやるからな。おれが運転して、話をしようぜ。おれならいいんだ。エディとか、今はここにいない職員だっておれのためにやってくれたんだ。おれならいいんだ」

「ありがとう」

「さて、そろそろおれたちも寝ないとな。お前、もう朝の台所当番になってんの？ テーブルの用意したり、給仕したりとか？」

「ううん」

「じゃあおれと同じだけ寝られるじゃん。朝飯のときに会おうぜ。おれといっしょのテーブルにすわれよ。ローラに紹介してやっから」

「いつ結婚するの？」

「あと一月半。お前も来てくれると嬉しいなあ。もちろん、式はこの建物だから、みんな来られるけど」

「ありがとう」とブルース。

ゲームですわっていると、みんなに怒鳴られた。見渡す限りの顔が、絶叫している。彼は視線を落とした。

「こいつ、何だか知ってる？ カマトトよ！」ひときわかん高い声で、顔をあげた。醜く歪んだ絶叫に混じって、中国人の娘がわめいていた。「おまえなんか、カマトトだよ！ このカマトト野郎！」

「一人でカイてる！ 一人でカイてる！」一同は、床の上で彼の回りを取り囲み、声をそろえた。

理事は、赤いベル・ボトムとピンクのスリッパをはいて、ニコニコしていた。焦点の合わないキラキラした目が、気狂いみたいだった。前後に身をゆすり、ひよろ長い脚を折って、クッションなしできちんと正座している。

「ここでせんずりこいてみな！」

理事は、何かが壊れるのを目にすると嬉しそうだった。目がキラキラして喜びにあふれた。昔の宮廷からの仰々しい女形みたいに、趣味の良い派手な服を着て、キョロキョロしては楽しんでた。そしてときどき震える声を出す。耳ざわりで単調な、金属音のような声。キーキー言うちょうつがいみたい。

「カマトト野郎！」と中国娘がわめいた。その隣で、別の女が手をバタバタさせて、ふくれっ面をしてみせた。プップッ。「ほら！」中毒娘がわめいて、くるっと振り向いてお尻を突き出し、それを指さしてまゝわめいた。「だったらあたしのケツにキスしな、カマトトめ！ 人にキスしたいんなら、こいつにキスしな、カマトト！」

「せんずりこいてみな！ せんずりこいてみな！」ファミリーが声をあわせた。

目を閉じたが、耳はまだ聞こえた。

「このボン引き。クソ野郎。無礼講男。ウンコ野郎。くされチンポ。この」等々、理事はゆっくりと単調に語りかけてきた。次々に。

耳からはまだ音が入ってきたが、入り混じっていた。一度顔をあげたのは、声がちょっと弱まったときに、マイクの声がしたときだった。マイクは平然と、こっちを見ていた。ちょっと顔を紅潮させ、礼装シャツのカラーがきつすぎるので首が赤くなっている。

マイクが言った。「ブルース。どうした？ なんてこんなとこに来た？ 何か言いたいことはねえか？ 何か自分のことで話せることねえの？」

「ボン引きめ！ お前、何者だったんだよ、このボン引き野郎！」ジョージはそう絶叫しながら、ゴムまりみたいに上下に跳ねていた。

中国娘は飛び上がって金切り声をあげた。「言ってみろよ、この尺八おかま娼夫のボン引き野郎、ケツなめ男、クソ野郎！」

彼は言った。「ぼくは目だ」

「このくされちんぽ。根性無し。ゲロ人間。ちんぽこ吸い。おかまの女役」と主任監督。もう何も聞こえなかった。それに、ことばの意味も忘れた。そしてとうとう、ことばそのものも忘れた。

ただ、マイクが見ているのだけは感じた。見て、そして答を待っているのに、こっちは何も返事できない。知らなかったし、思い出せなかったし、ほとんど感じなかったけど、気分悪かった。この場を去りたかった。

内部の真空が大きくなった。実はちょっとありがたかった。

その日も遅くなったのこと。

「ここをご覧。気狂いを収容しとくところ」と女が言った。

女がドアを開けると恐かった。ドアがバタンと開いて、部屋から騒音があふれた。その大きさにびっくりした。でも、目に入ったのは子供たちの遊ぶ姿だった。

その晩、年寄りが二人、子供たちにミルクと小さな食料を食べさせるのをながめた。二人は厨房近くの、別々の小さなアルコーヴにすわっている。みんなが食堂で待っていたけれど、コックのリックは、先に子供たちの食事を年寄り二人に渡した。

食堂に皿を運びながら、中国人の娘が微笑みかけた。「子供、好き？」

「うん」

「子供たちといっしょに食べてもいいのよ」

「へえ」

「いずれ食べさせてあげてもいいわよ、そうね、一月か二月もすれば。あなたが子供をぶたないのが、はっきりわかればね。ここの規則なの。ここの子供は、何をしても絶対にぶっちゃいけない」

「OK」子供たちが食べているのを見ると、あったまって生き返ったような気がした。すわると、子供が一人、ひざによじ登ってきた。おさじで食べ物をすくって、子供に食べ

させてやる。子供も自分も、同じくらいあったかい気分だと思った。中国人の娘はにっこりして、食堂に皿を運び続けた。

長いこと子供たちに混じってすわり、一人、また一人と子供を抱いた。年寄り二人は、子供たちと言い争って、お互いの食べさせ方について悪口を言い合った。食べ物のかけらや塊や染みが、テーブルや床に飛び散った。ハッと気がつく、子供たちは食べ終えて、でっかい遊技室へテレビマンガを見に行ってしまった。ぎくしゃくと身をかがめて、こぼれた食べ物を片づけようとした。

「おい、そりゃあんたの仕事じゃない！ わしがやるはずの仕事だ」年寄りの一人がきつい口調で言った。

「OK」と同意して、立ち上がり、テーブルの角に頭をぶつけた。こぼれた食べ物を手に持って、不思議そうにそれを見ていた。

「食堂の掃除でも手伝ってこい！」もう一人の老人が言った。ちょっとどもり気味だった。

厨房の手伝いの一人、皿洗いをしていたやつが、通りすがりにこう言った。「子供とすわるのって許可がいるんだぜ」

うなずき、混乱して立っていた。

「あれって年寄り用だぜ。子供のおもりなんてよ」皿洗いの男は笑った。「ほかに何にもできないやつ用」そして行ってしまった。

子供が一人残っていた。大きな目でこっちを観察している。「名前は？」

何も答えなかった。

「ねえってば、名前は？」

こわごわ手をのばして、机の上の牛肉のかけらに触った。もう冷えていた。でも、隣の子供がいたので、まだ気分はあったかかった。女の子の頭にちょっと触った。

「あたしの名前はテルマ。名前、わすれちゃったの？」とこっちをつつく。「名前わすれたら、手に書いとけばいいんだよ。やってみせたいよか」と、またつづく。

「洗ったら落ちない？ 手に書いたら、何かやったりお風呂に入ったりしたら消えちゃうよ」

「あっ、そうか」女の子はうなずいた。「じゃあ、かべに書いといたら？ あたまの上のところに。ねる部屋のかべ。消えないように、高いところに書いといて、じぶんの名前がもっとちゃんと知りたくなったら、」

「テルマ」彼はつぶやいた。

「ううん、それ、あたしの名前よ。おじさんちがう名前にしないと。それにテルマって女の子の名前だよ」

「そうだなあ」彼は考えこんだ。

「こんど会ったら、あたしが名前つけたげるね。考えたげるから。いい？」

「ここに住んでるんじゃないの？」

「住んでるよ。でもママが出てくかもしないの。あたしと弟もつれて、出てこうかなって言うんだ」

うなずいた。あったかさが少し消えた。

突然、理由はまったくわからなかったけれど、子供は走って行ってしまった。

とにかく、自分の名前を考えないと。ぼくの責任だもん。自分の手を調べて、なんでそんなことをしているんだろうと不思議に思った。何も見るものなんてないのに。ブルース

だ。それがぼくの名前だ。でも、もっとましな名前があるはずだけど。残っていたあったかさもだんだん消えていった。子供と同じように。

またひとりぼっちで、変な、迷子になったような気分だった。あんまり幸せじゃなかった。

ある日、マイク・ウェスタウェイは、近所のスーパーマーケットが寄付した腐りかけの商品を取りに出してもらえた。しかし、職員が誰も尾行していないのを確かめると、電話をかけて、マクドナルドの店先でドナ・ホーソンと会った。

二人で外にすわり、コカコーラやハンバーガーの乗った木のテーブルをはさんで向き合った。

「ホントにうまくもぐりこませられたの？」とドナ。

「ああ」とウェスタウェイ。しかし、内心考えた。あいつはイカレきってる。大丈夫だろうか。本当にモノになるだろうか。でも、こうするしかないんだ。

「特に警戒してないのね」

「ああ」とマイク・ウェスタウェイ。

ドナが言った。「あなた個人としては、連中があのブツを栽培してるのは確かだと思う？」

「いや。おれが信じてるわけじゃない。お上だよ」おれたちを雇ってる連中。

「あの名前の意味は？」

「モルス・オントロギカ。精神の死。アイデンティティの死。人間の本質の死」

「彼、やってくれるかしら」

ウェスタウェイは、通りすぎる車や人をながめた。食べ物をもてあそびながら、ぼんやりとながめている。

「確信はないのね」

「コトが起きるまではわかりっこない。記憶だ。焦げた脳細胞が二つ三つついたり消えたり。やってくれると言うけれど、行動するというよりも反射運動みたいなものだ。こっちは希望を持つしかない。聖書でパウロが言ってるだろう。信仰と希望と、金をばらまくこと」彼は向かいのきれいな黒髪娘を観察し、その知的な顔立ちの中に、なぜボブ・アークター いや、あいつのことはいつもブルースだと思わないと。さもないと、知りすぎてるせいでつかまっちゃう。おれが知るはずも、知るよしもないことを知ってると言って。なぜブルースがこんなにもドナに魅かれたのかを見てとれた。まだ、ものが考えられた頃のブルースの話だけれど。

「彼、すごくよく訓練されてるから」というドナの声は、驚くほど絶望的だった。そして同時に、悲しみの影が顔をよぎり、その輪郭をひきつらせてゆがませた。そして「高すぎる代償だわ」と半ば独り言のように言い、コーラを飲んだ。

マイクは思った。でも、ほかに方法はなかったんだ。あそこに入るには、おれだっただけ入れない。もう今では確実になってる。おれがどれだけ努力したことが。あいつらは、ブルースみたいなヤキのまわりきったカスしか入れない。無害なヤツしか。そう、まるで……あいつみたいでないと。さもないと、やつらは危険を冒さない。それがやつらの方針だ。

「政府の求めるものはやたらに大きいのね」とドナ。

「人生の求めるものだってやたらと大きいよ」

目をあげて、ドナは怒りをにじませながらこっちをにらんだ。「この場合は連邦政府よ。ほかの何物でもなく。あなたからも、あたしからも、それに」ここで口を止めた。「それにあたしの友だちだったものからも」

「あいつはまだきみの友だちだぜ」

激しい口調でドナは「彼の残りカスよ」と言った。

マイク・ウェスタウェイは思った。彼の残りカスは、まだきみを求めているんだよ。自分なりのやり方で。マイクも悲しかった。でも、いい日だった。人々や車は気分がよかったし、空気もいい匂いだった。それに成功の見通しがあった。一番気分のいいのがそれだった。ここまで来たのだ。残りの道のりだって行けるとも。

ドナが言った。「あたしね、ホントに思うんだけど、誰かや何か生き物が、それと知らないうちに犠牲になっちゃうのほど悲惨なことってないんじゃない？ 知ってたらまだいいわ。ちゃんと理解して、自発的に犠牲になったんなら。でも」と身ぶり。「彼は知らないのよ。全然知らなかった。自発的でもなかったし」

「自発的だよ。それが彼の仕事だったんだから」

「彼はまったく予期してなかったわ。今だってまるでわかってない。だって、今じゃわかりようがないものね。あなただって、そのくらいわかってんでしょ。そして彼はこの先一生、生きてる限り、何一つ考えられないのよ。反射行動だけ。偶然そうなったわけじゃない。そうなるよう仕向けられたのよ。だからあたしたちは、こう、悪い業を背負ったわけ。背中に感じられるわ。死体みたい。背中に死体をついでるみたい」ボブ・アークターの死体を。生物学的には生きてるわけだけど」ドナの声が大きくなった。マイク・ウェスタウェイが身ぶりで制すると、ドナは目に見えて努力して気を落ち着けた。ほかの木テーブルにすわってハンバーガーやシェイクを楽しんでいる人々が、探るようにこちらを見ていた。

しばらくしてウェスタウェイが言った。「そうだな、こういう見方をしてごらんよ。精神を持たない人間や生き物なら、やつらも尋問するわけにはいかないんだ」

「仕事に戻らなきゃ」とドナは腕時計を見た。「上には、あなたの話だと何も問題なさそうだって言っとくわ。あなたの意見ではそうだって」

「冬まで待てよ」とウェスタウェイ。

「冬？」

「それまでかかる。理由は聞くな。でも、そうなってるんだよ。冬にうまく行くか、あるいはまるでうまくいかないか、二つに一つ。その時に手に入るか、あるいは全然だめか」ずばり冬至に、と彼は思った。

「ふさわしい季節ね。すべてが死に絶えて雪に覆われた季節」

マイクは笑った。「カリフォルニアで？」

「精神の冬よ。モルス・オントロギカ。精神が死ぬ季節」

「眠っているだけだ」とウェスタウェイ。立ち上がった。「おれもいかなきゃ。植物どもを山ほど取ってこないと」

ドナは、悲しそうに黙りこくって、悩み深そうな失望をこめてこっちを見つめた。

「厨房用の植物だよ。ニンジンやレタス。その手の代物。マッコイ・マーケットがニュー・パスの貧民どもに寄付してくれたんだ。気にさわったらすまない。別に植物人間とかいうシャレで言ったわけじゃなかった。深い意味はなかったんだ」マイクはドナの革ジャンの肩をたたいた。そのとき、この革ジャンは、ボブ・アークターが健康で幸せだっ



た日々に、プレゼントとしてドナに買ってやったものだろうと気がついた。

「この件では、ずいぶん長いこといっしょに仕事してきたわね。この先そう長くは続けたくないわ。もう終わってほしい。ときどき眠つかれない夜なんか、クソッ、こっちのほうがヤツらより冷酷じゃないかって思うもの。ヤツらって、敵さんよ」

「きみを見ても、冷酷な人間とはまるで思えんがね。といっても、まあきみをそんなによく知ってるわけじゃないし。おれに見えるのは、はっきり見えるのは、この世で一番暖かい人間だよ」

「外見は暖かいの。他人に見えるところは。暖かな目、暖かな顔、暖かなクソつくり笑い。でも、内面はいつも冷酷で、ウソだらけだわ。あたしは見かけとはちがう。ひどい人間よ」女の声は落ち着いたままで、話しながら、その顔には微笑が浮かんでいた。瞳は大きくて優しく、後ろめたさはまったくなかった。「でも、やっぱりほかにどうしようもないのよ。でしょ？ もうずいぶん昔にそれを悟って、自分をこういうふうに変えたの。でも、そんなに悪いもんじゃないわ。こうしてれば欲しいものが手に入るし。それに誰だってある程度はこんなふうなのよ。あたしの何が悪いって、ウソつきだってこと。友だちにもウソつくし、ボブ・アークターにはウソつきっぱなしだった。一度なんか、あたしの言うことを何もかも鵜呑みにしないように言ってやったんだけど、もちろん冗談だと思っただけ。聞こうとしなかった。でも、あたしはちゃんとやったんだから、その後であたしの言うことを聞かないとか信用しないとかいうのは、彼の責任よね。注意はしたんだから。でも、右から左にぬけて、全然変わらなかった。もとのまま続けただけ」

「きみはやるべきことをやったんだ。やるべき以上のことさえやった」

女はテーブルを離れはじめた。「OK、それじゃとりあえず、特に報告することはないのね。あなたが大丈夫だと言ってるってだけね。彼が入りおおせて、受け入れられたって。あの」と身を震わせて、「あのゾットするゲームでも、何も白状しなかった、と」

「その通り」

「じゃ、またね」ドナは立ち止まった。「連邦側は、冬まで待ちたがらないわよ」

「でも冬しかない。冬至の日」とウェスタウェイ。

「何の日ですって？」

「とにかく待って、それと祈って」

「そんなの無意味よ。祈るなんて。昔はいろいろと祈ったもんだけど、もうやんない。お祈りなんか効くんなら、こんなあたしたちがやってるみたいなことをやる必要なんかはないはずよ。お祈りもウソっぱちだわ」

「ほとんど何でもそうだよ」とマイクは立ち去る女の後を数歩追った。彼女に魅かれ、好きになった。「きみが友だちを破滅させたとは思わんよ。おれの見たところ、きみだって被害者に負けず劣らず破滅してる。ただ、きみの場合は外に出ないだけだ。とにかく、あれしかなかった」

「あたし、地獄行きね」とドナは突然にっこりした。少年のような大きな微笑だった。「育ちがカソリックだし」

「地獄では五ドルのヤク入りの袋を売ってくれるんだと。帰ってあけてみると、中に入ってるのはM&Mチョコボール」

「M&Mは七面鳥のウンチでできてんのよ」と言って、ドナはいきなり消えた。行き来する人々の間にかき消えてしまった。マイクはばちくりした。ボブ・アークターもこういう気分だったんだろうか。そうにちがいない。さっきまでしっかりと永遠にそこにいそう

で、次の瞬間 何もなし。火が空気のように消え失せ、大地の一部が大地にかえるように消える。決していなくなることはない、その他大勢人種の中にまぎれこむ。彼らの中に注ぎこまれる。変転の蒸発娘、か。望みのままに現れては消え。誰も、何もついていけない。

おれは風を網にかけようとする。アークターもそうだった。連邦麻薬濫用取締官の一人をガッチリつかもうとしては、無駄な努力を続ける。相手は隠れているのに。業務命令次第で溶け去ってしまう影なのに。もともといなかったかのごとく、消え失せてしまうのに。アークターが恋していたのは当局の幽霊、一種のホログラムだ。ふつうの人間は、彼らを通り抜けて向こう側に出られてしまう。決してしっかりつかむことなしに。

神の仕事は悪を善に変えることだ。もし神がここで活動しているなら、ここでも悪を善に変えているはずだ。おれたちの目には見えないかも知れないけど。そのプロセスは現実の表層の下に隠され、後にならないと現れない。待ち受けるおれたちの子孫の代になるまで。おれたちの戦った悲惨な戦いや、おれたちの払った犠牲を知らない、ケチな連中の代になるまで。おれたちのことなんか、マイナーな歴史書の脚注に書いてあるので気がつくぐらいのもんだろう。ほんのわずかな記述。倒れたものの名簿すらない。

どっかに記念碑をつくって、この戦いで死んだ者の名を記すべきだ。それに、哀れにも死ねなかった者の名も。死を越えて生き続けなければならなかった者たち。たとえばボウ・アークターみたいに。中でも一番哀れなヤツだ。

ドナは傭兵だという気がする。金で雇われているんじゃない。彼らは生霊に一番近い。永遠に消え失せる。新しい名前、新しい任地。こっちは考える。彼女はいったい今どこに？ そしてその答は

どこにもいない。もともと存在していなかったんだから。

木のテーブルにすわりなおして、マイク・ウェスタウェイはハンバーガーを食べ終え、コーラを飲み終えた。ニュー・パスで出されるものよりはましだったから。このハンバーガーが牛の肛門の挽き肉で作られているにしても。

ドナを呼び戻し、彼女を見つけ、所有する……おれはボブ・アークターの求めていたものを求めている。あいつがああなってるのも、今にしてみればいいことなのかもしれない。あいつの人生の悲劇は、ニュー・パス以前にもう存在していた。大気のような精霊に恋したこと。それこそ本物の悲恋だ。どうしようもなささを絵に描いたようなもんだ。いかなる書物にも、人類の有史以来、彼女の名前が現れることはない。近くに住まいがあるわけでもないし、名前もない。そういう女がいるものだ。そういう女をおれたちはいばん愛してしまう。まったく希望はないのに。抱きしめようとした瞬間にかわされてしまうのに。

だからおれたちは、ボブ・アークターをもっとひどい運命から救ってやったのかもしれない、とウェスタウェイは結論づけた。それを成し遂げた一方で、あいつの残された部分をも活用した。それも立派な価値ある利用法で。

もし、おれたちがツイてればだけど。

「おはなし知ってる？」とある日テルマがきいた。

「オオカミの話を知ってる」とブルース。

「オオカミとおばあさんの？」

「ううん。黒と白のオオカミ。あおのオオカミは木の上において、何度も何度もお百姓さんの家畜の上から襲いかかったんだ。とうとうある時、そのお百姓さんは息子たちや息子

の友だちを集めてきて、みんなで木をグルリと囲んで、木の上の黒と白のオオカミが落ちてくるのを待ちかまえた。とうとうオオカミはきたならしい茶色の動物の上から襲いかかって、そこで黒と白の毛皮を着たまま、みんなに撃ち殺されちゃうんだ」

「へーっ、かわいそう」とテルマ。

「でも、皮は取っておいた。木の上から襲う、大きな黒と白のオオカミの皮をはいで、毛皮にして取っておいたの。後に続く人たち、後になってやってきた人たちに、それがどんなオオカミかを見せて、そいつや、そいつの力や大きさに感心できるようにね。それで続く世代はそのオオカミのことを語って、その勇敢さや威厳をもとにいろんな話を作っては、オオカミの死を嘆いたんだよ」

「なんでみんなオオカミを撃ったの？」

「だって、ほかにどうしようもなかったから。そういうオオカミは、撃つしかないんだもん」

「ほかにおはなし知らない？ もっといいおはなし」

「ううん。ぼくの知ってるのはそれだけ」ブルースはすわって、オオカミが自分のすばらしい跳躍力をどんなに楽しんだことか、その見事な肉体で何度も何度も襲いかかるのをどんなにたのしんだことか、と考えた。でも、その肉体は撃ち落とされ、いまはもうない。それも、どうせいずれは屠殺されて食われてしまうような薄汚い動物たちのために。何の強さもなく、跳躍したこともなく、自分たちの肉体に何の誇りも抱いたことのないような動物たち。でもとにかく、いい面を見れば、その動物たちは惨めではあっても生き延びていった。それと、黒と白のオオカミは決して文句を言わなかった。撃たれたときでさえ、何も言わなかった。ツメは獲物に深く食いこんだまま。何のためにでもない。ただ、それがオオカミの流儀で、そうするのが好きだったから。それがオオカミの唯一の生き方だった。生きるための唯一のスタイルだった。それしか知らなかった。そして捕まった。

「ほら、オオカミ！」とテルマは叫んで、ぎこちなく跳ねまわった。「ウォーツ、ウォーツ！」と物をつかもうとしたテルマの手が空をつかんだ。この子もおかしいんだとわかって、ブルースはうろたえた。げんなりと、なぜそんなことが起きたのか不思議に思いながらも、テルマが障害を持っているのを初めて認識した。

「きみはオオカミじゃないよ」

でも、その間にも、手探りしてびっこをひきながら、テルマは転んだ。今でさえも、障害は続いているのか。なぜこんな悲しみが……

Ich unglucksel'ger Atlas! Eine Welt,  
Die ganze Welt der Schmerzen muss ich tragen,  
Ich trage Unertragliches, und brechen  
Will mir das Herz im Leibe.

……存在し得るのかしら。ブルースは立ち去った。

背後で、テルマはまだ遊んでいる。つまづいて転ぶ。転ぶって、どんな気分なんだろう。

廊下をうろついて、掃除器を探していた。子供たちが一日中ほとんどずっと過ごしている大きな遊技室に、しっかり掃除器をかけるよう言われたのだ。

「廊下をいって右のところ」とある人が指さした。アールだ。

「ありがとう、アール」

閉まったドアにたどりついて、ノックしようとしたが、気を変えてそのまま開けた。

室内にはお婆さんが立っていて、ゴムボールを三つ持っていてお手玉をしていた。こっちに向いた彼女は、灰色でパサパサの髪を肩にたらし、ほとんどない歯をむきだしてニタニタした。白のハイソックスとテニス・シューズをはいている。落ちくぼんだ目が見えた。落ちくぼんだ目、ニタニタ笑い、歯のない口。

「あんた、これできる？」お婆さんはゼイゼイいって、ゴムボールを三つとも宙に放り投げた。ボールは落ちてきて、お婆さんに当たりながら床に落ちた。お婆さんは動きをとめて、唾を散らしながら笑った。

「ぼくにはできないよ」とブルースは、つつ立ってうろたえた。

「あたしゃできる」やせた老いぼれ生き物は、腕をポキポキいわせながらからだを動かし、ボールを取り上げて、こちらをチラリと見て、何とか上手にやろうとしている。

戸口のブルースの横に、別の誰かが現れて、並んで見ていた。

「あの人、どのくらい練習してたの？」とブルース。

「かなり長いことね」そして隣の人はお婆さんに声をかけた。もう一回。だんだんできてきたよ」

お婆さんは骨をポキポキいわせながら、腰をかがめて、またボールを拾おうとしては取り落としている。

「一個あそこだよ。ほら、あんたのナイト・テーブルの下」とブルースの横の人。

「おおおや！」お婆さんはゼイゼイ言った。

お婆さんは、何度もやりなおしては、ボールを落とし、また拾って立ち上がり、慎重に狙いをさだめ、からだのバランスをとり、ボールを宙高くに投げ、それが降ってくるとうずくまる。ボールはときどき頭にもあたっていた。

ブルースの横の人が、鼻をクンクンいわせた。「ドナ、お風呂に入らないとダメだよ。バッチイから」

ブルースはゾツとした。「あれはドナじゃない。ドナなんですか？」顔をあげてお婆さんに目をやり、すごい恐怖を感じた。こちらを見つめかえすお婆さんの目には、涙のようなものがたまっていたけれど、でも笑っていた。笑いながら三つのボールをこっちに投げつけ、ぶつけようとした。ブルースはかわした。

「ダメよ、ドナ。そんなことしちゃダメ。人にぶついたりしないの。テレビで見たのをやってなさい。ほら、投げて、自分でとって、またすぐに投げる。でも今はお風呂に入るのよ。臭いから」

「OK」お婆さんは同意して、急いで去った。背が丸くてチビだ。ゴムボールは床に転がしたままだった。

ブルースの横の人がドアを閉め、二人は廊下を歩いていった。「ドナはいつからここにいますか？」とブルース。

「もうずいぶん昔よ。あたしがくるずっと前から。ってことは六カ月より前ね。お手玉をはじめたのは一週間前」

「じゃああれはドナじゃない。そんなに長くここにいたんなら。だって、ぼくがここに来たのが一週間前だから」それで、ドナはぼくをMGに乗せてつれてきてくれた。覚えてるぞ。だって、ラジエータの水を補給するんでしばらく止まったもの。そのときのドナは元気だった。悲しい目をして、沈んでて、物静かで落ちついて、革ジャンとブーツと、ウサギの脚がぶらさがってるハンドバッグを持っていた。いつものドナと同じように。

---

そしてブレスは、掃除器を探し続けた。気分はずっとよくなっていた。なぜかはわからなかったけれど。



## 第 15 章

「ぼく、動物とはたらく？」とブルース。

「いや。ここの農場のどっかにまわそうかと思ってる。しばらく植物のほうで試してみたいし。二、三カ月かな。広々とした、土にさわれるところでき。あんなロケットだの宇宙探査だの、みんな天を目指そうとしすぎて。おれがお前に目指してほしいのは」

「ぼくは生きものといっしょにいたい」

マイクは説明した。「地面は生きてる。地球はまだ生きてるんだから。お前のためにもそれが一番いいんだよ。農業の知識は？ 種とか耕作とか収穫とか、わかる？」

「オフィス勤めだったから」

「これからは外で働いてもらう。お前の精神が回復するもんなら、自然に徐々に回復するのを待つしかない。あせったって考えられるようにはならないんだし。とにかく働き続けることだ。種をまいたり、菜園　ここじゃそう呼んでる　を耕したり害虫を殺したり。この作業は多いよ。しかるべきスプレーで、昆虫を抹殺する。でも、ここはスプレーについては慎重なんだ。効果よりも害のほうが大きいこともあるからね。作物や地面を汚染するし、使ってる人も汚染することがある。そいつの頭を食っちゃう。お前のが食われちゃったみたいに」

「OK」とブルース。

それを見ながらマイクは思った。お前はスプレーされて、今やムシになってしまった。ムシに殺虫剤を撒けば死ぬ。ヒトにスプレーすれば、脳にスプレーすれば、そいつはムシになっちゃって、いつまでも同じところをグルグルまわってはカタカタバタバタしてるだけになる。反射行動だけの機械、まるでアリだ。最後に出された命令を、何度も繰り返して実行するだけ。

こいつの脳には、新しいものは何一つ入らない。脳そのものがないから。

そして脳といっしょに、かつて体内からのぞいていた人格も消えた。おれが会ったことのない人格が。

でも、こいつだって、しかるべき場所に配されてしかるべき環境に置かれれば、まだ下を見て、地面を見ることぐらいはできるかも。そして、地面がそこにあるのを認識する程度なら。そこに何か、自分以外の生きたものを植えることもできるだろう。そして成長させる。

こいつが二度とできないのがそれだ。おれの横に立っているこの生き物は死んじゃってるから、二度と成長しない。だんだん腐って行って、まだ残っているものさえやがて死ぬ。おれたちがそれを運び出す。

死んだヤツにとって、未来はほとんどない。ふつうは、過去しかない。そしてアークター・フレッド・ブルースにとっては、過去さえもない。これしかない。

職員用の車を運転するマイクの横で、背中を丸めた人影が身をゆすった。車の揺れで動かされたのだ。

こいつをこんな目に合わせたのは、ニュー・パスなのかもしれん。こいつをこんなにしてしまうために物質を送り出して、こんな存在になり下がってから、いずれは取り込もうとたくらんでいたのかも。

混沌のなかに、ヤツらの文明を作り上げるために。そんなものが本当に「文明」であればの話だが。

マイクにはわからなかった。まだニュー・パスに来てからの期間が短すぎる。ニュー・パスの目的は、あと二年職員を続けるまで明かせない、と理事が言っていた。

その目的は、麻薬中毒の更生とはなんら関係がないそうだ。

ニュー・パスの資金がどこからやってくるのか、理事のドナルド以外は誰も知らなかった。金はいつもあった。ふん、物質Dを作れば、金はいっぱいあるわな。遠く離れた田舎の農場や小さな店や、「学校」と称する施設がいろいろある。物質Dをつくる儲け、流通させる儲け、最終的には売る儲け。少なくとも、ニュー・パスを維持し、成長させるだけの収入はある。いや、もっとたくさん。いろんな究極の目標を達成するに十分なだけある。

その目標が何かは、ニュー・パスの腹次第。

マイクは　アメリカ麻薬取締局は　世間や警察ですら知らないようなことを知っていた。

物質Dは、ヘロインのように有機性なのだ。化学工場の生産物ではない。

だから、「ニュー・パスを維持し、『成長』させるだけの収入はある」という考えは、かなり意味深なものだった。これはしょっちゅう思い返してみた。

生者は、死者に利用されてはならない。でも、死者は　マイクは、傍らの空虚な形、ブルースのほうをチラリと見た　可能なら、生者のために利用されるべきなんだ。

それが人生の決まりなんだよ。

それに死者だって、感情があればの話だけど、生者に利用されて悪い気はするまい。

理解はできなくても、見ることはできる死者。こいつらは、おれたちのカメラなんだ。



## 第 16 章

台所の流しの下で、せっけんの箱やブラシやバケツといっしょに、小さな骨のかけらを見つけた。人間の骨みたいで、ジェリー・フェイビンのかな、と思った。

おかげで人生のずっと昔の出来事を思い出した。昔、男二人といっしょに住んでいて、ときどき流しの下でフレッドというネズミを飼っているという冗談をとばしたのだ。それでいつだったかホントに金がなくなったとき、哀れなフレッドを喰っちまったんだ、と人に話すのだ。

これがその骨のかけらなのかも。流しの下に住んでいたネズミの骨。さびしさをまぎらわすためにでっちあげたネズミの骨。

みんながラウンジで話すのを聞く。

「そいつは見た目よりずっといかれてた。おれはそう感じたね。で、こいつ、ある日はるばるヴェンチャーまで車をとばして、オジャイあたりの内陸に入ったところに住んでる友だちに会いにいった。番地を見なくても、見ただけで家がわかって、車を止めて、家の人に、レオに会いたって言った。『レオは死にましたよ。ご存知なくて申し訳ない』そこでこいつはこう答えた。『OK、んじゃまた木曜に出直してくる』そして走り去って、コーストを戻り、たぶん木曜に戻ってレオを探しにいったんじゃないかな。おもしろいだろ？」

コーヒーを飲みながら、みんなの話を聞いた。

「てみると、電話帳の載ってる番号が一つしかないの。誰に電話したくても、その番号にかける。どのページもどのページも.....あたしが言ってんのは完ぺきにイカレまくった社会の話。それで札入れを見ると、いろんなメモ用紙だのカードだのに、その番号が書き殴ってあって入ってんの。相手はいろいろでも、番号は唯一無二。それでもしその番号をわすれちゃったら、もう誰にも電話できなくなっちゃうの」

「番号案内に電話すれば？」

「番号案内の番号も同じなのよ」

まだ聞いていた。この人たちが描いている社会は、なかなかおもしろかった。電話をかけると、「この電話番号は現在使用されておりません」と言われるか、相手に「まちがい電話だよ」と言われる。そこで、その同じ番号にかけなおすと、今度は話したい相手が出る。医者に行ったら 医者は一人しかなくて、外科でも内科でも何でもこなす 薬が種類しかない。診断のあと、その薬が処方される。その処方箋を薬局に持っていっても、薬剤師は医者書いたものが全然読めなくて、手持ちの唯一の薬であるアスピリンをくれる。それで何でもなおってしまう。

法を破るにしても、法律はたった一つしかなくて、みんな何度も何度もそれを破る。お

まわりはまめめしくそれを全部書き連ね、どの法に、どう違反したか、毎回同じことを書く。そして、信号無視から反逆罪まで、どんな法律違反でも罰則は同じだった。その罰とは死刑であり、死刑反対の声もあがっていたのだが、そうすると信号無視のときなんかでも罰が全然なくなっちゃうから、そういうわけにはいかなかった。そこで法律はそのまま、とうとうその社会はヤキがまわりきってみんな死んだ。いや、ヤキがまわったんじゃない　ヤキはもとからまわりきってた。みんな、法律を犯すたびに一人づつかき消えていったのだ。そして何となく死んだ。

たぶん、最後の人が死んだって聞いたとき、みんなは「そいつらどんな連中だったのかな。そうだなあ　んじゃまた木曜に出直してくる」とでも言ったんだろう。よくわからなかったけど、ブルースは笑った。そしてみんなに話すと、ラウンジにいたほかのみんなも笑った。

「すごくおもしろいよ、ブルース」と言う。

そしてそれが定番のオチになった。サマルカンド・ハウスの誰かが、何かわからなかったり、トイレット・ペーパーとか探すよう言われたものが見つからなかったとき、みんな「んじゃまた木曜に出直してくる」と言う。一般に、これはブルースの考案したものだと考えられていた。ブルースのせりふ。同じオチを毎週毎週言う、テレビの漫才みたいなものだ。サマルカンド・ハウスではウケて、みんなにとってある意味を持つせりふになった。

後で、ある晩のゲームで、みんなが順番に、それぞれの人間がニュー・パスに何をもちたか(たとえばコンセプトとか)について評価しあったが、この時ブルースは、ユーモアをもちたかとして評価された。自分がどんなにひどい気分でも、物事をおもしろく見る能力をもちたかと言うのだ。そこにいたみんなが拍手して、どぎまぎして目をあげると、微笑の輪が見えた。みんなの目に賞賛がこもって暖かく、みんなの拍手の音はずいぶん長いことブルースの心の中とどまっていた。

## 第 17 章

その年の八月末、ニュー・パスに入って二ヶ月後、ナバ・ヴァレーの農場施設に移された。カリフォルニア州北部の内陸だ。ワイン産地で、カリフォルニアの見事なブドウ園がたくさんある。

ニュー・パス財団理事のドナルド・エイブラムスが移送命令書にサインした。これは、ブルースの対応に非常な関心を抱いている、マイケル・ウェスタウェイという職員の提案によるものだった。特に、ゲームをもってしてもブルースの状態が改善しなかったのが大きい。それどころか、かえって悪くなったほどなのだ。

「お前の名前はブルースか」と農場の責任者が言った。ブルースは、スーツケースを抱えて、ぶきっちょに車から降りたところだった。

「ぼくの名前はブルースだよ」

「しばらく農作業をやってみてもらうよ、ブルース」

「OK」

「ここの方が気に入ると思うよ、ブルース」

「ここの方が、気に入ると思う」

農場主任はブルースをじろじろながめわたした。「最近髪を切られたのか」

「うん髪を切られた」ブルースは手をあげて、剃られた頭にさわった。

「なんで？」

「髪を切られたのは、女性居住区にいたのを見つけたから」

「髪切りはこれが初めて？」

「髪切りはこれが二度目」ためらってから、「前に、暴れたの」ブルースは、まだスーツケースを持ったまま立っていた。主任は、スーツケースを置くように合図した。「暴力規則を破った」

「何をやった？」

「枕を投げた」

「OK、ブルース。ついてこい。寝るところを教えてやる。ここじゃ中央居住棟はない。六人ごとに小さな小屋がある。そこで寝て、食事をつくって働いてないときはそこで過ごす。ゲームはない。仕事だけ。もうお前はゲームなしだよ」

ブルースは嬉しそうだった。顔に微笑が浮かんだ。

「山は好きか？」と農場主任は右手を指さした。「上をごらん。山だ。雪はないけど、山だ。サンタ・ローザは左の方になる。あの山の斜面では、ホントにすごいブドウをつくってるんだよ。ここではブドウはつくってない。いろんな作物を育ててるけど、ブドウはない」

「山は好きだ」とブルース。

「あいつらをごらん」主任はまた指さした。ブルースは見ようとしなかった。「帽子をあつらえてやろう。頭が剃られてんのに、帽子なしじゃ畑に出られないもん。帽子をあげるまで仕事に出るなよ。わかった？」

「帽子をもらうまで仕事に出ない」とブルース。

「ここは空気がおいしいんだ」と主任。

「空気は好きだ」

「うん」主任はブルースに、スーツケースを持ってついてくるよう合図した。どうもやりにくいな、とブルースに目をやった。何とっていいかわからなかった。この手の連中が到着したときには、よくあることだ。「おれたちみんな空気は好きだよ、ブルース。ホントに。それだけはみんな共通だ」そう、その程度の共通点はまだある。

「友だちに会える？」とブルース。

「昔いたところの友だちか？ サンタ・アナの施設の？」

「マイクとローラとジョージとエディとドナと」

「居住施設の人間は、農場には出てこないんだ。ここは閉鎖式で運営してるから。でも、年に一度か二度は戻れる。面会がクリスマスと、それに」

ブルースは足をとめていた。

「次の面会は、感謝祭のときだ。その時は、ここでの作業員を、出身居住施設に二日だけ帰す。それからクリスマスまではまたここだ。その時にまた会える。もしほかの施設に移送されてなければだけどね。三カ月はかかるけど。でも、このニュー・パスでは一人一人の人間関係は認められていないんだよ。聞いてないの？ ファミリー全体とだけ関係が持てるんだ」

「それはわかるよ。ニュー・パスの綱領の一部だったんで暗記させられたから」とブルースはあたりを見回した。「水が飲みたいよ」

「この水のみ場を教えてやろう。宿舎ごとにも一つあるけれど、このファミリー全体用にも公衆水のみ場がある」主任はブルースをつれて、プレハブ宿舎の一つに向かった。「この農場施設は公開されてない。実験的な交配作物があるから、害虫の侵入を避けたいんだ。人を入れると、それが職員でも、服だの靴だの髪の毛だのに害虫をくっつけて持ち込むからね」でたらめに宿舎を選んだ。「お前のは4 G。忘れないね？」

「みんなおなじに見える」とブルース。

「見分けがつくように、この宿舎に何か釘でとめとくといい。そうすればすぐに覚えられる。何か色つきの物がいい」主任は宿舎の戸を開けた。熱く臭い空気が吹き出してきた。主任は考え込んだ。「まず朝鮮アザミをやらしてもらおうかな。トゲがあるから、手袋をするんだよ」

「朝鮮アザミ」とブルース。

「そうそう、ここにはキノコもある。実験的なキノコ畑で、もちろん密閉されてる国内のキノコ生産者はみんな収穫を密閉しとくんだ。そうでないと、病原性の孢子が入り込んで菌床を汚染するんでね。キノコの孢子ってのは空気をちたってくるんだよ、もちろん。キノコ業者にとっては災難だがね」

「キノコ」と言いながら、ブルースは暗く暑い宿舎に入った。主任はそれを見守った。

「そうだ、ブルース」

「そうだ、ブルース」とブルース。

「ブルース、目をさませ」と主任。

ブルースはうなずいた。宿舎のむっとした薄明かりの中に立って、まだスーツケースを持っている。「OK」

ちょっと暗くなるとすぐにうとうとしやがる。まるでニワトリだ、と主任は思った。

植物の中の植物か、キノコの中のキノコか。好きなほうを選びな。

宿舎の頭上の電灯をひねってつけ、それからブルースに、その操作法を教え始めた。ブルースは気にもとめないようだった。視界に山をとらえ、それをじっと見つめていた。いま初めてそれに気がついたのだ。

「山だよ、ブルース。山だよ」と主任。

「山だよ、ブルース。山だよ」とブルースは見つめた。

「反響言語症だよ、ブルース。反響言語症だよ」と主任。

「反響言語症だよ、ブルース」

「OK、ブルース」と主任は宿舎を出て、後ろ手にドアを閉めた。あいつはニンジンの世話をさせよう。それともダイコンか。何か単純で、あんまり悩まずにすむものがない。

それと、あの小屋にもう一人、植物人間を移らせよう。あいつに仲間ができるように。ふたりでシンクロしてうなずきあってりゃいい。そんな連中が何列も。何ヘクタールも一面にいる。

畑の方に向かわせられると、ベコベコの鏡に映ったような、みすぼらしいトウモロコシが見えた。ゴミが育ってる。これはゴミの畑なのか。

身をかがめると、地面の低いところに、小さな花が咲いていた。青い。多くは短くてすづまりの太い茎に咲いている。不精ヒゲみたい。切りわらみたい。

一つじゃない。いっぱいある。顔を十分近づけたのでわかった。高いトウモロコシの列の中の鬼っ子。百姓がみんなやるように、ある作物を別の作物の中に、同心円状に隠してある。メキシコの百姓は、こうやって大麻を栽培する。背の高い作物で丸く囲む。そうすればジープに乗ったフェデラーレ（連邦職員）に見つからない。でも、空からなら見つかってしまう。

そしてメキシコのフェデラーレたちは、そんな大麻栽培を発見すると、百姓と、その妻と、子どもと、家畜まで機関銃で殺す。そして走り去る。そしてヘリコプターによる捜索が続き、それをジープが支援する。

なんてきれいでかわいい青い花。

「お前の見てるのは未来の花だよ。でも、お前のための未来じゃない」ニュー・パス理事のドナルドが言った。

「なんでぼくのためじゃないの？」とブルース。

「お前は今まで十分にいい目を見てきた」と理事はクスクス笑った。「だから、立ち上がるんだ。そんなひれ伏すのはやめろ　こいつはもう、お前の神でもないし、偶像でもない。もっとも一時はそうだったけどな。お前には、ここに育っているのが何か超越的な代物に見えるのか？　まるでそんな感じだけど」そしてブルースの肩を力強く叩くと、手を下にのばして、花を見て凍りついたままの目の視線を断ち切った。

「消えた。春の花が消えた」とブルース。

「いや、お前に見えないだけの話。お前にはわからない哲学的な問題だ。認識論　知識に関する理論だ」

ブルースには、光をさえぎるドナルドの手のひらしか見えなかった。それを千年も見つ

めた。手はじっとしている。固定されている。ブルースのために固定され続ける。時の外におかれた死んだ目のために永遠に固定される。そらすことのできない目と、どここうしない手。目が見つめると時間が消え失せ、宇宙は彼とともにゼリーと化し、少なくとも彼にとっては、彼と彼の理解力といっしょに凍りつき、やがてそれが完全に停止する。知らないことは何もなかった。もう何も起きることはなかった。

「仕事に戻るんだ、ブルース」と理事のドナルド。

「ぼくは見た」とブルース。わかった。あれがそうなんだ。ぼくは物質Dが生えているのを見た。死が大地から、地面そのものから、広い青い畑で、寸づまりの色をしてのびているのを見た。

農場施設主任とドナルド・エイブラハムスは顔を見合わせ、それからひざまづいている人間の姿と、目隠しのトウモロコシの中の、そこらじゅうに植えられたモルス・オントロギカに目を落とした。

「仕事に戻るんだ、ブルース」とひざまづいた人間の姿が言って、立ち上がった。

ドナルドと農場施設主任は停めてあるリンカーンのほうに歩いていった。話をしている。ブルースは　ふりむかず、ふりむけず　二人が去るのをながめた。

身をかがめて、ブルースは寸づまりの青い植物をむしって、それを右の靴に隠し、見えないようにした。友だちへのプレゼント。そう思って、誰にも見えない心の底で、感謝祭を待ちわびた。

## 作者付記

この小説は、自分の行いのためにあまりにも厳しく罰せられた人々についてのものだ。みんな楽しく過ごしたかっただけなのだけれど、みんな道路で遊ぶ子供同然だった。仲間が一人また一人と殺されて ひかれて、不具になり、破壊されてゆくのがわかって、とにかく遊び続けた。おれたちみんな、しばらくはすごく幸せだった。すわりこんで、働きもせず、ヨタをとばして遊んでるだけ。でも、それは死ぬほどちょっとの間しか続かなくて、その罰ときたら信じ難いようなものだった。それをまのあたりにしても、まだ信じられないくらいだった。たとえば、これを書いているとき、ジェリー・フェイビンのモデルになったやつが自殺したのを報らされた。アーニー・ラックマンのモデルになった友だちは、この小説を書き始める前に死んだ。このおれだって、しばらくはこの道路で遊ぶ子供たちの一人だった。おれも、ほかのみんなと同じく、大人になるかわりに遊ぼうとして、そして罰を受けた。おれも下のリストに載っている。この小説を捧げる人々のリストであり、その人々がどうなったかのリストだ。

ドラッグの濫用は病気じゃない。それは決断であり、それも走っている車の前に踏み出そうとするような決断だ。そういうのは病気と言うよりも、判断ミスだろう。山ほどの人がそれを始めたら、それは社会的な誤りになり、ライフ・スタイルになる。このライフ・スタイル独特のモットーは、「今を幸せに 明日になったら死んでるから」だけれど、死ぬのはアツという間に始まって、幸せなんか思い出でしかなくなる。それならば、このライフ・スタイルも、ふつうの人間存在のスピードを上げて、集約したものでしかない。あんたのライス・スタイルと違って違っちゃいない。ただ、もっと速いだけ。何年単位のかわりに、何日とか何週間とか何ヶ月の単位ですべてが起る。「現金をつかんで質草は流してしまえ」とヴィオンが一四六〇年に言っている。でも、その現金が小銭程度で、質草が自分の一生だったらそうはいかない。

この小説に教訓はない。ブルジョワ的じゃない。働くべきなのに遊んでたりしてこいつらはけしからん、とは言わない。ただ、結果がどうなったかを書いているだけだ。ギリシャの劇は、社会として科学を発見しつつあった。科学とはつまり因果律。この小説にもネメシスの天罰が存在する。運命じゃない。おれたちみんな、道路で遊ぶのをやめようと思えばやめられたんだから。運命じゃなくて、遊び続けたみんなに対するおそるべき天罰なのだ。おれの人生と心の心底から、おれはそう言いたい。このおれはといえば、おれはこの小説の登場人物じゃない。おれ自身がこの小説なのだ。でもそれを言えば、当時のアメリカすべてがこの小説だ。この小説は、おれの個人的な知り合いよりたくさんの人たちについてのものだ。おれたちが新聞で読むような人たちについて。こいつは、仲間とすわりこんで、ヨタを飛ばしてテープで録音したりすることや、六〇年代という時代の、体制内外での悪しき選択についての小説だ。そして自然がおれたちに鉄槌を下した。おそるべ

き事物によって、おれたちは無理矢理遊ぶのをやめさせられた。

「罪」があったとすれば、それはこの連中が永久に楽しく過ごしたいと願ったことで、それ故に罰を受けたんだけど、でも、さっきも言ったけど、おれの感じでは、その罰はあまりに大きすぎた。だからおれとしては、それについてはギリシャ式に、あるいは道徳的に中立なやりかたで、単なる科学として、決定論的で公平な因果律として考えたい。おれはみんなを愛していた。以下の人々に、おれの愛を捧げる。

- ゲイリーンに (死亡)
- レイに (死亡)
- フランシーに (不治の精神病)
- キャシーに (不治の脳障害)
- ジムに (死亡)
- ヴァルに (不治の重度脳障害)
- ナンシーに (不治の精神病)
- ジョアンに (不治の脳障害)
- マーレンに (死亡)
- ニックに (死亡)
- テリーに (死亡)
- デニスに (死亡)
- フィルに (不治の隣臓障害)
- スーに (不治の血管障害)
- ジェリーに (不治の精神病と血管障害)

.....その他大勢に。

追悼。これがおれの同志たちだった。それも最高の。みんなおれの心の中に生き続けている。そして敵は決して許されることはない。「敵」は、みんなの遊び方のまちがいだった。みんながもう一度、何か別のやり方で遊べますように。そしてみんな幸せになれますように。



# 訳者あとがき

## 1. 総論

本書は *A Scanner Darkly* (1977) の全訳である。翻訳の底本としては、Panther/Granada 版のペーパーバックを使用。辞書として、『新英和大辞典』(小稲義男他編、研究社、第五版、1980) と『リーダーズ英和辞典』(松田徳一郎他編、研究社、第一版、1984) を主に使用。翻訳作業は、PC9801M+ 一太郎 ver.3 と、J3100SS+VZ Editor ver 1.5 上で行った。

## 2. 評価

『死の迷路』に続き、本書もサンリオ SF 文庫に既訳が存在した。それにもかかわらず、本書に対する正当な評価というものを、ぼくは寡聞にして知らない。一部のヒッピーの残党が、自分たちを好意的に扱った小説だと勘違いして無邪気に喜んでいるケースが数例見られるのみで、あとは『ヴァリス』と『流れよわが涙、と警官は言った』のあいだの小説として、添え物的に処理されている。これは決して旧訳のせいではないし、だからといって本書が過渡期の凡作であるためでもない。ディックの小説のなかで、本書はある突出した位置をしめており、そのため作品変遷史のなかに位置づけることが困難なのである。

### 2.1. 作者の評価：反ドラッグと自伝性

そもそもディック自身にとっても、本書は特別な思い入れのある本らしい。あるインタビューで、かれは本書をして「後にも先にもこれ以上のものはない、ぼくの最高傑作」と語っている。

その理由として、かれは二点あげている。まず、これが反ドラッグ小説である点。「『暗闇のスキャナー』を読んだ人は、一生ドラッグをやろうなんて絶対に思わないはずなんだ」とかれは語る。

だが残念ながら、そう思っているのは本人だけのような気もする。実際、ある人は『暗闇のスキャナー』を読んで、そのあまりの悲痛さに「一九八三年の日本では、アルコール・ヘッドしかないから、工業用アルコールで肝臓をイカレさせるしかなかった」そうだ(ソーマ・ヒカリ「ディックのパディ&ソウル・ブルーズ」、『あぶくの城』所収より)。アルコールは広義のドラッグであり、また「アルコール・ヘッドしかないから」という以上、それ以外のドラッグがあればこの人物は喜んでそっちを使用したであろうと推定できる。つまりこの読者は、本書を読んでますますドラッグにはしりたくなってしまったわけで、ディックの意図が完全に失敗していることが証明されている。

これはこの読者だけの反応ではない。ジャンキー側に同情的な視点で書かれている本書は、一般的には親ジャンキーすなわち親ドラッグ的な小説として認知されている(実はそうではないのだが、これについては後述)。問題のドラッグが最終的には巨大なシステムの駒であり、人を非人間化するものなのだと描くことで、ディックとしては十分にドラッグ批判を展開したつもりなのだろう。だが、かれの十八番の技法ゆえに、その効果は相殺されてしまう。不適応者への感情移入を大きな柱として成立しているディックの小説の技法については『死の迷路』解説で述べたので、ここでは繰り返さない。が、不適応者を擁護する一方で、かれらが自主的に行なったドラッグ使用だけ批判しようとするディックの論理展開は、どうしてもあいまいにならざるを得ない。「この小説に教訓はない」というあとがきでのかれの主張は、そこらへんのあいまいさを保留しておくための苦肉の策でもある。

さて、作者自身の評価点のもう一つは、これが六、七〇年代のディック自身の自伝的要素を色濃く持っている点である。作者のあとがきでもわかるように、本書の登場人物はそれぞれ現実のモデルを持っているらしい。「かれらのことばを書き留めることができうれしい」とディックはインタビューで語っている。「読み返すと、あいつらが生き返ってきたような気がする」と(『ザップ・ガン』巻末所収のインタビュー参照)。

これはその通りだろう。そうしたセンチメンタルな想い入れが、ドラッグ批判というかれの第一の意図を展開するにあたって、マイナスに作用していることはすでに述べた通り。しかし、小説の評価と作者のお題目の表現とは自ずと別物である。読み物に生気を与えるという点では大いにプラスに作用しているので、訳も許容範囲内で最大限に口語っぽくしてみた。いま、ゲラを読み返してみると、ちょっとクサイ感じがする。が、そのくらいでいいのだと思う。もともと六〇年代のことばを記録しようとして七七年に出た書物。『ニューロマンサー』のような目新しさよりも、気恥ずかしいくらいの懐かしさが似つかわしい。それに、ディックというのもそういう作家なのだから。

## 2.2. 訳者の評価：ディックの「現実」

ディックの作品群のなかで、本書の占める位置は見定めにくい。小説的にはもっとも完成度の高い優れた作品だが、その支持層が見えにくいのだ。

『ヴァリス』や『聖なる侵入』は、小説的な未完成度と内容的なわかりにくさが逆に深読みを可能としている点で支持されるだろう。そういうことに喜びを見いだす人種はいつの時代にもある頻度をもって統計的に出現するものであり、決して絶えることはない。

一方、『ユーピック』『パーマー・エルドリッチの三つの聖痕』などは、できれば社会参加を避けたいと願う高校生から大学生たちによって、今後も支持されるだろう。もちろんこれから若年人口が減少するのは事実だが、その一方で労働力不足によるモラトリアム人口の増大が起きるため、需要は比較的安定するはずだ。

さて、後者のほうが読みものとしては圧倒的におもしろいといううがいがいこそあれ、この両者に共通しているのは、目の前の現実の背後に、凡人には感知しがたい別のシステムが存在してる、という認識である。榎木野衣ならこれを、ヤルタ体制下の秘密主義に基づくナントカであると言うだろう。東西冷戦体制崩壊後の現代に通用するものではない、いまは人工衛星のおかげで秘密というものが存在しえない、エコロジーによる世界支配の時代

なのである、と。でも、ベルリンの壁がなくなっても、別に世の中から秘密が消えたわけじゃない。むしろ、わかりやすい構図が消えてしまったことで、世の中はますますわけがわからなくなっている。そこへみんなには見えない(が比較的単純な)裏のシステム(真の「現実」)という考えを導入することで、ディックは逆に、これまで以上の大衆的人気を獲得し得るだろう。平たく言えば、一種の現実逃避手段を提供するわけだ。

しかし、本書は『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』とならんで、ディックの「現実」の扱いにおいて特異点となっている。特に本書での現実の強固さは、これまでの(そしてこれ以降の)ディックとは一線を画している。ことには、逃避できる別の現実など一切ないのだ。

別の言い方をしてみよう。これ以前、あるいは以後のディックのほとんどの長編において、真の「現実」とはなにやら通常の人間世界を離れたものとして描かれていた。それはたとえば白痴やエスパーやガニメデ人にしか感知できない「現実」であり、凡人は麻薬によるトリップか、神さまにピンク色の光でもあててもらわなければその「現実」に接近できない。つまり常人の気づかないシステムとは、多かれ少なかれわれわれの人間世界とは不連続で、超越的なものとして存在していた。

SFというジャンルは、特に深い必然性もなく、そういう超越性が世界に侵入することを許してしまう。この点で、本人がいかに不満に思っていようとも、ディックにとってSFというジャンルは非常に有効に機能した。しかし一方で、このようにSFのジャンルとしての特性によりかかった彼の作風は、常に一種の安易さを伴う結果となっている。ジュディス・メリルが『SFに何ができるか』(晶文社)でディックに対して示しているいらだちも、レムのとまどいも、おそらくはこの安易さによるものであり、ディックがあこがれの主流文学で決して(死んでからも)成功できなかったのも、この安易さのためである。『パーマー・エルドリッチの三つの聖痕』のような傑作では、その安易さすら軽やかさとなって作品の重いトーンを救っているのだが、『ヴァリス』でも、そのよりかかる先がDIYのお手製つぎはぎ神学になっただけで、安易さは一方向に改まっていない。ちなみに『ヴァリス』の小説としての困難は、そのよりかかる先のつぎはぎ神学がまるっきり不安定で、ディックの安易さを支えきれていないことによる。

しかし、『暗闇のスキャナー』にその安易さはない。本書はSF性によりかかることもないし、超越的なシステムを描いてみせることもない。わずかに登場するSF的小道具であるスクランブル・スーツと物質Dも、チューZや易や脳重合シリンダーのような別世界(真の「現実」)への入り口とはならず、非常につつましやかな設定の地位にとどまっている。

なるほど本書では、主人公がさまざまな幻覚に悩まされる。かれ個人にとっては、それは現実の崩壊だろう。だが、それは最終的にはドラッグ中毒による副作用であり、その現実崩壊が他の登場人物の現実を侵すことはない。かれにとっての現実崩壊は、ある意図をもって人為的に仕掛けられたものであり、それを知る人々にとっては単に起こるべくして起こったものでしかない。要するに、麻薬なんかやるおまえが悪い、自業自得だ、というわけで、しかも主人公はそれをはっきりと上司から面と向かって告げられる。

さらに単に意図的にドラッグを与えられるだけなら、『パーマー・エルドリッチの三つの聖痕』も同じ話だが、本書の場合、その被害者である主人公が、より大きなからくりを理解することは決してない。その「より大きなからくり」も、なんら超越的なものではない。神さまが寝ぼけているわけでもなければ、フォーマルハウト星人が侵略をたくらんで

いるわけでもない。ちょっと手のこんだおとり捜査、といった程度のものだ。そこもまた、しょせんはわれわれと（そして主人公たちと）同じ人間が同じように生きる、同じ現実のなかでしかない。

しかし、その同じ現実のなかの正義と善意が、悪や不正と同じ、いやそれ以上の苦しみを人に強いてしまう。

この現実はずらい。残酷だ。しかもその残酷さは、主人公の決して知りえないレベルにまで貫徹している。本書にあるのはそれだけだ。さらに、「現実には悲惨だけれど、そのなかで前向きに生きよう」といった、『アンドロ羊』に見られる主体的決意による目先の救済さえ、本書では与えられていない。つまり、ここには落ちこぼれにとっていいことは何一つない。あるのは死か廃人化かの選択だけだし、廃人になってさえ人は歯車であることから逃れられない。残るのは、ディックの同情的な視点だけである。もちろん、ディックにおける「同情」というのはえらくご大層なものだし、ドナ・ホーソンがかわいくていじらしいので安心する人も多かろう。しかし、それ以外のディックらしくない酷薄さは、確実にある違和感と居心地の悪さをもたらしている。

そしてそれが『暗闇のスキャナー』のすごさだ。

この時点で一瞬だけ、ディックは正しい方向を向いていた。本書について、「あれは傑作だと思う。これまで書いてきたなかで最高の傑作っていうんじゃない、一生に一度の大傑作だと思う」とディック本人も語っている。その通り。ぼくもそう思う。SFに依存するのをやめ、神学に依存するようになるまでの短い期間、ディックが自立していたわずかな期間に本書が書かれたことを、われわれは感謝しなくてはならない。実際、ディックがこの先『暗闇のスキャナー』に匹敵する書物を書くことはなかった。

さて、このような特殊な位置にある『暗闇のスキャナー』の読者層は、ほかのディックの読者とは自ずと異なるだろう。本書について、ディックはこうも語っている。「書いていて、胸がはりさけた。読んでいて、胸がはりさけた。校正しながら、胸がはりさけた。校正が終わってから二日間泣き続けていた」。そんな本を二冊以上書いたら、とうていからだがもたなかつただろうということは、まあ想像つかなくもない。が、どうせ数年後に死ぬ身だったのだから、もうちょっと無理してくれでもよかったのではないだろうか。が、これは愚痴というもの。こうしたセンチメンタリズムに過剰に反応する読者層は当然考えられるだろう。それ以外の支持層が、いまのぼくには見えない。しかし今後、書誌や伝記やガジェット偏愛にとどまらない、ディックの小説への正当な評価を生み出すのは、このいまだ見えない『スキャナー』支持層であるはずだ。それ以外に、ディックの世界に残された資源はないのだから。

### 3. 私事について

本書もまた、ぼくの学生時代最後の翻訳の一冊である。したがって、学生時代のアスペクトにまみれた研究室には、まだ感謝を欠かすわけにはいかない。ありがとう。

訳すにあたって、一応世のディック関連文献には一通り目を通したが、ほとんどが個人的な体験や手持ちの理論体系のなかで閉じたものにとどまり、一般性のある知的な有効性を持ち得ていなかったように記憶している。数少ない例外の一つが、香山リカ「ドラッグ・マニュアル」（『あぶくの城』所収）である。『暗闇のスキャナー』に限らず、ディックの小説に登場する主だったドラッグについて、多少の推測をまじえた解説を加えたものだ。

自分の訳に登場する現象について、専門家の裏付けがあるのは心強い。もっとも、それで訳がなんら変わるわけでは単に精神衛生上よいというだけなのだが、それがいかに重要かは、精神科の医者であるリカちゃんなら充分ご承知だろう。感謝する。ありがとう。

本書の編集は小浜徹也氏が担当された。

平成三年九月

山形浩生

## 追記

そうそうもう一つ、本書の原題が *A Scanner Darkly* であって、*The Scanner Darkly* ではないことには気を留めておいていただきたい。愚直に訳せば、『おぼろな盗視聴機の一人』となるだろう（『暗闇のスキャナー』という邦題は、ことばの意味よりも語感を優先させたものである）。これは特定の個人に起こった特殊な出来事じゃない、アメリカ中で起きた数多くの事例の一つにすぎないんだ、というディックの主張が、こんなところでまで顔を見せているわけだ。

もちろん実際には、すべてのヒッピーがディックの友人たちのような不幸な末路をたどったわけではない。ほとんどのヒッピーやジャンキーは、それなりに生き延びて、株屋になったりリゾート開発の手先になったり、あるいはドロップアウトとしての生活を貫き通したりして、この九〇年代までなんとかやってきている。そういうある意味でぶざまな、ある意味でまっとうな、ある意味で平凡なヒッピーたちの後世の姿は、トマス・ピンチョンの（現時点での）最新作『ヴァインランド』などに見ることができる。もちろん、こっちが真実でディックが描いているのはペシミスティックなうそだ、というわけではない。あたりまえの話だが、人の数だけ生があり、属する社会的文化的な複合体があったというだけのこと。『暗闇のスキャナー』も、たかだかそのなかの一つの複合体の産物にすぎないことは忘れてはならない。これは本書の小説としての価値をなんら落とすものではない。